

松本市

K A I G A N J I

海岸寺遺跡

通常砂防事業（海岸寺沢）埋蔵文化財発掘調査報告書

2016.3

長野県松本建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



1 海岸寺遺跡全景（南西から）向かって左は桐原城址、右は霜降城址



2 1・2区全景

2 巻頭写真



1 4区全景（北西から）



2 4区全景

はじめに

松本市東部に位置する山辺地区は、美ヶ原高原への入り口にあたり、山辺ぶどうの産地として知られています。薄川が形作った平野と山裾に展開する山辺地区は、薄川を下れば松本市街地に至り、西には飛騨と信濃を隔てる日本アルプスの山並みを遠望する、風光明媚の地です。平野には積石塚古墳として著名な針塚古墳（長野県史跡）があり、南北の山々には小笠原氏城跡（同）が立地する歴史の古い土地です。

この城跡群の一つ、桐原城跡が広がる尾根の麓を流れ下る海岸寺沢は、江戸時代後期に洪水を起こした記録があり、石堤が現存しています。昭和 58 年に約 700 m の区間が砂防指定地に編入されており、その災害防止対策は、長年地域の切実な課題となってきました。平成に入り、松本建設事務所によって砂防ダム建設計画が事業化されました。

海岸寺沢をさかのぼった「弘法平」は、古代に創建された伝承がある海岸寺の奥院といわれ、東桐原の観音堂には、平安時代中期の作とされる木造千手観音立像（長野県宝）が大切にまつられています。江戸時代には、海岸寺が中院、下の坊へ移転してきた記録があります。このたびの砂防事業地は、海岸寺の伝承地にあたります。このため、松本市教育委員会は事前に試掘確認調査を行って、池跡と礎石建物跡を確かめ、これを保存地区としました。本堤部分と堆砂域は現状保存できないため、長野県埋蔵文化財センターが発掘調査することになりました。

調査の結果、縄文・弥生・古墳時代の遺物が出土し、古くから人々が訪れていたことがわかりました。また平安時代中期頃の住居跡などがみつかりました。さらに中世の焼き火跡や火葬施設跡もみつかり、これらは桐原城が営まれていた頃の活動の跡と思われます。事業地全体に広がる高い石垣に囲まれた平坦地は、江戸時代後半頃に耕地を広げるために大規模な造成を行った土地と判明しました。このとき以降、現代まで豊富な湧水を利用した米作りが営まれ続けてきたことでしょう。

今回の調査では、直接海岸寺跡を示す遺構や遺物はみつかりませんでしたが、木造千手観音立像の制作年代と同じ頃の生活の痕跡が、確かに刻まれていることが証明されました。山辺地区は、地元の歴史に関心が高い地域と伺っています。今後、海岸寺遺跡を記録保存した本書が、地域の歩みを明らかにするために活用されましたら幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただきました長野県松本建設事務所の方々、長野県教育委員会や、松本市教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆さま、そして発掘作業や整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝を表す次第であります。

例 言

- 1 本書は、長野県松本市に所在する海岸寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、通常砂防事業（海岸寺沢）に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』30・31で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、松本市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は世界測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくはご指導を得た。（敬称略）
 - 業務委託
 - 測量・空中写真撮影：（株）みすず総合コンサルタント（平成25年度）
（有）測地（平成26年度）
 - 年代測定：（株）加速器分析研究所（平成25・26年度）
 - 遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）（平成26年度）
 - 調査指導
 - 遺跡・遺構調査指導：豊島区立郷土資料館 橋口定志（平成25年度）
- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表す。（五十音順、敬称略）
木下 勇、桜井 了、茂原信生、島田哲男、関沢 聡、関根慎二、高橋清文、竹原 学、直井雅尚、原 明芳、福沢佳典、藤澤良祐、百瀬耕司、松本市教育委員会、松本市立博物館、山辺歴史研究会、長野県文化財保護審議会 史跡・考古資料部会（小野 昭、笹澤 浩、会田 進）
- 8 発掘調査・整理作業の担当者等は第1章第2節に記載した。
- 9 本書は主任調査研究員綿田弘実が執筆し、調査部長平林 彰と調査第1課長岡村秀雄が校閲した。
- 10 本書に添付したDVDには、巻頭写真・写真図版PDF、自然科学分析報告書PDFを収録した。
- 11 松本市教育委員会との協議により、本遺跡の調査回数として、今回を第三次調査とする。

凡 例

1 遺構番号は、遺構種ごとに付してある。発掘調査で欠番にしたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。

2 遺物番号は、本報告の本文・図表・写真のすべてに共通する。

3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。

(1) 遺構実測図

竪穴住居跡・焼土跡・遺物集中・溝跡 1:60 土坑 1:40

石垣 1:80・1:100 平坦地土層 1:80・1:200

(2) 遺物実測図

土器・陶磁器 1:4 土器拓影 1:2・1:3 石器 2:3

金属製品 1:1

(3) 遺物写真





原則として遺物図とおおよそ同じだが、任意縮尺にしているものもある。

4 遺物の器種名については細分せず、過去の埋文センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。

5 基本層序および遺構埋土の色調は「新版 標準土色帖 2005年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修）」による。

6 実測図中のスクリーントーンは、下記の通り使用した。

(1) 遺構図

焼土  地山  炭化物集中  樹木・根 

(2) 遺物図 土器

黒色処理  須恵器断面  灰釉陶器・中近世陶磁器断面 

目 次

卷頭写真	
はじめに	i
例 言	iii
凡 例	iv
目 次	v
挿図目次	vi
挿表目次	vi
遺構・遺物図版目次	vii
写真図版目次	viii
第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
1 事業の概要 2 埋蔵文化財保護協議と調査	
第2節 調査の経過と体制	4
1 発掘作業の経過 2 整理作業の経過 3 調査日誌抄	
第3節 発掘調査の方法	7
第2章 遺跡の地形・歴史的環境	13
第1節 地形環境	13
第2節 歴史的環境	14
第3章 遺構と遺物	21
第1節 概 観	21
第2節 遺 構	22
1 竪穴住居跡 2 焼土跡 3 遺物集中 4 溝跡 5 火葬施設跡 6 墓跡 7 土坑	
8 石垣と平坦面	
第3節 遺 物	49
1 縄文時代 2 弥生・古墳時代 3 古代 4 中世・近世	
第4章 科学分析	55
第5章 総 括	58
引用・参考文献	60
付 表	63
遺構・遺物図版	72
写真図版	109
報告書抄録	133

挿表目次

第1表	文化財保護法手続き	4
第2表	受委託契約一覧	4
第3表	調査体制	6
第4表	周辺遺跡地名表	17
第5表	土器・陶磁器集計表	54
第6表	放射性炭素年代測定結果	56

挿図目次

第1図	遺跡範囲・調査範囲・地形図	2
第2図	事業用地・基準線・調査区設置図	9
第3図	周辺遺跡分布図	16
第4図	旧海岸寺経塚出土品実測図	20
第5図	SB01・SQ01 出土土器器種組成	53

付 表 目 次

付表1	遺構一覧表	63
付表2	遺物観察表	66

付 図

付図1	遺構全体図 1 : 500
付図2	遺構全体図 (西側) 1 : 250
付図3	遺構全体図 (東側) 1 : 250

遺構・遺物図版目次

図版 1	3 - 2 区 SB01 住居跡	72
図版 2	4 区 SB03 住居跡	73
図版 3	4 区 SF01~03 焼土跡・沢状地形	74
図版 4	5 区 SF04 焼土跡	75
図版 5	4 区 SQ01 遺物集中・SD09 溝跡	76
図版 6	1 区 SD03 溝跡	77
図版 7	2 区 SD01・3 - 1 区 SD02・1 区 SD04~07 溝跡	78
図版 8	3 - 4 区 SK07・08・58 土坑	79
図版 9	3 - 1 区 SK01~06 土坑	80
図版 10	3 - 2 区 SK09~17 土坑	81
図版 11	1 区 SK18~26 土坑	82
図版 12	1 区 SK27~30・32~37 土坑	83
図版 13	1 区 SK38~42・44~47 土坑	84
図版 14	1 区 SK48~57 土坑	85
図版 15	4 区平坦地 26・29 SK59~66 土坑	86
図版 16	4 区平坦地 25 SK67~79 土坑	87
図版 17	1 区平坦地 5 SH01・02 石垣	88
図版 18	1 区平坦地 6・7 SH03・04 石垣	89
図版 19	1 区平坦地 8・10 SH05・06 石垣	90
図版 20	1 区平坦地 12・13 SH08・09 石垣	91
図版 21	2 区平坦地 14・15 SH10・13 石垣	92
図版 22	2 区平坦地 14・16 SH11・12・14・16~18 石垣	93
図版 23	2 区平坦地 16~18 SH15・21・22 石垣	94
図版 24	2 区平坦地 16~18 SH19・20・23・24 石垣	95
図版 25	2 区平坦地 19~21 SH25~32 石垣	96
図版 26	5 区平坦地 1・2 SH36・37 石垣	97
図版 27	4 区平坦地 24 SH38 石垣	98
図版 28	4 区平坦地 25・26 SH39・40 石垣	99
図版 29	4 区平坦地 27~29 SH41~43 石垣	100
図版 30	1 区平坦地 5~13 トレンチ断面図	101
図版 31	2 区平坦地 14~19 トレンチ断面図	102
図版 32	4 区平坦地 24~29 トレンチ断面図	103
図版 33	4 区平坦地 24・25・29 南東外周断面図	104
図版 34	縄文・弥生土器	105
図版 35	3 区古代他土器・陶器	106
図版 36	4 区古代他土器・陶器	107
図版 37	4・5 区古代・中近世土器・陶磁器、石器、金属製品	108

写真図版目次

PL1	遺跡遠景、空撮	109
PL2	3 - 2 区遺構 (SB01 住居跡、土坑)	110
PL3	3 - 4 区遺構 (SK07・08 墓跡)	111
PL4	3 - 1 区・1 区遺構 1 (平坦地 11) - SD02、SK01~03・06・18・19	112
PL5	1 区遺構 2 (平坦地 9) - SD04・05・07、SK48・51~53・56	113
PL6	1 区遺構 3 (平坦地 11) - SD03、SK26・27・33・40~42・45	114
PL7	5 区・4 区遺構 1 (SF04 焼土跡、SQ01 遺物集中) - SD09	115
PL8	4 区遺構 2 (SB03 住居跡、沢状地形)	116
PL9	4 区遺構 3 (SK59・79 火葬施設、土坑) - SK61、67~78	117
PL10	1 区石垣 1 (平坦地 5・6) - SH01~03	118
PL11	1 区石垣 2 (平坦地 7・8・10) - SH04~06	119
PL12	1 区石垣 3 (平坦地 12・13) - SH08・09	120
PL13	2 区石垣 1 (平坦地 14・15・16) - SH11~15・17・19	121
PL14	2 区石垣 2 (平坦地 17・18・19) - SH21・24・25	122
PL15	2 区石垣 3 (平坦地 21)、1 区平坦地土層断面 - SH31・32	123
PL16	5 区・4 区石垣 1 (平坦地 1・2・24) - SH36~38	124
PL17	4 区石垣 2 (平坦地 25・26) - SH39・40	125
PL18	4 区石垣 3 (平坦地 27・28・29) - SH41~43	126
PL19	4・5 区平坦地土層断面	127
PL20	縄文・弥生土器	128
PL21	古代土器 3・4・5 区	129
PL22	古代土器 SB01、SQ01、平坦地 24	130
PL23	古墳時代・古代・中近世土器、陶器	131
PL24	古代・中近世土器・陶磁器、石器、金属製品	132

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

1. 通常砂防（海岸寺沢）事業の概要

海岸寺遺跡は、松本市街地から約6km東、入山辺字東桐原に所在する。地形は、薄川左岸の大倉山西山麓の海岸寺沢が形成した小扇状地に広がる。海岸寺沢は海岸寺遺跡の北端を画し、北側の尾根には長野県史跡小笠原氏城跡・桐原城跡が展開している。海岸寺沢では近世に洪水が発生し、18世紀末には桐原村で川除普請が行われたことを記した史料（松本市1994）があり、石堤が現存している。海岸寺沢は昭和58年に約700mの区間が砂防指定地に編入されており、現在でも洪水災害の対策が必要な地域である（松本市教育委員会2010）。このため、松本建設事務所が事業者となって砂防ダム工事が事業化された。

平成22年度には計画平面図が設計された。当初計画によれば、一部埋蔵文化財包蔵地範囲外を含めて、透過型の砂防堰堤工（ $L = 144.6\text{ m}$ 、 $H = 12.0\text{ m}$ 、 $V = 16,500\text{ m}^3$ ）、法面保護工・排水工を伴う市道付替工（ $L = 355\text{ m}$ 、 $W = 4.0\text{ m}$ ）を行うものである（第1図）。砂防堰堤は、埋蔵文化財包蔵地の中ほど、標高776m前後の等高線方向に設置し、後述する1区平坦地13及び4区平坦地29部分に構築する。堰堤北東部から海岸寺沢の間は堰体中詰め土取り場となり、1区平坦地5～11及び2区平坦地19～22部分が該当する。砂防堰堤から上方の発掘調査範囲全体が、計画堆砂線となる。市道付替工は、畑地灌漑幹線農道から調査範囲の中央を通る市道2263号線の、鳥獣被害防止ゲートまでの拡幅部分と、平坦地29を通り北側に急カーブして東の山麓に沿って、最高所の平坦地1で市道2263号線につながる新設部分がある。工事用道路は仮設ではなく、アスファルト・コンクリート舗装し、工事終了後は市道となる（第1図）。

2. 埋蔵文化財の保護協議と調査

埋蔵文化財包蔵地海岸寺遺跡の保護協議は、平成23年度から始まった。12月には松本建設事務所、長野県教育委員会、松本市教育委員会（以下、「建設事務所」、「県教委」、「市教委」とする）の三者による現地協議が行われた。当初、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は市道2263号線の南東側、標高763m前後から東桐原集落の上方まで、東西・南北とも150mほどの範囲であった。旧海岸寺奥の院が弘法平にあり、後に中院に下った旨の伝承（長野県1936）があるため、協議結果は、市道付替工事予定地の高所部分、平坦地1・4を市教委が試掘確認調査をすることとなった。

平成24年度 試掘確認調査は平成24年9・10月実施された。平坦地1・4とも表土が浅いため人力でトレンチを掘削した後、平面的に表土を除去して遺構の範囲を確認した。これによって平坦地1では池跡、平坦地4では礎石建物跡を検出し、試掘確認調査地点は埋め戻して保存された。この結果から、市教委は当該地点の現状保存を要望するとともに、海岸寺遺跡の範囲を、平坦地1を含む標高約800mの地点まで拡大した。

試掘確認調査後、建設事務所、県教委、市教委の三者協議の結果、市教委は市内事業件数が多くこの事業に対応できないため、長野県埋蔵文化財センター（以下「当センター」）が記録保存目的の発掘調査を行うように調整された。



第1図 遺跡範囲・調査範囲・地形図

H25・26調査範囲
 松本市教育委員会調査範囲

12月に建設事務所、県教委、当センターが三者協議を行い、記録保存の対象範囲が工事用道路、堰堤部分（基礎掘削範囲を含む）、堆砂域とされた。建設事務所が計画した工事期間は平成26～28年度の3カ年であった。年度ごとの工事内容は、26年度の初年度は工事用道路を幹線農道から堰堤予定地まで造成、及び堰堤西端部の建設、2・3年目で残りの工事用道路と堰堤の建設を行うものであった。また、工事範囲は猛禽類の生息域で、営巣期にあたる1月中旬から7月末までの期間は、工事・発掘作業ができないことが説明された。着工可否の判断は、この課題への対応のために設置された東桐原地区環境調査検討委員会（以下「検討委員会」）にゆだねられている。このような条件から、平成25年度調査は8月発掘作業開始とし、対象範囲は市道拡幅部分と、堰堤及び土取り場を含む市道西側部分となった。さらに、26年度調査は市道の現道部分と新設部分、及び市道東側の計画堆砂線に含まれる部分、整理作業、報告書刊行は27・28年度に行うよう、要望された。

この後、市教委が要望していた平坦地1・4の保存に伴う工事用道路の計画変更が行われ、1区の東側を迂回して市道2263号線に接続する計画となった。

平成25年度 平成25年度調査は、25年3月26日から26年3月26日の契約期間となった。調査面積は5,800㎡である。4月23日、建設事務所、県教委、当センターが現地確認した。建設事務所からは、工事用道路となる市道拡幅部分の調査を優先してほしいこと、クマタカの営巣地から半径500m以内に立ち入らないこと、絶滅危惧種ウマノズクサの保護、検討委員会に調査計画を説明することなどが要望された。一方、当センターからは樹木伐採、ごみの撤去、調査前の石垣測定の必要性等の課題を挙げた。

6月4日、環境検討委員会委員、建設事務所とともに、ウマノズクサの保護について現地確認した。ウマノズクサは、ジャコウアゲハの食草となる絶滅危惧種であり、発掘作業及び工事に支障となる個体

を確認し、該当する個体は6月中旬を目途に、建設事務所が遺跡内の保存予定地に移植することとなった。

7月24日、調査開始にあたって建設事務所と当センターで現地協議を行った。ごみの撤去、支障木の伐採、猛禽類、ウマノスズクサへの配慮などが確認された。

8月1日、重機搬入とともに発掘作業を開始し、9月10日作業員が参加して遺構調査に着手した。

9月30日、検討委員会にオブザーバーとして出席し発掘作業の概要を報告した。建設事務所からは、26年度発掘作業開始時期は8月を予定とすること、25年度予定されていた進入路工事は26年度実施する計画が示された。

12月2日、発掘調査終了と引き渡しについて、建設事務所と当センターが現地協議し、次年度調査予定地確認調査部分の埋め戻し、調査終了部分のロープ張り、終了後は建設事務所管理とすることなどを確認した。作業員参加による発掘は12月6日終了し、次年度調査予定地の確認調査を17日終えて作業を終了した。翌日から基礎整理作業に着手した。

12月16日、26年度調査について建設事務所、県教委、市教委、当センターの四者による協議を行った。当センターから25年度調査及び試掘確認調査結果を報告し、山地側の包蔵地範囲と調査範囲の確定などの課題について協議した。

平成26年3月18日、検討委員会にオブザーバーとして出席し、当センターからは25年度調査成果を報告した。

平成26年度 平成26年度調査は、26年6月17日から27年3月25日の契約期間となった。調査面積は5,200㎡である。

7月14日、検討委員会にオブザーバーとして出席した。市道部分の工事工程と発掘作業工程とが重複するため、進入路、プレハブ・駐車場用地確保の課題が明らかになり、建設事務所と協議することとなった。

7月28日、建設事務所、工事業者と当センターが現地で打ち合わせを行った。市道2263号線以外進入路がないため、プレハブ設置まで市道部分の着工を待つこと、調査期間中歩行者の安全確保に配慮すること、25年度調査済み地点を排土置き場とすること等について確認した。トイレと駐車場は建設事務所の助言と地元の協力により、幹線農道脇に確保することとなった。

8月25日、重機を搬入してプレハブ用地の整地を行い、29日プレハブ設置、器材搬入が完了した。9月1日から市道部分の発掘作業に着手し、2日作業員が参加して発掘を開始した。

9月12日、排土置き場について、建設事務所、工事業者、市教委、当センターが現地で協議した。礫が混じらない表土層は保存地区の保護層として、調査終了時に厚さ30cmに敷き均すこと、前年度調査済み地区を共同で使用する、工事車両の発掘調査区域進入に当たっては、作業員の安全に特段の注意を払うこととした。

11月5日、市教委立会により、作業終了状況と保存地区の保護層の確認を受けた。6日、作業員参加の発掘を終了し器材搬出を行った。10日、建設事務所と調査終了及び引き渡しについて協議し、排土均しを完了して作業を終了した。翌日から用地は建設事務所管理となった。同時に基礎整理作業に着手した。

平成27年度 平成27年度は整理作業及び発掘調査報告書刊行を作業内容とする契約を締結した。契約期間は平成27年6月29日から28年3月22日である。

なお、海岸寺遺跡の文化財保護法に基づく届け出等の手続、及び受委託契約は、次表のとおりである。

第1表 文化財保護法の手続き

土木工事通知(法94条)	県教委勧告(法94条)	発掘届(法92条)	発掘通知(法92条)	埋蔵物発見届	文化財認定
文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付	文書番号・日付
25松建第100号 (H25.6.26)	25教文第8-84号 (H25.7.12)	25長埋第1-4号 (H25.6.28)	25教文6-6号 (H25.7.25)	25長埋第2-10号 (H25.12.18)	25教文第20-98号 (H26.1.20)
25松建第100号 (H25.6.26)	25教文第8-84号 (H25.7.12)	26長埋第14-7号 (H26.7.29)	26教文6-8号 (H26.8.8)	26長埋第15-10号 (H26.11.11)	26教文第20-71号 (H26.11.28)

第2表 受託契約一覧

年度	契約期間	契約額 (円)	作業内容
平成25年	H25. 3. 26 ~H26. 3. 26	28,350,000	発掘作業、基礎整理作業
平成26年	H26. 6. 17~H27. 3. 25	24,392,000	発掘作業、基礎整理作業
平成27年	H27. 6. 29~H28. 3. 22	14,890,000	本格整理作業、報告書刊行

第2節 調査の経過と体制

1. 発掘作業の経過

(1) 平成25年度の発掘作業

調査範囲は北東から南西方向の長軸約225m、等高線方向の短軸最大幅約100m、海拔標高804mから757mまで、47mの比高差を有する南西向き扇状地面と、北端を画す海岸寺沢に沿った氾濫原にわたっている。畑灌幹線農道から遺跡範囲を上り、扇状地中央部で東向きから北東向きに「く」の字に折れて上る市道2263号線を境界として、北西側を1区、南東側を4区、この東側上方にある山麓部分を5区、海岸寺沢氾濫原を2区、幹線農道から鳥獣被害防止ゲートまでの市道部分を3区と呼称した。

25年度は1区・2区、及び3区の市道付替部分を対象とし、調査面積は5,800㎡である。8月1日、重機を搬入して調査を開始し、駐車場造成後、トレンチ掘削による調査面の確認から着手した。8月14日プレハブ設置が完了し、表土剥ぎを行った。9月10日発掘作業員が参加して石垣清掃から作業を開始した。10月9日から市道付部分を重機で掘削した後人力で精査し、古代の住居跡を検出した。また、近世の土坑墓を検出し、11月5日埋葬された人骨を取り上げた。この間に炭素年代測定を委託し、10月22・23日、11月8日石垣の写真測量を行い、11月14日空中写真撮影した。

11月下旬には平坦地9・11の遺構検出・精査を行い、終了部分から埋め戻した。12月4日、石垣の断面調査を行い、6日発掘作業員による作業を終了し、器材を搬出した。その後、12月上・中旬に2区の平坦地にトレンチを掘削して下層を確認し、次年度調査予定地4区の平坦面にトレンチを掘削して遺構確認作業を行った。12月17日トレンチの埋め戻しを終わって調査を終了した。

(2) 平成26年度の発掘作業

26年度は3区の市道部分、4区・5区、を対象とし、調査面積は5,200㎡である。8月25日、重機を搬

入してプレハブ用地を造成、29日プレハブ設置が完了し器材搬入する。9月1日、3区の市道路盤の碎石を除去し、表土剥ぎを行う。2日発掘作業員が参加して3区の遺構検出を開始した。幅2m弱の現道下は、中央部を幅1mほど掘削して農業用水パイプが埋設されており、遺構はなく、ただちに測量して終了した。この間、重機は4区の下段の平坦地29から平坦地26まで、前年度試掘確認して埋め戻したトレンチの一部を復旧し、土層・検出面を確認して表土剥ぎを行った。平坦地29から遺構検出を開始し、試掘で確認されていた遺構は中世の火葬施設跡と判明した。平坦地24では古代、25では中近世の遺構が検出され、精査した。平坦地の遺構調査と並行して石垣の清掃、写真撮影を行った。

10月8日、最も高所の5区に重機進入路を設け、山麓斜面と市道脇をトレンチ掘削により試掘した。この結果遺構は確認されず、埋め戻した。5区の平坦地2では遺構・遺物が確認されたため、南半部を表土剥ぎし遺構精査を行った。20日以降重機は遺構調査が済んだ4区の平坦地26～29の埋め戻しに着手した。23日平坦地2の北半部を表土剥ぎし、遺構検出・精査した。10月27日南側山麓斜面の平坦地30をトレンチ掘削したところ、遺構・遺物は確認されなかった。10月14日空撮を実施し、29・30日石垣のレーザー計測を行った。

11月4日から残った遺構調査及び埋め戻しと並行して、器材等搬出のための荷づくりを開始した。6日クローラードンプで工事中の市道を通り、器材を幹線農道まで搬出してトラックに積み込み、作業員による現場作業を終了した。以後、10日まで埋め戻しと石垣の図化素図の修正作業、写真撮影を続け11日で作業を終了した。

2 整理作業の経過

(1) 平成25・26年度の基礎整理作業

平成25年度は12月18日から26年3月26日、26年度は11月1日から27年3月25日の間、当センターで基礎整理作業を行った。基礎整理作業は、発掘調査で作成した図面・写真等各種記録類、及び遺物の分量を把握し、記録類を点検して補足・修正し、台帳作成、仮収納等を行うものである。

図面整理としては、遺構図面の点検、補修、遺構台帳と遺構図の照合、図面修正と二次原図・全体図・台帳作成を行った。2カ年とも、委託による石垣立面・断面図、地形図作成のための図化素図校正作業もこの期間に行った。26年度は単点結線図と手測平面図のデジタルトレース、及び全体図作成まで委託した。写真整理としては、撮影記録簿と各種写真の照合、フィルムのアルバム収納と注記、デジタルデータのバックアップと格納、台帳作成を行った。遺物整理としては、遺構・グリッドごとの収納箱への仕分け作業、袋・箱への付番と台帳作成、洗浄、注記台帳作成、注記マシンによる注記を行った。具体的な作業の方法は、本章第3節に記した。26年度は基礎整理期間に炭素年代測定を委託し、結果報告を受けた。

(2) 平成27年度の整理作業

平成27年度は7月1日から28年3月22日の間、報告書作成のための本格整理作業を行った。

遺物整理としては、土器の接合・分類・集計、及び管理台帳作成、復元、拓本を含む実測、トレースを行った。少数の石器・金属製品は台帳作成、実測、トレースを行った。実測と合わせて遺物観察票を作成し、これに基づいて出土土器全体の計数・計量による集計表と、報告書掲載遺物の観察票を作製した。トレース図はスキャニングして図版を作製した。この間にデジタルカメラによる遺物写真撮影を行い、写真図版を作成した。

図面整理としては、25年度遺構平面図、石垣手測図、25・26年度の断面図を修正し、二次原図からデジタルトレース、全体図作成、地区別・遺構種別の図版作成を行った。併せて土層記録を点検・統一し、

図版に入力した。また遺構一覧表を作成した。写真整理としては、遺構のデジタル写真からの報告書掲載写真選定、データによる写真図版作成とキャプション入力を行った。

報告書本文原稿の作成は、住居跡等主要な遺構の説明は個々の所見整理カードをもとに成稿した。土坑等は地点別に群として説明し、詳細は遺構一覧表によった。その他、周辺遺跡分布図・地名表をはじめ、必要な挿図・挿表・付図等を作成し、本書全体の原稿執筆を行った。実測・観察・トレース・図版作成等を経た遺物・図面・写真は移管に備えて収納し、それに伴う台帳作成を行った。

入札を経て委託した事業は、遺物撮影業務、印刷製本業務である。

平成25～27年度の調査体制は、第3表のとおりである。

第3表 調査体制

年度	所長	副所長	管理部 部長補佐	管理課長	調査部長	担当課長	担当調査研究員
平成25年	窪田久雄	会津敏男	佐藤国昭	村山清治	大竹憲昭	上田典男	市川隆之 三木雅博
平成26年	会津敏男	多城 哲		村山清治	大竹憲昭	町田勝則	綿田弘実 前田一也 福井優希
平成27年	会津敏男	多城 哲		山本希一	平林 彰	岡村秀雄	綿田弘実

発掘作業員 : 有賀由佳 井口方宏 上兼 薫 折井完次 加藤 旻 小林 博 小山繁樹 鈴木将之 瀧澤さゆり
 武田善徳 中村 誠 西原達雄 三村脩二 宮澤文雄 山田英行 渡辺啓之助 渡辺すみ子
 整理作業員 : 石田多美子 猪股万里子 上原美千代 岡村美喜子 柄澤登紀子 小林 愛 坂田恵美子
 高松美法 中村智恵子 西嶋典子 藤井裕子 宮下正治 山下千幸

3. 調査日誌抄

平成25年度

- 4月23日 本年度調査についての現地協議(建設事務所、県教委、当センター)
- 6月27日 橋口定志氏石垣調査について現地指導
- 8月1日 重機搬入、発掘調査開始
- 9月30日 第4回東桐原地区環境検討委員会出席
- 10月22日 古代住居跡検出、平坦地14～19石垣写真測量実施(～23日)
- 12月17日 埋戻し完了、調査終了
- 12月18日 基礎整理作業開始、図化記録の点検・補修・台帳作成

平成26年

- 2月8日 市教委主催「発掘された松本2013」に出席(～2月23日)
- 3月18日 第5回検討委員会に出席
- 3月20日 基礎整理作業員終了

平成26年度

- 7月14日 第6回検討委員会出席(検討委員会、建設事務所、当センター)
- 9月1日 3区付替道路部分碎石除去後、表土剥ぎ
- 11月1日 基礎整理作業開始



平成25年度 石垣清掃



平成26年度 SQ01 掘り下げ

11月18日 調査終了あいさつ
平成27年

3月25日 基礎整理作業終了

平成27年度

7月1日 整理作業開始、図面類の整理開始

8月4日 土器実測開始

8月24日 遺構図デジタルトレース

12月7日 遺物写真撮影

12月17日 印刷・製本業者決定

平成28年

3月18日 報告書刊行

3月22日 整理作業完了



平成27年度 遺構図デジタルトレース

第3節 発掘調査の方法

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、当センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に則って実施している。

1. 遺跡の名称と遺跡記号

遺跡の名称と記号は次のとおりである。

名称：海岸寺遺跡（かいがんじ いせき） 遺跡記号：EKA

遺跡記号は、記録の便宜を図るため、遺跡をアルファベット大文字3文字で表す当センター独自の表記である。長野県内を9地区に区分し、塩尻・松本市地区を指す「E」を冠し、海岸寺遺跡の「KAIGANJI」の2文字「KA」を組み合わせる「EKA」とした。この表記は遺物注記、写真・図化記録と各種台帳と、報告書掲載の図版、挿図・表の記載に使用している。

2. 遺構名称と遺構記号

遺構についても、遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため、記号で表記した。主に平面形状や分布の特徴を指標として検出時に決定するため、以下に記した遺構記号と想定される遺構の機能・性格が適合しない場合もある。遺構記号は時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。発掘の結果、遺構ではないことが判明した場合は欠番とした。当センターで使用している遺構記号のうち、本書で使用しているものには次の種類がある。

SB：長径2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み [竪穴住居跡]

SK：単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さな掘り込み。[土坑]

SD：溝状の掘り込み。[溝跡、流路跡]

SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるもの。[焼土跡、火床]

SH：石が面的に集中するもの。本書では石垣に付した。[礫群、集石遺構、配石遺構]

SQ：遺物が面的に集中するもの。[遺物集中、土器集中、廃棄場]

3. 調査区（グリッド）の設定と呼称（第2図）

グリッドの設定法は、国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（ $X = 0.0000$ 、 $Y = 0.0000$ ）を基準に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。本遺跡では北西周辺を通る $X = 26200$ 、 $Y = -42800$ を北西隅の基準線とし、これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」、「大地区」、「中地区」に区画した。大々地区は200m四方の区画で、北西隅からⅠ・Ⅱ・Ⅲのローマ数字番号を付した。大地区は大々地区内を40m四方の方眼で25区画したもので、北西隅から南東隅へA・B・C・・・Yのアルファベット大文字の番号を付した。中地区は、大地区内を8m四方の方眼で25区画したもので、北西隅から01・02・03、・・・25のアラビア数字を付した。遺構測量の基準単位としたのが、この区画である。中地区内はさらに2m四方の方眼で16区画し、01・02・03・・・16のアラビア数字の枝番号で呼称している。この調査グリッドは測量基準線とするほか、遺構・遺物の位置を表す場合に用いる。例えば3-1区の土坑SK02の位置は、「I W23-04」と表記される。

4. 調査地区割と地点呼称

調査対象地内では、道路や地形で区切られる調査地点毎に「調査区」名を付した。地区名については、前節「発掘作業の経過 平成25年度の発掘作業」冒頭で記した。幹線農道から鳥獣被害防止ゲートまでの市道2263号線付替道路部分「3区」は、さらに現道や地形で区切られた調査範囲を指し、枝番のアラビア数字を付した「3-1、3-2、・・・3-6、3-7区」といった地区呼称を用いた。

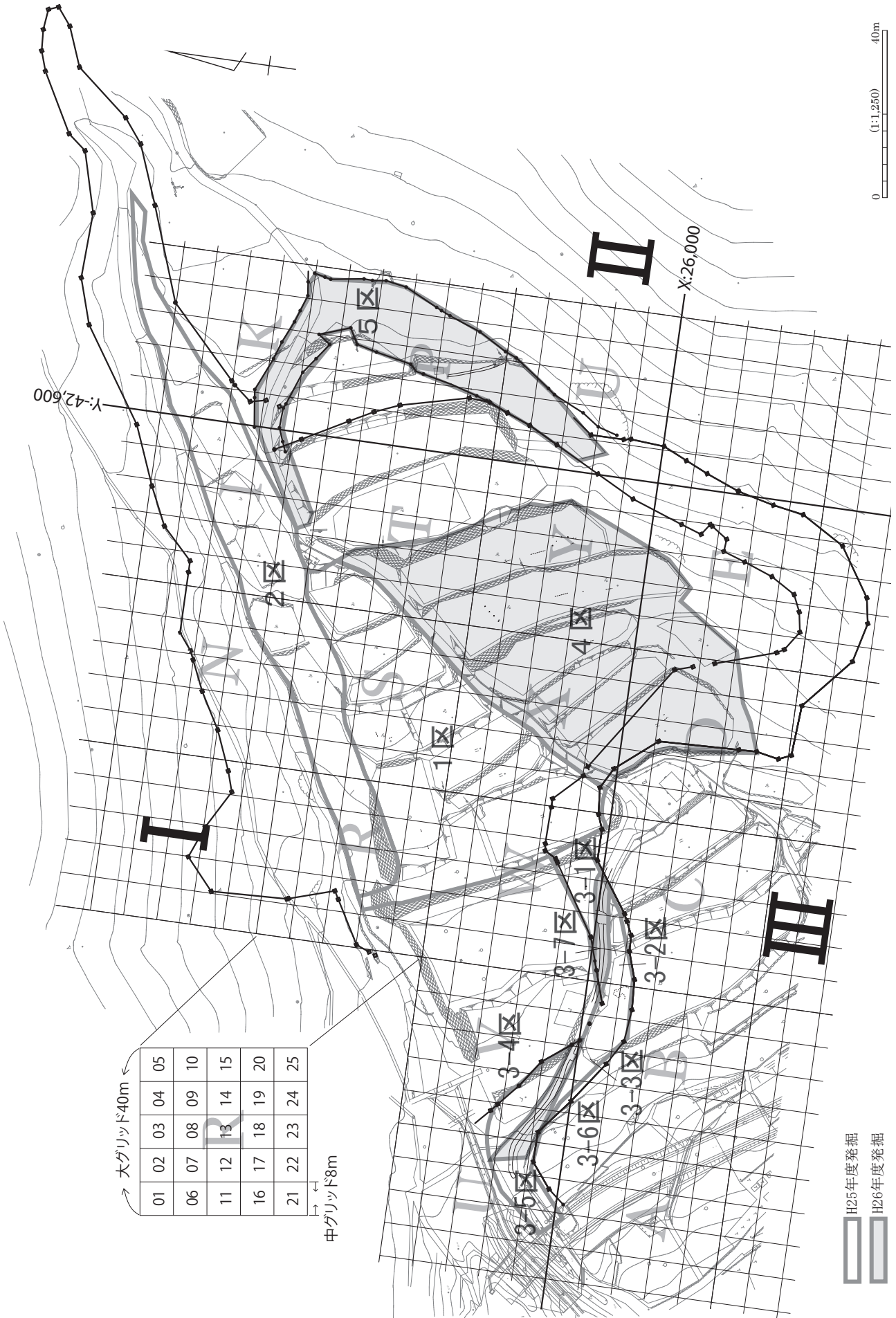
また、本遺跡内では水平に造成された平坦地が連続し、急傾斜面や石垣で隔てられていることから、比較的容易に平坦地が区分できる。平坦地は、調査前には建物を建てるために造成された可能性がある造成単位となることや、トレンチ設定から面的調査、石垣調査等一連の調査手順を行う単位となることから、平坦地ごとに通し番号を付し、「平坦地○」と呼称した。平坦地番号は調査対象地全体に関わるため、平成24年度市教委が試掘調査を実施した最上段の池跡を「平坦地1」、礎石建物を検出した段を「平坦地4」とし、当センターの調査地区内はそのまま平坦地5以下の番号を付した。3区は道路と拡幅部分であり、平坦地番号は付さなかった。

5. 調査指導

発掘調査前に、平坦地に伴う石垣の記録をどのように行うか指針を設けるため、平成25年6月に橋口定志氏（豊島区立郷土資料館）を招聘し、現地指導を受けた。指導では石垣は修築されている可能性と共に、積方は谷積主体ではないので近世末まで下らない可能性、一方で長方体の石を横長に水平に積み上げる、中世の布目崩し積とも異なる様相から、近世の構築ではないかと指摘された。海岸寺沢沿いの平坦地にみられる二段の石垣は背後に古い石垣が埋没している可能性、沢沿いに張出す緩斜面の帯状平坦地は、沢の治水施設の可能性などが指摘された。記録については、手測は平面図と立面図を整合させにくいのでやめたほうが良いこと、平面では石垣が地下水等の影響で崩れ始めているはらみに注意する点が指摘された。

6. 土層確認と表土剥ぎ

調査区全体に段をなして連なる平坦地は、山側を切土して谷側に盛土し、段差部分に石垣を組み上げたものである。調査開始時には、平坦地の長軸となる等高線方向と、短軸となる直交方向に、重機でトレンチを掘削し、遺物包含層の有無、及び遺構検出面及を確認して表土剥ぎを行った。標準的な土層の堆積状況は、上層から次のようであった。



第2図 事業用地・基準線・調査区設定図

I層：耕作土層。灰黄褐色土。調査範囲の大部分が水田であり、層厚30cm前後の水田耕土である。粘性のあるシルト質土で礫は含まず、下部に鉄分の沈着がみられる。25年度調査区では一部畑地であった。

II層：礫を少量含む上部盛土層。鈍い黄褐色から暗褐色土。耕作土の基盤をなす層で砂混じり。礫は鶏卵大以下の小形のもの10%以下含まれる。II・III層は盛土であるため、土質・土色の異なる比較的薄い堆積層を複数交える部分が多い、

III層：巨礫を多量に含む下部盛土層。人頭大以上の垂角礫を20%以上含む、粗粒砂混じりの厚い盛土。山側にはなく、谷側ほど層厚は厚くなる。石垣背後は礫が多く空隙があつてよく水を通す。

IV層：旧表土層。黒褐色から暗褐色のシルト質土。炭粒を含む部分もある。盛土層下の谷側に比較的薄く堆積する。削平されて堆積していない部分が多い。礫を含むがIII層ほど多量ではない。古代・中世の遺構埋土や遺物包含層となる。

V層：地山層。黄褐色のシルト質砂礫層。

表土剥ぎではV層上面まで除去し、人力で遺構検出を試みた。IV層が堆積し遺物が確認された部分は、小形の道具を用いて人力でIV層を掘り下げた。26年度調査区は平坦面ごとの比高が大きく、層厚が厚いIII層が崩れやすいためベルトは残さず、谷側に重機で長軸方向のトレンチを掘削した。土層断面は石垣背後の部分を図化した。

7. 遺構検出と遺構調査の方法

基本的な調査の進め方は、重機で表土を掘削した後、グリッドを設定して、草かきなど大きな道具を用いて人力で遺構検出を行った。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名またはグリッド名を併記するか、帰属遺構名を記して取り上げた。検出された遺構は、規模・形態に応じ、柱穴の可能性のある直径50cm程度以下の円形土坑は柱痕の検出を試みた後半截、それより大形で楕円形や不整形の土坑は半截または十字形に掘り下げ、断面観察した。住居跡と遺物集中、溝跡は、十字方向あるいは単一方向のトレンチまたは土層観察ベルトを残して掘り下げた。遺物を伴う住居跡、遺物集中、火葬施設は写真撮影、実測図化して出土状態を記録した。遺物取り上げ後に完掘状態の写真撮影・実測図化を行った。

8. 石垣の調査

本遺跡では階段状の平坦地が連続し、各平坦地に石垣が伴っていることが特徴的に認められていた。その石垣の形態は古い可能性も推測もされていた。また、トレンチ調査で遺構・遺物の検出もなかったことから、平坦地の造成時期を知る手がかりとして、石垣の様相から推定することを試みた。

石垣の時期を識別する観点として、石の積方、石材（形状・規模・加工）、石垣背後の断面構造に着目した。これらの観点のなかで、積方・石材・規模は立面の測量図と写真で記録した。玄能による加工は石垣の観察所見に加えた。石垣の平面は崩れやはらみと呼ばれる石垣面の膨張が顕著に認められる箇所、さらに二段に構築されている箇所について、平面図も測量した。石垣の立面・平面測量は主に測量委託によって行った。石垣の断面構造は、立面図作図後に重機で截り割り調査を実施し、断面の状況を写真と測量図に記録した。なお、市道脇にある石垣は明治時代の公図にある細い道を、現在のように拡張した時に造成されている可能性があり、参考として記録した平坦地5南壁以外は測量をしておらず、写真のみの記録とした。

本遺跡の石垣では、同じ石垣内に積み直しによる時期差があることが推測される。また、石垣背面の土層には、背面の平坦地造成土と異なる礫の混じりが少ない土が入り、石垣の構築が平坦地造成以後と推測できるものと、下層の盛土と類似した礫混じり土が入り、平坦地造成時に近い時期のものがある可能性が

考えられた。

平坦地5～8・10・12・13まで実施した石垣の切り割り調査の結果、平坦地8・10・12の東面石垣には平坦地の下層造成土と類似した土層で石垣背後が埋められており、平坦地造成当初に近い時期に造られた可能性がある。一方、平坦地5～7と13は下層盛土層と異なる土層が石垣背後に認められ、造り替えられている可能性が想定された。

9. 科学分析

平成25年度は平坦地で遺物が全く出土してないため造成時期が不明で、それを解明するために盛土層中に混じる炭化物から年代を推測した。放射性炭素年代測定では盛土層中で炭化物粒の散在が確認された平坦地7の下層、さらに平坦地5の礫混じり土層中出土の炭化物を採取して分析した。その結果、平坦地7では14世紀、平坦地5では18・19世紀の結果が出た。平成26年度調査でも遺物が少量であり、遺構から出土した遺物も混在している状況がみられたため、住居跡、遺物集中、焼土跡、火葬施設跡から採取した炭を年代測定した。結果は平安時代と中近世に比定される年代となった。

10. 測量と図化記録

図化記録は、前述の調査グリッドに基づき手測した平面・断面（立面）実測図と、トータルステーション・写真測量による測量委託によって記録した。基準杭は測量委託により、工事杭をもとに設置した。手測平面図は、基準杭に基づいて水糸・スタッフ等で方眼を設置し、遺構等を図化する場合と、セクションポイントなどの2点間を結んだ線を仮の基準線として手測し、ポイントを単点測量する場合がある。断面図は委託測量したものと、標高杭を基準にレベルを用いて手測したものがある。縮尺は1:20または1:10とし、A2判の当センター専用の用紙を用いた。実測作業は調査研究員及びその指示のもとに発掘作業員が行った。土層の記録は、『新版標準土色帖』に則って記録した。

本遺跡は調査範囲が広いものの遺構密度が低いため、平面測量と石垣の測量を中心に測量委託した。方法はトータルステーションによる単点測量と地形測量、地上写真測量がある。トータルステーションによる単点測量は遺構平面図を中心に一部断面図に用いた。その方法は担当者がマーキングした測点をトータルステーションで記録し、翌日出力図に担当者が結線して平面図を完成させる方法である。また、地形測量はトータルステーションで観測したが、トレンチ等を除く面的掘削範囲に等高線を発生させた。石垣の測量は、25年度は写真測量で行い、石垣全体の立面を図化し、一部は手測した。写真測量では、石垣にターゲットを設置して測量し、そのターゲットの測量結果に基づいて写真を図化機にかけて作図した。26年度は3Dレーザー計測によって石垣の立面全体を記録し、遺存状態が比較的良好な部分を選択して、幅2～4m分を図化した。石垣の図化素図は現地で視認した上、校正を行った。

11. 写真記録

遺跡全体と遺構に関わる写真撮影は、担当者が地上で撮影したものと、委託によるラジコンヘリを使用した空中写真撮影の二者がある。地上写真撮影では6×7フィルムカメラと、デジタル一眼レフカメラ、コンパクトデジタルカメラの三種を使用し、担当者が撮影した。6×7フィルムカメラを記録保存目的の写真記録の基本とし、遺跡・遺構に関わる写真を撮影した。6×7カメラではモノクロネガとカラーリバーサル2種のフィルムを用い、露出の異なる同構図の写真を各2枚撮影した。フィルムは外注で現像し、モノクロはベタ焼とフィルム、カラーはスリーブ仕上げのフィルムをアルバムに収納した。

デジタル一眼カメラは6×7カメラを補助する写真として、6×7カメラ撮影と同じ写真に加え、作業

工程や所見記録のメモとなる補助的写真を撮影した。デジタルカメラでは6×7カメラ同様に露出の異なる写真2枚と、後に色調整ができるようにグレーカードを写し込んだ1枚を加え、同じ構図の写真合計3枚を撮影した。デジタル一眼レフカメラの写真データは、メモリーカードからハードディスクにコピーし、さらに保存バックアップ用にCDを焼いた。6×7カメラとデジタル一眼レフカメラは、撮影の都度、撮影記録簿にコマ番号、日付、地区、被写体、撮影方向、撮影者を記入し、整理時に写真台帳化した。

コンパクトデジタルカメラは作業風景や速報性のある写真撮影に用いた。デジタル一眼レフカメラの写真データと同様に保存した。

測量業者に委託して、ラジコンヘリを用いた空中写真を撮影した。撮影時には担当者が立ち会い、撮影方向や撮影地点についてオペレーターと打合せした後、ラジコンヘリに搭載されたカメラ映像をモニターで確認しながら撮影箇所を指示して撮影した。撮影にはリバーサル・モノクロフィルムカメラとデジタルカメラを用いた。フィルム・データは地上写真と同様に保存した。

整理作業の方法については、前節で平成25・26年度の基礎整理、及び27年度の報告書作成のための本格整理で記述した。



弘法平に残る基壇



海岸寺観音堂の祭礼

第2章 遺跡の地理・歴史的環境

第1節 地形環境

海岸寺遺跡は、松本市街地に接する東部山地先端の、尾根に挟まれた扇状地にある。この扇状地は西に開けた山辺谷の入り口付近にあり、北側に桐原城が立地する桐原山とも大倉山とも呼ばれている尾根と、南側の霜降城が立地する尾根の間に位置する。遺跡からは薄川の扇状地と、西南西に広がる松本市街地南半部から、遠く乗鞍岳が一望できる。以下、市教委が実施した桐原城址・海岸寺遺跡平成20年度発掘調査の報告書から、地形と地質に関する記述を抜粋する（市教委2010）。

この松本盆地や周辺の山地は、新生代第四紀更新世中頃から激しくなった地殻活動により、地塊のブロック化が進み、それぞれ独自の動きをしたため、現在みるような変化に富んだ複雑な地形を形成するに至った。即ち、北部フォッサマグナ地域中央部のうち、①上田盆地と松本盆地の間にある山地が筑摩山地で、これを更に2つに区分して、武石峰（1972 m）を中心とした山地を武石山地とし、海岸寺遺跡はその西端にある。今1つは刈谷原峠付近より西側の傾動地形の山地を城山と呼んでいる。②筑摩山地の南は山辺構造谷をはさんで鉢伏山地と、それに接して西には中山丘陵がある。③武石山地の南東は美ヶ原ブロックである。④武石山地の西は約1200 mの落差を持って深志盆地ブロックに接し、このブロック地塊は松本構造盆地の形成後、更に盆地の東縁部が陥没的に沈降してできた局部的盆地であり、その一部は湖沼となっていたとみられ、深志湖と呼称している。このように狭い地域内でのブロック毎の変動により形成された地形である。

海岸寺遺跡が立地するこの山地は、旧松本市周辺部の北・東部を、屏風を立てたような急斜面で囲み、南側は薄川が流下する山辺構造谷に向かって伸び、尾根は三角末端面をなしている。このことは、この谷が構造的（断層）であることを示し、更に薄川による右岸の扇状地上に幾筋もの沢による崖錐や崖錐性の小扇状地を載せている。

この薄川扇状地は、薄川の出水率が大きい歴史時代以降も洪水が絶えない。そのため、浸食堆積が激しく段丘面の数は正確にはわからないが、700 m～757 m付近に複数あり、山地からの崖錐性堆積物により南に大きく傾斜している。この扇状地のうち、上部面の礫層は更新世末の森口礫層に対比されている。

武石山地ブロックは武石峰（1972 m）・袴越山（1752 m）・焼山（1907 m）等からなり、市街地とはおよそ1200 mの比高をなしている。地質は新生代第三紀のグリーンタフと呼ばれる凝灰岩質を含む海底堆積物の内村層に、石英閃緑岩や玢岩が貫入して内村層を押し上げ、軟らかい堆積岩は浸食され、後に残った硬い火成岩類が残丘状の地形を形成したとみられる。なお、武石峠付近は旧河川による陸成の堆積物もみられ、塩川累層と呼ばれている。これは浸食作用で準平原化されるとき、旧河川により運ばれた土砂の堆積によるものとみられる。

発掘地点は桐原城の南西山麓と、霜降城の北西山麓の間にあり、武石山地ブロック西南端が南西に伸びる尾根の裾に位置し、北西端を海岸寺沢が画している。桐原城本体は北西にある尾根筋の948 m付近にあり、尾根筋にあった内村層は浸食され貫入した石英閃緑岩が露出し、その上を風化した閃緑岩質粘土とロームが薄く覆っている。これらの露出した岩石は、石垣や石堤の石材として利用されている。

第2節 歴史的環境

1. 周辺の遺跡（第3図、第4表）

海岸寺遺跡が所在する入山辺地区は松本市の東端に位置する。西側を除く三方を山に囲まれ、西北に面した溪谷の地で、95%が山林原野である。入山辺の中央を東から西に薄川が流れ、西は里山辺地区に接する。地名は古代の山家郷に由来している。

入山辺地区は平地が少ない谷間のため、他の地区に比べて大きな遺跡はなく、調査事例が少ない。里山辺地区と第3図の範囲にある旧市の女鳥羽川左岸域、及び中山地区北部の遺跡について、発掘調査された遺跡、及び時期がわかる遺跡を中心に概観する（松本市1994・1996、市教委2010）。遺跡名の「遺跡」は省略し、文中の初出箇所では図中の番号を（ ）に記す。

旧石器時代 地図の範囲外を含め、中山の千石地点から尖頭器・有舌尖頭器各3点、西仁能田山地点から木葉形尖頭器、南中島から尖頭器4点、鋏形原から有舌尖頭器1点、弥生前（103）から大形の黒曜石製有舌尖頭器が出土している。今日、有舌尖頭器は縄文時代草創期に位置付けられている。入山辺の厩所（12）では局部磨製石斧が出土している。

縄文時代 薄川上流の入山辺からたどると、観峯平（1）から西桐原（25）まで、すべて縄文時代遺跡である。このうち時期がわかる遺跡は、図化範囲の東に外れた高地にある三城・扉峠北尾根・観峯平・駒越（17）・海岸寺（23）が前期・中期、広山原（3）早～後期、添の木（4）早・前期、大仏（10）・小仏（11）・西桐原（25）が中期、入山辺南方（54）早・中期、橋倉（55）中期がある。広山原では、後期前半の遺物がまとまって出土した。ほとんどの遺跡は谷間に沿った段丘上のやや平坦な場所に立地する。これらの遺跡では、縄文土器や石器に加えて、黒曜石の塊や剥片が採集されている。峠を越えれば黒曜石原産地帯の小県郡に通ずるので、このような山間部の小遺跡を経由して黒曜石が移動していたと推定される。

里山辺に入ると、石上（33）・里山辺鎌田（32）・薄町（34）が中期、針塚（36）早～後期、上金井（28）中～晩期、堀の内（31）・大嵩崎（57）・惣社（42）が中期、林山腰（58）中・後期、千鹿頭北（61）晩期がある。このうち、薄川右岸の石上、里山辺鎌田、薄町、針塚と左岸の林山腰で、前期末から中期初頭の住居が検出された。林山腰には後期前葉の柄鏡形敷石住居もある。薄川兩岸の山麓緩斜面から扇状地扇央部には、前期末から中期初頭の遺跡は分布しているが、中期中葉から後葉の遺跡はほとんどない。

旧市域の女鳥羽川左岸では、大村塚田（43）で中期後葉住居46軒が調査された。大村立石（46）・大輔原（47）も中期である。女鳥羽川（50）は河床下にある、後期後半から晩期後半の希少な遺跡である。

中山は縄文遺跡が多い。埴原北（105）は早期末～前期初頭、生妻（103）は中期後葉住居5、弥生前（104）は中期中葉から後期初頭の住居28を検出した。山影（106）は中期中葉から後期前半まで住居18、和泉（110）は中期である。図の範囲外に、カニホリ東（前期末～中期初頭住居9）、カニホリ西（同時期住居3）、向畑（中期初頭住居9）、坪ノ内（前期末～中期初頭住居2、中期中葉廃棄場、中期後葉・後期初頭～前葉環状集落）、南中島（中期後葉住居15の環状集落）、深沢（中期後葉住居2）の調査事例がある。坪ノ内は継続期間の長い中山地区最大の集落である。これら遺跡群の遺物は、早期押型文期、早期末～前期初頭、前期後葉～終末の各時期に集中する。前期末葉の住居群は台地の平坦面から斜面への移行部に立地し、向畑の中期初頭住居も同じ。中期中葉後半には集落立地は平坦部へ移行する。後葉後半には住居軒数が最多で環状構成となる。これらの集落は住居が減少しながら後期前葉に継続し、後期後半には低位の場所に移動したと推定されている（市教委1991c）。

中山地区遺跡群の変遷の中で、前期末～中期初頭に集落が集中する点は里山辺と共通し、注目されている。海岸寺遺跡の縄文土器もこの時期に属するものであり、地域的な動向を反映している。

弥生時代 入山辺では、広山原に弥生土器片、中入（18）に磨製石鏃がある。海岸寺遺跡には条痕文土器小破片があるが、中期前半までの遺跡は付近にない。里山辺では、薄川右岸の針塚に前期末の再葬墓5基があるが、集落は不明である。堀の内に後期住居10、里山辺鎌田に同2がある。惣社地区に宮北（41）がある。薄川の下流には中期後半住居34、後期後半住居6を検出した大集落、県町（52）がある。横田古屋敷（49）では中期後半住居4と礫床木棺墓4が検出された。中山は少なく、生妻・向畑に中期遺物がある。

古墳時代 入山辺では集落は確認されていない。里山辺の薄川右岸では、弥生後期から継続する堀の内に前期14・中期4・後期4の住居と前期の方形周溝墓1、里山辺鎌田には中期住居2がある。さらに下流には下原に後期住居19、宮北に後期住居がある。左岸では千鹿頭北で前期7・後期40の住居、小松下では後期住居を検出した。下流では、大村古屋敷に中期7・後期8の住居、県町に中・後期各4軒などがある。

古墳は薄川の河岸段丘上と扇状地両端の山麓部に分布する。段丘上では右岸の薄町から荒町にかけて積石塚古墳群があり、中期の針塚（75、県史跡）、後期の大塚（76・77）がある。針塚では竪穴式石室から舶載鏡の内行八花文鏡、鉄斧、鉄鏃等が出土した。石上（72）には周溝があるが、積石塚古墳かは不明である。

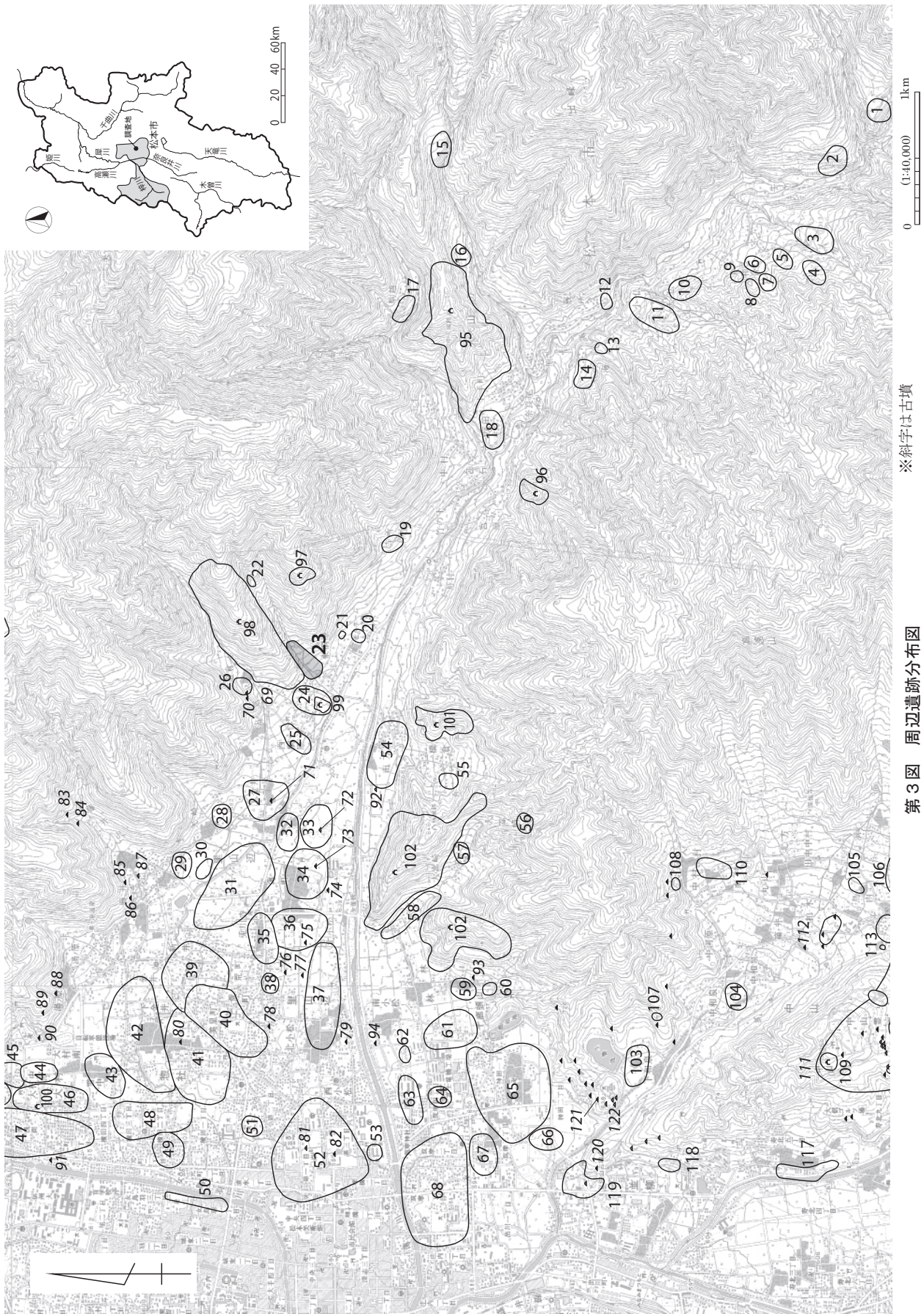
山麓部では、里山辺の藤井沢沿いに里山辺丸山（84）、山田入（83）、藤井1～3号（85～87）、御母家1・2号（88・89）、桃仙園（90）がある。海岸寺遺跡から尾根を挟む追倉沢沿いに、人穴1・2号（69・70）がある。ほかに実態が明らかではない入山辺1・2号がある。左岸には南方（92）、巾上（94）などの後期古墳があり、南方では横穴式石室から金銅製の圭頭太刀、銅鏡・承盤、鉄製壺鎧（市重要文化財）などが出土した。山麓部には護符（93）がある。

奈良・平安時代 薄川上流の山間部には、縄文と重複して広山原、添ノ木、小仏、厩所、一ノ海山の神（13）、一ノ海（14）、神城（15）、石柱（16）の平安時代の小遺跡がある。海岸寺遺跡から下流側には、上金井、上金井矢崎（28）がある。海岸寺沢をさかのぼった弘法平にある海岸寺経塚（22）は昭和10年代に発見され、12世紀の銅製経筒、刀子、白磁合子（市重要文化財）などが出土した（第4図）。

扇状地上には広範囲に遺跡が分布する。左岸には小松下で平安住居4、林（60）、林山腰、千鹿頭北で奈良住居10・平安住居7、神田で奈良・平安住居各4がある。右岸には、上流域から東桐原（24）、西桐原（25）、石上で平安住居33、薄町で同10、藤井山田（29）、藤井（30）、堀の内で平安住居67、兎川寺で同14、針塚で同14、下原（40）で奈良住居1の調査事例と、新井（39）、荒町（38）、北小松（37）がある。下流域の県町で奈良住居2・平安住居40、宮北で平安住居3、筑摩で平安住居1の調査事例がある。このうち大輔原、兎川寺、針塚、千鹿頭北、神田は9世紀末で途絶する。大村、大村古屋敷、堀の内、県町は10・11世紀に継続する集落である（原2014）。

中山地区では南中島・深沢で平安住居各1、山影で同5がみつまっているが、古墳中期以降生活の痕跡は乏しい。他に埴原牧の「繫飼場跡」、「推定信濃牧監庁跡」（ともに長野県史跡）がある。

中世以降 薄川右岸に上金井矢崎、追倉（26）、天神海道（20）があり、左岸では林山腰、護符（59）、大嵩崎、わび沢（56）がある。これらの遺跡は山城の麓や周辺に存在しているが、発掘例が非常に少ない。林山腰では2次調査で礎石建物が確認されているが、林城（102）に伴う館跡なのかは特定できなかった。これ以外では、堀の内、石上、針塚で火葬墓、薄町で土坑が確認され、青磁や白磁などの遺物も得られている。入山辺南方では平安末から中世にかけての住居址が発見され、宮北では6次調査において中世と思われる竪穴状遺構が検出されたが、該期の集落は明らかになっていない。



第3図 周辺遺跡分布図

第4表 周辺遺跡地名表

※遺跡名太字：既発掘調査遺跡 ●：住居跡6軒以上 ◎：住居跡1～5軒

番号	市番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生			古墳				古代			中近世	備考 (発掘年)	
				草・早	前・中	後・晩	不詳	前・中	後期	不詳	前期	中期	後期	不詳	奈良	平安	不詳			
1	258	観峯平遺跡					○													
2	257	梨木平遺跡					○													
3	256	広山原遺跡		○	○	○											○			
4	255	添の木遺跡		○	○												○	○		
5	254	大和合東村遺跡			○		○													
6	253	大和合小屋平遺跡					○													
7	252	大和合上ノ平遺跡					○													
8	251	大和合御殿沢遺跡					○													
9	250	大和合本村遺跡					○													
10	249	大仏遺跡			○															
11	248	小仏遺跡			○												○	○		
12	247	厩所遺跡	○														○	○		
13	246	一ノ海山の神遺跡					○										○			
14	245	一ノ海遺跡					○										○			
15	244	神城遺跡					○										○	○		
16	243	石柱遺跡					○										○	○		
17	242	駒越遺跡			○	○										○		○		
18	241	中入遺跡					○		○											
19	240	寺所遺跡					○													
20	239	天神海道遺跡																○		
21	531	天神上遺跡					○													
22	238	海岸寺経塚																○		
23	501	海岸寺遺跡			○	○		○					○				◎		○	2008, 2013, 2014
24	237	東桐原遺跡					○											○		
25	234	西桐原遺跡			○	○												○		
26	204	追倉遺跡					○												○	
27	203	上金井遺跡			○	○	○											○	○	
28	202	上金井矢崎遺跡					○										○	○	○	
29	197	藤井山田遺跡																○		
30	198	藤井遺跡																○		
31	199	堀の内遺跡			◎				●		●	◎	◎				●		○	1999
32	205	里山辺鎌田遺跡			◎	○			◎			◎					○	○	○	1989
33	207	石上遺跡			◎								○				●		○	1989
34	206	薄町遺跡			○								○				●		○	1989
35	200	兔川寺遺跡												○			●			1997
36	201	針塚遺跡		○	○	○		○	○						○	○	●		○	1982
37	487	北小松遺跡																	○	
38	196	荒町遺跡							○									○		
39	195	新井遺跡							○						○			○		
40	194	下原遺跡					○							●		◎				1986
41	79	宮北遺跡						○						◎			◎			1982
42	78	惣社遺跡			○									○			○			2001
43	81	大村塚田遺跡			●				◎											1990
44	77	大村前田遺跡							○							◎	◎			1991
45	74	大村古屋敷遺跡							●		●	●			◎	●		○		1991
46	76	大村立石遺跡			○	○											○			
47	75	大輔原遺跡			○									◎		●	●			1997
48	80	横田遺跡			○				○										○	1980
49	82	横田古屋敷遺跡						◎	◎			○	○							1997
50	156	女鳥羽川遺跡				○	○		○								○	○		1970
51	160	四ツ谷遺跡			○			○										○		
52	161	県町遺跡						●	●			◎	◎			◎	●			1979, 1987~89, 1996, 2001, 2007, 2010
53	164	埋橋遺跡			○												◎			1986
54	235	入山辺南方遺跡		○	○	○									○				◎	1988
55	236	橋倉遺跡			○														○	
56	212	わび沢遺跡					○												○	
57	211	大嵩崎遺跡			○													○	○	
58	208	林山腰遺跡			◎	◎											◎	◎	◎	1987
59	210	御符遺跡					○							○					○	
60	213	林遺跡					○								○				○	
61	61	千鹿頭北遺跡				○			○	●		●		●	●					1987
62	516	小松下遺跡			○									◎			◎		○	2007
63	167	筑摩北川原遺跡																○		
64	168	筑摩南川原遺跡							○						○					
65	169	神田遺跡					○	○							○	◎	◎			1988
66	480	神田西遺跡													○				○	
67	166	三才遺跡															○		◎	1991
68	165	筑摩遺跡						○	○					◎			◎			2005
69	232	人穴2号(里山辺14号)古墳															○			
70	231	人穴1号(里山辺13号)古墳															○			
71	229	上金井(里山辺12号)古墳															○			

番号	市番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生			古墳			古代			中近世	備考 (発掘年)
				草・早	前・中	後・晩	不詳	前・中	後期	不詳	前期	中期	後期	不詳	奈良	平安		
72	228	石上古墳										○					1989	
74	227	里山辺猫塚(里山辺17号)古墳											○					
75	225	針塚(里山辺4号)古墳								○								
76	224	大塚2号(里山辺3号)古墳											○					
77	223	大塚1号(里山辺12号)古墳											○					
78	220	荒町(里山辺1号)古墳											○					
79	221	北河原屋敷(里山辺11号)古墳										○						
80	109	惣社車塚古墳											○					
81	188	県塚2号古墳											○					
82	187	県塚1号古墳											○					
83	216	山田入(里山辺7号)古墳											○					
84	217	里山辺丸山(里山辺6号)古墳										○						
85	218	藤井1号(里山辺8号)古墳										○						
86	219	藤井2号(里山辺15号)古墳										○						
87	514	藤井3号古墳											○					
88	214	御母家1号(里山辺5号)古墳										○						
89	215	御母家2号古墳											○					
90	108	桃仙園古墳											○					
91	104	国司塚古墳											○					
92	264	南方古墳										○					1989	
93	230	御符(里山辺9号)古墳										○						
94	222	巾上(里山辺10号)古墳										○						
95	265	中入城址(山家城址)														○		
96	269	宮原城址														○		
97	268	霜降城址														○		
98	266	桐原城址(下降城・上降城)														○	2007, 2008	
99	530	桐原氏館址														○		
100	122	大村館址														○		
101	267	水番城址(林城付属施設)														○		
102	233	林城址														○		
102	233	林城址(大城)														○		
102	233	林城址(小城)														○		
103	340	生妻遺跡		○	○●	○		○		◎	◎			○		○	1989	
104	355	弥生前遺跡	○	●	○●	◎								○		○	1989	
105	483	埴原北遺跡		○	○									○			1991	
106	356	山影遺跡			●	◎				●				◎		○	1991	
107	341	弥生遺跡					○											
108	342	宮平八幡宮裏山遺跡					○								○		1991~2001	
109	372	鍬形原砦址														○		
110	343	和泉遺跡			○								○			○		
111	419	中山古墳群										○			○		1990~2001, 2004~2005	
112	392	小丸山(中山23号)古墳										○					1991	
113	443	推定信濃諸牧牧監庁跡			○									○		○	1991	
114	357	ツカヤ下遺跡					○		○				○					
115	370	鳥内遺跡											○					
116	344	西越遺跡											○					
117	316	瀬黒遺跡						○					○		○	○		
118	171	山行法師遺跡				○			○				○		○			
119	170	平畑遺跡						○					○		○			
120	190	弘法山古墳							○								1974	
121	407	仁能田山(中山36号)古墳							○								1972	
122	435~437	棺護山古墳1~3号											○					
123	400・401	生妻古墳1(中山30号)・2号											○					

図中にある山辺地区の城館址は、桐原氏が領した桐原城址（98、県史跡）、桐原氏館址（99）、桐原城の支城・霜降城址（97）、小笠原氏の居城・林城址（大城・小城、102、県史跡）、水番城址（101）、中入城址（95、別名山家城、県史跡）、宮原城址（96）である。他に大村館址（100）、鍬形原砦址（109）がある。

2. 海岸寺の歴史（第4図）

『長野県町村誌〈南信篇〉』（長野県 1936）には、明治7年（1874年）東筑摩郡山辺村から報告された「寺」の項に、海岸寺について次の記述がある。文中にある「弘法平」については、別項に記述がある。一部旧漢字を改め、西暦年を補って引用する。また、奥院から中院への移転を記録した1617年の木造棟札と、焼失後の再建願いを記した1801年の古文書を併せて紹介する（市教委 2010）。

旧海岸寺 「古へ高野山末、古義真言宗、村の寅の方桐原耕地にあり。古刹にして聖武帝の御宇、天平年中聖徳太子の創建、桐原山弥勒院海岸寺、隆福坊法傳住務と云ふ。其後十一面千手観音、宝亀二年（771）行基菩薩の作と云ふ。坂上田村將軍利仁、延暦二十三年甲申年（804年）當國を征し給ひし時、尊信ありて堂塔を莊嚴なさしむ。住務徳遊坊と云ふ。大同元年（806年）二十四の坊舎を建て、七堂伽藍の梵刹にして、今の地を去ること十二町、山の崖際にあり（今弘法平と云ふ地なり）住僧智達法印、寛正元年（1459年）桐原の地頭、桐原大蔵頭真智、大に修理を加へて、鬼門除と成す。天文二十二年（1553年）癸丑、夏兵乱の災いに罹り大に破損す。法印阿闍梨明岸代、天正年中火災。同十九年（1591年）石川伯耆守康昌代、寺領を没せらる。元和三丁巳年（1617年）三月、桐原與惣右衛門祈願に依り、奥院を中院に移し、又寛文八年（1668年）下ノ坊の地に堂塔を移す。元禄十丁丑年（1697年）、快應法印衆生の力を以て修理を加へ、三月開扉すと雖も、無檀にして漸々衰微せしを以て、爾来里山辺村旧兎川寺末同様となり、間々住僧も絶せしことありしに、記録もなし。天保十三壬寅年（1842年）より以降無住に付、明治三庚午冬（1870年）、旧藩主戸田光則知事職たりしとき、更に破却の命を受け、既に本堂を破毀し、殆ど庫裏を毀たんとする時、豈圖んや村落学校を設けして、人材を教育するの基礎を立つべきの命を感拝し、速やかに仏体並什器を他の法類へ委託し、大に營繕を加へ、学校と為す。校名桐原学校側ち是れなり。」

旧海岸寺跡地 「今弘法平と云ふ。村の丑の方桐原耕地、大蔵山の麓にして、天平年中紀州高野の末古義真言、桐原山海岸寺並塔中二十四坊を創建して、七堂伽藍の梵刹たりしに、漸々衰廢して大に破損す。因て元和三丁巳年（1617年）中院へ移すと云ふ。分間詳かならずと雖も礎石を存す。」

『木造棟札』 元和3（1617）年（『信濃史料』第22巻453頁）

「 元和三年丁巳三月十八日

桐原山海岸寺本尊千手観音堂從奥院当所へ安鎮奉造立、當場並田地下々田五畝四歩畔共寄進に付置者也、
施主 桐原與曾衛門」

『桐原村海岸寺焼失再建願控』 享和元（1801）年（『松本市史』第4巻 旧市町村編Ⅳ 433頁）

「 奉願口上覚

山家組桐原村海岸寺之儀、去ル寛政十年焼失仕候処、此度村方相談之上建立支度奉存候、尤茅葺ニ而間口八間ニ、裏行四間ニ仕、仏間之裏式間三尺之間、老尺五寸之出しニ支度、尤組物等一切無御座候、則別紙新古墨引仕奉掛 御目ニ候、此段 御許容被成下置候様奉願上候、以上、

海岸寺無住ニ付本寺山家組兎川村 願 主 兎 川 寺

桐原村 村 頭 平右衛門印 同 重左衛門印

享和元辛酉年 三月 庄 屋 作右衛門印 同 条右衛門印

藤井佐左衛門殿

（以下省略） 」

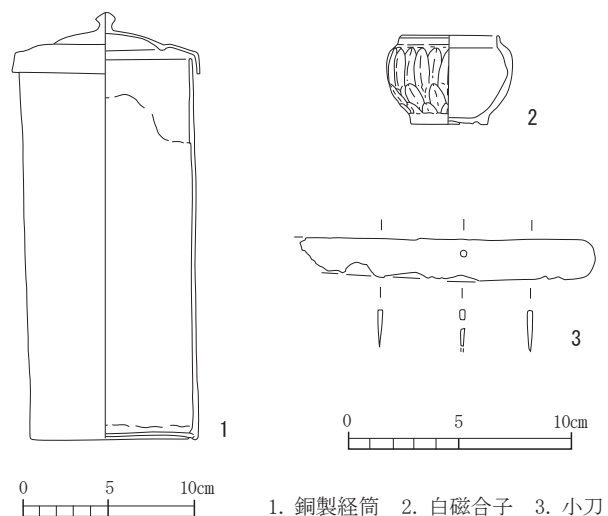
桐原にあった海岸寺は、「桐原山海岸寺」、または「弥勒山海岸寺」と称したと伝えられ、中世にはすでに衰退し、近世では里山辺の兎川寺の末寺として観音堂を残すのみになっていた。寺伝では推古天皇の代に聖徳太子が創建し、本尊の木造千手観音は宝亀2年行基の作というが、根拠はない。観音堂に安置されてきた観音像は台座裏に天和3（1683）年の修理銘があり、時の松本城主水野忠直が大檀那となり、京都の仏師が修理したことが記されている。この墨書銘に行基菩薩の作、天平年中の彫刻という旨の記述がある（木下2002）。一時かなり損傷を受けていたようで、欠損・後補の部分が多いが、鬘波式衣文などを残す作風の特徴と、内割りを施さない古式の一木造りの技法から、藤原中期、10世紀後半頃の製作といわれている（東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会1984、長野県史刊行会1992）。本像は松本平で最古の仏像として、県宝に指定されている。現在は収蔵棟に安置され、5月3日には兎川寺と徳運寺の住職を招いて、祭礼を行っている。

最初この寺は北方の大蔵山際にある弘法平にあったと伝えられている。ここにあった経塚から12世紀の銅製経筒などが出土している（第4図）。この経塚と観音像の存在は、海岸寺の創建が平安時代にさかのぼるという推定の根拠ともなる。

中世に至り、1460年に桐原の領主の桐原真智が修理を加えて鬼門除けとしたが、武田氏の侵攻により破損した。その後天正年中に火災に遭い、1591年に寺領を没収された。1617年に桐原與曾衛門の祈願により奥の院を中院に移し、田地を寄進した。さらに1668年には下の坊の位置に堂塔を移した（松本市1996）。1798年には焼失したが、1801年無住のため兎川寺が願主となって再建を願い出た。明治初年の廃仏毀釈により廃寺となった。この頃、弘法平には礎石が残っていたようである。

海岸寺に関する史資料は少なく実態は不明であるが、かつて沢奥にある泉と巨岩を控えた、標高900m前後の弘法平にあったと伝えられる。現在は6×7mほどの基壇の奥にある石積み上に、明治21年銘のある石殿があり、愛宕大権現、不動明王の石像が安置されている。石殿には弘法大師像が収められ、9月には「弘法様」の祭りが行われている（木下2002）。基壇の周囲には人工的に造成された平坦地が数段認められ、北側の尾根に露頭する巨岩の一角に海岸寺経塚が作られた。この立地環境から、海岸寺は弘法平を中核とする山林寺院（山寺）として創建された可能性が推測される。これらの状況を松本市波田の若澤寺元寺場遺跡、内田の牛伏寺堂平跡の発掘調査結果と対比すると、山林寺院の創建はいずれも平安時代に遡ることが明らかにされており、この点では整合的である。年代は10世紀を中心とし、一部9世紀後半に遡る可能性が想定されている。

海岸寺の存在や形態はともかく、この地に観音像が伝えられた理由についても、弘法平との関連が注目される。松本周辺の山林寺院立地の共通点は、いずれも山中の湧水地点の近くに立地することである。牛伏寺と弘法平については、巨岩が近くにある共通点が認められる。こうした景観的な共通点は、平安時代の山林寺院建立に関わる重要な要素であったと思われる。



1. 銅製経筒 2. 白磁合子 3. 小刀

第4図 旧海岸寺経塚出土品実測図

第3章 遺構と遺物

第1節 概観

1. 遺構

調査範囲は北東から南西方向の長軸約 225 m、短軸方向の最大幅約 100 m、海拔標高 804m から 757 m まで 47 m の比高を有する南西向き扇状地面と、北端を画す海岸寺沢の氾濫原にわたっている。前章で記した通り、扇状地中央部でくの字に折れて上る市道 2263 号線を境界として、北西側を 1・2 区、南東側を 4・5 区、幹線農道から鳥獣被害防止ゲートまでの市道線部分を 3 区と呼称した。石垣を含めて、以下の遺構が全地区から検出されている。

住居跡 2 (平安、近世)、焼土跡 4 (中世)、遺物集中 1 (平安)、溝跡 8 (近世ほか)、土坑 77 (中世・近世ほか)、石垣 40 (近世以降)

住居跡は 3 区に平安時代の SB01、4 区に近世と思われる SB03 がある。平坦地 25 の盛土層下から検出された SB03 は整地面(テラス状遺構)で、中・近世陶器を伴い、平坦地造成時期の年代とかかわる。焼土跡のうち 3 基は平坦地 25 の沢状地形の中に並び、戦国期と推定される。遺物集中 SQ01 は平坦地 24 で検出され、SB01 とほぼ同時期と思われる。溝跡は 4 区平坦地 24 の SD09 が古代、2 区の石垣に伴う SD01 が近世以降と推定されるほかは、時期が不明である。土坑には、4 区の中世火葬施設 SK59・79、埋葬人骨を伴う 3 区の近世土坑墓が含まれる。その他の土坑は主に 1 区の平坦地 9・11 に多く、3 - 1・2 区、4 区の平坦地 25・29 などで検出されたが、時期・性格は明らかではない。多くは平坦地造成以後の畑作に伴うものと推定された。平坦地の周囲を画す石垣の大部分は、近世以降の耕地造成に伴って構築されたことが明らかになった。石材と石積方法の変化から、構築時期の新旧が推定されるものがある。

2. 遺物

遺物は縄文時代から近世にわたり、時期と種別は次のとおりである。

縄文時代(前・中期土器、石器)、弥生時代(中期土器)、古墳時代(後期土器)、平安時代(土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器)、中世(土器、陶磁器、銭貨)、近世(陶磁器、人骨)

遺物の大部分は土器、陶磁器であり、重量は平成 25 年度調査約 6 kg、26 年度調査約 4 kg、合計 10 kg 弱が出土した。重量比では 80% 強は平安時代に属し、中世は 10% 弱、縄文時代は約 6%、近世は 2% 弱で、弥生・古墳時代は極めて少ない。

縄文土器は前期末葉にまとまり、石器は少数ながら分布範囲は広い。平安時代の土器は SB01 と SQ01 から集中して出土し、いずれも 10 世紀代と考えられる。他の地点からの出土量は少ないが、2 区を除いて全地区から出土している。中世・近世の土器・陶磁器は少量ではありながら、平坦地 25 の沢状地形・SB03、平坦地 29 の火葬施設 SK59 付近、3 - 2 区からややまとまって出土し、それぞれの遺構や平坦地構築時期の年代を推定する上で、貴重な資料となる。中世土器・陶磁器には、青磁蓮弁碗、古瀬戸、カワラケ、内耳鍋などがある。鎌倉・戦国時代に属するものがあり、時期差がみられる。

第2節 遺 構

1. 竪穴住居跡

SB01 図版1 PL2 **位置**: 3-2区 III B05・10

経過: 検出面まで重機で表土剥ぎしたところ、地山に黒色土(3層)が方形に落ち込む部分がみられた。精査して検出作業を行うと北西・南東方向に軸が通る方形プランが確認され、この範囲から土器片が多数出土した。さらに南東隅でカマド跡と思われる崩れた石組みが検出されたことから、住居跡と判断した。黒色土範囲の確認作業において、土質の差から本跡を切る土坑 SK11~14・17 が検出された。

埋土: 黒色土(3層)の層厚は北側で10cm、南側で20cm程度であり、ほとんどが削平されている。3層下部にある黒褐色土(5層)はしまりがあり、床面と思われる。床を掘り下げると、土層の薄い所では、地山の黄褐色土(7層)が露出する部分がある。深い部分では、凹凸がある地山を褐灰色土(6層)で平坦に埋め、床面を作っている。

規模・形状: 東壁にカマドがある方形プランと思われ、調査できた部分は現存長東西3.8m・南北4.0mのほぼ隅丸方形である。西側は旧地形造成時の段差部分にかかっており、削られている。南側は調査区外となる。壁の立ち上がりはわずかで、確実な形状は確認できない。

遺物: 床面上の黒色土の層からは、平安時代の土器約4.9kgが出土した。西側からは図化できた平安時代の土師器杯(図版35-3)・椀(8)、カマド跡の石組周辺からは、同じく土師器杯(4)、黒色土器・灰釉陶器椀(14・17)、須恵器壺(27)などが出土した。住居跡確認前に出土した平安時代土器もあり、本跡に帰属する土器は若干増えるであろう。ほかに釘の可能性のある鉄製品(図版37-3-1)がある。本跡から大部分が出土した甕(図版35-26)は、床面を切る土坑 SK17 出土破片と接合し、同土坑の土師器杯2点(29・30)は本跡とほとんど時期差がない。

時期: 出土土器から平安時代10世紀代と考えられる。

SB03 図版2 PL8 **位置**: 4区平坦地25 I Y01・06・07

経過: 表土剥ぎの際、現地表面下約1mの深さで炭化物が薄く散布する面を検出し、カワラケ破片を確認した。山側を切土され、耕作土直下から現れた黄褐色砂質シルトの地山上面で、灰黄褐色土が等高線方向に直線的に落ち込むプランが確認された。土色の違いは比較的明瞭であった。平坦な整地面となる可能性があったため、等高線方向に3本、直交方向に1本サブトレンチをあげ、床を確認した。床面は明瞭ではなかったが、傾斜はあるものの平坦な地山面が現れ、埋土中から中・近世の土器・陶器、炭化物集中部分が検出された。断面実測後、遺物分布・平面図を記録し、炭化物を採取した。

埋土: 3分層(1~3層)されたが、層序は上下の水平堆積ではない。いずれも灰黄褐色のシルトで、砂礫、風化した亜角礫、炭を含む。北西端の壁際、埋土上部の70×40cmの範囲に炭が集中していた。周囲に焼土はなかった。

規模・形状: 等高線方向の北西-南東にほぼ直線状の壁線があり、検出された部分では長さ約8.8m、直交方向は約3.8mを測るが、斜面下側は不明である。北西部はSF01~03がある沢状地形と接してプラン不明、南東隅は直角に折れるため、本来は長方形プランと推定される。山側は壁高約15~25cmを測り、比較的急角度で立ち上がる。貼床は確認されず、地山を床面と考えた。平坦にした床面に凹凸はなく、約5°の傾斜がある。周溝・柱穴・炉等の施設は確認されなかった。山側の壁線と平坦に近い床面から、整地面(テラス状遺構)と考えられる。

遺物: 北西部側にやや集中して、土器・陶磁器破片が出土した。内容は古代の灰釉陶器少量、中世の古瀬

戸（図版 37 - 93～95）、青磁蓮弁碗（91）、内耳鍋（102～104）、カワラケ（92）、近世の陶器（96～98）である。

時期：北西壁際埋土上部に集中していた炭を年代測定したところ（測定番号 IAAA-142581）、1670 年～1944 年まで 4 時期の年代が算出され、18 世紀中期の可能性が最も高かった。この年代は出土した近世陶器の時期と整合的である。水田造成以前の遺構であり、造成時期の上限年代の根拠となる可能性がある。

2. 焼土跡

SF01・02・03 図版 3 PL8 **位置：**4 区平坦地 25 I Y01

経過：表土剥ぎの際、市道に近い北西部で広い沢状地形が確認され、多量の巨礫を交えた盛土で埋め立てられていた。盛土を除去すると、現地地表下約 0.6～1.2 m の深さで焼土跡と内耳鍋破片が検出された。沢状の凹地は旧地形の傾斜面と思われた。底面は礫が露出した地山となるが、焼土跡が 3 箇所検出された。巨礫を含む厚い盛土を重機で除去したため、トレンチ・ベルトは設定しなかった。南東側に SB03 が接し、切り合う可能性があるが、上部を削平され検出面では埋土に明瞭な差が見られなかったため、発掘時には新旧関係が不明であった。

埋土：暗褐色砂質シルトの単層である。4 区の各平坦地外周トレンチの 3・4 層に相当する。角礫の巨礫を多量に含み空隙があることから、造成時の盛土と推定される。この埋土の下部、黄褐色砂質シルトの地山直上から遺物が出土した。斜面下側には少量の炭が散在していた。

規模・形状：等高線に直交する沢状地形は、北西側は市道に沿った石垣にかかり、幅は不明。斜面上側は水田造成により地山まで削平され、下側は平坦地 26 東面石垣 SH40 となる。検出部分は、北西－南東の幅約 8.6 m。等高線直交方向の凹地部分の長さは約 3.2 m を測る。中央部から上側は約 15° の傾斜があり、下側は 3° 程度と平坦に近い。南東部は緩く立ち上がり、床面との比高は約 50 cm ある。貼床は確認されず、地山を床面と考えた。柱穴等は確認されなかった。斜面中央部の SPA - A' 付近には、等高線直交方向に約 1 m 間隔で 3 箇所焼土跡があり、上から下へ SF01・02・03 を付番した。焼土は 20～40 cm の不整形で暗赤褐色を呈し、赤化部分は硬化していない。縁石や掘り込みは確認できない。焼土の規模・形状の近似と直線的な分布状況から、沢状地形を利用した一連の施設と推定した。

遺物：土器・陶磁器破片約 230 g がある。北半部を中心に、盛土層下の地山直上から出土した。内耳鍋が大部分を占め（図版 37 - 90）、カワラケ少数がある。ほかに土師器・灰釉陶器（105）もある。

時期：内耳鍋の出土から本遺構は戦国期と推定され、中世・近世の土器・陶磁器が出土した SB03 に先行する可能性が高い。

SF04 図版 4 PL7 **位置：**5 区平坦地 2 II P23

経過：平坦地 2 の長軸中央に南東端から幅 1 m のトレンチを重機で掘削し、北半部の現地地表下約 30 cm の深さで焼土跡を確認した。排土置き場とするため、平坦地 2 は 2 分割して南半部から調査し、いったん埋め戻した。南半部調査後トレンチを復旧し、周囲を表土剥ぎしたところ、焼土跡の約 2 m 南で同じ深さから、平安時代の黒色土器碗 1 個体が出土した。当該期住居跡の可能性があるので、当初のトレンチに直交方向のサブトレンチを設け、断面・平面でプラン確認を試みた。掘り方等はみられず遺物も単体のため、SF04 を付番した。単点で焼土範囲、遺物を記録し、焼土の年代測定を目的に炭化物を採取した。写真撮影後、焼土跡及び土器出土地点の下層を掘り下げたが、新たな遺構・遺物は検出されなかった。

埋土：上層に耕作土下部にあたる灰黄褐色シルト（1 層）、焼土の直上には風化礫が混じり、大礫・巨礫を含む黒褐色シルト層（2 層）が堆積する。焼土層の下層は 2 層近似の暗褐色シルト（3 層）である。

規模・形状：検出位置は平坦地 2 中央部の、ほぼ平坦な部分である。焼土は東西方向に長軸が通る、144

cm×70 cmの不整楕円形を呈す。層厚は中央部で3~4 cm。検出面の黒褐色シルト（3層）が被熱して鈍い赤褐色を呈し、硬化していない。

遺物：本跡から約2 m南側の2層中で、平安時代の黒色土器碗1個体（図版37-88）がつぶれた状態で出土した。全体の約80%が遺存する。本跡の周囲数mの範囲から、他に土師器皿・甕小破片が少数、灰釉陶器広口瓶の破片（図版37-89）が出土した。

時期：発掘時には復元可能な平安時代土器が付近から出土したことから、同時期の焼土跡、あるいは住居跡のカマド残存部分を推定した。炭3点を年代測定した結果、1点は12世紀後半（IAAA-142585）、2点は13世紀後半（IAAA-142584・142586）の可能性が高いものであった。出土した土器より新しく、平安時代末期から鎌倉時代前期に相当する遺構と考えられる。

3. 遺物集中

SQ01 図版5 PL7 **位置**：4区平坦地24 I Y13・14

経過：平坦地24の南東端から表土剥ぎしたところ、黒褐色土層に比較的多く土器を含む部分を確認した。同時に東側に近接して走る溝跡SD09を検出し、断面観察で本遺構の上層にあることから、先行して調査した。重機トレンチの壁面精査・遺構検出で遺物が増えたが、プランは把握できなかった。サブトレンチによって平安時代の遺物包含層、その下層で縄文土器の包含層を確認した。遺物分布範囲の規模から当初住居跡を想定したが、掘り方等は確認できず、遺物が集中するためSQ01を付番した。多量の炭化物が混じる部分から年代測定を目的に炭化物を採取し、単点で遺物・集中範囲を記録した。SD09とは遺物にほとんど時期差が認められず、近い時期ながらSD09が本跡の東端を切ると推定した。

埋土：斜面上方では耕作土直下で地山が現れる。下方は沢状の凹地となり、断面SP.A-A'では上層の鈍い黄褐色土（2層）に平安時代土器、黒褐色土の薄い間層（3・4層）を挟んで下層の褐色土（5層）に縄文土器が含まれる。断面SP.B-B'では2層下は礫を多量に含む厚い灰黄褐色土（6層）となり、縄文時代の遺物包含層はみられない。

規模・形状：検出された部分は、長軸は北北西から南南東方向、短軸はこれと直交方向となる、約7.5 m×4.0 mの半円状の範囲である。短軸方向の南側は平坦地25東面石垣SH39となる。

遺物：総量約2 kgの平安時代土器・陶器が出土した。遺物集中と認定する以前に採取した遺物を併せると、3 kg弱となる。種別は食膳具が圧倒的多数を占める。土師器が最も多く、杯（39・43・48・49・51~53）・碗（63・65・67・78）・鉢（80・81）がある。ついで黒色土器杯（68・71）・碗（72）がある。灰釉陶器は碗（62）・皿（79）が少量、須恵器（77）はさらに少ない。煮炊具では土師器甕・小型甕、貯蔵具では須恵器甕（87）と器種不明の灰釉陶器が少数みられる。土師器杯・碗には煤が付着したものもある。他に縄文前期・中期土器約250 g、弥生中期土器ごく少量が出土している。

時期：出土遺物から平安時代の遺物集中と考えられる。後世の掘削・盛土によって本来の規模・形状が不明であるが、分布範囲が狭く復元個体を複数含むことから、同地点にあった住居跡などが破壊された可能性が高い。時期は9世紀末から10世紀代と推定される。炭2点による年代測定の結果は、1点が8世紀後半から9世紀代（IAAA-142582）、1点が10世紀後半（IAAA-142583）であった。後者は出土した平安時代土器の年代と整合する。

4. 溝 跡

SD01 図版7 PL14 **位置**：2区平坦地17 I O16・21

平坦地17東面石垣SH21の下端を調査するためトレンチ掘削したところ、埋没していたSD01が確認さ

れた。北北西－南南東に走り、長さ 5.0 m、幅約 40～60 cm、深さ約 40～50 cm。底面は右側がわずかに低い。SH21 下端が東側面を兼ね、主に自然垂角礫を用いる。左側は不規則ながら大きめの石を横長に積み、右側は板状の石を多く用いて谷積する。西側面はやや小さめの石をまばらに積み、下半部には少ない。遺物は出土していない。SH21 と一体の溝で、構築時期は同時と推定される。

SD02 図版 7 PL4 **位置**：3－1 区 I W23

地山の黄褐色土層上面で検出された。南北に走り、等高線に斜行する。南側は調査範囲外となり、長さ 4.4 m を検出した。幅は一定せず約 40～80 cm、深さ約 30 cm。底面には地山の礫が露出する。遺物は出土していない。

SD03 図版 6 PL6 **位置**：1 区平坦地 11 I R19・20、S16

地山の黄褐色土層上面で検出された。等高線と直交する東北東－西南西方向に、ほぼ直線的に走る。長さ約 11.8 m、幅約 90～145 cm、中央部の深さ約 50 cm を測る。底面は二段に掘り込まれる状況がみられるが、一定しない。部分的に地山の礫が露出する。遺物は出土していない。本溝の東端から斜面上方約 4 m には、SH07 が構築された段差を介して同じ方向に走る SD07 の西端が位置する。

SD04・05・06 図版 7 PL5 **位置**：1 区平坦地 9 I S12

平坦地 9 東面の段差に近い位置に、3 条の短い溝が 2 m 四方ほどの範囲にある。SD04 は等高線方向、SD05・06 は直交方向で、SD04・06 はほとんど接している。SD04 は長さ 1.38m、幅約 38 cm、深さ 10 cm 前後、SD05 は長さ 1.28m、最大幅 36 cm、深さ 10 cm 前後、SD06 は長さ 1.20m、最大幅 44 cm、深さ 20 cm 前後である。遺物は出土していない。現状では浅く短い溝であるが、切土されて一部が残存した可能性もある。

SD07 図版 7 PL5 **位置**：1 区平坦地 9 I S11・12

地山の黄褐色土層上面で検出された。1 段下の平坦面 9 にある SD03 と同じく、等高線と直交する東北東－西南西方向に、ほぼ直線的に走る。長さ約 7.5 m が検出されたが、中間 2.2 m は削平されて途切れる。幅約 50～60 cm、東側の深さ約 10 cm を測る。底面は平坦である。遺物は出土していない。SD03 と連続する溝の可能性はある。

SD09 図版 5 PL7 **位置**：4 区平坦地 24 I Y13・14

表土剥ぎしたところ、黒褐色の埋土に古代土器を含む溝跡を確認した。地山の黄褐色土の上に堆積した腐れ礫を含む鈍い黄褐色土上面にあり、土色の差は比較的明瞭であった。直交方向のサブトレンチによって本遺構の幅・深さを断面で確認し、隣接する古代遺物集中 SQ01 と同時に掘り下げた。SQ01 も近似した黒褐色土であり連続する可能性があったが、サブトレンチ断面でわずかに離れて上層に位置することを確認した。埋土は黒褐色シルトで、腐れ礫を含み炭が少量混じる。ほぼ等高線方向を走り、検出された部分は南北約 4.6m で、この間約 70 cm の比高がある。幅は 50 cm 前後、深さ約 20 cm を測る。平安時代の土師器杯（図版 36－84）と黒色土器杯・椀少量が出土したため、同時期の溝跡と考えられる。

5. 火葬施設跡

SK59 図版 15 PL9 **位置**：4 区平坦地 29 III D09－01・05

平成 25 年度調査において、平坦地 26～29 に重機でトレンチ掘削する試掘を行った際、炭化物を伴う土坑が確認された。トレンチは埋め戻してあったため、調査開始当初これを復旧して遺構検出面を確定し、周囲の表土剥ぎを行った。SK59 は水田造成時の盛土下で再検出され、焼骨片と多量の炭が混じっていたため黄褐色の地山層と容易に識別できた。切り合いはない。地山の礫混じり砂質シルトを掘り込み、旧表土と思われる砂・シルト混じりの暗褐色土を埋土とする。銭貨 2 点が出たため、火葬施設と判断した。掘り込みは浅く数 cm 下で底面となり、地山に含まれる拳大の垂角礫が露出して、でこぼこの状態となる。

礫は被熱している。形状は北西－南東にやや長い円形で、長軸 1.05 m×短軸 0.93 m。壁は非常に緩く皿状の形態を呈す。北西部がやや深く 15 cmを測る。

銭貨は磨滅しているが、元祐通宝・聖宋元宝（2・3）であった。遺構内からではないが、約 3 m西側の同じ検出面から、青磁蓮弁碗の破片（図版 37－1－100）が出土した。これは鎌倉時代 13 世紀代の産であり、銭貨とともに年代の傍証となる。出土した炭 2 点を年代測定したところ、14 世紀前半（IAAA-142578）と、13 世紀末・14 世紀後半（IAAAA-142581）の年代が測定された。

SK79 図版 16 PL9 **位置**：4 区平坦地 25 III E02-08

平坦地 26 東面石垣 SH40 の背後に重機でトレンチを掘削し、遺構確認を行った。南端から着手したところ、現地地表下約 1.3 mの深さで焼土と炭化物が集中する部分を確認した。このトレンチによって本遺構の東半部埋土上部が掘削された。地山層上面でプラン確認し、埋土に焼土・炭化物と骨片が混じっていたため、SK59 類似の火葬施設と推定した。東半部の調査後、重機で幅 1 m拡張して南・西壁を検出した。切り合いはない。埋土上層（1 層）は砂礫を含む褐色シルト、下層（2 層）は炭を多量に含む暗褐色の焼土層である。西壁以外プランの上部は正確に把握できないが、南北に長軸があり、1.22m×1.00mの東側が膨らむ不整楕円形を呈す。壁は低い急な角度で立ち上がる。2 層下部までの深さは深い部分で 17 cm、底面は平坦である。2 層から焼骨片が少量出土した。炭を年代測定したところ、16 世紀代の年代が測定された（IAAA-142580）。本跡から約 50 m西下方に位置する SK59 の炭素年代測定値は、13 世紀代であり（IAAA-142578・142579）、中世の火葬施設には時期差がある。

6. 墓 跡

SK08 図版 8 PL3 **位置**：3－4 区 I V17－15・22－03

調査範囲で検出されて遺構としては最も低所の、標高 761 m付近に位置する。切り合い関係にある土坑 SK07・58 と併せて記述する。3 基の土坑の順序は、土層断面観察から SK08 → SK07 → SK58 となり、いずれも亜角礫を多量に含む黄褐色土の地山層を掘り込む。SK58 は SK07・08 が切り合う部分の上部に掘り込まれる。59×43 cmの楕円形、深さ 40 cmの小型土坑である。SK07 は 210×175 cmの不整形、深さ 56 cmの大型土坑である。

SK08 は南北方向に長軸が通る 160×120 cmの楕円形、深さ 57 cmの大型土坑である。北・西壁に接して長方形の木棺痕跡があり、176×100 cmを測る。底面近くに、北頭位で右向き（西向き）に下肢を折り曲げ合掌した側臥屈葬人骨が遺存していた。人骨は 20 歳代と推定される男性である。3 基の土坑から遺物は出土していない。埋土は粗粒砂・亜角礫を含むにぶい黄褐色土または灰黄褐色土である。この種の土層は平坦地造成土層と近似することから、平坦地造成以後の遺構と推定される。また SK08 については、側臥屈葬の埋葬姿勢が中世から近世前半頃に見られることから、近世前半頃の土坑墓の可能性もある。

7. 土 坑

土坑は 77 基検出された。分布する地点は、3－2 区、3－1 区、1 区平坦地 9・11、4 区平坦地 25・26・29 の各地点である。調査時点で SK を付した遺構中で、性格が推定される火葬施設、墓跡については前記のとおりである。これ以外の 70 余基の土坑については時期・性格が明らかではないため、個々の詳細は土坑実測図及び遺構一覧表に譲り、地点ごとに土坑群として記述する。土坑の埋土には、褐灰色基調の土坑と黒褐色基調の土坑二者がある。トレンチ調査の所見では、黒褐色土は平坦地造成以前の表土層とみられることから、この埋土を有する遺構は造成以前、褐灰色土は平坦地造成土に近似するため、造成以後の遺構と推定される。

3-1 区土坑群 SK01～06 図版9 PL4 **位置**：I W22・23・24

標高768 m前後の地点で、溝跡SD02に隣接して6基が分布する。SK01と調査範囲外に係るSK04・06は平面形が不整の長方形または楕円形、長軸1 m以上の大型と思われる。埋土は灰黄褐色またはにぶい黄褐色である。SK03を切るSK02・04・05直径50 cm以下の小型、平面形が円形または楕円形を呈する。埋土はSK02が灰黄褐色、SK04・05が黒褐色である。大半が平坦地造成後の土坑であろう。

3-2 区土坑群 SK09～17 図版10 PL2 **位置**：III B05・10、C01

標高763 m前後の地点で、古代住居跡SB01と切り合うか、隣接して9基が分布する。SK17はSB01の床面に掘り込まれ、104×72 cmの長方形、深さ44 cmを測り、黒色の埋土から平安時代の土師器杯2点（図版35-29・30）が出土した。その他は直径20～60 cm前後の円形または楕円形を呈する小型土坑である。埋土はSK10・12・13・16が黒色土、SK09・11・14・15は灰黄褐色土を基調とする。SK17が古代と推定されSK10・12・13・16も古代の可能性がある。その他は平坦地造成後の土坑であろう。

1 区平坦地11 土坑群 SK18～47 図版11～13 PL6 **位置**：I R15・19・20・24・25、S11・16・21

標高774～778 m前後、東西約24 m×南北約12 mの緩斜面に30基が分布する。SD03に隣接する。集中部分や柱列を構成する配置はみられない。SK18・23・40は長径120～150 cmの円形または楕円形を呈する大型土坑である。SK28・29・35・37～39・44・46は直径50 cm未満の円形または楕円形・隅丸長方形の小型土坑である。その他は長径50～100 cm、楕円形を中心に不整な隅丸長方形などを呈する、中型の土坑である。深さは10～50 cm前後で、口径との相関関係は見出せない。埋土はSK25が黒褐色土のほか、すべて灰黄褐色または褐灰色である。

1 区平坦地9 土坑群 SK48～57 図版14 PL5 **位置**：I S11・12・17

平坦地11の上段に続く緩斜面の平坦地である。標高780～781 m、東西約11 m×南北約12 mの緩斜面に10基が分布する。SD04～07に隣接する。集中部分はみられない。SK48・50・52・53・56は長径120～160 cmの円形・楕円形・隅丸長方形を呈する大型土坑である。SK49・57・58は長径50～100 cm、やや不整な円形を呈する、中型の土坑である。SK51・54・55は直径50 cm未満、円形の小型土坑である。深さは20～50 cm前後で、大型土坑が深い。埋土はすべて灰黄褐色または褐灰色である。平坦地11と一連の土坑群であり、SD03～07とともに平坦地造成後の土坑であろう。畑地として利用されてきた地点であり、耕作に関連して掘り込まれた土坑と思われる。

4 区平坦地29 土坑群 SK62～66 図版15 **位置**：III D04・08・09

標高772.5 m前後、火葬施設SK59に隣接して5基が分布する。いずれも平坦地造成土層下から検出された。SK62が長径60 cmの楕円形のほかは、口径20～30 cmの円形小型土坑である。深さは10～20 cmである。埋土は黒褐色または暗褐色である。中世の土坑と思われる。

4 区平坦地26 土坑群 SK60・61 図版15 **位置**：I Y16

整地面SB03と火葬施設SK79の間にある、標高約778 mの斜面に2基が並ぶ。いずれも平坦地27東面石垣SH41の背後を埋める、多量の礫を交えた造成土層下から検出された。長径124 cmと44 cm強の楕円形、深さ25 cm前後の土坑である。埋土は黒色土・褐色土である。

4 区平坦地25 土坑群 SK67～78 図版16 PL8 **位置**：I Y12・17

整地面SB03と火葬施設SK79の間にある、標高781～782 mの沢状地形斜面に12基が分布する。いずれも平坦地造成土層下から検出された。いずれも口径20～40 cmの円形または楕円形の小型土坑である。深さは20 cm未満である。埋土は鉄分が沈着した暗褐色土である。

8. 石垣と平坦面

本遺跡の石垣に見られる積方には、築石の継ぎ目が水平方向に通る、すなわち横目地が通る「布目積み」の一類型で、短い横目地を上下、左右に通す「布目崩し積」がみられる。もう一種、石を斜めに積んで下石を作る谷へ上石をはめていく「谷積」もみられる。谷積は布目崩し積より遅れ、18世紀中期以降に現れる積方といわれている（三浦 2005）。また、石材は地元産の閃緑岩・玢岩など自然の垂角礫を無加工で用いる場合と、玄能で割り加工を施した割石を用いる場合があり、後者が技術的に新しい。①自然石を用い、布目崩し積によって直線的に積み上げた斜面下部のみに築いた石垣（平坦地 8 SH05）が最も古く、②割石を用い布目崩し積により直交方向に隅角を作る石垣（平坦地 18 SH22）が次ぎ、③割石を用い谷積により隅角がカーブして連続する石垣（平坦地 13 SH09、平坦地 14 SH10）は最も新しい。割石を用いないと隅角の構築は困難であり、カーブを形成するには谷積によらないと無理であるため、技術的に①・②・③の順序が推定される。このような本遺跡にみられる石材と積方の差異を新旧時期推定の前提として、個々の石垣の所見を説明する。石垣の部分説明に当たっては、立面を正面から見た場合に向かって左側・右側を、それぞれ「左」・「右」と表記する。

（1） 1区（扇状地上北西部）の石垣と平坦地

SH01（平坦地 5 東面石垣） 図版 17 PL10

位置・遺存状態・調査：平坦地 5（現地表面海拔標高 786.03 m、以下同じ）の東面、傾斜上方斜面にある。中央付近が平坦地 5 側へはらんで崩落し、石は下方に散乱して北側半分にはなかった。崩落後に片づけられたのであろう。北部の表土層を除去すると石垣最下段が断片的に残存し、本来は段丘崖付近まで存在したと思われる。中央付近は崩落した石が厚く載っており、下端は検出できなかった。平坦地 5 南面石垣 SH02 は本石垣南端を埋めるように構築され、本石垣が前出と推定できる。耕作土層除去後石垣下端を掘り出し、清掃して写真撮影と測量を行った。

規模・構造：平坦地 5 の東面に沿って長さ約 10 m、高さ約 1.7 m を測り、石垣面の角度は水平に対して 85° とほぼ垂直。平坦地 5 東面斜面の地山を削平して急傾斜面を作り、小礫混じり土で埋めながら前面に石垣を積む。上方の平坦地 4 との比高が大きく、平坦地 4 の盛土層と直接の重複関係は認められない。石垣背後のある土層中の小石は散在的で裏込石とはいえない。

石材・積方：石材には自然垂角礫と割石があり、いずれも立方体石が選択されている。石垣下端に幅 70 cm・高さ 20 cm ほどの長方体石を設置し、上部に幅 20~40 cm 前後の立方体石を多用する。石の隙間に幅約 20 cm 以下の割った小石を挟む。割加工を施す石は最下段と中段に帯状に配される。割石の比率は 13.3% で、中型石に多く割加工が施される。立方体・長方体の石を平行に積み上げ、下から 3・4 段までは若干右上がりに横に目地が通る。横方向に平らに石を並べながら積み上げた布目崩し積とみられる。石垣面は比較的揃い、小型板状石を挟み込んで密である。南側上部に小ぶりの石ばかり V 字形に積む箇所がある。2 段目の石の並びが崩れている箇所が部分的に崩落し、積み直したと思われる。

所見：本石垣南端は、谷積の石垣 SH02 に埋められていることから、布目崩し積の本石垣が古いと推定できる事例である。割石を用い、小型石を挟み込んで石を安定させ、積方も密で石垣の面も揃っているため、手間をかけて構築されている印象を受ける。本石垣の上限年代は出土遺物もなく不明であるが、同じ布目崩し積の平坦地 8・12 東面の石垣 SH05・08 より石垣の面が揃い、割石を多用する点、小型石を挟み込む点の本石垣の特徴であり、SH05・08 より技術的に進んだ後出時期と推測される。

SH02 (平坦地5南面石垣) 図版17 PL10

位置・遺存状態・調査：平坦地5の南面の市道脇に位置し、道路斜面を保護し、平坦地5の南辺を区画する。東端はSH01の上面を埋めるように構築しており、SH01石垣以後に構築された。石垣上端や傾斜下方の低い部分の石積は雑で、東端に崩落した石が数個あった。平坦地5上面を掘削した後、石垣を清掃して写真撮影をした。石を斜めに用いて組む谷積であり、後述のように、本遺跡内の石垣のなかで最も新しい石垣例として写真測量を行った。市道脇にあるため、截ち割りは行っていない。

規模：市道脇にある石垣上端は道路の傾斜に沿って西へ低くなり、下端は平坦地5地表面と同じ水平となる石垣である。下端の長さ約5.0m、東端の高さは約1.1m、石垣面の角度は平坦面に対して62°とやや緩勾配である。

石材・積方：自然垂角礫を主体に、一部に割石も用いる。大きさは幅30・高さ40cm前後が多く、幅70cm・高さ60cmほどの石もある。割石は中・小型の石が多いが、幅50cmほどの石もある。割石の比率は16%である。角度が緩やかで、石垣というより石を積むように貼り付けた観がある。最下段に様々な形状の石を横並びに置き、上面が斜めになるものは斜めに石を組み合わせて積む。2段目は右上がりに、3段目は左上がりに積む。不整形な自然垂角礫を多用するため、整った谷積ではないが、谷積と似た積方とみられる。空隙も多い。

所見：本石垣は市道脇にあること、SH01を埋めるように作られていることから、SH01以後に構築された。市道は地籍図には当初のものと思われる細い道に、現在の拡幅道路が加筆されている。従って、本石垣は明治時代の地籍図作成以後に拡幅された道路に伴うものとみられる。おそらく道路の拡幅は自動車通行のために行われたと推定され、最も新しい石垣の一つといえる。

SH03 (平坦地6東面石垣) 図版18 PL10

位置・遺存状態・調査：平坦地6(784.58m)と東側の平坦地5との中間斜面に位置し、平坦地6の造成土層上にある最下段は水平である。上端はところどころU・V字形に崩れ、平面でも所々はらんで飛び出る。このはらみを伴う崩落を修理した形跡はない。左端の石垣上部の石は調査前に抜かれていた。平坦地6の耕作土を除去した後、石垣を清掃して測量を行い、最後に石垣の截ち割りを行った。

規模・構造：長さ約16.5m、高さ最大1.6m、石垣面の角度は水平に対して78~82°と垂直に近い。截ち割り調査では、平坦地5の造成土層を切るように石垣背後を埋める土層が認められた。裏込め石はなく土を入れている。このことから、傾斜上方の平坦地5の造成を行った後、平坦地6造成時に石垣を積みながら背後を埋め、最上段の石を設置後に、平坦地5の耕作土の母材となる礫が少ない土を載せたか、または本石垣が平坦地6造成以後時間を経て、後に積み直された可能性がある。

石材・積方：石材は長方体・立方体の石が多いが、大きさには大小差がある。SH01同様に加工石と自然垂角礫を併用するが、最下段に幅1m・高さ60cmほどの大きな石を用いる。中央から右側上部は高さ20cm・幅20cmほどの比較的小さい石、中央から左側は幅30~40cm・高さ20cm前後の長方体石を用い、横方向の石積の目地が通る。このことから上部左右の石垣は修築か、追加されたもので構築時期が異なると推測される。中央付近のやや小型の石が長方形石の上に乗っている箇所や、中央右手の小さい石を用いた箇所は修築かもしれない。左手のほうが古い様相を残すと思われる。割石の比率は8.5%である。

下段は石垣面側がやや高くなるように、石面を上向きに傾けて載せ、中段ではほぼ水平に積んでいる。石の傾斜の変化は積み直しの可能性をうかがわせる。左側では大きな石を最下段に据え、その隙間や上に長さ60cm・幅20cmほどの長方形石を水平に積む。右側では最下段に大き目の石が配置されるが、下端に小さな板状石を挟み込んでおり、左側の石の設置方法とは異なる。全体的には最下段に大き目の石を所々に

据え、小型長方体の石で大型石の間の隙間を埋めている。石はほぼ平行に積まれているが、左手へ向かって高くなる傾向がある。石垣は密に組まれており、本来は石垣面が揃っていたと推測される。最下段の大型石は、板状石の広い面を石垣面に見せるように据えて奥行きはあまりない。見栄えを優先したものか、古い布目崩し積技術の延長の積方かもしれない。

所見：石垣の積方では石の面を揃え、密に組む特徴はSH01に似る。ただし、大きめの石を最下段に設置し、右手ではその下に小さな割石を挟み込んでいる。石の大きさに差があることは、積み直しの可能性を示す。SH01との時間差はわからない。また、最下段の石に細かい石を挟んで安定させる積み方は平坦地7でも認められ、共通の構築方法とみられる。

SH04（平坦地7東面石垣） 図版18 PL11

位置・遺存状態・調査：平坦地7（783.28 m）東側の平坦地6との間の斜面にある。下端は平坦地7の上面同様ほぼ水平である。全体的に遺存状態は良好ながら、石垣上端が所々U字状に窪む場所があり、石の崩落と修築を繰り返したと思われる。平坦地7の耕作土層にトレンチを入れて石垣の下端を確認するとともに石垣と平坦地の関係を把握し、耕作土を除去した後、石垣を清掃して写真撮影と測量を行った。その後石垣の構造を探るトレンチを掘削した。

規模・構造：長さ約20 m、高さは低い箇所約80 cm、高い箇所約1.4 mを測る。石垣面の角度は水平に対して82°前後である。石垣下部には平坦地7の耕作土層の母材となる礫が少ない土層があり、明らかに平坦地7の造成以後に本石垣が構築されている。石垣背後の土層は礫が少ない土層であり、上段の平坦地6の礫混じりの造成土層と連続していないことから、平坦地6造成以後に構築されたことは確実である。

石材・積方：自然垂角礫と割石を用いる。最下段に幅30～80 cm・高さ30～50 cm前後の大きめの石、上部に幅10～40 cm・高さ10～30 cmほどの小型の石を用いる。石の隙間に小型の割石を挟み込む部分も認められる。割石の比率は10.8%で、石垣左側のV字状に石が並ぶ、積み直しと思われる部分は割石の比率が高いが、右側の布目崩し積を残す部分は垂角礫が主体である。全体的に石垣の面が揃い密に組まれている。細部では右手端部と中央から左手にかけての石垣に積方の違いがある。右手端8 mほどは横長の長方体石を平行に据えて積み上げ、最下段にあまり大きな石を用いていない。石材は垂角礫を主体とし、割石が少ない。布目崩し積の可能性はある。中央から左手は最下段に大きめの石を並べ、その上にやや小ぶりの石を用いる。最下段の石の下には薄い小型石を挟み込み、安定を図っている。最下段の大きめの石は、広い面を石垣面に向けて奥行きが短いものが多く、裏込めは確認されなかった。その上部は斜めに石が並ぶか、小型石がU・V字状に集中する箇所があり、崩落と修築を繰り返した可能性がある。最下段の大きめの石上部に積む石は、さまざまな大きさの石を斜めや縦に積み上げる特徴がある。以上から、右手端部に古い形態を残しつつ、中央から左側は積み直しされ、小規模の崩落と修築を繰り返した可能性がある。

所見：本石垣は下部に大型石、上部に小型石を布目崩し積で積む特徴があり、SH01・03～06・08と似ている。上述した構築順序からも、布目崩し積として構築され、大きめの石下端に細かい平石を挟み込む中央から左手は、補修のため積み直しされたと思われる。この箇所に割石が多い特徴も新しい要素と見られる。

SH05（平坦地8東面石垣） 図版19 PL11

位置・遺存状態・調査：平坦地8（779.98 m）の東斜面に位置する。上段の平坦地7との間の斜面下部にあり、下端は平坦地8の耕作土層平坦面より若干高い斜面下端に構築されている。また、平坦地7・8中間斜面の石垣上部は土のみの斜面となる。石垣の左端は一段高い緩斜面平坦地9となり、平坦地8はその

端部を削り込んで構築されているが、この部分には石垣は設置されていない。調査は平坦地8の耕作土層を除去した後、石垣を清掃して写真撮影と測量、切り割りを行った。

規模・構造：長さ約15.4m、高さ約0.8～1.0mである。石垣面の角度は 92° とほぼ垂直で、一部上端がオーバーハングする。平坦地7から8に至るトレンチ調査により、平坦地7を形成する礫混じり土層が、石垣背後まで入り込むように見られた。この構造から、本石垣は平坦地造成当初の姿を残す可能性がある。

石材・積方：石材は自然亜角礫を主体とする。大きさは、長さ50cm・高さ20cm～長さ30cm・高さ10cmほどの長方体である。長さ1.1m・高さ50cmの石もある。石垣上端は小ぶりの石が載っている。割石の数は少なく全体の6.9%である。割石は小型石を中心とし、中央部に少なく両端に比較的多い。長方体の石を比較的多用し、大きめの石を下に小型の石を上積み。長方体石は横長の位置に積まれ、基本的に布目崩し積と見られる。自然石を多用し、石垣の面はあまり揃わず、SH01・03・04に比べて隙間が多い。中央部下部にある大きな石は地山の石である。

所見：本石垣は自然石の長方体石を多用した布目崩し積であること、隙間を割石で詰める状況も見られず、石垣の高さも低いなどの特徴があるため、遺跡内でも古い形態を残す石垣と推定される。また本石垣北端は隣接する高台を削り込みながらも、石垣を設置していない。本項冒頭の②に該当する、端部に直交方向の石垣を別に設置する平坦地18よりは古い可能性がある。

SH06（平坦地10 東石垣） 図版19 PL11

位置・遺存状態・調査：平坦地10（777.04m）の東面、平坦地8との境界となる斜面にある。地表で石垣は認められなかったが、表土を除去すると所々石が検出され、本来は石垣が存在したことが推測された。石は部分的に残存し、中央部分と左側にはほとんど残っていない。重機で表土を概略除去して人力で石を掘り出した。その後清掃・写真撮影・測量を行った。

規模・構造：長さ約15.6m、高さ0.8～1.0mを測る。石垣面の角度は水平面に対して 85° 前後である。大部分崩落し、本来の規模は現状以上と推測する。石が点在的に残るが、高所にあるものは石垣ではなく整地土層中の石、もしくは上部の平坦地8から崩落した石の可能性がある。平坦地8・10を通したトレンチ断面では、石垣最下段の下部に平坦地8を形成する礫混じり土が入る状況がみられた。裏込め石は認められなかった。

石材・積方：自然亜角礫を主体とし、高さ20～30cm、幅約60～80cmの長方体と、高さ30cm以下で長さ約50cmの長方体・立方体の石を用いる。割石は少なく、残存部分の5.5%である。これらの石周辺には20cm以下の小型亜角礫が集中する箇所がいくつかある。これらの小型石に割石はない。積方は、石垣遺存部分に立方体の石を立てるところもあるが、基本的に布目崩し積とみられる。大きめの石を下段に設置する傾向がある。上部に細かい石を多く用いる箇所は積み直しの可能性がある。

所見：遺存状態が悪く詳細は不明だが、平坦地8と共通の、平坦地10を形成する礫混じり土層が石垣背後に入り込んでおり、SH05と同様に造成時に構築された石垣の可能性がある。大部分は崩落して片づけられ、残存部には比較的小型の石が多いことから、耕作中に石を積み上げた可能性がある。

SH07（平坦地11 東面石垣）

位置・遺存状態・調査：平坦地11（約777.5m）の東傾斜面上方、平坦地9との境界にある。段丘上には平坦地5～8・10・12・13等の上面が水平な平坦地群と、緩斜面の長い平坦地群があり、平坦地11は後者にあたる。他の緩斜面の平坦地群には石垣がみられないが、この平坦地11のみ石垣が伴う。コンクリ

ート片が混じるため、構築もしくは修築が近年まで行われたことが推測される。このため測量していない。

規模・構造：崩落部分の断面を見ると、他の石垣同様に裏込め石はなく、土で埋めながら石垣を積んでいる。上段の平坦地9も緩斜面となる平坦地であるためか、盛土は平坦地の先端しか施されていない。そのため、平坦地造成との関連は不明である。石垣は途中でクランク状に折れ、二重に石垣が構築されているようにみえる部分もあり、崩れた石垣の修築ではなく、追加するように構築している可能性がある。

石材・積方：石材には幅20～30 cm、高さ10～20 cm前後の石を用いる。最下段では幅50 cm前後、高さ50 cmほどの板状石を用いるが、奥行はない。そのため、一部は手前にオーバーハングするように崩れている。最下段に大きめの石を用い、中段には小型板状の長方体石、最上段に三角錐や台形、柱状などの不整形石を多用する。積方は、屈折する北側は下部に大きめの石を積み、その上部や隙間を埋めるように薄板状の石を布目崩し積している。最下段の大きな石は不整形のまま使われているため、中段以下はブロック状にまとめて2～3回に分けて積んでいる。隙間に小型割石を挟み込むが、石垣の面が揃わず隙間が多い。

所見：石の積み方は不整形の大きな石を立てて設置し、その隙間を小型石で埋める。形態はSH01・03・04に近い。ただし、下段では大きめの石を配置して隙間を埋めるように板状石を布目崩し積みしたともみられ、平坦地5～7の石垣に近い様相ながら、布目崩し積である点は若干先行する時期の可能性も残る。この形態の石垣は他になく、詳細は不明である。南側に隣接するSH06は石垣が崩落して、石の遺存がわずかなことから、SH06の崩落した石を使って本石垣が構築された可能性もある。

SH08（平坦地12 東面石垣） 図版20 PL12

位置・遺存状態・調査：平坦地12（775.56 m）東面と平坦地10の中間斜面に位置する。平坦地12の耕作土層上面より高い位置に石垣が構築されており、耕作土層との前後関係は直接把握できない。石垣の遺存状態は不良で、中央および中央右側は所々幅約1～3 mほど崩落している。崩落した石は耕作土層中に残っておらず、片づけられたと思われる。石垣中央右手は最下段の石のみ遺存する。平坦地の比高からも低い石垣であったと推測されるが、崩落しても修復されなかったと思われる。調査中に石垣の一部が台風の影響で崩落した。断面実測予定箇所であったため、石垣の構造は記録できなかったところがある。耕作土層を除去した後に、石垣を清掃して写真測量と写真撮影を行った。最後に截ち割り調査を実施した。

規模・構造：長さ約23.4 m、高さは最大1.2 mと低い石垣である。石垣面の角度は詳細不明ながら、80°前後で、一部ははらんでオーバーハングする。断面の詳細は記録できなかったが、平坦地10を形成する礫混じり土層が石垣背後まで及んでいたとみられ、平坦地造成と併せて構築されたと思われる。

石材・積方：石垣下部には最大幅1 m、高さ約50 cmの大きな自然石を配置し、その上には幅20～30 cm・高さ5～30 cmほどの石を積み上げる。小型石はあまり用いず、割石は8.1%と少ない。大きめの石は奥行のない板状石で、石垣面に広い面を見せるように据えている。基本的には布目崩し積とみられる低い石垣で、2～4段前後積まれる。全体的に左手のほうが大きめの石、右手のほうが細かい石を用いる傾向がある。左手の所々に割石を挟み込むが、多くはない。大きめの石を用いる箇所は自然石が多く隙間が多い。

所見：低い石垣で大きめの自然石を多用する点、平坦地12の耕作土層下まで石垣を構築しない点から、平坦地10造成時と近い時期に石垣が構築されている可能性がある。その特徴はSH05・06と類似しており、構築時期も近いと思われる。

SH09（平坦地13 東面石垣） 図版20 PL12

位置・遺存状態・調査：平坦地13（773.15 m）の東面に位置する。平坦地13の北側に沢に沿った若干高い平坦地11があり、本石垣北端はその緩斜面裾を削り込んで屈曲する。南端は市道脇が緩斜面となる平

平地 13 南端付近で途切れる。遺存状態は比較的良好だが、割面が新鮮な石が目立ち、近年に積み直されたと思われる。平地 13 の耕作土層を除去した後、石垣を清掃し、写真撮影と測量を実施して石垣を截ち割った。

規模・構造：東面は長さ 16.5 m、高さ 1.4 m 前後で、北端 2 m ほどが屈曲する。石垣面の角度は 80° 前後で、上部がやや緩やかとなる。截ち割りにより、石垣背後に礫混じり土が入る状況が確認された。

石材・積方：石材は割石を主体に自然石を交える。石垣面にみえる割石の比率は 24.9%。割面が比較的新鮮である。石の大きさは幅 10～20 cm・高さ 40 cm 以下の小さめの石が多用され、幅 90 cm・高さ 40 cm ほどの石もわずかにある。中央左手では、石垣面に幅 30～40 cm・厚さ 10～20 cm の板状石が多用される。右端には道路のアスファルト片を用い、現代まで継続的に修築されていたことがうかがえる。全体的に石垣の面が比較的揃い、相対的に小さい石が密に組まれている。石は斜めに組まれるものが多く、全体的には谷積にみえる。斜めに積まれた石は、中央左寄りでは右上りで右→左、左端では左上りで左→右に交差する状況が認められる。崩落個所の修築に際し異なる方向で石垣が組まれたのであろう。また、左端の屈曲箇所はカーブを描いて連続的に屈曲する。

所見：石垣の最下段や中央付近では長方体石を横に積む箇所が認められ、本来は布目崩し積であったが、後に多くが崩落して修築部分が多くなった可能性がある。その際には谷積が多用されたと思われる。

小 結

1 区の平地 5～13 にある石垣は、出土遺物がないため時期は詳細不明である。ただし、布目崩し積と谷積が認められるとともに、布目崩し積の石垣間でも形態差が認められるため、時間差が存在すると思われる。この扇状地上面の平地は連続して階段状に構築されているため、そこに石垣を構築する場合は平地の上側からか、下端側からの一方向の順で作られたのではないかと考えたが、平地の盛土層同士の重複はないため構築順序は把握できなかった。ただ、個々石垣の截ち割り調査では、背後の下層に礫混じり土を入れ、上部に礫の少ない土層で埋めるタイプと、礫の多い平地地造成土で石垣背後を埋めるものがある。後者は平地地造成土と同じ土層であることから、造成時期と時間差をおかずに石垣が構築されたものと推定される。

(2) 2 区 (海岸寺沢氾濫原内) の石垣と平地

SH10 (平地 14 東面・南面石垣) 図版 21 PL13

位置・遺存状態・調査：氾濫原内平地地群の最上段、平地 14 (791.82 m) の傾斜上方東面から、段丘崖となる南面に位置する。東面では直線的に石垣を配置し、海岸寺沢側の北端は浸食崖までで垂直に途切れ、徐々に南面のカーブ付近へ向かって高くなる。南面は東面からカーブして屈曲し、段丘崖直下を通る市道の側面に沿って徐々に低くなる。遺存状態は比較的良好だが、石垣下部は段丘崖側からの崩落土で埋没していた。石垣際までトレンチを入れ、石垣下端まで表土を掘削した後、平地の断面図を作図してベルト撤去し、石垣を露出させて清掃、写真測量を行った。

規模：東面の長さはカーブの屈曲角がきつくなる箇所まで約 7.4 m。下端は沢側が低く、南東部の屈曲部が高くなり、石垣高は沢端で 1.2 m、屈曲部で 1.6 m を測る。南面は東面の屈曲部から西端まで長さ 5.8 m を測る。屈曲部で高さ 1.6 m、西端で 0.6 m ほどである。東面の石垣面傾斜角は水平に対して 77° 前後、南面の傾斜角は 82° 前後である。

石材・積方：最下段に自然もしくは一部を割った最大 80 × 70 cm ほどの大きめの亜角礫を並べ、その上に幅 8 cm・長さ 20 cm、および幅 20 cm・長さ 40 cm 前後の石を積み上げ、10 cm 以下の割石を挟み込む。割石

と 30 cm 四方前後の立方体に近い石を多用する特徴がある。割石は比較的多く認められ、特に南東部のカーブ付近に多い。最下段の大きめの石にも割石や一部割ったと思われる痕跡があり、当初から割石加工して石垣が組まれたと思われる。他の場所では割石が点在して挟み込まれるが、中央左寄り上部や石垣上端は自然垂角礫が主体となる。これらの場所は小型石を主体的に用い、割加工を施さないことから、石工ではなく耕作者が補修した可能性がある。

東面石垣には大きく 3 つの積方がみられる。①は中央左側の場所で、大きめの石を最下段に置き、上部に長方形や方形の石を横に目地が通るよう水平に積み上げるものである。部分的に割石を用いるが、垂角礫を選択している。②は中央より右側から屈曲部にかかる場所で、割石を多用し、最下段の石上面を水平に揃えず、上部は斜め・縦に石を嵌め込んで積み上げる。不整形の石上面は高さが揃わず、石と石の隙間が V 字形に空いた場合は斜めに石を落とし込む。中段は数段を右→左へ向かって積んでいるため、類似規模の石を縦方向や斜めに重ねている。また、隙間を埋める間詰め石が縦に差し込まれる部分もある。間詰め石は、石と石の間に 1・2 個程度、石を安定させるため挟み込み、石垣が密に組まれているように見える。③は中央左寄りの上部で、やや小型の自然垂角礫を多用し、水平ながら雑然と積んでいる。

所見：3 種の積方は時間差によると思われる、③は上部に位置することから最後のものと判明するが、①・②の前後関係は不明瞭である。②は石を斜めに積むことから、谷積の影響を受けた以後のものと思われる。自然垂角礫の形状が類似するものを選択する積方から、割石加工で石材形状に拘らない積方への変化と推定すれば、①から②の箇所への変遷が推定される。また、方向が異なる面と面の接線に角ができる石垣はいくつかあるが、本石垣のようにカーブを描いて隣接辺の石垣が連続するものは他にない。

SH11 (平坦地 14 沢側東面石垣) 図版 22 PL13

位置・遺存状態・調査：平坦地 14 の北側、海岸寺沢沿いの平坦地東面にある。南端は平坦地 14 沢側の斜面となる SH12 の端部を埋めるように構築され、SH12 より後に構築されたことがうかがえる石垣上端・下端は地形に沿って緩やかに沢へ傾斜する。背後は沢へ向かう傾斜面にあり、沢の浸食で挟られている。石垣北端は沢に接する付近まで延びるが、北端は石の崩落か積み直したものと思われ、積方が雑である。氾濫原内の平坦地 14～16 の間にある帯状平坦地に伴う石垣の中では、遺存状態が比較的良好である。清掃後、手測による実測を行い写真撮影した。

規模：長さ約 3.5 m、高さ最大 0.8 m を測り、石垣面の角度は平坦地水平面から 74° である。

石材・積方：石材は割石と自然石を用いるが、6 割ほどが自然垂角礫である。大きさは幅 10～30 cm・高さ 10～20 cm の小ぶりの石が中心で、大きな石は用いていない。最下段に平石を並べ、その上に三角・台形・長方形の石を積んでいる。一見、布目崩し積に見えるが、横よりも縦の石の目地が通り、全体的に石は右側に傾斜しているので、右側にもたせかけて縦積みしたように見える。ただし北端は石を縦に置くなど、単純な縦積みではなく、修築の可能性もある。

所見：石垣は低く、小型石を用いている点、右側にもたせかけるように縦に積んでいる点で、広めの平坦地に付随する石垣と様相は異なる。類例は少ない。本石垣と直交する、布目崩し積と思われる SH12 の端部を埋めているため、それより後出する。

SH12 (平坦地 14 沢面北面石垣) 図版 22 PL13

位置・遺存状態・調査：平坦地 14 の海岸寺沢側斜面北面にあり、東西方向に構築されている。東部は石が少数で一部は樹木根で壊されているが、沢沿いの帯状平坦地東面にあたる石垣は、本石垣東端を埋めるように構築され、北面石垣が先に構築されたと思われる。遺存状態は不良で、中央付近の石垣が断片的に

遺存するが、西端は大きく崩れて石が落下している。東部は壊れて大きくはらみ、西端は平坦地 15 東面石垣 SH13 まで連続せず、小礫が散在する程度である。下端は沢沿いの帯状平坦地の傾斜に沿って緩やかに傾斜するが、上端は遺存不良ながら平坦地 14 の平坦面とほぼ水平とみられる。清掃後手測で測量し、写真撮影を行った。

規模：東面石垣は長さ約 9.2 m、高さは最大 1.3 m を測る。水平から石垣面の角度は 78～85° 前後である。

石材・積方：石材は自然石と割石を用いるが、自然垂角礫が多い。石の大きさは下部に幅 70 cm・高さ 30 cm ほどの大き目の石を用いるが、主体は幅 10～50 cm・高さ 10～30 cm 前後の石である。遺存不良で本来の積方は不明である。わずかに残る中央付近では、縦・斜めに配置する石は認められず、長方体石は横長に用いることから、基本的に布目崩し積の可能性もある。割石を挟み込んで石を安定させ、石垣面を揃える造作はあまり認められず隙間も多い。全体的に雑な積方である。

所見：遺存状態が悪く時期の詳細は不明である。

SH13（平坦地 15 東面石垣） 図版 21 PL13

位置・遺存状態：平坦地 15（789.16 m）東側、平坦地 14 との中間斜面に構築されている。北端は海岸寺沢との接触部から始まり、南端は段丘崖斜面側にあり、沢と同方向の短い石垣を埋めるように直角に接続する。平坦地 14 は上面が平坦で、沢側に緩斜面となる帯状平坦地が付属する。この場所にかかる石垣左端から約 3 m は高さ 0.7 m の一段のみだが、平坦地 14 西斜面にかかる中央から右手は、石垣下端から約 1.8 m のところに狭い段を設けて二段に作られている。右端は崩れて石が遺存していない。上段左側は平坦地 14 の沢沿い北面の石垣 SH12 に続くが、直接連続していない。

規模：長さは約 9.6 m、高さは最大 2.9 m を測る。上述のとおり平坦地 14 下方は二段に作られ、下段は高さ約 1.8 m で狭い段を伴い、上段は高さ 1.1 m を測る。石垣面の角度は水平に対して 82° 前後である。石垣の比高が大きく、截ち割り調査を実施していないため構造は不明である。平坦地 14 造成土と思われる礫混じり土の上に築かれているので、平坦地 14 造成以後の構築と思われる。

石材・積方：自然垂角礫と割石を用い、割石は比較的目立って石垣面の 24.9% にあたる。全体的に散在し、割石が帯状に分布することはない。小型石が多いが、最下段に設置する大きめの割石も加工されている。石材は最下段に幅 50～80 cm・高さ 50～70 cm の大きな石を所々配置し、その上部に幅 10～50 cm・高さ 10～40 cm の石を積む。不整形の大きめの自然石の隙間を縦、もしくは斜めに充填するものが多く、基本的に谷積を意識している。左側の一段積みの低い場所は長方体石を横長に積み、布目崩し積に見える。二段積み右端付近には斜め積みの石が連続するので、この周辺は新しく積まれた可能性がある。

所見：本石垣は二段に積み、最下段に広い面を石垣面に見せるように積み、その上部には谷積と思われる斜めに石を組む部分も認められる。これらの特徴は SH10 に認められ、構築時期が近いと思われる。本石垣の北部は布目崩し積とみられ、本来はこの積方で構築され、後代に積み直しされたと推測される。

SH14（平坦地 15 沢面北面石垣） 図版 22 PL13

位置・遺存状態・調査：後頁の①に続けて、本石垣は南面で SH18 から続く。樹木根で一部が壊れ、遺存状態は全体的に悪い。本石垣の崩れている東端の延長先は平坦地 15 の沢側斜面に続くが、そこまでは構築されていない。石垣下端は平坦地 15 北側の帯状平坦地の傾斜に沿って緩傾斜する。上端は大部分崩落して不明だが、西側の遺存部分から判断して本来は水平であったと推定される。地表面でも石積は確認され、石垣の清掃を行って仮基準点を設置し、手測で測量を行った。截ち割り調査は実施していない。

規模・構造：長さ約5 m、高さは最も良好な西端で高さ約1.2 mを測る。断面調査は実施していないが、崩落部分では裏込め石とみられる小ぶりの石を確認することができ、整地に併せて背面に土を充填しながら積まれたものと思われる。平坦地16東面石垣SH15に連続することから、同じ時期に構築された可能性がある。

石材・積方：石垣下部には幅40～60 cm・高さ20～40 cmほどの大きな石が転落しており、これらも使われていたと思われるが、石垣に残存する石は幅10～40 cm・高さ10～20 cmほどの長方体・立方体・三角柱状の石である。自然石が多く割石は少数である。形状がさまざまな類似した大きさの石を用い、その場で積みやすい石を選んだように見える。細かい割石を挟み込む造作はない。やや不整形の自然石を用いるため隙間が多く雑な積方で、定形的な積方は認め難いが、西端は布目崩し積にも見える。SH15との境となる隅は算木積ではなく、長方体石を東面に直交方向に長辺を置くように積み、それに連続しながらも本石垣面では直方体石を直交方向に積む。隙間に小型石を挟んでいるが、割石は少ない。

所見：本石垣は連続状況から、平坦地15造成時にSH15と連続して積まれたものと思われる。

SH15（平坦地16東面石垣） 図版23

位置・遺存状態・調査：平坦地16の上方斜面に位置する。石垣は二段に構築され、南部は傾斜がやや緩やかな段丘崖に達する。下段はその傾斜面に接する中央付近まで構築され、上段は南側まで続く。中央付近がはらんで大きく崩れ、下段石垣は崩落と樹木根により石積の遺存は不良である。北辺には沢沿いに一段高い突出部があり、その南面の石垣SH18と直交する。SH18は本石垣を覆うように構築され、後出と思われる。調査は石垣下部の耕作土層除去後、清掃して写真撮影と測量を行った。石垣は平坦面との比高が3 m近く、沢沿い平坦地は狭く排土置場がないため、背面の截り割りは行っていない。

規模：東面に直線的に構築され、上段は長さ約7.5 m、高さ最大2.5 m、下段は長さ約4.6 m、高さ約1.3 m、上段だけの高さは約1.2 mを測る。石垣面の角度はほぼ垂直で、中央部は崩落し遺存不良である。

石材・積方：自然垂角礫が圧倒的に多く、割石は石垣面の8.9%である。石の大きさは平均で幅30～50 cm・高さ10～20 cm前後で、最大40×100 cmがある。割石は下段中央北寄り、上段の西端に比較的集中する。この部分は修築された可能性があり、本来は垂角礫を使用していたと思われる。中央部分が大きく崩落しているため、本来の積方は不明である。比較的遺存状態が良好な北部は長方体・立方体の石を水平に横並びに積む布目崩し積とみられる。小型割石を挟み込む等で石を安定させる造作は認められない。

所見：基本的に布目崩し積とみられ、谷積が認められないため、構築時期は近代・現代までは下らないと思われる。細かい割石を用いず、立方体に近い石を多用する布目崩し積である点はSH01・03・04と共通する。

SH16（平坦地16沢面突出部北面石垣） 図版22

位置・遺存状態・調査：平坦地15の沢沿い緩斜面の帯状平坦地が、平坦地16（786.70 m）北東部で長方形に突出する。この突出部の南・北・西面にそれぞれ小規模な石垣が構築されている。平坦地16の北面海岸寺沢斜面に位置する。遺存状態は断片的で不良。最下段の石は直線的に並ぶ。上部は石が遺存せず、沢上流側の東端は石がまばらとなる。西端は突出部西面のSH17に続くので、それと併せて作られた可能性があるが、断定はできない。清掃し、仮基準点を設定して手測を行った。

規模・構造：部分的ながら、平面的で直線的に石が並ぶ範囲は長さ約3.6 m、高さは最大0.6 mと低い。この石垣がある斜面は水平から約40°と緩やかである。截り割り調査を実施していないため平坦地造成との関係は不明である。石の配置状況や傾斜面の状態から、平坦地造成時に構築されたというより、造成

以後に石を貼り付けるように積んだとみられる。本来上段に石が存在したかは不明である。

石材・積方：石材は自然石のみで、無加工の小ぶりな垂角礫を多用する。大きさは大部分が幅 20～30 cm・高さ 10～20 cmほど、最大で幅 50 cm・高さ 20 cmほどである。明瞭な石積といえる部分は少ないが、下端の石が横方向に並ぶことから、基本的に布目崩し積のようにみえる。上部がほとんどなく断定はできない。

所見：東端の石がまばらになることや、沢斜面に沿って上流側に長く連続しないため、突出部西面石垣の延長で付加した石垣と考えられる。小ぶりな自然石を用いることも、補助的に作られたとみる理由となる。

SH17（平坦地 16 沢面突出部西面石垣） 図版 22 PL13

位置・遺存状態・調査：平坦地 16 の沢側北部にある長方形突出部西面に位置する。耕作土層を除去中に突出部南面で石垣が確認され、西面石垣の存在も確実視された。そこで西面を掘削し下部に残る石垣を露出させた。石垣下部は中央付近に向かって窪むように並び、上部は傾斜が緩やかで明瞭に確認できず、石積は部分的であった。全体的に遺存状態は悪く、明瞭に石積の状態が確認できた部分は少ない。北端が突出部北面に連続する状況は、明瞭には把握できなかった。また、南端は突出部南面に続くようにもみえるが、明瞭に連続したものは確認できなかった。清掃後に写真撮影を行い、仮基準点により平面図と立面図を手測し、単点測量で基準点を記録した。

規模：長さ約 3.8 m、高さ約 0.8 mほどである。西面の傾斜は全体で水平面から 62° 前後であるが、石が積まれる下部は約 80° 前後と垂直に近い。突出部の截ち割り調査を実施していないが、石垣下端の高さが沢沿い平坦地の上面レベル付近にあたるため、この平坦地造成時以後に付加したと推測される。

石材・積方：自然石を多用し、一部割石を用いる。主体は長さ 10～40 cm・高さ 10～30 cm前後の石で、一部に幅 70 cm・高さ 50 cmほどの石を用いる。このなかで幅 30～40 cm・高さ 20～30 cmの長方体石を用いた部分は石積が把握しやすく、間に幅 10～20 cm・高さ 10 cm前後の板状小型石を多用する。積方は判然としませんが、比較的好く残る左手では下部に長方体石を横方向に並べ、その上に薄板状の小ぶりな石を重ねている。基本的に布目崩し積とみられるが、小ぶりな石を多用する上部は付加的に積まれた可能性がある。

所見：本石垣は遺存不良ながら、石垣下端が下方平坦地上面とほぼ同じ高さとなることから、遺存する石垣は突出部造成時に構築されたものではなく、平坦地使用中に付加された可能性がある。本石垣以前の突出部造成時の石垣の存在は不明である。高い石垣ではないことから、崩落の度に少数の石を積むような修築だったのかもしれない。構築時期は不明である。

SH18（平坦地 16 沢面突出部南面石垣） 図版 22

位置・遺存状態・調査：平坦地 16 の北東部、沢沿いの長方形突出部南面に位置する。平坦地 16 東面の石垣 SH15 下端の掘削中に石が並んで検出されたことから確認された。平坦地 16 下端と同じ高さで掘削したところ、石垣下部では石がまばらで、むしろ上部の石は並んで確認された。遺存状態は悪く、上下部とも緩やかな傾斜に沿う。西端は突出部西面 SH17 に接するが、石積が連続せず途切れるようにみえる。清掃して写真撮影後、仮基準点により手測で平面図と立面図を作成し、仮基準点は単点測量で記録した。

規模：長さ約 3.0 m、高さは最大 1.2 mあるが、平均的には 0.8 mほどである。石垣のはらみで飛び出しが多く把握しにくい、石垣面の角度は水平に対して 78° 前後である。

石材・積方：自然垂角礫を主体に、幅 10～50 cm・高さ 10～20 cm前後の小ぶりな石を多用する。隙間が多く石垣の面は揃っていない。石の積方に規則性はうかがえず、当初から丁寧に積まれていたものではなかろう。立面図化した石は散在的だが、これは石の根本まで掘削できなかったことと、一部は整地層中に混じる礫の可能性もある。上部の石が密に並ぶ箇所は後で付加された石積かもしれない。

所見：石垣の形状からも突出部造成時に作られたものではなく、後で付加されたものと推測される。ただし、突出部造成時に石垣が伴っていたかは痕跡がなく不明である。

SH19（平坦地 16 沢面北石垣） 図版 24 PL13

位置・遺存状態・調査：平坦地 16 の海岸寺沢斜面北面にある。中央から西側に石積がみられたため、南北トレンチを設定し範囲確認した。東側の平坦地 16 突出部までの間も掘削したが、明瞭な石垣はなかった。東側は一部石が積まれたような箇所があり、本来は石積が存在した可能性もある。石垣下端は帯状平坦地の傾斜に沿い、上部は遺存不良で揃っていない。石垣中央から西側にも崩落して石がない部分がある。

規模・構造：石垣の範囲は捉えにくいだが、明瞭に石垣とみられるのは中央から西側で長さ約 7.5 m、平坦地 16 突出部まで含めると、平坦地 16 北斜面は長さ 14 m を測る。平坦地 16 との比高は低い東端で 20 cm、最大は西端で約 2 m である。西側の石垣の高さは約 0.8 m である。石垣面の角度は遺存良好な中央付近で 70~90° となる。南北トレンチで截ち割ったが、石垣背後に裏込め等は確認できず、平坦地 16 造成以後に構築されたと考えられる。

石材・積方：大部分が自然垂角礫で、わずかに割石が認められる。ほとんどは幅 10~40 cm・高さ 10~20 cm ほどの三角柱・長方体・立方体の石で、大きさは近似するが、加工を施さないため形状はさまざまである。中央から西側の遺存部東端には幅 1 m・高さ 40 cm ほどの大きな石を配置している。積方は確認しにくい。西端は横方向に平行する石を積み、布目崩し積とみられる。中央付近も同様である。石垣下端は傾斜地にあり、右手から平行に積んで徐々に高く積み上げたようにもみえるが断定できない。積方はやや粗く、長方体石を縦長に用いる箇所もあり、隙間も多い。ここには谷積の影響もあるようにみえるが、自然石を多用した不整形石の隙間を埋めるために、縦長など変則的な石の積方をしたのであろうか。

所見：氾濫原内の各平坦地東面に作られる石垣は丁寧に組まれるが、本石垣を含む沢側北面は雑に組まれたものが多く、遺存状態不良も多い。洪水で破壊されやすい場所のためか、本来石垣を伴ったのか判然とせず、残った石垣は付加的に作られた可能性もある。

SH20（平坦地 16 沢面東石垣） 図版 24

位置・遺存状態・調査：平坦地 16 の沢斜面沿いに一段低い帯状平坦地があり、その西端に位置する。平坦地 17 東面石垣 SH21 の北延長付近にあるものの、平坦地 16 側に若干登った場所にあり、直接連続しない SH21 とは別の石垣とした。沢へ傾斜する斜面に作られ、地形に沿って石を数段積んでいる。石垣面は所々突出する。当初は存在がわからなかったが、SH19 の清掃中に確認された。

規模：長さ 1.8 m、高さ 0.6 m、最大 0.8 m ほどと非常に小さい。石垣面の角度はほぼ 90° である。截ち割りしていないが、現地表面で下端が見えていたこと、石垣が低いことから、平坦地 16 北側の帯状平坦地造成に併せて設置されたものではなく、造成以後に付加した可能性が高いと思われる。

石材・積方：自然垂角礫と、4 割ほど割石を用いる。石の大きさは幅 10~40 cm・高さ 10~20 cm ほどの小ぶりの石が多く、最大で幅 60 cm・高さ 40 cm のものがある。割石が多いが石垣面は揃っていない。石垣は傾斜面に構築されており、沢側に大きな石を置いて転石を防ぐと共に、傾斜上方には小ぶりの石を 3 段階積み上げている。低い石垣で積方にあまり規則性は見受けられない。

所見：短く低い石垣であり、当初から計画されたものではなく追加された石垣と思われる。小規模な石垣を設置した理由は不明だが、沢沿いの帯状平坦地の西端を明示するための施設かもしれない。

SH21（平坦地 17 東面石垣） 図版 23 PL14

位置・遺存状態・調査：平坦地 17 (782.74 m) の東面と斜面上方の平坦地 16 との間にある。直線的に構築され、南端は段丘崖斜面まで、北端は沢に面した平坦地 16 端部の斜面まで続く。南端部分は所々空隙がある。上端は比較的平坦で、立面形状は上端と下端が平行する。下部は石垣直下に沿う SD01 の東側面となる。SD01 は地表面に痕跡が認められず、東壁にあたる石垣下端も完全に埋没していた。この部分をトレンチ掘削したところ、SD01 が確認され、これを掘り下げると同時に石垣面を清掃した。測量は写真測量によったが、北端は近接する立木に遮られた。SD01 東面は手測し、写真測量図と合成した。

規模：長さ約 6.2 m、高さ約 2.1 m を測る。石垣面の角度は水平に対して 76° である。

積方・石材：自然垂角礫を主体とし割石も用いる。大きな石は少なく、最大で幅 50 cm・高さ 30~40 cm を測る。下段に大きな石が集中せず、幅 40 cm 前後・高さ 20~30 cm ほどの立方体・長方体石が多い部分と、幅 10~30 cm・高さ 10~20 cm ほどの小ぶりの石が帯状に集中する箇所がある。右下部は幅 20~30 cm・高さ 10~20 cm 前後の小型石が多く、中段は幅 30~40 cm・高さ 20~30 cm 前後の石、右上段は幅 20~30 cm・高さ 20~30 cm 前後の石が多い。法量別の帯状分布は、積方が平行に積まれたか、修築された可能性を示す。割石の比率は 11% で、石垣面に割面を見せる石は、上段と中段右側に小型石を中心に帯状に分布する。下部中央付近や右上部の箇所では斜めに石を重ねるが、下部左から上部はほぼ水平に積まれており、全体的には布目崩し積にみえる。石の大きさの集中から、向かって右下から布目崩し積したと思われる。

所見：本石垣は割石が目立つこと、全体的には布目崩し積にみえることから、平坦地 5 東面石垣 SH01 の前後に構築されたものと思われる。

SH22 (平坦地 18 東面石垣) 図版 23

位置・遺存状態・調査：平坦地 17 と 18 の中間斜面、平坦地 18 (782.74 m) 東面にある。中央部は幅 5 m ほど石が抜けている。崩落石は遺存せず、片づけられたらしい。南端は段丘崖側に構築された短い南面石垣まで続く。この南面石垣は平坦地 17 へ登る道に沿って三角形に残るが、崩落したと思われる。重複状況から、南面石垣構築以後に本石垣が作られている。下端は平坦地に沿ってほぼ水平で、最下段は耕作土層に埋もれていた。狭いため重機掘削が困難で、石垣背後の構造や平坦地との関係の把握できなかった。

規模：長さは約 9.1 m、高さは約 2.2 m を測る。石垣の角度は北面石垣 SH23 との接点から計測し、水平面に対して $78\sim 82^{\circ}$ 前後である。

石材・積方：自然垂角礫を主体に割石も混じり、石垣面が比較的揃う。最下段に比較的大きな 40×20 cm ほどの長方形石を横に並べ、下から 1.2 m ほどは平均で長さ約 30 cm・高さ 20 cm、最大で長さ 70 cm・高さ約 20 cm の長方形垂角礫を積む。上部もほぼ同じ長さ約 30 cm・高さ 20 cm の石も用いるが、全体的に小ぶりの石が多い。割石は石垣最下段や石垣中段、上部に帯状に配される。石垣面にみえる割石の比率は 7.7% と少ない。この状況は、一定の形状・規模の自然垂角礫を数度に分割して積み上げた際、上部で不整形な隙間が生じたり適材が不足して、割り加工の石を加えた結果かもしれない。最下段の石は横方向に並べ、そこに載る長方体石は横長に積まれる。大きめの石を下段に用いているが、石の広面を石垣面に設置するものは少なく、長方体石の広い面を上面向け積んでいる。長方形の石を縦、斜めに積むものは少なく、基本的に長方形石は横長に平行で積み上げる布目崩し積と見られる。また、SH23 同様に下段から 1.2 m ほどで積方が異なる。下部は布目崩し積で、長方形石は横長に積み上げ、細かい割石を挟むが、上段は積み方が雑で隙間も多く、斜めに積む石もある。谷積の影響を受けていると思われる。ただし、南端上段は下段と同様の布目崩し積である。

所見：垂角礫を主体的に用い、布目崩し積である点は SH01 に似ている。このことから、SH01 と近い時期の石垣と思われる。本来は布目崩し積であったが、崩落によって上部は修築された可能性がある。

SH23 (平坦地 18 北面石垣) 図版 24

位置・遺存状態・調査：平坦地 18 沢側にある土手状盛り南面、平坦地 18 からみて北面にある。平坦地 18 北面を画し、傾斜上方の SH22 に直交し、この北端を埋めるように構築しているため、SH22 構築以後に作られたと思われる。石垣下端は平坦地 18 に合わせて水平となり、下端 40 cmほどが耕作土層に埋もれていた。上端は土手状の傾斜に沿って東側が高く、中央付近から大きく西へ傾斜する。截ち割り調査は実施していない。

規模：長さ約 3.2 m、高さ最大約 1.7 mある。石垣面の角度は水平に対して 78° 前後である。

石材・積方：自然垂角礫が多い。平均的な大きさが幅・高さとも 20 cm前後の石を多用し、石垣面にみえる幅 40 cm・高さ 30 cm、あるいは幅 30 cm・高さ 50 cmほどの石を最大とする。あまり細かい石は使っていない。形状は長方体もあるが立方体に近いものが比較的多い。割石の数は少なく、部分的な割加工とみられる石を含めても 10%に満たない。割石は下段と東端に分布する。下端から 1 mほどで積方が異なる。下段は右側に比較的大きな石を並べ、下から 4 段前後まで高さを合わせて比較的平行に積み上げ、布目崩し積と認められる。ここに割石が点在する。隙間が多く石垣の面は揃っていない。上段は右端の東面石垣にもたせかけるように石を積み上げた後、その左側に一定の高さに布目崩し積しているが、隙間が多く石が密着せず、石垣面に凹凸がある。谷積は認められない。

所見：本石垣は SH22 以後の構築であるが、石の積方は類似する。このことから、近い時期に連続して積まれた石垣で、前後関係は積む順番によるものと考えられる。

SH24 (1) (平坦地 18 沢面東石垣) 図版 24 PL14

位置・遺存状態・調査：平坦地 18 の沢に面した浸食崖にある。湧水が沢側へ落ちる流路に浸食されて西端は途切れる。本石垣下端は海岸寺沢の流水面に達し、上端は平坦地 18 上面と平行してほぼ平坦である。南北トレンチを石垣際まで掘削したが、本石垣に達するトレンチ調査は実施していない。

規模：長さ 5.0 m、高さは 0.6~0.8 mを測る。石垣面の角度は水平面に対して 78° 前後である。構造は確認していない。

石材・積方：沢の転石とみられる垂角礫を多用し、中段に割石が少量加わる。石の大きさは幅 20~50 cm・高さ 10~30 cm前後で、突出した大きな石も小型の石も少ない。類似法量の転石を選択したためと思われる。割石は小型石を主体に混在比率は 13%である。割面を沢に面した側に向けるものが多い。谷積であるが、定形化されていない石を用い、整った積方ではない。最下段は右上がり斜めに石を配置し、所々同方向に積み重ねる。その上は左上がり石を積み、最上段は水平に積む。不整形な自然垂角礫を用いることから定形的な谷積とはいえないが、交互に斜めの石を積む傾向があることから谷積とみられる。

所見：SH22・23 と積方が異なる本石垣は、SH23 に追加されたものであろうか。

SH24 (2) (平坦地 18 沢面西石垣) 図版 24 PL14

位置・遺存状態・調査：平坦地 18 沢斜面の下流側に位置する。SH24(1) の西側延長上にあり、段を境に上下段に分かれ、本石垣はその上段にあたる。西端は平坦地 19 東面石垣 SH25 北端の石となって連続する。SH24 同様沢に面した石垣ながら積方が異なる。上端は平坦地 18 とほぼ平行するが、下端は沢流水面に沿って西へ傾斜する。全体的な立面形状は直角三角形となる。石垣の存在は調査当初に確認されたが、石垣自体の調査は調査終了間際に行った。沢に接する石垣のため撮影の距離が取れず、写真は斜め方向しかない。また、石垣に接する立木があり、一部測量できなかった。

規模・構造：長さ 5.5 m、高さは東端で 0.8 m、西端で 1.6 mを測る。石垣面の角度は水平面に対して

80°前後である。平坦地18のトレンチ調査では沢面の石垣は埋没している部分があり、平坦地造成以後に追加されたものと推測される。

石材・積方：西端のSH25と連続する部分には、幅30～70cm・高さ20～30cmほどの長方体に近い石を用い、それより上流側では幅10～30cm・高さ10～20cmほどの長方体・立方体・台形状などの不整形自然石を主体的に用いる。所々幅40～50cm・高さ20cmほどの長方体石が挟み込まれる。割石が少量混じり、全体の11.4%を占める。割石は中段以下に散在し、上部の小型石を積んだ箇所には少ない。斜め・縦に積まれた石は少なく、長方体石は水平に積まれるものがあることから、基本的に布目崩し積とみられる。石垣下端は東部で傾斜が緩く、中央付近から急傾斜で落ち込み、大きく傾斜しながら西端に続く。落ち込む中央付近から西側が最初に積まれ、その上は東部から高さを揃えて積んだと思われる。中央付近ではU字状に石の積み方が異なる箇所があり、修築の可能性はある。

所見：SH25は本石垣の西端に重なり、ともに布目崩し積とみられるため、両者がほぼ連続して積まれていると考えられる。ただし、SH25は沢側が大きく崩落して、この石垣と直接連続するか明らかではなく、平坦地構築当初からの石垣なのかは不明瞭である。

SH25（平坦地19東面石垣） 図版25 PL14

位置・遺存状態・調査：平坦地19（780.77m）東面、平坦地18との中間斜面に位置する。中央から沢側は大きく崩れ、右側の石垣が遺存する。下端・上端ともほぼ水平である。左端はSH26となり、右端は段丘崖際に及ぶ。平坦地19に石垣下端までトレンチを掘削し、耕作土を除去して石垣を清掃した。石垣が高く崩落の危険があるため、トレンチによる截ち割りは行わなかった。

規模：長さ約8.2m、高さ約1.4mである。石垣面の角度は水平面から76～81°前後である。

石材・積方：自然垂角礫と割石を用いる。大きさは、平均的には幅10～40cm・高さ10～30cm前後で、幅40～50cm・高さ40～50cmもある。不整形の長方体・立方体・台形・三角柱状などの形状がある。割石は部分的な加工に留まり、石垣残存部分で8.7%である。割石は中央付近で縦方向に多く集中し、右側では全体的に散っている。不整形石を用いるが、最下段は平坦面を下にして横方向に並べ、その上に隙間を埋めるように石の大きさと形状を合わせながら平行に積み上げる。長方体石はほぼ水平に積み、隙間に小型石を挟んで安定させ、平行積みしている。石垣全体では上段と左手側に細かい石を多用する傾向がうかがえる。

所見：本石垣は布目崩し積の可能性はある。石材の選択や加工度合いの低さから、SH01・03・04と近い時期に造成された可能性があろう。連続すると考えられる平坦地18沢面石垣との関係は、同じ布目崩し積のSH24(2)と近い時期に構築されたと推測される。ただし、本石垣の沢側が大きく崩落し、直接連続していないため断定はできない。

SH26（平坦地19沢面西上段石垣） 図版25

位置・遺存状態・調査：平坦地19の沢斜面にある二段の石垣上段にあたる。左端は石がまばらになって途絶え、右側下流側は石が崩れた箇所で途切れる。石垣面は平坦ではなく所々はらんでいる。特に湧水がある下部のはらみは大きい。平坦地19沢面石垣は、本石垣と下流側下部のSH27がわずかに上下に重なっており、巨視的には段を設けた二段の石垣とみられる。立面を写真測量し、截ち割りは行っていない。

規模・構造：長さ約4.2m、高さは最大1.5mほどである。石垣面の角度は水平面に対して72°前後と比較的緩い。南北トレンチ断面では、平坦地19沢側端部の下層は礫が大量に混じる層、中層は礫の少ないシルト質土、さらに上層に礫が大量に混る土層が堆積する。この状況から、沢面の石垣は平坦地を沢側

へ拡張した際に併せて構築されたと思われる。

石材・積方：大部分が自然垂角礫で、割石 1.9%が混じる。不整形石が多く隙間も多い。平均的な法量は長さ・高さとも 20 cm程度で、大きなものは各 30 cm、あるいは長さ 50 cm・幅 20 cmほどである。無加工の垂角礫を用いるため、積方は規則的ではない。斜めに積む石もあり、谷積を意識している可能性がある。特に上流側では谷積と見られる石材が顕著に認められ、下流側の西部は平面方形の小ぶりの石が多い。

所見：谷積を意識している可能性から、構築時期は 18 世紀後半以後と思われる。沢沿いの水流から平坦地を保護する目的で構築されたものであろう。

SH27 (平坦地 19 沢面西下段石垣) 図版 25

位置・規模・調査：平坦地 19 の沢斜面にあり、二段の石垣の下段にあたる。下端は沢の傾斜に沿って緩やかに傾斜し、上端東側は水平だが、西側は沢へ下る道の縁を形成し急傾斜となる。石垣全体の立面形状は平行四辺形で、高さ約 1.9 m、長さ約 5 mを測る。傾斜上側の東下端はほぼ垂直に削り、下端はほぼ平らな造成面上に石垣を作っている。沢に直接面した斜面に構築された石垣で、清掃後石垣の測量調査と写真撮影のみ実施した。狭いため十分な距離が取れず、斜め方向の写真のみ撮影した。

石材・積方：沢の転石、自然垂角礫を主体とし、大きさは長さ 10~40 cm・高さ 10~30 cmほどの比較的平たい形状の石である。割石は石垣面にみえる石の 7.95%で、上部には全くなく、下方の小型礫に少量見られる。上段の積方は布目崩し積であるが、東下端をほぼ水平に積み、西側と上部は傾斜に沿って斜めに積まれている。積み直し痕跡はみられない。無加工の転石を用いるため隙間が多く、石垣の面は揃わず、大きな石を安定させるために挟み込む間詰石も少ない。下段には谷積による斜めに配置した石がある。

所見：下段は谷積を行うことから、18 世紀後半以後の所産と思われる。

SH28 (平坦地 20 沢面東石垣) 図版 25

位置・遺存状態・調査：平坦地 20 (約 777 m) の沢斜面に位置し、下端は流水のある河床面に達する。左端は平坦地 19 下端付近、右端は平坦地 20 西端から若干東寄りで途切れる短い石垣である。西側は下端が水平に近く、上端は緩やかに傾斜する。上流側の左側は上端が平坦地 20 の緩傾斜する平坦面に沿い、下端は沢の傾斜に沿って緩やかに高まる。中央には平坦地 21 東面石垣 SH31 があり、本石垣の上部に直交するように構築されているので、SH31 は本石垣より後出とみられる。所々石積が飛び出る部分があり石垣面は揃わない。調査終了間際に存在が判明したため、清掃後に写真撮影と写真測量のみ行った。

規模・構造：長さ 5.2 m、高さ最大で 0.8 m、低い部分は 0.4 mほどの小規模な石垣である。石垣面の角度は垂直か、部分的にオーバーハングする。平坦地造成土層との関係を見るトレンチ調査を実施していないが、平坦地 20 は盛土が少ない簡単な造成で上面も緩やかに傾斜する。本石垣も低いことから、沢側斜面に石を積み背後を土で簡単に埋めた程度の造成と思われる。

石材・積方：自然垂角礫を用い、幅 20~40 cm・高さ 20 cm前後の、小型の石が主体である。幅 60 cm・高さ 30 cmほどの石もある。割面がみえる石材は 3 個、6.7%である。隙間が多く石垣面も揃わない雑な積方である。不整形自然石を用いて横に目地が通らないが、板状横長石の並びには平行に積む傾向が見て取れ、中央付近の落ち込む周辺は若干斜めの横方向に並ぶ。この状況から基本的には布目崩し積とみられる。上端は石の上面に凹凸があり、横に目地が通らないため、個別に崩落した石を積んだ可能性がある。

所見：高さが低く自然石主体の雑な石垣である。割石を多用せず規模も小さいことから、専門的な石工が組んだものではない可能性がある。海岸寺沢は 18 世紀初頭に氾濫を起こした後、下流側に土手を築いたことが伝わるので(市教委 2010)、本石垣が直接流水のある沢に面することから、構築時期は、18 世紀以

後と思われる。

SH29 (平坦地 20 沢面西石垣) 図版 25

位置・遺存状態・調査：平坦地 20 の沢斜面に位置し、左端は浅く途切れる。上流側に SH28 があり、途切れながら本来は連続する石垣であった可能性がある。石垣下端は沢流水面より若干高い場所にあたる。石積は高い場所でも 3 段ほどで積方は粗い。平面的には所々石が飛び出て、石垣面は揃わない。平坦地 21 東面石垣 SH31 は本石垣の上面に築かれ、あとから構築されたことがうかがえる。本石垣は調査終了間際に存在が判明し、清掃後に写真撮影と写真測量を行った。

規模・構造：長さ 1.8 m、高さは 0.8 m と低い。わずかに傾斜する、石垣面の凹凸が著しく詳細は不明である。截ち割り調査を実施しておらず、平坦地造成土層との関係は不明である。上面が緩やかに傾斜し、石垣が低い特徴から、沢斜面に石を積み背後を土で簡単に埋めた程度の造成と思われる。

石材・積方：自然の小型亜角礫が主体で、大きさは高さ 10 cm 前後が多く、幅 20 cm ほどの石が最大である。加工した石材は点在し、比率は 7.8% である。石材の選択基準は SH31 と同じ。隙間が多く、石垣面が揃わない雑な積方である。不整形の小型亜角礫を積むため横に目地は通らないが、長方形石は横長に用いる傾向があり、中央付近では若干斜め横方向に並ぶ。この状況から基本的には布目崩し積とみられる。上端は凹凸があり列状に並ばないため、個別に崩落した石を積み直した可能性がある。

所見：石積が低く自然石主体の雑な石垣である。本石垣は直接流水のある沢に面しているので、SH28 同様、海岸寺沢が氾濫した 18 世紀以後の構築と思われる。

SH30 (平坦地 21 沢面石垣) 図版 25

位置・遺存状態・調査：氾濫原内の下流側にある平坦地 21 (約 775.0 m) の沢浸食崖斜面にあり、下端は流水のある沢に接する。上面は平坦地の傾斜に平行し、下端も沢傾斜に沿って緩やかに傾斜する。左端はほぼ垂直に積まれるが、下流側の右端は沢へ下る道に沿ってやや急傾斜に落ち込む。石垣の右端はやや乱れ、修築した可能性がある。石垣の存在が判明したのは調査終了間際に、急遽清掃と写真測量を実施した。平坦地との関係を探る截ち割り調査は実施していない。

規模：長さ 5.4 m、高さ 1.0 m を測る。傾斜地形にあつて全体的に上端・下端も傾斜するが、高さはほぼ一定する。石垣面の角度は計測していない。構造の詳細は不明である。平坦地 21 の造成時か、造成以後のものと思われる。低い石垣であり、平坦地 21 の造成以後に加えられた可能性はある。

石材・積方：幅 20～50 cm・高さ 10～30 cm ほどの長方体・立方体・台形・三角柱状の不整形石を多用する。全体的に幅 30～50 cm・高さ 20 cm 前後の中型の自然亜角礫を用いるが、西端は幅 10～20 cm・高さ 10 cm 前後の小型石が多い。割石は左手に点在し、石垣面にみえる石の 8.6% に過ぎない。石の並びは全体的に横に目地が通り、下端と左端は長方体石が横長に積まれるため、この部分は布目崩し積にみえる。ただし、不整形の自然石を用いるため上端は水平にならず、三角の石を落とし込むように積む、また長方体石を斜め・縦に積む箇所もみられる。横方向に石を並べて積んではいるが、不整形石をそのまま形状に合わせ横方向に並べて積み上げ、石を斜め・縦に用いることから谷積も意識している可能性もある。

所見：带状平坦地 20～23 までの沢側には、断片的ながら石垣が残存するところがある。特に上流側のほうが遺存状態良好で、本石垣はその一つである。石積は部分的に横方向に目地が通るようにみえるが、布目崩し積とは断言できない。また、石を縦長、斜めに積む傾向から谷積を意識していると思われる。この状況から、構築時期は 18 世紀後半以後ではないかと推定する。

SH31 (平坦地 21 東面石垣) 図版 25 PL15

位置・遺存状態・調査：沢沿いの平坦地群のなかで下流側にある平坦地 20 と平坦地 21 の間の段差にある。平坦地 20・21 は沢沿いの傾斜方向に長い帯状平坦地で比高は小さく、石垣も低い。左端は沢岸まで続きそのまま SH29 に重なるが、本石垣が SH29 の上部に位置するため、それより後出することがうかがえる。右端は浅く途切れる。上端はほぼ水平だが下端は傾斜地形に沿っている。調査終了間際に石垣の存在が判明し、急遽調査に着手した。清掃して低い石垣を露呈し、写真測量した。断面は沢沿いに掘削したトレンチで一部を確認したが、石垣の切り割りができず、盛土層を一部確認したのみである。

規模：長さ 1.8 m、高さ 40 cm ほどの低い石垣である。石垣面の角度は水平に対して 77° 前後である。

石材・積方：沢の転石と思われる小型亜角礫を主体的に用い、断面が観察される石はわずかである。大きいものでも 20 cm 前後の石を選択している。連続する SH29 と類似した石を用いる。不整形の亜角礫を用いるため石垣面は揃わず、凹凸があり隙間も多い。積方に規則性はないが、楕円形石を縦、あるいは斜めにした積方がみられ、谷積の影響があろう。

所見：自然亜角礫を多用し、手で運べる程度の小型石材が多く割石を用いないことから、専門的な石工が組んだものではなかろう。谷積を意識した積方から、構築時期は 18 世紀後半以後と思われる。

SH32 (平坦地 21 南面石垣) 図版 25 PL15

位置・遺存状態・調査：平坦地 21 南面の段丘崖斜面にある。石垣上端にはやや緩斜した犬走り状の帯状空間があり、上端は道であった可能性がある。上端は緩やかに右へ傾斜し、下端は左端のやや急斜面となる平坦地 20 から 21 境界周辺で大きく落ち込むが、右側は傾斜面に併せて緩やかに傾斜する。石垣全体的の立面観は平行四辺形である。左側は比較的良好に遺存し、右部は崩落して石が散在する。草が枯れたため調査終了間際に本石垣の存在が判明した。急遽清掃を行い、写真撮影と写真測量を実施したが、段丘崖にかかる石垣で切り割りは実施できなかった。

規模・構造：残存部は長さ約 8.2 m、西延長上にも続くが崩落により詳細は不明である。高さは最大 1.4 m を測る。石垣面の角度は 80° 前後である。切り割りを行っていないため、地形整形と石垣の関係は不明である。崩落部分では裏込め石は認められず、段丘崖整形後に土を充填しながら積んだものと思われる。

石材・積方：自然亜角礫を主体とする。幅 1 m ・高さ 60 cm ほどの石が少数あり、下段は幅 20~50 cm ・高さ 10~30 cm 前後の石、上部は幅 10~20 cm ・高さ 10~20 cm の小型石を多用する。形状は長方体・板状・三角柱状など一定せず、沢周辺の亜角礫をそのまま使用する。割石の比率は 2.9% とわずかで点在するため、割れた転石等か割石を再利用したと思われる。幅 1 m ほどの石は左側と右側下段にあり、その周囲には幅 20~30 cm ・高さ 10~20 cm ほどの中型石が多い。中央部と上部には幅 20 cm 以下・高さ 20 cm 以下の小型石が多く、ここでは斜めに石の目地が通る部分がいくつかみられ、中央部は崩落に伴って修築された可能性がある。大・中型石を用いる箇所は石垣本来の形態を残すと思われ、この部分の積方は布目崩し積とみられる。

所見：本石垣の下端が平坦地 20・21 の段差に沿う形状から、平坦地造成以後に構築されたと考えられる。氾濫原内南面の段丘崖側にある石垣は、短いか不明瞭なものが多いなかで本石垣は比較的長く、局所的にある石垣といえる。亜角礫主体で割石を用いず小型石が多い傾向から、石工が組んだものではないと思われる。SH01・03・04 とは異なって、平坦地に伴って造られたものではなく、後に造られたものであると思われるが、この場所に石垣が構築された理由は明らかではない。

小 結

海岸寺沢の氾濫原内調査地点には、延長約 120 m にわたる沢沿いに、約 25 m の比高をもって 10 面の平坦地が並んでいる。平坦地 14～21 に構築された個々石垣の説明において指摘したことではあるが、海岸寺沢沿いの平坦地群の特徴をまとめてみる。

上流側にある平坦地 14～19 は、上面が水平になる平坦地群である。これらは傾斜の急な位置にあることに加え、上面を平坦とするために大きな比高があり、傾斜上方側（東面）に高い石垣を伴う。平坦地 14～16 の沢側には狭い帯状の緩斜面を呈する平坦地が付属し、平坦地 16 東部では長方形に突出する。平坦地 18 では土手状の高まりとして残り、平坦地 19 には帯状の平坦地が認められない。そのかわり、直接沢に面した北面に石垣が伴う。これらの帯状平坦地側の斜面は石垣を伴う。また、南側の段丘崖側斜面には部分的に短い石垣を伴うが、斜面全面に築かれることはない。比較的高い石垣を築いた平坦地 15・16 では、二段に構築されている。その石垣が作られた理由の一つは、おそらく 3～4 m を越える高さの石垣は組めなかったことにある。また、帯状平坦地は平坦地 14～16 とは高さを異にして形成されている。その帯状平坦地と接する高さの上段の石垣、帯状平坦地先端より低いところに下段石垣が位置することから、帯状平坦地の造成と二段の石垣が関連すると思われる。平坦地 15 では上下段共に谷積が認められるため、構築時間差を示すものではないと思われる。

また、沢沿いの帯状平坦地がなくなる平坦地 18・19 より下流側に位置する平坦地 20～23 は、流水のある現海岸寺沢に面した平坦地群である。これらはやや傾斜が緩やかな場所にあり、氾濫原沿いの幅の狭い箇所を傾斜方向に長い土地として、あまり造成を加えないまま使用しているものである。

(3) 3・4・5 区（扇状地上南東部）の石垣と平坦地

SH36（平坦地 1 東面石垣） 図版 26 PL16

位置・遺存状態・調査：5 区の平坦地 1（797.84 m）にある。急峻な斜面がやや緩傾斜となる山麓部に位置し、海岸寺沢が形成した小扇状地の扇頂部にあたる、調査範囲の最高所である。平坦地 1 から上は山麓斜面となり、切土は平坦地から比高が小さいため、本来現状に近いものであった可能性が高い。平坦地 1 では松本市教育委員会による試掘で池跡が確認され、大部分が保存されることとなった。石垣中央部にある昭和 20 年代に設置された用水施設が、石垣の一部を改変する箇所周辺は事業用地外となる。石垣は、用水施設から左側は段を設けて二段に構築される。右側は遺存状態が悪く、低い石列状に残る。この石垣前を重機でトレンチ掘削したところ遺構はなく、全体を清掃し、写真撮影、3D レーザー計測を行い、1 箇所を図化した。截ち割りしていない。

規模：東面は南北 22 m にわたって弧状に切土され、残存する石垣は長さ約 12 m である。図化した部分は高さ 2.7 m で、石積みは二段積され、下段 1.4 m・上段 1.0 m を測る。石垣面の角度は水平に対して下段 70°・上段 73° 前後である。

石材・積方：転石と思われる不整形の小型亜角礫を主体的に用い、割面が観察される礫は少ない。積方に規則性はなく、凹凸や隙間、崩落しかけた石が多い。

所見：高さがあるため段を設けているが、手で運べる程度の小型石材を多く用い堅固な積方ではない。

SH37（平坦地 2 東面石垣） 図版 26 PL16

位置・遺存状態・調査：5 区の平坦地 2 南半部（796.51 m）にある。平坦地 1 直下の北半部（795.96 m）よりやや高い。山麓斜面を切土し、西側に厚く盛土して造成した平坦地の東面に、北半部から続く石垣がある。南東側に尾根が迫り、日照条件がすこぶる悪い地点である。標高が異なる北半部・南半部の境界で石垣が小さく屈曲するため、本来は二つの平坦地だったと考えられる。調査範囲の石垣南端には昭和初期

に設置された水道施設と、ここにあった陰陽石を水道施設に用いたことを記した、昭和7年建立の「夫婦石碑」がある。(図版26 写真) 平坦面を調査し、埋め戻した後に全体を清掃し、写真撮影、3Dレーザー計測を行い、2箇所を図化した。截ち割りしていない。

規模：北半部との境界から直線的に長さ25mにわたり、図化部分(1)は高さ1.3m、石垣面の角度は水平に対して72°前後である。図化部分(2)は高さ1.9m、角度は85°前後である。

石材・積方：不整形の垂角礫を主体的に用い、断面が観察される石も見られる。三角形・台形などの大型の石を、平らな面を石垣面に向けて据え、谷部分に形の合う中型石を積み、上部に小型石を載せている。

所見：石垣下部にコンクリート基礎が敷設されているため、おそらく昭和時代に積み直された石垣であり、構築時の状況を残す部分を指摘できない。

SH38 (平坦地24 東面石垣) 図版27 PL16

位置・遺存状態・調査：4区の平坦地24(785.44m)東面にある。最高所にある平坦地1から、平坦地2北半部・平坦地3(793.35m)・4(790.20m)の平坦地3段が隔てる。平坦地4では市教委による試掘で礎石建物跡が確認され、保存されることとなった。石垣は高く、段を設けて二段に構築される。南・北に大きな崩落部分があり、上段は遺存状態が悪く、明瞭に新しい時期に修築した部分がある。石垣の裾部から常時湧水があり、特に南端付近は出水量が多い。平坦地の遺物集中SQ01などの調査と並行して、石垣全体を清掃し、写真撮影、3Dレーザー計測を行い、2箇所を図化した。截ち割りしていない。

規模：東面では直線的に長さ45mにわたり、南端で屈曲し、山麓の南面に約3m低い石垣がある。石垣北半に位置する図化部分(1)Bは高さ4.05mで、石積みは下段2.0m・上段1.4mを測る。石垣面の角度は下段78°・上段82°前後である。修築された(1)Cは高さ4.4mで、石積みは下段1.8m・上段2.3m、角度は下段80°・上段77°前後である。南半に位置する図化部分(2)Bは高さ4.5mで、石積みは下段2.8m・上段1.6mを測る。石垣面の角度は下段86°・上段72°前後である。(2)Cは高さ4.35mで、石積みは下段2.38m・上段2.0m、角度は下段82°・上段74°前後である。段は幅約1~2mである。全体的に上段・下段の石積みの高さ・角度の差は小さく、80°前後と急角度の石垣である。

石材・積方：垂角礫を主体的に用い、断面がある石も少なくない。全体的に中・大型の石が多い。図化部分(1)では、下段の下半には大型の長方形石を横に並べて置き、中段から中型の石を同様に重ね、隙間を中・小型石で埋めている。基本的に布目崩し積と思われる。上段の断面位置Bでも近似した石の並び方がみられる。Cは大部分割石を用い、谷積している。断面は新鮮で修築時期の新しさがうかがえる。旧石垣との境界部分には勾配を付け、算木積のように見える。図化部分(2)では(1)ほど規則性はうかがえないが、下段では短い横の目地が通る部分がある。図化部分以外では、下段でも谷積を意識した積方による部分が多く、段より上まで積む箇所もある。

所見：大型石を多用した規模の大きな石垣で、布目崩し積の部分を残すが、谷積を交えて修築した部分が多い。場所によって積方や石の大きさがやや異なる部分があり、修築が繰り返されたことがうかがえる。

SH39 (平坦地25 東面石垣) 図版28 PL17

位置・遺存状態・調査：4区の平坦地25(783.20m)東面にある。はらみにより膨らむ部分や、上半が崩落する箇所もみられるが、遺存状態は比較的良好である。石垣の裾部から湧水があり、南半部分では出水量が多い。平坦地のSB03、沢状地形などの調査と並行して、石垣全体を清掃し、写真撮影、3Dレーザー計測を行い、2箇所を図化した。截ち割りしていない。

規模：長さ60mにわたる。南端で緩くカーブし、山麓の南面に低い石垣がある。石垣の中央からやや北

側の図化部分(1)は高さ1.8m、石垣面の角度は75°前後である。(2)は高さ1.85m、角度は90°前後と急角度である。南北方向のトレンチでは、石垣上部の背後に、大・巨礫を多量に含む盛土層が確認された。

石材・積方：亜角礫を主体的に用い、割面がある石も見られる。図化部分(1)では下半に大型の長方形石を横に並べて置き、中段は中型の石を同様に重ね、上段には小型の不整形石を多く積んでいる。特に図の右側、断面位置ではこの状況が比較的明瞭で、基本的に布目崩し積と思われる。図化部分(2)では大・中型石を多用し、中段にも大型の長方形石を横向きに積んで、石垣面が揃っている。全体的に下端付近には横積みの大型石が残るが、図化部分以外では、谷積を意識した積方による修築部分も多くみられる。

所見：調査範囲の中で最も長い石垣である。大型石を多用した布目崩し積の部分を残すが、谷積の影響がある積方を交えて修築した部分が多い。SH38とも共通する状況がうかがえる。

SH40 (平坦地26 東面石垣) 図版28 PL17

位置・遺存状態・調査：4区の平坦地26(779.27m)東面にある。石垣は高く段を設けて二段に構築される。南端付近以外は上段より下段の石積みが高いが、下段の上部が崩落している部分がみられる。全体的に遺存状態は比較的良好である。平坦地の調査後埋め戻し、石垣全体を清掃し、写真撮影、3Dレーザー計測を行い、2箇所を図化した。截ち割りしていない。

規模：わずかに弧状となり、長さ41mにわたる。石垣のほぼ中央に位置する図化部分(1)は高さ3.9mで、石積みは下段1.5m・上段2.0mを測る。石垣面の角度は下段78°・上段80°前後である。図化部分(2)は高さ3.7mで、石積みは下段2.4m・上段1.3m、角度は下段76°・上段73°前後である。段は幅1~1.5m前後である。南北方向のトレンチでは、石垣上部の背後は、大・巨礫を多量に含む盛土層があることが確認された。

石材・積方：亜角礫を主体的に用い、割面がある石もみられる。図化部分(1)では、下段の下半には大型の石を横に並べて置き、基本的に布目崩し積と思われる。中段から中型の板状・不整形などの石を重ね、あまり規則性が見られない積方となる。上段は割面がある板状石が多く、交互に傾きが異なる谷積を意識した積方である。図化部分(2)では大・中型の石が多用される。下段の下半には大型石を置き、上半は中型石を用いた谷積に近い積方となる。上段では石を横積みし、谷積に近い部分も見られる。

所見：下段に布目崩し積の部分を残すが、谷積を交えて修築した部分が多い。SH38と近似する。

SH41 (平坦地27 東面石垣) 図版29 PL18

位置・遺存状態・調査：4区の平坦地27(776.65m)東面にある。一部崩落する箇所もみられるが、遺存状態は比較的良好である。平坦地の調査後埋め戻して石垣全体を清掃し、写真撮影、3Dレーザー計測を行い、1箇所を図化した。截ち割りしている。

規模・構造：直線的に長さ17mにわたる。図化部分は高さ2.5m、石垣面の角度は72°前後である。石積みの背後には、大・巨礫を40%以上含んだ平坦地26から続く盛土層があり、裏込の機能をもつものと思われる。

石材・積方：亜角礫を主体的に用い、割面がある石もみられる。中・小型石が多く、大型石は少ない。図化部分では下端に大型石を横に並べて置き、板状・不整形などの中型石を積み重ね、隙間に小型石を密に詰めている。南半部の上段では中型の石を横に並べて積むが、石垣面の石の色が全体と異なり、積み直した部分と思われる。全体的に石垣面が揃っている。

所見：大型石が少なく、横に目地が通る部分が少ないが、下端部の積方から布目崩し積と推定される。

SH42 (平坦地 28 東面石垣) 図版 29 PL18

位置・遺存状態・調査: 4区の平坦地 28 (775.25 m) 東面にある。崩落する箇所もみられるが、遺存状態は比較的良好である。平坦地の調査後埋め戻して石垣全体を清掃し、写真撮影、3D レーザー計測を行い、2箇所を図化した。截ち割りしている。

規模・構造: 直線的に長さ 27 m にわたる。中央寄り北側の図化部分 (1) は高さ 0.8 m、石垣面の角度は 85° 前後である。南側の図化部分 (2) は高さ 1.2 m、石垣面の角度は 76° 前後である。全体的に低い石垣であるが、北側ほど石垣上端部からの盛土が厚く、上部の石が遺存していない可能性がある。石積みの背後には、中～巨礫を 40% 含む平坦地 27 から続く盛土層があり、裏込の機能をもつと思われる。

石材・積方: 垂角礫を主体的に用い、割面がある礫もみられる。大・中を比較的多く用いる。図化部分 (1) では全体に大・中型礫を横に並べて置き、横に目地が通った布目崩し積である。隙間には小型石を詰める。(2) でも下半部に大型石を横に置いているが、この部分から南では谷積の影響がうかがえる積み方や、小型石が多い部分があり、修築と思われる。

所見: 低い石垣であるが、特に北半部には布目崩し積がよく残っている。

SH43 (平坦地 29 東・南面石垣) 図版 29 PL18

位置・遺存状態・調査: 4区の平坦地 29 (773.52 m) 東面から南端で屈折し、山麓の南面に続いている。崩落部分は少なく、遺存状態は良好である。平坦地の調査後埋め戻して石垣全体を清掃し、写真撮影、3D レーザー計測を行い、東面 2 箇所を図化した。截ち割りしている。

規模・構造: 東面は直線的に長さ 22 m、南面は 14 m にわたる。東面北側の図化部分 (1) は高さ 1.7 m、石垣面の角度は 70° 前後である。南側の図化部分 (2) は高さ 1.8 m、石垣面の角度は 72° 前後である。石積みの背後には、中～巨礫を 40% 含む、平坦地 28 から続く盛土層があるが、裏込としては石がややまばらのようにみえる。

石材・積方: 垂角礫を主体的に用い、割面がある石もみられる。大・中型の石を比較的多く用いる。図化部分 (1) では下端に大型石を横に並べて置くが、その上は中型石の隙間に板状石・小型石を詰めて上部まで積み上げ、規則性がみられない。(2) では下端に大型石を横に置くことは共通するが、大型石が上部まで多用され規則性がない。大部分が修築と思われる。

所見: 下部の積方には布目崩し積の痕跡があるが、明確ではない。全体に修築が多いと推定されるが、明瞭に谷積といえる部分も少ない。

小 結

4・5区は3段の保存された平坦地を介して、最上部の平坦地 1 から最下部の平坦地 29 まで、10 段の平坦地が連なる。平坦地群の延長は、北東から南西方向へ約 130 m、平坦面の比高差は 24 m 強を測る。市道 2263 号線を境界とする北西部の 1 区と比較して、平坦面 1 面の短軸 (東西) 長は大差ないものの、長軸 (南北) 長が圧倒的に長い。並び方は、4 区の平坦地 26・27・28・29 が 1 区の平坦地 8・10・12・13 にそれぞれ対応する位置にある。ただし、4 区の平坦地 24・25 の 2 面に対して、1 区は平坦地 5・6・7 の 3 面となり、ずれがある。また標高については、平坦地 25 と 7 が 25 cm 差、平坦地 28 と 12 が 30 cm 差と比較的近いものの、その他は市道を隔てた最寄りの平坦地間でも約 40 cm 以上の差がある。この理由は、耕地への水配りと関連することと推定される。扇状地上の平坦地造成が一つの事業として行われ、明治時代の地籍図に記載された拡幅前の現市道と用水路の開削も、この中で行われたことであろう。

石垣については、構築当時の姿をうかがわせる部分は少ない。自然の垂角礫を主体的に用い、下段部分

に横長の大きな石を据えた部分が、本来の布目崩し積を留め、上段ほど崩落後に修築され、割石を交えた谷積の影響が見て取れる積方となっている状況は、1・2区石垣の所見と共通する。ただし、4区の石垣は直交方向の石垣で角を作るものや、カーブを形成して連続する事例はみられない。また、全般に高さがあり長く直線的に組まれているため、当初から構築位置は変わっていないと思われ、SH38・39・43の山麓側南面石垣部分以外は、付加構築された可能性は低いと思われる。

旧地形の傾斜は、調査面の地形図とトレンチの土層断面図から推定される。1区の平坦地5～13、4区の平坦地24～29の長軸方向とも、約10度の傾斜である。平坦地3・4・24・25・26は石垣が高く、平坦面が南北に広いことは、この地点の掘削規模が大きく、盛土量が多いことを物語る。すなわち地形改変の大きさを反映していることになる。傾斜地における平坦地造成は、山側を切って谷側を盛ることは当然であるが、平坦地24・25の石垣背後のトレンチ断面では、北側から南側への盛土の移動が観察された。この状況から、現市道側に高まりがあり、これを切土して南側の山麓付近を埋め立てて平坦化をはかると推定される。

第3節 遺物

1. 縄文時代

(1) 縄文土器 図版34 PL20

縄文土器は約570g出土した。3-2区のSB01でおよそ半分の290g、4区平坦地24ではSQ01付近で約250gが出土した。ほかに1区平坦地7、5区平坦地2でも少量が出土している。時期は前期末葉（第I群）が大部分を占め、中期末葉（第II群）が少量ある。それぞれ複数時期を含んでいる。

第I群 前期末葉土器

第1類：諸磯c式土器（図版34-1～10・15・16）

1～10は平坦地24のSQ01周辺の狭い範囲から出土したものである。器壁の厚さや胎土の違いから、数個体の破片と思われる。15・16は平坦地7から出土した。

細い半截竹管状工具によって集合沈線文を描くものである。1～3・9は横位矢羽状、4～6は縦位矢羽状または斜位、7・8・15は横位の平行沈線、16は弧状（渦巻状？）に施す。2～6には小さな円形貼付文があり2・6は2個一対となる。2・8・9には縦位のヘラ切浮線文がある。10はこれらに伴う無文土器である。粘土帯で欠損し、直径23cm前後と推定される。内外面とも横ナデ調整され、外面は指ナデしたように凹凸を残し、縦位にまばらな擦痕を施している。この類は粗粒砂を含み、にぶい黄褐色あるいは褐色を呈する。

第2類：晴ヶ峯・十三菩提式土器（図版34-11・17～31）

11は5区平坦地2から出土した。縄文地文を施し、2条平行の結節浮線文が縦走する。円形貼付文と思われる小さなこぶがみられるが、器面が磨滅し判然としない。褐色を呈し、粗粒砂の多い胎土である。

17～31は3-2区のSB01から出土した。深鉢形土器の上半部破片が多いと思われるが、同一個体か複数か明らかではない。17・19は短く屈曲する口端部で、上面がくぼむ低い突起があり、内面が稜をなす。26も同じ部位であろう。18・20・21・25は外反気味の部位に横位の押圧隆帯がめぐり、上部に並行沈線で鋸歯状文を描くらしい。22～24も同じ鋸歯状文がある。半截竹管状工具によると思われるが、20・23・24は3条単位となっている。27には隆帯があり、28～31は無文である。17～26は同一個体破片の可能性はある。この類はにぶい黄橙色を呈し、粗粒砂を多く含む胎土である。

押圧隆帯、並行沈線による鋸歯状文という要素は、一見縄文中期の「平出第III類A土器」にも共通する

ように思われる。しかしながら、当該土器では押圧隆帯は胴中位をめぐる。鋸歯状文はみられず、波状文が口縁部に描かれ、新しい段階を除いて胴上部が無文となることはない。このため、該当しないと判断した。一方、17・19のような突起が付く口縁部形態と、横走る押圧隆帯は前期末葉にみられるが、鋸歯状文が伴う例は知られていない。単沈線でV字状の意匠を描くものが岡谷市大洞遺跡（当センター1987）にごく少数あり、本資料と対比される希少例となる可能性がある。

第Ⅱ群 中期末葉土器

第1類：唐草文系土器（図版34－12）

SQ01から1点のみ出土した。粘土帯で欠損する。縦位隆帯が器面を区画し、太めの斜位沈線文を施す。唐草文系土器第3段階と思われる。明褐色を呈し、砂粒を含む胎土である。

第2類：加曾利EⅣ式土器（図版34－32）

SB01から出土した。断面三角形に近い、低い隆帯が胴部に縦走している。隆帯で縦位区画し、縄文部と無文部が交互に配される深鉢であろう。黄橙色を呈し粗粒砂を多く含む胎土で、第Ⅰ群第2類に似ている。

（2）石器 図版37－2 PL24

石鏃、スクレイパー、使用痕ある剥片と、黒曜石碎片がある。

石鏃1は3－2区のSK11から出土した。黒曜石製の有柄石鏃で、先端と柄部を欠損している。表面は剥離が全面に及び、裏面には第一次剥離面を残す。有柄石鏃は出土した縄文土器の時期にはみられない形態であり、後期後半から晩期、あるいは次項の弥生土器の時期に帰属すると思われる。スクレイパー4は、3－2区のSK17と平坦地11沢側検出面から出土した2片が接合した。距離は約60数mである。暗灰色のチャート素材とする。二等辺三角形を呈する横長剥片の二辺に剥離を施し、刃部を作り出している。2・3は黒曜石の使用痕ある剥片である。2はSB01、3は平坦地11のSK40から出土した。3は厚みのある縦長剥片の両側縁に微細な剥離痕が残る。2は両極剥片の長辺に部分的な剥離痕がある。石鏃製作などを目的とした加工痕の可能性もある。

PL24－5～7は黒曜石の碎片である。5は平坦地25、6は平坦地27の盛土層、7は平坦地29の遺構検出面から出土した。使用・加工の痕跡がみられない石くずであるが、いずれも土器が出土していない平坦地の出土であり、縄文時代の活動範囲を物語る可能性がある。

2. 弥生・古墳時代

極めて少数のため、まとめて報告する。図示した資料がすべてである。

（1）弥生土器 図版34－13・14 PL20

SQ01から同一個体の2片が出土した。器壁が5mm程度と薄く、外反気味の器形である。横位の浅い条痕文を施し14には沈線文がみられる。褐色を呈し、細～中粒砂をやや多く含む。中期前半の甕形土器と思われる。

（2）古墳時代 図版35－33・34 PL23

33は3－2区、34は平坦地11のSD03から出土した。2点とも高杯の脚部である。33裾部破片である。34は脚中ほどの破片で、内面に調整痕の凹凸が残る。いずれも古墳時代後期の所産であろう。

3. 古代

（1）土器・陶器 第5図 第5表 図版35～37 PL21～24

古代の土器は8102g出土し、その95%はSB01とSQ01から出土した。この2遺構は遺構単位に資料を

説明し、土器類の種別と器種組成を示す。その他出土資料は、図化資料の説明のみとする。分類にあたっては、塩尻市吉田川西遺跡報告書（当センター1989）に従った。土器の種類には、土師器、黒色土器A・B、須恵器、灰釉陶器がある。器種と用途別の分類は、食膳具：杯・椀・皿・盤・鉢、煮炊具：甕・小型甕・羽釜・甌、貯蔵具：壺・甕・瓶・その他とした。

SB01 図版 35 - 1 ~ 28 PL21・22

SB01 付番以前に同地点から採取した遺物も含めると、遺物の総重量は 4869 g、用途別の組成は、食膳具 2051 g (42.1%)、煮炊具 1965 g (40.4%)、貯蔵具 333.5 g (6.8%)、器種不明 519.2 g (10.6%) である。食膳具は土師器が 76.7% を占め、灰釉陶器 15.9%、黒色土器 A 7.4%、である。器種は、土師器杯 (1~7)・椀 (8~12)・鉢 (16)、黒色土器 A 杯 (13)・椀 (14・15)、灰釉陶器椀 (17)・皿 (18~21) である。17 は大原 2 号窯式に属す。煮炊具には土師器甕 (24~26)・小型甕 (22・23) のほか、羽釜と推定される図化不可能の破片がある。貯蔵具には須恵器壺 (27)・灰釉陶器瓶 (28) がある。

SQ01 図版 36 - 38~84・86・87 PL21~24

SQ01 付番以前に同地点から採取した遺物も含めると、遺物の総重量は 2842.7 g、用途別の組成は、食膳具 2377 g (83.7%)、煮炊具 279.8 g (9.8%)、貯蔵具 138.8 g (4.9%)、器種不明 47 g (1.6%) である。食膳具は土師器が 69.2% を占め、黒色土器 A・B 25%、灰釉陶器 3.4%、須恵器 2.3% である。器種は、土師器杯 (38~59)・椀 (63~67・78)・皿 (60・61)・盤 (80~82・86)・鉄鉢形土器 (83)、黒色土器 A 杯 (68・69・71)・椀 (72~75)、黒色土器 B 杯 (70)、硬質の須恵器杯 (77)、灰釉陶器椀 (62・76)・皿 (79) である。土師器杯・椀のうち 38・41・44・45・56・63 には煤が付着している。62 は虎溪山 1 号窯式に属す。77 は口縁部が外側に屈曲して内面が稜をなす、類例のない形態である。煮炊具には土師器甕がみられるが、図化不可能である。貯蔵具には須恵器甕 (87)・灰釉陶器瓶少量がある。

その他 図版 35~37 PL21・23

SB01 を切る土坑 SK11 からは土師器甕 (図版 35 - 31)、SK17 からは土師器杯 2 点 (同 29・30) が出土した。SQ01 に隣接する溝跡 SD09 からは、土師器杯 (図版 36 - 84) が出土した。平坦地 25 の沢状地形からは、灰釉陶器瓶の破片 (図版 37 - 105) が出土した。平坦地 2 の焼土跡 SF04 周辺からは、黒色土器 A 椀 (図版 37 - 88)、灰釉陶器広口瓶 (同 89)、平坦地 2 背後の山麓斜面に設けたトレンチ T2 からは、黒色土器 A 鉢の破片 (同 101) が出土した。

(2) 鉄製品 (図版 37 - 3 - 1)

SB01 から 1 点出土した。形状から、釘の頭部と推定される。錆びてかりんとう状に膨張し、半分以上を欠損している。破断面にみえる金属部分は、幅 7 mm・厚さ 3 mm 程度で、端部が折れ曲がる。

4. 中世・近世

(1) 土器・陶磁器 図版 35~37 PL24

中世の土器・陶磁器は 922.7 g 出土し、重量比では内耳鍋が大部分を占める。近世の陶磁器は 155.2 g と少ない。多少ともまとまって出土したのは、平坦地 25 のテラス状遺構 SB03 のみである。

SB03 からは、中世の土器、陶磁器として青磁蓮弁碗 (図版 37 - 91)、古瀬戸丸皿 (93)・天目茶碗 (94)・カワラケ (92)・内耳鍋 (102~104) が出土した。近世の陶器には、瀬戸美濃産の鉢 (95)・拳骨茶碗 (96)・仏華瓶 (97)、地元産の灯明皿 (98) がある。これらの年代について、中世に属す 91 は鎬蓮弁で 13 世紀、93 は大窯 1~2 期に属し 15 世紀末から 16 世紀前半、94 は古瀬戸後期様式 2 期に属し 14 世紀後半、92 は 16 世紀以前、102~104 は 16 世紀である。近世陶器は、95 は 18 世紀末~19 世紀、96 は 18 世紀後半、97 は 18 世紀~19 世紀、98 は 18 世紀後半である。

平坦地 25 の焼土跡 SF01～03 がある沢状地形からは、盛土層下から内耳鍋（図版 37 - 90）が出土した。平坦地 24 から出土した小破片と接合している。平坦地 29 からは、青磁蓮弁碗（同 99・100）が出土した。鎬蓮弁であり、13 世紀の産である。3 - 2 区からは内耳鍋（図版 35 - 32・37）が出土した。16 世紀に属す。平坦地 7 からは、京都系のカワラケ（同 35）が出土した。13 世紀である。平坦地 9 からは壺（同 36）、平坦地 24 からは地元産の土鍋か土瓶（図版 36 - 85）が出土した。ともに 18 世紀以降の時期である。

（2）銭 貨 図版 37 - 3 PL24

北宋銭 3 点がある。2・3 は平坦地 29 の火葬施設跡 SK59、4 は平坦地 25 の火葬施設跡 SK79 から 10 m 前後北側の遺構検出面から出土した。2 は元祐通寶（1086 年初鑄）である。書体は篆書、背上星はない。3 は聖宋元寶（1101 年初鑄）、書体は行書である。4 は磨滅が著しく、かろうじて「元口通寶」と判読できる。該当する候補としては、2 と同じ元祐通寶か、元符通寶（1098 年初鑄）の可能性がある。

小 結

遺物の時期と分布を概観し、本遺跡における人々の活動範囲を推定すると、おおよそ次のようである。

縄文時代は、前期末葉が大部分を占め、第 I 群第 1 類は平坦地 24 の SQ01 と平坦地 7、第 2 類は 3 - 2 区に集中し、平坦地 2 にもみられる。中山地区のカニホリ西・東遺跡など、この時期の集落は斜面を選んで形成される事例があり、狩猟活動だけを推定することはできないであろう。少量出土した中期末葉の第 II 群第 1 類が SQ01、第 2 類が 3 - 2 区と、同じ出土地点である。使用痕ある剥片、土器以外の時期に属すと推定される有茎石鏃も、3 - 2 区出土である。このほか平坦地 11・25・27・29 にも散在するため、縄文時代の活動範囲は調査範囲全体に及んでいるものと推定される。さらに畑地灌漑幹線農道付近から中期後葉の土器が採集されているため、異なる時期の活動範囲が南西側に広がるものと思われる。

弥生時代は中期前半と思われる土器が、SQ01 から少量出土した。周辺で条痕文土器を出土した遺跡は針塚遺跡をおいて他にない。弥生集落が少数の時期、本遺跡に土器がもたらされた理由を推定する根拠は、現在見出せない。古墳時代は後期の高杯が平坦地 10 と 3 - 1 区から出土した。同時期の集落遺跡は平地の扇状地面に展開し、山麓斜面にはみられない。むしろ人穴 1・2 号古墳、山田入古墳、里山辺丸山古墳、藤井 1～3 号古墳の立地を考慮すれば、古墳が存在した可能性があろう。

平安時代の食膳具については、土師器杯・碗が主体となり、黒色土器 A 碗が伴う構成であり、土師器杯の口径は 10～13 cm の範囲に集中する。SB01 から大原 2 号窯式、SQ01 から虎溪山 1 号窯式の灰釉陶器が出土し、前者が 10 世紀前半、後者が 10 世紀後半の年代とされている。従って今回出土した平安時代土器は 10 世紀代に集中していることが明らかである。その中で、SQ01 出土の須恵器杯（77）は 9 世紀後半に属すと思われ、灰釉陶器の時期から時間幅があることが推定される。遺構が攪乱を受けているうえ、土器は図上復元した個体が多数を占めるため、詳細な編年位置の検討には無理があり、平安時代土器群を 10 世紀代と把握しておく。

概括的には SB01 と SQ01 はおよそ同時期の遺構と考えられるが、用途別分類の組成には大きな差異がある（第 5 表、第 5 図）。再述すると、SB01 は食膳具 42.1%、煮炊具 40.4%、貯蔵具 6.8%、器種不明 10.6% であるのに対して、SQ01 は食膳具 83.7%、煮炊具 9.8%、貯蔵具 4.9%、器種不明 1.6% であり、食膳具占有率に 2 倍の開きがある。吉田川西遺跡報告書で種類別・器種別重量が記載された住居跡出土土器のうち、10 世紀代の、SB114・94・52 段階前後に属す、SB103・116・94・13・58・48・87 の 7 軒を取り上げ、用途別分類の重量比による土器組成を算出してみた。結果は総重量 52,577 g、食膳具 25,642 g（48.8%）、煮炊具 15,550 g（29.6%）、貯蔵具 11,385 g（21.6%）であった。煮炊具と貯蔵具の占有率が近いものの、食膳具の占有率は本遺跡 SB01 と大差ないものである。

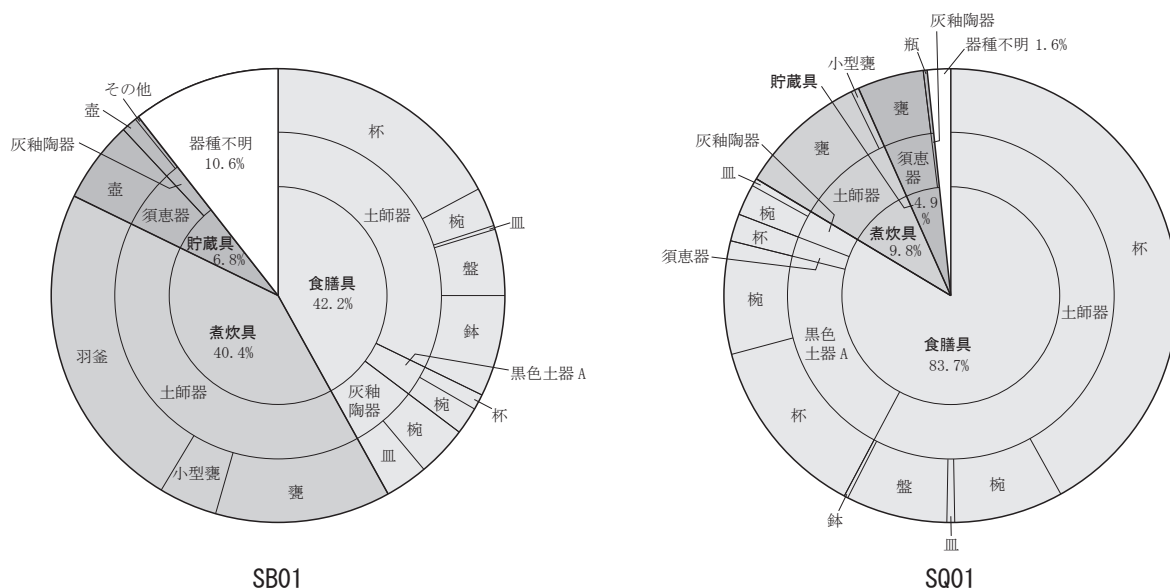
多少の時期差はあるものの、松本盆地の東西に位置する古代山林寺院跡の発掘事例と比較してみる。東側は松本市内田の牛伏寺堂平跡（原 2013）、西側は松本市波田の、若澤寺の前身といわれる本寺場遺跡（波田町教育委員会 2002）の発掘調査によって出土した、平安時代土器の用途別分類組成を示す。両遺跡とも土器の種別重量比は記載されていないので、牛伏寺堂平跡はトレンチ別の破片数、本寺場遺跡はトレンチ別の付番採集遺物の点数を集計した。

牛伏寺堂平跡では6箇所の平坦面が調査され、9世紀後半、10世紀前半～11世紀後半、11世紀中葉～12世紀初めの三時期の土器が出土した。その合計は437点、食膳具324点以上（74.1%以上）、煮炊具（25.2%）、貯蔵具3点（0.7%）である。土師器杯の多くに煤が付着し、灯明皿として使用されていた。元寺場遺跡の中心部には2箇所の基壇と4箇所の平場があり、5箇所のトレンチ調査が行われた。土器は9世紀後半に属するものが少量みられるが、11世紀前後が主体である。合計は161点、食膳具135点（83.9%）、煮炊具7点（4.4%）、貯蔵具19点（11.8%）である。灯明具に使用されて煤が付着した土師器杯も多い。

牛伏寺堂平跡、本寺場遺跡とも食膳具は概ね75%以上を占め、偶然であろうか、本寺場遺跡と本遺跡SQ01の食膳具占有率は極めて近い。煤が付着した土師器杯も共通する。このような、一般の集落遺跡と比較して食料の調理・貯蔵活動の形跡が薄弱な、灯明具転用品を含んだ食膳具偏向の土器組成から、寺院関連の遺構は検出されなかったものの、日常生活とは異なる信仰活動の場が推定される。牛伏寺堂平跡の平坦地群が、豊富な湧水を取り巻くように立地することから、原始的な湧水信仰に由来する選地である旨の指摘がある（原 2013）。SQ01は日照時間が短い、日常的な生活条件に欠ける地点ながら、背後の石垣からは常時水が湧出している状況から、同じ理由によって選地された可能性がある。さらに高所に位置し、水源が設置された平坦地2も、共通の立地条件を備えている。

中世の土器・陶磁器は14・15世紀にやや少数となるものの、13世紀から16世紀に及んでいる。遺構としては2箇所の時期が異なる火葬施設と、2地点の焼土跡が検出されている。遺構・遺物とも、地形改変の規模が大きかったと推定される、調査範囲の南東半部に多い。

近世の陶磁器は少量ながら、SB03と平坦地9からややまとまって出土している。18世紀後半から19世紀の産であり、17世紀代とされるものはみられない。近世後半、斜面中腹にテラス状の整地面を伴う活動空間SB03が存在し、水田造成の上限年代を示す遺構となる。屈葬人骨が出土したSK08は、埋土の性質から平坦地造成後、埋葬姿勢から近世前半頃の時期と推定されたが、遺物は伴っていない。



第5図 SB01・SQ01 出土土器器種組成

第4章 科学分析

本遺跡の発掘調査における科学分析として、専門研究機関に業務委託して放射性炭素年代測定を行った。平成25年度調査で4点、26年度調査で9点、合計13点の試料を測定し、これまで遺構の報告の中で時期推定の根拠として引用してきたが、本章では第6表にまとめ、概要を記す。年代測定の目的は、本遺跡は出土遺物が少量のため、遺物を伴わない遺構や平坦地が造成された時期を、炭化物から年代を明らかにすることである。年代測定はAMS法による。化学処理工程、測定方法、算出方法等の詳細は、結果報告の全文を収録している別添DVDに譲る。試料を採取した地点は、平坦地5・7盛土層、火葬施設SK59・79、竪穴状遺構SB03、遺物集中SQ01、焼土跡SF04の7遺構である。これらの結果を年代が古い順に記す。

遺物集中SQ01 平安時代の土器が集中的に出土し、おおよその年代は遺物から推定できた。遺物を含む埋土2・3層から採取した2点の試料を測定したところ、722calAD-1013calADまで6時期の1 σ 暦年代範囲が示された。2層から採取したIAAA-142582は、722calAD-866calADの間に4暦年代範囲があり、790calAD-829calAD(25.7%)が最も可能性が高く、他の3年代範囲は18.6%以下であった。3層から採取したIAAA-142583は902calAD-1013calADの間に2暦年代範囲があり、964calAD-1013calAD(52.0%)の可能性が高く、他は16.2%であった。土器の年代からは10世紀代が中心と予想され、IAAA-142583の年代範囲は整合的であるが、IAAA-142582の1 σ 年代範囲に相当する土器は確認できず、2 σ 年代範囲763calAD-882calAD(71.0%)に入る土器少数みられる。層位的には上位にあるIAAA-142582の年代が古く出ているため、地形改変の影響が現れた可能性がある。

焼土跡SF04 焼土層の母材となった3層と、その直上に堆積する2層から採取した3点の試料を測定し、1154calAD-1381calADの4暦年代範囲が示された。3層から採取したIAAA-142585は1154calAD-1214calAD(68.2%)の1暦年代範囲、2層から採取したIAAA-142584は1270calAD-1286calAD(68.20%)の1暦年代範囲であり、他の暦年代範囲は示されていない。この2点の年代の新旧は、層序の上下関係と整合する。3層から採取したIAAA-142586は1283calAD-1300calAD(42.5%)と、1369calAD-1381calAD(25.7%)であり、前者の可能性が高い。他は16.2%であった。この年代範囲はIAAA-142584とほぼ同じであるが、同じ3層採取のIAAA-142585より半世紀強古い。年代差はあるが、平安時代末から鎌倉時代の活動時期が推定される。周辺出土の黒色土器A椀は10世紀代と推定されることから、SF04とは関連しないものと考えられる。

火葬施設SK59 焼骨片と銭貨を含む浅い埋土から採取した2点の試料を測定し、各2暦年代範囲が示された。IAAA-142578は、1319calAD-1351calAD(47.3%)が、1391calAD-1406calAD(20.9%)より可能性が高い。IAAA-142579は、1284calAD-1304calAD(36.2%)と、1366calAD-1384calAD(32.0%)の可能性が近く、2 σ 暦年代範囲も5%程度の差である。13世紀末から14世紀前半と推定すると、付近から出土した青磁蓮弁碗の考古学的年代と近い。

平坦地7 多量の角礫を含む盛土層4層から採取した2点を測定した。IAAA-131312は、1315calAD-1356calAD(53.6%)が、1389calAD-1400calAD(14.6%)より相当可能性が高い。IAAA-131313は3年代範囲が示され、1304calAD-1328calAD(27.8%)と、1342calAD-1365calAD(27.4%)に近い可能性を示す。2 σ 年代範囲は1298calAD-1402calAD(95.4%)となる。IAAA-131312・131313とも14世紀前・中葉となるから、青磁蓮弁碗が出土した平坦地25・29の遺構と暦年代範囲が近く、当該時期の活動範囲が示唆さ

れる。その反面、周辺の調査結果から推定される平坦地造成時期とは年代差が大きい。造成事業が中世の活動痕跡を破壊したことによって、分析試料を巻き込んだ可能性がある。

火葬施設 SK79 炭を多量に含む焼土層から採取した1点の試料を測定し、2暦年代範囲が示された。IAAA-142580は、1521calAD-1591calAD (54.1%) が、1620calAD-1639calAD (14.1%) より相当可能性が高い。16世紀代とすれば、平坦地29にあるSK59とは暦年代範囲が異なり、同じ平坦地25にあり、付近から内耳鍋が出土したSF01~03の考古学的な推定年代に近い。

竪穴状遺構 SB03 埋土上部の炭化物集中部分から採取した1点の試料を測定した。IAAA-142581は、1670calAD-1944calADの間に、4暦年代範囲を示した。この中で1732calAD-1780calAD (38.1%) が最も可能性が高く、次の12.2%以下と差がある。18世紀代とすれば、出土した近世陶器の考古学的年代と整合し、耕地造成時期の上限年代の根拠となる。

平坦地5 拳大礫をやや多く含む盛土層6層から採取した2点を測定した。IAAA-131310は1692calAD-1920calADの間に、4年代範囲を示した。1812calAD-1890calAD (45.2%) は可能性が最も高く、次の

第6表 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用14C年代、較正年代)

測定番号	採取場所	暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
IAAA-131310	平坦地5 盛土層 6層	113 ± 24	1692calAD - 1710calAD (10.9%)* 1717calAD - 1728calAD (6.2%)* 1812calAD - 1890calAD (45.2%)* 1910calAD - 1920calAD (5.9%)*	1682calAD - 1737calAD (27.8%)* 1805calAD - 1936calAD (67.6%)*
IAAA-131311	平坦地5 盛土層 6層	94 ± 23	1697calAD - 1725calAD (23.1%)* 1815calAD - 1836calAD (16.7%)* 1877calAD - 1917calAD (28.4%)*	1690calAD - 1730calAD (26.0%)* 1810calAD - 1925calAD (69.4%)*
IAAA-131312	平坦地7 盛土層 4層	592 ± 24	1315calAD - 1356calAD (53.6%)* 1389calAD - 1400calAD (14.6%)*	1300calAD - 1369calAD (69.9%)* 1381calAD - 1410calAD (25.5%)*
IAAA-131313	平坦地7 盛土層 4層	608 ± 23	1304calAD - 1328calAD (27.8%)* 1342calAD - 1365calAD (27.4%)* 1384calAD - 1395calAD (12.9%)*	1298calAD - 1402calAD (95.4%)*
IAAA-142578	59号土坑(SK59) 埋土	580 ± 25	1319calAD - 1351calAD (47.3%)* 1391calAD - 1406calAD (20.9%)*	1304calAD - 1365calAD (64.3%)* 1383calAD - 1415calAD (31.1%)*
IAAA-142579	59号土坑(SK59) 埋土	664 ± 24	1284calAD - 1304calAD (36.2%)* 1366calAD - 1384calAD (32.0%)*	1278calAD - 1316calAD (50.1%)* 1355calAD - 1390calAD (45.3%)*
IAAA-142580	79号土坑(SK79) 埋土 2層	318 ± 24	1521calAD - 1591calAD (54.1%)* 1620calAD - 1639calAD (14.1%)*	1489calAD - 1604calAD (74.6%)* 1611calAD - 1645calAD (20.8%)*
IAAA-142581	3号竪穴状遺構(SB03) 埋土2層	163 ± 25	1670calAD - 1685calAD (11.2%)* 1732calAD - 1780calAD (38.1%)* 1799calAD - 1808calAD (6.8%)* 1928calAD - 1944calAD (12.2%)*	1665calAD - 1698calAD (16.6%)* 1724calAD - 1786calAD (40.8%)* 1793calAD - 1815calAD (10.6%)* 1834calAD - 1878calAD (7.9%)* 1916calAD - ... (19.6%)*
IAAA-142582	1号遺物集中(SQ01) 埋土2・3層	1,225 ± 25	722calAD - 740calAD (14.2%)* 767calAD - 779calAD (9.6%)* 790calAD - 829calAD (25.7%)* 838calAD - 866calAD (18.6%)*	694calAD - 746calAD (24.4%)* 763calAD - 882calAD (71.0%)*
IAAA-142583	1号遺物集中(SQ01) 埋土2・3層	1,077 ± 24	902calAD - 920calAD (16.2%)* 964calAD - 1013calAD (52.0%)*	896calAD - 927calAD (23.4%)* 941calAD - 1018calAD (72.0%)*
IAAA-142584	4号焼土跡(SF04) 埋土2・3層	720 ± 24	1270calAD - 1286calAD (68.2%)*	1257calAD - 1298calAD (95.4%)*
IAAA-142585	4号焼土跡(SF04) 埋土2・3層	877 ± 24	1154calAD - 1214calAD (68.2%)*	1046calAD - 1092calAD (19.2%)* 1121calAD - 1140calAD (4.7%)* 1147calAD - 1221calAD (71.5%)*
IAAA-142586	4号焼土跡(SF04) 埋土2・3層	671 ± 23	1283calAD - 1300calAD (42.5%)* 1369calAD - 1381calAD (25.7%)*	1276calAD - 1313calAD (55.8%)* 1357calAD - 1389calAD (39.6%)*

[参考値]

* Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の14C年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを示す。)

1692calAD-1710calAD (10.9%) 他とは差がある。IAAA-131311 は、1697calAD-1917calAD の間に3年代範囲が示された。1877calAD-1917calAD (28.4%) を最高に、23.1%、16.7%と確率が近い。2 σ 年代範囲は1810calAD-1925calAD (69.4%) となり、概ね19世紀代の可能性が高い。SB03出土の近世陶器の考古学的年代とも矛盾しない。



桐原城跡（左）と海岸寺遺跡



4区SQ01、5区SF04付近出土古代土器

第5章 総括

海岸寺遺跡は、松本市教育委員会の発掘調査等によって縄文時代、平安時代、中世の遺跡と判明していた（市教委 2010）。遺跡内にある収蔵棟に安置される 10 世紀代の木造千手観音立像（長野県宝）や、海岸寺沢を約 500 m さかのぼった谷奥の海岸寺奥の院伝承地「弘法平」にある、12 世紀代の経筒、白磁などの遺物（松本市重要文化財）を出土した海岸寺経塚、遺跡北端を流れる「海岸寺沢」の地名から、遺跡には平安時代に遡る海岸寺の存在が想定されていた。

寺院遺構検出の期待 海岸寺は関連する古文書も少なく寺院の実態は不明だが、伝承によればかつて弘法平に中核施設があり、24 坊ともいわれる堂宇が散在、または移転している可能性があった（長野県 1936）。県営砂防事業に先立って、今回の調査対象地 4 区の上段で平成 24 年度に市教委が試掘調査を実施し、礎石建物跡を検出した。この建物跡が高い石垣を伴う平坦地 4 に所在するため、平坦地が寺院関連施設設置を目的に造成された可能性が生じた。25 年度調査では寺院関連施設を想定し、平坦地の面的調査、及び石垣の截ち割りを行った。その結果、一部で耕作関係の遺構を検出したが、平坦地の造成時期は近世以降と判明し、下層に遺構面は認められなかった。調査範囲全体に連なる平坦地群は、水田主体の耕地造成を目的とし、少量の出土遺物から、地形改変によって縄文、平安、中世の遺構が削平されたことが判明した。この地形改変を免れた地点から平安住居跡と、造成後に掘り込まれた近世土坑墓が検出された。

水田造成以前の遺構を求めて 26 年度調査地点 4 区はより大きな高低差があり、地形改変の規模が大きいことが予想された。前年度調査の結果を受け、石垣の調査より、盛土下に旧地形が残る各平坦面の面的調査に注力した。平坦面の中央部から上側は、水田耕土直下で切土された地山が現れ、石垣の裏側は多量の巨礫を交えた盛土であった。平坦地 2・24・25・26・29 では部分的ながら、盛土下から平安、中世、近世の遺構が検出され、縄文から近世にわたる遺物が出土した。これらを素材として、第 3 章の「遺物」小結で遺跡の変遷を推定した。なお、市道 2263 号線部分は、全線にわたって中央部を幅約 1 m 掘削して農業用水パイプが埋設され、遺構は皆無であった。

縄文前期集落跡か 縄文時代の遺構は確認できなかったが、土器は前期末葉にまとまる。類例が少ない資料も含むが、諸磯 c 式、十三菩提・晴ヶ峯式に比定した。時期不詳ながら、全体から石器も出土した。土器がやや多く出土した平坦地 24 の東半部は湧水が多く、毎朝シカの足跡が残る狩場の適地である。松本盆地では縄文前期集落の調査事例が乏しい中で、前期末葉には松本市カニホリ東・西遺跡、赤木山遺跡群白神場遺跡、塩尻市古屋敷遺跡、女夫山ノ神遺跡で数軒以上の住居跡が検出されている。これらの遺跡には斜面に立地するものがある。集落立地を比較すると、本遺跡を狩場だけに限定できないであろう。

弥生・古墳時代土器の背景 SQ01 から出土した弥生土器を中期前半の条痕文土器と考えたが、針塚遺跡以外周辺に同時期の遺跡がない。本遺跡から出土した理由は説明できないが、少数の破片資料にも着目し、分布状況を追跡したい。古墳時代後期の高杯破片については、周辺の遺跡分布状況から、古墳が存在した可能性を考えた。推定が正しければ、一切痕跡をとどめない状態にまで破壊されたものであろう。

平安時代の竪穴住居跡と遺物集中 竪穴住居跡 SB01 は平安時代 10 世紀代と推定される。松本市域では 10 世紀に平地の遺跡が減少する一方、山間地に 9 世紀末頃から 10 世紀にかけて小規模な遺跡が出現する状況が知られている（原 2014）。SB01 は当該期に山間地に現れる小規模遺跡の一例と考えられる。出土土器の器種は一般的な集落遺跡で認められるものと大差なく、仏具も出土していない。ただし、海岸寺観音

堂に伝わる木造千手観音立像が10世紀の作とされているから、SB01は年代に近い。この住居跡の存在は、平安時代に開発が及ぶ範囲と、海岸寺の領域や位置関係を考える上で参考になろう。市教委による幹線農道地点では平安時代土器は129点出土し、後期に位置すると考えられることから、遺構・遺物分布範囲は南に広がり、SB01より後出するものである。

遺物集中SQ01は平坦地24東半部、日照の悪い湧水地点付近にある。地形改変を受けながらも遺物出土範囲は狭く、復元個体が複数含まれているから、本来の遺構と近い位置にある。9世紀後半から10世紀後半までの土器があり、10世紀代を中心とする。80%以上を食膳具が占める組成は一般的な集落遺跡とは著しく異なる。正確な比較は困難ながら、牛伏寺堂平跡と若澤寺元寺場跡の平安時代土器の器種組成と通ずる。本遺跡では少数であるが、煤付着杯・碗の存在も共通する。おそらく特定の時期・機会に湧水信仰に関わる祈禱などの儀礼を、灯明具を用いて行った場と推定する。周辺から古代の整地面や建物跡は検出されず、寺院関連施設の存在は確認できないが、聖地の一角を占めていた可能性がある。

広がる中世遺構 中世の遺構は、平坦地29から14世紀前半頃の火葬施設、平坦地25から16世紀代の火葬施設と焼土跡群SF01～03、平坦地2から13世紀代の焼土跡SF04が検出された。15世紀代を挟んで前後2時期の遺構・遺物が調査範囲に広く分布している。火葬施設が検出されたものの、五輪塔や墓跡は確認できないため、埋葬地は別の地点であろうか。山間斜面における火葬施設の事例に注意したい。内耳鍋の分布は比較的広く、市教委調査の幹線農道地点でも67点出土している。桐原城跡の東区堅堀と近接して堅穴状遺構も検出されており、中世の旧海岸寺と桐原城の存続時期に、生活領域が広がっていたものと推定されている。

近世遺構と平坦地造成 平坦地25の盛土層下で検出したテラス状の整地面SB03で、18世紀後半から19世紀の陶器が出土し、造成の上限年代となる。側臥屈葬人骨が出土した3区のSK08は、造成後の埋土タイプで、埋葬姿勢から近世と推定された。この時期から調査地一帯は農地となり、現代に至っている。

平坦地に構築された石垣については、構造・石材・積方等の特徴から、その変遷について第3章「遺構」の石垣小結で詳述している。大要は、礫を多量に含んだ平坦地造成土層を背後に盛り、自然垂角礫を布目崩し積する直線的な石垣が前出、礫が少量の平坦地耕作土層を背後に盛り、玄能加工の割石を交えて谷積の影響がある積方による、隅がカーブした石垣が後出である。個々の石垣については、崩落部分の修築や後の付加的な構築、設置場所の条件等から、単純に新旧を指摘できないものが多い。本遺跡の石垣は、概ね近世後半以降の構築と判明したが、周辺の山間斜面の耕地は大部分が地元産出石材を用いた同様の石垣を伴い、地域の農地景観を構成している。今回の発掘調査以外に調査事例はなく、地域の近世・近代史を明らかにする上で活用されることが期待される。

今回の調査では、海岸寺につながる寺院関連遺構・遺物はみられなかったが、平安時代遺物から湧水地で営まれた儀礼行為の推定を試みた。平安末期、経塚が造営された弘法平には、海岸寺沢に通ずるせせらぎの傍らに石殿と石仏がたたずみ、今日も聖地の雰囲気漂う。調査地点周辺には水源地や貯水槽、昭和年号のある水神碑が点在し、小扇状地全体が文字通りみなもとの観がある。弘法平から人里近い調査地点まで、古代以来水に関わる聖地と意識されてきた土地柄ではなかったのかと、断想する。

発掘調査開始から報告書刊行まで3カ年、さまざまな問題に対応していただいた、長野県松本建設事務所、長野県教育委員会、松本市教育委員会、松本市入山辺支所の皆様に感謝申し上げます。また、円滑な発掘調査の推進に御協力いただいた、東桐原・西桐原地区をはじめとする入山辺地区の皆様、発掘作業・整理作業に従事された皆様、発掘調査から報告書刊行に至るまで貴重な御教示をいただいた皆様に御礼申し上げます。本書が海岸寺遺跡を記録保存する事業の成果品として、資料の公開・活用のよすがとなることを祈って擲筆します。

引用・参考文献

(編著者名五十音順)

1. 発掘調査報告書

- 塩尻市教育委員会 1990 『古屋敷遺跡』
- 塩尻市教育委員会 2002 『女夫山ノ神・牛壳沢・鳶ヶ沢遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター1987「大洞遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 1 -岡谷市内-』
- 長野県埋蔵文化財センター1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3 -塩尻市内その2 -吉田川西遺跡-』
- 長野県埋蔵文化財センター1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告遺書 4 -松本市内その1 -総論編』
- 長野県埋蔵文化財センター2013「海岸寺遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報 30』
- 長野県埋蔵文化財センター2014「海岸寺遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報 31』
- 波田町教育委員会 2002 『元寺場遺跡』
- 松本市教育委員会 1981 a 『県町遺跡』
- 松本市教育委員会 1981 b 『松本市横田・岡田遺跡』
- 松本市教育委員会 1982 『宮北遺跡』
- 松本市教育委員会 1983 『推定信濃国府』
- 松本市教育委員会 1984 『宮北遺跡』
- 松本市教育委員会 1985 a 『松本市赤木山遺跡群』
- 松本市教育委員会 1985 b 『推定信濃国府』
- 松本市教育委員会 1986 『推定信濃国府』
- 松本市教育委員会 1987 a 『松本市下原・埋橋遺跡』
- 松本市教育委員会 1987 b 『推定信濃国府』
- 松本市教育委員会 1988 『松本市林山越遺跡』
- 松本市教育委員会 1989 a 『松本市千鹿頭北遺跡』
- 松本市教育委員会 1989 b 『松本市神田遺跡』
- 松本市教育委員会 1989 c 『松本市向畑遺跡Ⅱ』
- 松本市教育委員会 1990 a 『大塚古墳・南方古墳・南方遺跡』
- 松本市教育委員会 1990 b 『松本市坪ノ内遺跡』
- 松本市教育委員会 1990 c 『松本市県町遺跡』
- 松本市教育委員会 1990 d 『松本市向畑遺跡Ⅲ』
- 松本市教育委員会 1991 a 『松本市弥生前遺跡』
- 松本市教育委員会 1991 b 『松本市生妻遺跡』
- 松本市教育委員会 1991 c 『松本市南中島遺跡』
- 松本市教育委員会 1991 d 『薄町・石上・鎌田遺跡』
- 松本市教育委員会 1992 a 『松本市堀の内遺跡』
- 松本市教育委員会 1992 b 『松本市大村塚田遺跡』
- 松本市教育委員会 1992 c 『松本市三才遺跡』
- 松本市教育委員会 1993 a 『松本市山影遺跡』
- 松本市教育委員会 1993 b 『埴原北・中山古屋敷・推定信濃諸牧牧監庁跡Ⅱ・小丸山古墳』
- 松本市教育委員会 1993 c 『松本市針塚遺跡Ⅱ』
- 松本市教育委員会 1993 d 『古屋敷遺跡・前田遺跡』

- 松本市教育委員会 1997 『県町遺跡X I』
 松本市教育委員会 1999 『兔川寺遺跡』
 松本市教育委員会 2000 『大輔原遺跡』
 松本市教育委員会 2003 a 『県町遺跡X II』
 松本市教育委員会 2003 b 『中山古墳群・鉾形原遺跡・鉾形原砦址』
 松本市教育委員会 2004 『中山古墳群・鉾形原遺跡・鉾形原砦址』
 松本市教育委員会 2006 『筑摩遺跡III』
 松本市教育委員会 2008 『中山古墳群 14・15 カニホリ東・西遺跡』
 松本市教育委員会 2009 『県町遺跡』
 松本市教育委員会 2010 a 『桐原城址・海岸寺遺跡』
 松本市教育委員会 2010 b 『小松下遺跡』
 松本市教育委員会 2012 『横田古屋敷遺跡』
 松本市教育委員会 2014 『県町遺跡』
 山形村教育委員会 2009 『清水寺遺跡II』

2. 地誌、論文、その他

- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』
 赤塩 仁・三上徹也 1994 「下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義」『中部高地の考古学IV』
 上田・小県誌刊行会 1995 『上田・小県誌第六巻歴史編上（一）考古』
 木下 守 2002 「弘法様」から探る旧海岸寺の姿『長野県民俗の会通信』171号
 桐原 健 1986 「古代山村にみられる生業の一端」『信濃』III・5-1
 関根慎二 2016 「群馬県における諸磯式と異型式土器の様相」『第29回縄文セミナー 縄文前期後半の型式間交渉の諸問題』
 田口昭二 1983 『美濃焼』ニュー・サイエンス社
 田淵実夫 1975 『石垣』法政大学出版局
 時枝 務 2014 『霊場の考古学』高志書院
 中島経夫 1994 「密教寺院の旧寺跡」『平出遺跡考古博物館ノート8 古代・中世の祈りの世界』
 長崎元廣 1997・1998 「中部地方の縄文前期末・中期初頭期における土器型式編年論の系譜と展望（1）（2）」『長野県考古学会会誌』83・84・85
 長野県 1936 「入山辺村」『長野県町村誌』南信篇（郷土出版社1985『長野県町村誌』中南信篇）
 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全1巻（1）遺跡地名表』
 長野県史刊行会 1983 「針塚遺跡」「弘法山古墳」「中山古墳群」「中山36号古墳」「埴原牧跡」「女鳥羽川遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻（3）主要遺跡（中・南信）』
 長野県史刊行会 1992 『長野県史 美術建築資料編 全1巻（1）美術工芸』
 長野県立歴史館 2010 『平成22年度秋季企画展 東の牛伏寺 西の若澤寺』
 原 明芳 2006 「松本平の古代末期の寺院考」『信濃』III・58-5
 原 明芳 2013 「第一章 原始・古代」『牛伏寺誌 歴史編』抜刷
 原 明芳 2014 「信濃国筑摩郡の変容、その主体者は誰かー平安時代後期を中心にー」『古代東国の考古学③ 古代の開発と地域の力』高志書院
 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1984 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二巻上』
 文化庁文化財部記念物課 2015 『石垣整備のてびき』同成社
 松本市 1994 『松本市史 第四巻旧市町村編IV』
 松本市 1996 『松本市史 第二巻歴史編I 原始・古代・中世』

三浦正幸 2005 『城のつくり方図典』小学館

綿田弘実 2009 「中部高地における縄文中期初頭土器群」『第22回縄文セミナー 中期初頭の再検討』・『同 記録集』

和田村村誌編纂委員会 1977 『和田村村誌』



弘法平の石殿・石仏



左側の愛宕大権現



右側の不動明王

付表1 遺構一覧表

*1 切り合い等により規模が不明確なものは()を付した。

遺構 番号	位 置			図版	PL	規 模 (cm)			平面形状	主軸	遺物	備考 (時期)
	地区	グリッド	標高			長軸	短軸	深さ				
住居跡												
SB01	3-2区	III B05・10	763	1	2	(380)	(400)	20	隅丸方形	N75° E	平安土器・陶器	平安
SB03	4区平坦地25	I Y01・06・07	782.84	2	8	886	(389)	55	方形?	0°	中近世土器	近世
焼土跡												
SF01	4区平坦地25	I Y01	782.36	3	8	25	23	—		N52° W		中世(戦国)
SF02	4区平坦地25	I Y01	782.01	3	8	28	22	—		N74° W		中世(戦国)
SF03	4区平坦地25	I Y01	781.96	3	8	39	38	—		N137° W		中世(戦国)
SF04	5区	II P23	796.35	4	7	144	70	3~4	不正楕円形	N63° E		中世
遺物集中												
SQ01	4区平坦地24	I Y13・14		5	7	(750)	(400)	—	半円形	N22° W	古代土器・陶器	平安
溝跡												
SD01	2区平坦地17	I O16・21	784.7	7	14	500	40~60	40~50		N30° W		近世
SD02	3-1区	I W23	768.78	7	4	440	40~80	30		N96° E		
SD03	1区平坦地11	I R19・20, S16	777.9	6	6	1180	90~145	50		N31° W		
SD04	1区平坦地9	I S12	780.89	7	5	138	38	10		N17° W		
SD05	1区平坦地9	I S12	780.65	7	5	128	36	10		N63° E		
SD06	1区平坦地9	I S12	780.74	7		120	44	20		N66° E		
SD07	1区平坦地9	I S11・12	780.59	7	5	(750)	50~60	10		N58° E		
SD09	4区平坦地24	I Y13・14	785.07	5	7	460	50	20		N23° E	土師器	平安
土坑												
SK01	3-1区	I W24-01・05	768.96	9	4	116	80	39	不整長方形	0°		
SK02	3-1区	I W23-04	768.79	9	4	(36)	52	36	楕円形	N25° W		
SK03	3-1区	I W23-03・04	768.67	9	4	(88)	90	23	楕円形	N30° W		
SK04	3-1区	I W23-08	768.63	9		40	30	16	不整楕円形	N80° W		
SK05	3-1区	I W23-07・11	768.25	9		46	36	34	楕円形	N5° E		
SK06	3-1区	I W22-08・23-09	767.44	9	4	(44)	80	21	不整形	N18° W		
SK07	3-4区	I V22-03	761.42	8	3	210	175	56	不整形	0°		
SK08	3-4区	I V17-15・22-03	761.05	8	3	160	120	57	不整形	N35° W	人骨	墓
SK09	3-2区	III C01-13	763.14	8	2	20	18	20	円形	0°		
SK10	3-2区	III C01-13	763.08	10	2	42	40	22	隅丸方形	N55° E		
SK11	3-2区	III B10-04	762.92	10	2	66	50	46	楕円形	N60° W	土師器	
SK12	3-2区	III B10-03	762.83	10	2	28	26	10	円形	0°		
SK13	3-2区	III B05-15	762.89	10	2	50	40	22	楕円形	N40° W		
SK14	3-2区	III B05-15	762.87	10	2	24	22	24	隅丸方形	0°		
SK15	3-2区	III B05-14・15	762.86	10	2	40	32	28	楕円形	N68° W		
SK16	3-2区	III B05-16	762.94	10	2	32	30	18	円形	0°		
SK17	3-2区	III B05-15・16、 10-03・04	762.95	10	2	104	72	44	長方形	N60° W	土師器	平安
SK18	1区平坦地11	I S21-01・02	777.25	11	4	150	146	28	円形	0°		
SK19	1区平坦地11	I S16-13・14	777.46	11	4	94	76	41	長方形	N35° W		
SK20	1区平坦地11	I S16-09・13	777.52	11		110	60	19	不整形	N80° W		
SK21	1区平坦地11	I S16-10	777.92	11		86	66	25	不整長方形	N65° E		
SK22	1区平坦地11	I S11-13・16-01	778.01	11		100	76	24	楕円形	N15° E		
SK23	1区平坦地11	I R15-16, S11- 13	777.88	11		126	100	37	長方形	N38° E		
SK24	1区平坦地11	I R20-04	777.53	11		76	76	39	不整形	N25° W	土師器	
SK25	1区平坦地11	I R20-07・08	777.28	11		60	40	21	不整楕円形	N23° W	土師器	
SK26	1区平坦地11	I R25-06・07	776.30	11	6	100	82	28	楕円形	N35° W		
SK27	1区平坦地11	I R25-06	776.06	12	6	60	50	16	楕円形	N35° W		
SK28	1区平坦地11	I R25-06	775.93	12		32	30	11	隅丸方形	0°		
SK29	1区平坦地11	I R24-08	775.56	12		34	22	22	楕円形	N55° W		
SK30	1区平坦地11	I R24-12	775.46	12		90	66	28	長方形	N40° W		
SK32	1区平坦地11	I R24-07・08・11・12	775.42	12		98	(76)	24	楕円形	N55° E	須恵器	
SK33	1区平坦地11	I R24-09・10・13・14	774.85	12	6	104	(80)	43	楕円形	N53° E		
SK34	1区平坦地11	I R19-10・14	775.32	12		78	72	31	隅丸方形	N12° E		
SK35	1区平坦地11	I R19-15	775.32	12		28	28	15	方形	0°		
SK36	1区平坦地11	I R19-15, R24-03	775.32	12		76	54	16	隅丸方形	N40° E		
SK37	1区平坦地11	I R19-14・24-02	775.16	12		34	26	18	楕円形	N35° W		
SK38	1区平坦地11	I R19-13	775.04	13		42	32	19	楕円形	N65° E		
SK39	1区平坦地11	I R24-01	774.94	13		30	28	10	隅丸方形	0°		
SK40	1区平坦地11	I R24-01・02	774.14	13	6	124	106	43	不整楕円形	N5° W		
SK41	1区平坦地11	I R19-13・24-01	774.96	13	6	90	72	54	不整長方形	N55° E		
SK42	1区平坦地11	I R24-01	774.94	13	6	76	68	29	方形	N15° W		
SK44	1区平坦地11	I R24-02・06	775.13	13		40	26	5	隅丸長方形	N45° E		
SK45	1区平坦地11	I R20-13・14	776.28	13	6	90	80	36	楕円形	N10° E		

遺構 番号	位 置			図版	PL	規 模 (cm)			平面形状	主軸	遺物	備考 (時期)
	地区	グリッド	標高			長軸	短軸	深さ				
土坑												
SK46	1区平坦地11	I R20-13	775.93	13		34	26	10	楕円形	N35° W		
SK47	1区平坦地11	I R20-09・13	776.21	13		56	40	12	長方形	N27° W		
SK48	1区平坦地9	I S17-04・18-01	780.78	14	5	152	110	34	楕円形	N45° E	土師器	
SK49	1区平坦地9	I S12-16	780.92	14	5	86	70	19	不整楕円形	N15° E		
SK50	1区平坦地9	I S12-11・12	780.90	14	5	150	96	55	長方形	N70° E		
SK51	1区平坦地9	I S12-11	780.55	14	5	40	34	23	楕円形	N30° W		
SK52	1区平坦地9	I S12-10・14	780.39	14	5	120	112	40	不整形	N20° W		
SK53	1区平坦地9	I S12-14・15, 17-02・03	780.30	14	5	160	114	36	楕円形	N60° E		
SK54	1区平坦地9	I S12-02	780.75	14	5	44	40	22	隅丸方形	N15° W		
SK55	1区平坦地9	I S12-05・06	780.42	14	5	40	40	16	円形	0°		
SK56	1区平坦地9	I S11-07・11	77940	14	5	120	108	52	楕円形	0°		
SK57	1区平坦地9	I S17-02	780.08	14	5	88	72	24	楕円形	N43° E		
SK58	3-4区	III V17-15・22-03	761.40	8		59	43	40	楕円形	N12° E		
SK59	4区平坦地29	III D09-01・05	772.72	15	9	105	93	15	不整形	N35° W	銭貨×2	中世(鎌倉) 火葬施設
SK60	4区平坦地26	I Y16-09・13	778.29	15		124	(68)	27	楕円形	N32° W		
SK61	4区平坦地26	I Y16-13	778.26	15	9	(44)	38	24	方形	N85° E		
SK62	4区平坦地29	III D08-04	772.66	15		60	48	12	楕円形	N42° E		
SK63	4区平坦地29	III D04-14	772.72	15		28	24	14	楕円形	N35° W		
SK64	4区平坦地29	III D04-14	772.72	15		22	18	20	楕円形	N46° W		
SK65	4区平坦地29	III D09-01	772.70	15		20	20	10	方形	0°		
SK66	4区平坦地29	III D09-01	772.72	15		32	22	18	楕円形	N35° W		
SK67	4区平坦地25	I Y12-14	781.62	16	9	20	20	16	円形	0°		
SK68	4区平坦地25	I Y12-14・15	781.62	16	9	22	20	14	円形	0°		
SK69	4区平坦地25	I Y12-14・15	781.70	16	9	28	28	12	円形	0°		
SK70	4区平坦地25	I Y17-03	781.73	16	9	24	22	13	楕円形	N43° E		
SK71	4区平坦地25	I Y17-02・03	781.65	16	9	26	22	13	楕円形	N3° W		
SK72	4区平坦地25	I Y17-02	781.69	16	9	22	22	14	円形	0°		
SK73	4区平坦地25	I Y17-03	781.83	16	9	22	18	17	楕円形	N87° W		
SK74	4区平坦地25	I Y17-03・04	782.09	16	9	32	24	19	楕円形	N25° E		
SK75	4区平坦地25	I Y17-03	781.91	16	9	24	24	11	円形	0°		
SK76	4区平坦地25	I Y17-02	781.66	16	9	22	22	11	円形	0°		
SK77	4区平坦地25	I Y17-07	781.90	16	9	40	28	7	楕円形	N45° E		
SK78	4区平坦地25	I Y17-07	781.91	16	9	32	28	8	楕円形	N47° W		
SK79	4区平坦地25	III E02-08	781.84	16	9	122	100	27	楕円形	N3° W		中世(戦国) 火葬施設

石垣 ※2 積方：現在見えている積方で面積の多い順に◎、○、△の記号で分類した。

遺構 番号	名称	グリッド	図版	PL	規 模 (m)			石 材		積 方		備 考
					長さ	高さ	角度	直角礫	割石	布目崩し積	谷積	
SH01	平坦地5東面石垣	I T01・06・07	17	10	10	1.7	85°	長方形、立方体多	13.3%	◎		
SH02	平坦地5南面石垣	I T06・07	17	10	5	1.1	62°	不整形多	16.0%		◎	
SH03	平坦地6東面石垣	I S09・10・15、T11	18	10	16.5	最大1.6	78~82°	長方形、立方体多	8.5%	△		
SH04	平坦地7東面石垣	I S14・19・20	18	11	20	0.8~1.4	82°	長方形多	10.8%	◎		
SH05	平坦地8東面石垣	I S18・20・23・24・25	19	11	15.4	0.8~1.0	92°	長方形多	6.9%	◎		
SH06	平坦地10東面石垣	I S22、X02・03	19	11	15.6	0.8~1.0	85°	長方形、立方体多	5.5%	◎		
SH07	平坦地11東面石垣	I S11・16・21			(11)	不明	不明	長方形、不整形多		△		
SH08	平坦地12東面石垣	I W05、X01・06・07・12・13	20	12	23.4	最大1.2	80°	不整形、板状多	8.1%	◎		
SH09	平坦地13東面石垣	I W10、X06・11	20	12	16.5	1.4	80°	長方形、立方体	24.9%	△	◎	二段
SH10	平坦地14東面・南面石垣	I 005、II K01・06	21	13	7.4(東面) 5.8(南面)	1.2~1.6(東面) 0.6~1.6(南面)	77°(東面) 82°(南面)	正方形多	やや多	○	○	
SH11	平坦地14沢側東面石垣	I 004・09・10	22	13	3.5	0.8	74°	三角、台形、長方形	やや多			
SH12	平坦地14沢側北面石垣	I 009・10	22	13	9.2	最大1.3	78~85°	長方形	少	△		
SH13	平坦地15東面石垣	I 008・09・14	21	13	9.6	最大2.9(上段1.1、下段1.8)	82°	長方形、不整形	24.9%	◎	○	二段
SH14	平坦地15沢側北面石垣	I 012・13	22	13	5	1.2	-	長方形、立方体、三角柱多	少	△		

遺構 番号	名称	グリッド	図版	PL	規 模 (m)			石 材		積 方		備 考
					長さ	高さ	角度	亜角礫	割石	布目崩 し積	谷積	
石垣												
SH15	平坦地16東面 石垣	I 012・13・17・18	23		7.5(上段7.5、 下段4.6)	最大2.5(上段 1.2、下段1.3)	90°	長方体、立方体 多	8.9%	◎		
SH16	平坦地16沢面 突出部北面石 垣	I 012	22		3.6	0.6	40°		なし	△		
SH17	平坦地16沢面突 出部西面石垣	I 012	22	13	3.8	0.8	62~80°	長方体多	少	○		
SH18	平坦地16沢面突 出部南面石垣	I 012	22		3	0.8~1.2	78°		少			
SH19	平坦地16沢面 北石垣	I 016・17	24	13	14	0.2~2	70~90°	三角柱、長方 体、立方体	わずか	◎		
SH20	平坦地16沢面 東石垣	I N20、016	24		1.8	0.6~0.8	90°		40%			
SH21	平坦地17東面 石垣	I 016・21	23	14	6.2	2.1	76°	長方体、立方体	11%	◎		
SH22	平坦地18東面 石垣	I N25	23		9.1	2.2	78~82°	長方形多	7.7%	◎	△	
SH23	平坦地18北面 石垣	I N20	24		3.2	最大1.7	78°	立方体多	10%未満	○		
SH24 (1)	平坦地18沢面 東石垣	I N19・20	24	14	5	0.6~0.8	78°	不整形多	13.0%		◎	
SH24 (2)	平坦地18沢面 西石垣	I N19・24	24	14	5.5	0.8~1.6	80°	長方体、立方 体、台形柱多	11.4%	◎		
SH25	平坦地19東面 石垣	I N24、S04	25	14	8.2	1.4	76~81°	立方体、三角柱 多	8.7%	○		
SH26	平坦地19沢面 西上段石垣	I N23	25		4.2	最大1.5	72°	不整形多	1.9%		◎	二段
SH27	平坦地19沢面 西下段石垣	I S02・03	25		5	1.9	-	板状多	7.95%	○	◎	二段
SH28	平坦地20沢面 東石垣	I S02	25		5.2	0.4~0.8	90°	不整形多	6.7%	◎		
SH29	平坦地20沢面 西石垣	I S01	25		1.8	0.8	不明	不整形多	7.8%	○		
SH30	平坦地21沢面 石垣	I R10	25		5.4	1	不明	長方体、不整形石 多	8.6%	△	○	
SH31	平坦地21東面 石垣	I S01・06・07	25	15	1.8	0.4	77°	不整形多	わずか		○	
SH32	平坦地21南面 石垣	I R01・S06・07	25	15	8.2	最大1.4	80°	不整形多	2.9%	○		
SH36	平坦地1東面石 垣	II K23・24	26	16	12	2.7(上段 1.0、下段 1.4)	上段 73° 下 段70°					二段
SH37	平坦地2東面石 垣	II P13・18・23、U03・04	26	16	25	1.3~1.9	72~85°	不整形多	あり			
SH38	平坦地24東面 石垣	I T12・17・18・23、 Y03・04・09・14・15	27	16	45	4.05~4.4(上 段1.4~2.3、 下段1.8~ 2.4)	上段74 ~82° 下段78 ~82°	長方形多	あり	○	◎	二段
SH39	平坦地25東面 石垣	I T16・21・22、Y02・ 07・12・13・18・23、III E03	28	17	60	1.8~1.85	75~90°	長方形、不整形 多	あり	○	◎	
SH40	平坦地26東面 石垣	I X04・05・10、Y06・ 11・16・17・21・22	28	17	41	3.7~3.9(上 段1.3~2.0、 下段1.5~ 2.4)	上段73 ~80° 下段76 ~78°	板状、不整形多	あり	○	◎	二段
SH41	平坦地27東面 石垣	I X08・09・13・14・19・ 20	29	18	17	2.5	72°	板状、不整形多	あり	○		
SH42	平坦地28東面 石垣	I X13・18・19・24・25、 III D05	29	18	27	0.8~1.2	76~85°		あり	◎		
SH43	平坦地29東 面・南面石垣	I X23・24、III D04・05・ 10・14・15・19	29	18	東面22、南面14	1.7~1.8	70~72°	板状多	あり			

付表2 掲載遺物観察表

図版 No.	PL No.	管理 No.	地区	遺構・地点・層位	時期	種類	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	最大径	重量	g	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
34-1	20-1	119	4	SQ01・IV14-08・3層	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	51.2	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR5/6明褐	白色粒子少量、砂粒多量(粗粒)	良	諸磯C	
34-2	20-1	121	4	SQ01・IV13-12・トレ・3層	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	12.9	10YR5/4にぶい黄褐	7.5YR6/6橙	石英、白色粒子・砂粒少量	良	諸磯C	
34-3	20-1	124	4	SQ01・IV14-05・レキ	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	11.1	7.5YR5/4にぶい黄褐	7.5YR5/6明褐	石英少量、砂粒多量	良	諸磯C	
34-4	20-1	120	4	SQ01・IV14-08・3層	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	18.3	10YR5/4にぶい黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	石英・白色粒子・砂粒多量	良	諸磯C	
34-5	20-1	123	4	SQ01・IV14-08・3層	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	6.2	7.5YR5/4にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	石英、白色粒子・赤色粒子・砂粒少量	良	諸磯C	
34-6	20-1	122	4	平坦地24・IV13-07・トレ・レキ	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	11.1	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	石英少量、砂粒多量	良	諸磯C	
34-7	20-1	126	4	SQ01・Aトレ・No.1	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	12.8	7.5YR4/4褐	7.5YR5/4にぶい黄	白色粒子・赤色粒子微量、砂粒多量、細礫～粗粒砂	良	諸磯C	
34-8	20-1	125	4	平坦地24・IV13-07・トレ・レキ	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	6.4	10YR4/2灰黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	石英・白色粒子・赤色粒子微量、砂粒少量	良	諸磯C	
34-9	20-1	127	4	SQ01・IV14-05・レキ	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	5.9	7.5YR4/3褐	10YR5/4にぶい黄橙	石英少量、白色粒子多量	良	諸磯C	
34-10	20-1	128	4	SQ01・No.11・No.19・Aトレ・No.2	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	10%以下	-	-	(5.3)	(23.4)	93.8	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	砂粒多量(灰・白色粗～中粒)	やや不良	諸磯C、粗製	
34-11	20-1	133	5	平坦地2・No.4	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%	-	-	-	-	9.5	7.5YR5/4にぶい黄	7.5YR6/6橙	(粗粒)砂粒・白色粒子多量、赤褐色粒子少量	良	諸磯C	
34-12	20-1	129	4	SQ01・IV14-08・3層	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	17.0	7.5YR5/8明褐	7.5YR5/4にぶい黄	石英・砂粒多量	良	諸磯C	
34-13	20-1	135	4	SQ01・No.5・IV14-08・3層	弥生中期	弥生土器	甕	胴部	5%	-	-	-	-	6.9	7.5YR4/3褐	7.5YR4/6褐	石英・白色粒子多量	良	諸磯C	
34-14	20-1	135	4	SQ01・No.5・IV14-08・3層	弥生中期	弥生土器	甕	胴部	5%	-	-	-	-	6.9	7.5YR4/3褐	7.5YR4/6褐	石英・白色粒子多量	良	諸磯C	
34-15	20-1	32	1	平坦地7・トレ・3層	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部(上)	5%以下	-	-	-	-	18.8	7.5YR6/6橙	7.5YR5/6明褐	砂粒・白色粒子多量(粗粒砂)	良	諸磯C	
34-16	20-1	33	1	平坦地7・トレ・3層	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	10.5	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	砂粒・白色粒子多量	良	諸磯C	
34-17	20-2	34	3-2	SB01・黒土	縄文前期	深鉢	深鉢	口縁部	5%以下	-	-	-	-	12.3	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい黄	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-18	20-2	35	3-2	SB01・黒土	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	11.8	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	砂粒・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-19	20-2	36	3-2	SB01・黒土	縄文前期	深鉢	深鉢	口縁部	5%以下	-	-	-	-	6.9	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	白色粒子多量、砂粒少量	良	晴ヶ峯	
34-20	20-2	37	3-2	SB01・黒土	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	24.9	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	砂粒・白色粒子多量(中～細粒)	良	晴ヶ峯	
34-21	20-2	38	3-2	SB01・黒土	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	15.7	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	砂粒・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-22	20-2	39	3-2	SB01・黒土	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	19.8	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-23	20-2	40	3-2	SB01・ベルト・3層	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	13.6	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-24	20-2	41	3-2	SB01・黒土	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	8.9	7.5YR7/4にぶい黄	7.5YR7/4にぶい黄	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-25	20-2	42	3-2	SB01・黒土	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	17.0	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	砂粒・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-26	20-2	45	3-2	SB01・黒土	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	20.8	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	砂粒・赤褐色粒子多量、白色粒子少量	良	晴ヶ峯	
34-27	20-2	44	3-2	SB01・黒土	縄文前期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	8.3	7.5YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量	良	晴ヶ峯	
34-28	20-2	46	3-2	SB01・黒土・検出面	縄文	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	37.4	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	(粗粒)白色粒子微量・赤色粒子・砂粒多量	良	諸磯C	
34-29	20-2	48	3-2	SB01・黒土	縄文	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	11.7	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	白色粒子微量、砂粒多量	良	諸磯C	
34-30	20-2	47	3-2	SB01・黒土	縄文	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	15.6	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	赤褐色粒子少量、砂粒多量(粗粒)	良	諸磯C	
34-31	20-2	46	3-2	SB01・黒土・検出面	縄文	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	37.4	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	(粗粒)白色粒子微量・赤色粒子・砂粒多量	良	諸磯C	
34-32	20-2	43	3-2	SB01・黒土・埋土	縄文中期	深鉢	深鉢	胴部	5%以下	-	-	-	-	63.6	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量	良	加曾利EIV	
35-1	21	3	3-2	SB01・検出面	平安	土師器	杯	口縁部～底部	40%	(11.5)	5.4	3.1	-	39.1	7.5YR6/4にぶい黄	7.5YR6/4にぶい黄	砂粒・赤褐色粒子多量、白色粒子少量	良	諸磯C	

図版 No.	PL No.	管理 No.	地区	遺構・地点・層位	時期	種類	器種	部位	残存率	推定：<>現在値：()法量：cm				重量：g	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
										口径	底径	器高	最大径						
35-2	22-1	6	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	坏A	口縁部～底部	20%	<10.8>	<5.0>	3.1	-	22.4	10YR7/1灰白 7.5YR8/4浅黄橙	10YR6/1褐灰	赤褐色粒子多量、石英・砂粒・白色粒子少量	良	
35-3	21	1	3-2	SB01・No.2	平安	土師器	坏A	口縁部～底部	95%	13.0	6.0	3.5	-	117.9	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	赤褐色粒子多量、白色粗粒	良	
35-4	21	2	3-2	SB01・No.4	平安	土師器	坏A	口縁部～底部	40%	<12.6>	<6.5>	3.0	-	42.0	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	赤褐色粒子多量、砂粒・白色粒子少量	良	
35-5	22-1	49	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	坏	底部	5%	-	<5.0>	(0.7)	-	10.5	10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	赤褐色粒子多量	良	
35-6	22-1	4	3-2	SB01・No.4	平安	土師器	坏A	底部	10%	-	(6.1)	1.5	-	25.5	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子(粗)多量	良	
35-7	22-1	5	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	坏A	底部	10%	-	5.8	(0.9)	-	16.6	7.5YR8/6浅黄橙	5YR7/6橙	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量	不良	
35-8	21	7	3-2	SB01・No.1・埋土	平安	土師器	盤B I	口縁部～底部	80%	14.8	8.9	5.9	-	235.6	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/4浅黄橙	砂粒少量、石英・白色粒子少量	不良	
35-9	22-1	10	3-2	SB01・埋土	平安	土師器	碗	底部	10%	-	<6.8>	(2.1)	-	28.4	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	砂粒・粗白色粒子多量、赤褐色粒子少量	普通	
35-10	22-1	52	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	碗	底部	5%	-	-	(1.9)	-	11.5	5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	砂粒・赤褐色粒子・多量(粗)	普通	
35-11	22-1	9	3-2	SB01・No.1	平安	土師器	碗	底部	10%	-	<7.9>	(2.1)	-	24.5	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	赤褐色粒子多量	良	
35-12	22-1	51	3-2	SB01・検出面	平安	土師器	碗	底部	5%	-	<5.2>	(1.6)	-	28.9	5YR7/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	赤褐色粒子やや多量	良	
35-13	22-1	50	3-2	SB01・No.1	平安	土師器	黑色土器A 坏	底部	5%	-	<5.0>	(1.9)	-	14.6	10YR8/3浅黄橙	10YR2/1黒	赤褐色粒子少量	良	
35-14	21	8	3-2	SB01・No.7	平安	土師器	黑色土器A 碗	口縁部～底部	20%	<14.0>	<6.7>	4.5	-	53.0	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR2/1黒	赤褐色粒子多量、白色粒子多量	良	
35-15	22-1	53	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	黑色土器A 碗	底部	5%	-	<7.0>	(1.7)	-	14.3	10YR7/3にぶい黄橙	10YR2/1黒	赤褐色粒子・白色粒子多量	良	
35-16	21	11	3-2	SB01・No.4・黒土	平安	土師器	鉢	口縁部～底部	50%	<18.9>	<7.8>	7.4	-	349.1	10YR4/2灰黄褐	10YR7/2にぶい黄灰 10YR5/2灰黄褐	砂粒・赤褐色粒子多量、石英・白色粒子少量	良	
35-17	21	12	3-2	SB01・No.3・No.1層	平安	灰釉陶器	碗	口縁部～底部	50%	<15.0>	7.4	4.7	-	175.9	5YR8/1灰白(釉)	2.5Y7/1灰白	白色粒子少量	良	
35-18	21	13	3-2	SB01・黒土	平安	灰釉陶器	皿B	胴部～底部	20%	-	<6.9>	2.6	-	46.9	2.5Y7/1灰白	2.5Y8/1灰白	-	良	
35-19	22-1	16	3-2	SB01・黒土	平安	灰釉陶器	皿	口縁部～胴部	10%	<12.8>	-	(2.1)	-	9.7	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	良	
35-20	22-1	14	3-2	SB01・黒土	平安	灰釉陶器	皿	底部	20%	-	<6.4>	(1.9)	-	30.8	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	良	
35-21	22-1	15	3-2	SB01・黒土	平安	灰釉陶器	皿	胴部～底部	10%	-	<6.0>	(1.3)	-	18.1	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	砂粒・赤褐色粒子微量	良	
35-22	22-1	21	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	小型甕	口縁部	5%	<10.0>	-	(2.6)	-	7.2	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR4/1褐灰	砂粒少量、褐色粒子少量	良	
35-23	22-1	20	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	小型甕	口縁部	5%	<10.0>	-	(2.8)	-	8.0	7.5YR5/3にぶい褐	5YR3/3暗赤褐	赤褐色粒子多量	良	
35-24	22-1	19	3-2	SB01・黒土	平安	土師器	小型甕	胴部	10%	-	-	(7.8)	-	42.4	7.5YR7/6橙	7.5YR8/4浅黄橙	砂粒少量、赤褐色粒子多量、白色粒子微量	良	
35-25	22-1	17	3-2	SB01・No.4・黒土	平安	土師器	甕	胴部～底部	20%	-	<8.4>	(5.6)	-	62.8	5YR7/6橙	7.5YR8/4浅黄橙	砂粒・赤褐色粒子多量、白色粒子微量	良	
35-26	22-1	18	3-2	SB01・黒土・埋土・検出面・SK17・1層	平安	土師器	羽釜	胴部～底部	20%	-	<10.7>	(17.5)	-	492.6	7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR3/2黒褐	7.5YR5/3にぶい褐 7.5YR7/4にぶい橙	砂粒・白色粒子多量、赤褐色粒子少量	良	
35-27	21	22	3-2	SB01・No.5・No.6・黒土	平安	須臾器	長頸壺	胴部	30%	-	-	(12.7)	(18.0)	282.8	N6/灰	N6/灰	白色粒子多量、砂粒微量	良	
35-28	22-1	23	3-2	SB01・黒土・埋土	平安	灰釉陶器	長頸壺	胴部	10%	-	-	(7.4)	(14.6)	49.9	5Y5/2灰白-7(釉)	2.5Y7/1灰白	-	良	
35-29	21	26	3-2	SK17・1層	平安	土師器	坏A II	口縁部～底部	80%	13.2	5.8	4.0	-	111.7	5YR7/6橙	5YR7/6橙	白色粒子少量、赤褐色粒子多量、砂粒少量	良	
35-30	21	27	3-2	SK17・1層	平安	土師器	坏	口縁部～底部	50%	(12.6)	5.4	3.6	-	58.9	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	石英、白色粒子微量、赤褐色粒子多量、砂粒やや多量	良	
35-31	23-2	25	3-2	SK11	平安	土師器	鉢?	胴部～底部	10%	-	<7.7>	(2.5)	-	29.1	2.5Y6/2灰黄	7.5YR6/4にぶい橙	石英微量、白色粒子微量、赤褐色粒子少量	良	
35-32	23-2	31	3-2	トキ1	中世	土師器	内耳鍋	口縁部～胴部	10%	(31.8)	(22.7)	(15.9)	-	237.4	10YR7/4にぶい黄橙	7.5YR橙	砂粒(粗～中)・赤褐色粒子・白色粒子多量	良	
35-33	23-2	30	3-2	検出面	古墳	高坏	高坏	胴部・裾部	5%	-	-	-	-	7.2	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	白色細粒子多量	普通	
35-34	23-2	28	1	SD03	古墳	高坏	高坏	脚部	5%	-	<5.8>	(3.9)	-	25.1	5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	白色粒子少量、細粒砂少量	良	
35-35	23-2	29	1	平垣地7・トクテ・4層	平安	かわらけ(京都系)	かわらけ	口縁部～胴部	10%	<14.0>	-	(3.8)	-	29.0	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐	赤褐色粒子(粗)多量、細粒砂やや多量	良	

図版 No.	PL No.	管理 No.	地区	遺構・地点・層位	時期	種類	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	最大径	重量	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
35-36	24-2-3	54	1	平垣地9・耕土	近世?	陶器		底部	5%	-	<8.9>	(2.4)	-	52.4	7.5YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR4/3褐色	砂粒少量	良	
35-37	23-2	24	3-2	SB01(3-2区抜い)・黒土	中世	内耳鍋		口縁部	5%	<31.3>	-	(4.5)	-	28.2	10YR7/3にぶい黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	砂粒少量、白色粒子・石英少量、赤褐色粒子微量	良	
36-38	22-2	89	4	SQ01・平垣地24・IV13 ^外 ・外 礫・平垣地24・IV13-04レキ	平安	土師器	坏	口縁部・底部	5%	<9.6>	4.0	(3.1)	-	22.0	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	白色粒子多量、細～中粒砂やや多量	良	
36-39	22-2	76	4	SQ01・No.23	平安	土師器	坏A	口縁部～底部	20%	<9.8>	<6.0>	2.6	-	15.8	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/3にぶい黄褐色	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子(粗)多量	良	
36-40	22-2	94	4	IV13-16・平垣地24・IV13-16 1・2層	平安	土師器	坏	口縁部	10%	<9.8>	-	(1.8)	-	6.1	7.5YR7/8黄褐色	7.5YR6/6褐色	砂粒・白色粒子多量	良	
36-41	22-2	92	4	平垣地24・IV13-16 1・2層	平安	土師器	坏A	口縁部	5%	<11.8>	-	(2.0)	-	6.5	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	赤褐色粒子多量、白色粒子少量	良	
36-42	22-2	91	4	平垣地24・IV13-07・ト レ・レキ	平安	土師器	坏	口縁部	20%	<10.5>	-	(1.9)	-	10.2	10YR7/6明黄褐色	10YR7/6明黄褐色	砂粒・白色粒子多量、赤褐色粒子微量	やや不良	
36-43	21	71	4	SQ01・No.6	平安	土師器	坏A	口縁部～底部	25%	<10.5>	<4.7>	2.8	-	46.4	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	石英微量、白色粒子・赤褐色粒子少量、砂粒多量、6mm大赤褐色砂粒混	良	
36-44	22-2	104	4	平垣地24・IV13-03・ト レ・レキ	平安	土師器	碗	口縁部	5%	<12.6>	-	(2.6)	-	7.5	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子・石英少量	良	
36-45	22-2	100	4	平垣地24・IV13-03	平安	土師器	坏	口縁部	10%	<13.0>	-	(2.5)	-	4.1	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/6褐色	白色粒子少量、砂粒・赤褐色粒子微量	良	
36-46	22-2	97	4	平垣地24・IV13-7・ト レ・レキ	平安	土師器	坏	口縁部	10%	<13.6>	<7.0>	(3.2)	-	15.4	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	砂粒(中～細)・赤褐色粒子多量、白色粒子・石英少量	良	
36-47	22-2	70	4	SQ01・No.3	平安	土師器	坏	底部	20%	-	4.9	(1.7)	-	39.6	5YR6/8褐色	5YR6/8褐色	石英少量、白色粒子・砂粒やや多量	良	
36-48	22-2	75	4	SQ01・No.23	平安	土師器	坏A	胴部～底部	20%	-	4.8	(1.9)	-	27.2	10YR8/3浅黄褐色	10YR8/4浅黄褐色	赤褐色粒子やや多量、砂粒・白色粒子少量	良	
36-49	22-2	103	4	平垣地24・IV13-07・ト レ・レキ	平安	土師器	坏	底部	5%	<4.8>	<4.8>	(0.8)	-	4.3	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	砂粒多量(中～細粒)	良	
36-50	22-2	93	4	平垣地24・IV14-01・レキ	平安	土師器	坏	底部	10%	<5.1>	<0.9>	(0.9)	-	11.8	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	砂粒・赤褐色粒子多量、白色粒子・石英少量	良	
36-51	22-2	74	4	SQ01・No.21	平安	土師器	坏	胴部～底部	5%	<4.0>	<4.0>	(3.0)	-	7.4	5YR6/6褐色	10YR6/6褐色	白色粒子(粗)やや多量、砂粒多量	良	
36-52	22-2	72	4	SQ01・No.8	平安	土師器	坏	底部	5%	<4.2>	<4.2>	(0.9)	-	10.0	10YR7/8黄褐色	7.5YR6/6褐色	白色粒子・砂粒やや多量(中～粗粒)	良	
36-53	22-2	73	4	SQ01・No.14	平安	土師器	坏	底部	20%	-	3.9	(1.4)	-	34.6	5YR6/8褐色	7.5YR6/6褐色	石英少量、白色粒子やや多量、砂粒多量(中～細)	良	
36-54	22-2	95	4	平垣地24・IV13-03・1層	平安	土師器	坏A	底部	20%	-	4.8	(1.6)	-	59.4	7.5YR6/6褐色	7.5YR6/6褐色	赤褐色粒子・ハツク色粒子・石英多量	良	
36-55	22-2	98	4	平垣地24・IV13-07	平安	土師器	坏	底部	10%	<5.0>	<1.2>	(1.2)	-	20.2	10YR7/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	砂粒・白色粒子多量	良	
36-56	22-2	102	4	平垣地24・IV13-07	平安	土師器	坏	底部	10%	<4.8>	<4.8>	(1.2)	-	13.5	7.5YR7/4にぶい黄褐色	7.5YR5/3にぶい黄褐色	砂粒・白色粒子少量(細粒)	良	
36-57	22-2	88	4	平垣地24・IV13-08・レキ	平安	土師器	坏	胴部～底部	15%	<4.8>	<4.8>	(1.3)	-	19.1	7.5YR7/8黄褐色	7.5YR6/6褐色	砂粒(細)・白色粒子多量	良	
36-58	22-2	99	4	平垣地24・IV13-03・ト レ・レキ	平安	土師器	坏	底部	10%	<4.8>	<4.8>	(1.8)	-	8.0	5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	赤褐色粒子(中)・白色粒子(細)多量	良	
36-59	22-2	105	4	平垣地24・IV16-22・ト レ	平安	土師器	坏	底部	10%	<5.0>	<5.0>	(0.9)	-	15.6	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	砂粒・白色粒子多量、赤褐色粒子少量、石英微量	良	
36-60	22-2	108	4	平垣地24・IV13-09・1層	平安	土師器	皿	口縁部	5%	<15.7>	-	(1.8)	-	13.6	5YR6/6褐色	7.5YR5/3にぶい黄褐色	砂粒・白色粒子(粗)・石英多量	良	
36-61	22-2	101	4	平垣地24・IV13-03・レキ	平安	土師器	坏	口縁部	5%	<12.9>	-	(2.3)	-	6.9	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/6褐色	赤褐色粒子多量、白色粒子・砂粒・石英少量	良	
36-62	21	86	4	SQ01・No.25・平垣地24・IV13-07・ト レ・レキ	平安	灰釉陶器	碗	口縁部～底部	25%	-	8.9	(5.4)	-	64.3	5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	良	
36-63	23-1	81	4	SQ01・No.2	平安	土師器	盤	底部	5%	-	-	(2.4)	-	53.1	7.5YR6/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄褐色	石英・白色粒子・赤褐色粒子少量、砂粒多量	良	

図版 No.	PL No.	管理 No.	地区	遺構・地点・層位	時期	種類	器種	部位	残存率	推定：< >現在値：()法量：cm				重量：g	外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
										口径	底径	器高	最大径						
36-64	23-1	106	4	平坦地24・IY13-04・1・2層	平安	土師器	碗	底部	15%	-	-	(1.6)	-	5YR6/6橙	5YR6/6橙	砂粒・白色粒子・赤褐色粒子多量	良		
36-65	23-1	78	4	SQ01・No.5	平安	土師器	碗	底部	20%	-	6.9	(2.2)	-	7.5YR7/6橙	10YR7/6明黄褐	砂粒・赤褐色粒子・白色粒子多量・石英少量	良		
36-66	23-1	107	4	平坦地24・IY13-07・ト レ・レキ	平安	土師器	碗	底部	15%	-	-	(1.9)	-	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	砂粒・白色粒子・赤褐色粒子少量(粗粒)	良		
36-67	23-1	79	4	SQ01・No.18	平安	土師器	碗	底部	5%	-	7.9	(2.4)	-	5YR6/6橙	5YR6/6橙	石英・赤褐色粒子少量、白色粒子やや多量	良		
36-68	21	84	4	SQ01・No.2・No.4・No.17・ 平坦地24・IY08・サフ	平安	黒色土器A	杯A	口縁～底部	50%	16.0	6.1	4.8	-	7.5YR4/6褐	7.5YR2/1黒	砂粒多量	良		
36-69	23-1	90	4	平坦地24・IY13-11・ベル ト1・2層	平安	黒色土器A	杯	底部	10%	-	<5.0>	(1.25)	-	7.5YR6/6橙	10YR4/1褐灰	砂粒・白色粒子多量	良		
36-70	23-1	116	4	平坦地24・IY13-11・ベル ト2層	平安	黒色土器 B?	杯	胴部～底部	10%	-	<7.0>	(1.3)	-	10YR4/1褐灰	10YR3/1黒褐	白色粒子多量、石英少量、 砂粒少量(中～細)	良		
36-71	23-1	77	4	SQ01・No.25	平安	黒色土器A	杯	底部	20%	-	3.7	(1.0)	-	7.5YR6/4にぶい、橙	10YR3/1黒褐	石英・白色粒子少量、中～ 細粒砂多量	良		
36-72	21	110	4	SQ01・No.26	平安	黒色土器A	碗	口縁部～底 部	70%	<15.0>	7.2	5.4	-	5YR6/6橙	2.5Y5/2暗灰黄	白色粒子・砂粒多量	良		
36-73	23-1	113	4	平坦地24・IY13-03・1層	平安	黒色土器A	碗	底部	20%	-	<7.8>	(1.8)	-	5YR6/6橙	10YR6/2灰黄褐	砂粒・白色粒子多量(粗・ 細兼含む)	良		
36-74	23-1	112	4	平坦地24・IY13-03・ト レ・レキ	平安	黒色土器A	碗	底部	10%	-	<7.4>	(2.1)	-	5YR6/6橙	2.5Y5/1黄灰 7.5YR6/4にぶい、橙	砂粒・白色粒子・赤褐色粒子 多量	良		
36-75	23-1	114	4	平坦地24・IT16-17-22	平安	黒色土器A	碗	底部	10%	-	<5.7>	(1.7)	-	7.5YR7/4にぶい、橙	10YR4/1褐灰	砂粒・白色粒子多量(粗・ 細兼含む)	良		
36-76	23-1	111	4	平坦地24・IY13-11・ト レ・レキ	平安	黒色土器A	碗	底部	20%	-	<5.2>	(2.5)	-	10YR7/4にぶい、黄橙	10YR4/2灰黄褐	石英多量、赤褐色粒子・砂粒 少量	良		
36-77	21	85	4	SQ01・No.2・平坦地24・IY04- 05・盛土・SQ01・IY13-08・13	平安	須恵器	杯A	口縁部～底 部	20%	<13.5>	6.2	(5.1)	-	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	白色粒子・砂粒少量	良		
36-78	21	80	4	SQ01・No.22・平坦地24・ IY13-08・1層	平安	土師器	碗	底部	20%	-	6.8	(3.1)	-	10YR6/4にぶい、黄橙	10YR5/3にぶい、黄橙	石英多量・白色粒子少量・ 赤褐色粒子微量、砂粒少量	良		
36-79	23-1	117	4	平坦地24・IY13-07・ト レ・レキ・SQ01・No.26	平安	灰釉陶器	段皿	口縁部	10%	13.8	-	1.6	-	10YR7/1灰白	2.5Y7/1灰白	-	良		
36-80	23-1	82	4	SQ01・No.6	平安	土師器	盤・鉢	口縁部～胴 部	5%	<24.0>	-	(5.1)	-	7.5YR7/6橙	7.5YR6/4にぶい、橙	白色粒子・赤褐色粒子少量、 砂粒多量	良		
36-81	23-1	83	4	SQ01・No.28	平安	土師器	盤A	胴部～底部	5%	-	-	(2.7)	-	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	白色粒子少量、赤褐色粒子・ 砂粒多量	良		
36-82	23-1	115	4	平坦地24・IY13-04・ベル ト・レキ	平安	土師器	盤A	底部	15%	-	<8.0>	(1.6)	-	10YR7/4にぶい、黄橙	10YR7/4にぶい、黄橙	赤褐色粒子・白色粒子多 量、砂粒・石英微量	良		
36-83	22-2	109	4	平坦地24・IY13-03・レキ	平安	土師器	鉄鉢形 杯A	口縁部	5%以下	<22.0>	-	(1.9)	-	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	粗粒砂・赤褐色粒子少量	普通		
36-84	23-1	96	4	SD09・黒土	平安	土師器	杯A	胴部～底部	10%以下	-	<4.7>	(1.4)	-	7.5YR6/8橙	5YR5/8明赤褐	白色粒子少量、砂粒多量	良		
36-85	23-1	130	4	平坦地24・IT16-22・ト レ・レキ・暗褐	近世	近世	土瓶・瀬 戸か?	底部	5%	-	<6.8>	(2.1)	-	2.5Y8/2灰白	10YR3/2黒褐	-	良		
36-86	23-1	118	4	平坦地24・IY13-03・ト レ・レキ	平安	土師器	盤?	胴部	5%	-	-	-	-	10YR6/3にぶい、黄橙	10YR7/2にぶい、黄橙	砂粒少量・空隙ある	不良		
36-87	23-1	87	4	SQ01・No.25	平安	須恵器	甕	胴部	5%以下	-	-	-	-	10YR4/1褐灰	2.5Y5/1黄灰	白色粒子少量	良		
37-88	21	131	5	平坦地2・No.1	平安	黒色土器A	碗	口縁～底部	80%	14.2	6.6	6.6	-	7.5YR7/6橙	N2/黒	砂粒・白色粒子・赤褐色粒子 多量	良		
37-89	23-2	132	5	平坦地2・IU03-06・検出 面	平安	灰釉陶器	広口瓶	口縁部	5%	<18.0>	-	(4.8)	-	2.5Y8/2灰白	10YR8/2灰白	-	良		
37-90	23-2	58	4	平坦地24・IT16・17・22検 出面・平坦地25・凹地・ No.1	中世・戦 国	内耳鍋	内耳鍋	胴部	10%	-	(10.2)	(26.0)	-	10YR3/2黒褐	7.5YR6/6橙	石英少量、白色粒子・砂粒 多量	良		
37-91	24-1・2	66	4	SB03・No.10・埋土	中世	青磁	蓮弁碗	胴部	5%	-	-	-	-	5Y7/3残黄	5Y7/3残黄	黄白色・空隙あり	良好		

図版 No.	PL No.	管理 No.	地区	遺構・地点・層位	時期	種類	器種	部位	残存率	推定：<>現在値：()法量：cm			外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
										口径	底径	器高					
37-92	24-1・2	62	4	SB03	中世	中世土器	皿(かわらけ)	口縁部	5%	<12.0>	-	(2.9)	-	7.5R8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	赤色粒子微量、混和材なし	良
37-93	24-1・2	65	4	SB03・凹地・No.6	中世	中世陶器(古瀬戸)	皿	底部	5%	<6.9>	(1.2)	-	-	5Y7/3浅黄	5Y7/3浅黄	-	良
37-94	24-1・2	63	4	SB03・No.1・埋土	中世	中世(古瀬戸)	天目茶碗	底部	10%	<4.6>	(1.3)	-	-	10YR2/1黒	10YR2/1黒	-	良
37-95	24-1・2	64	4	SB03・No.1・埋土	中世	中世(瀬戸)	鉢	口縁部~胴部	5%	<11.8>	-	(3.1)	-	2.5YR3/2黒褐	2.5YR3/2黒褐	-	良
37-96	24-1・2	67	4	SB03・No.1・埋土	近世	近世陶器	碗	口縁部	5%	<10.6>	-	(3.0)	-	10YR2/1黒	10YR2/1黒	-	良
37-97	24-1・2	68	4	SB03・No.17・埋土	近世	近世陶器	花瓶	胴部	5%	-	-	(7.2)	-	7.5YR2/1黒	7.5YR2/1黒	空隙少しあり	鉄軸
37-98	24-1・2	69	4	SB03・No.16・埋土	近世	近世	灯明皿	口縁部	5%	<9.0>	(1.2)	-	-	10YR4/1褐灰	10YR4/1褐灰	-	良
37-99	24-1・2	56	4	平垣地29・Z	中世	青磁	蓮弁碗	口縁部	5%	<16.7>	-	(4.9)	-	2.5G5/1(赤)-7 灰	5Y66/1(赤)-7 灰	-	良
37-100	24-1・2	55	4	IIID08・平垣地29・No.1	中世	青磁	蓮弁碗	底部	5%	(16.0)	-	3.	-	2.5G16/1(赤)-7 灰	2.5G16/1(赤)-7 灰	-	良好
37-101	23-2	134	5	IIPI9-07 2層	平安	黒色土器A	鉢	胴部	5%	-	-	-	-	7.5YR7/6橙	N1.5/黒	石英多量、白色粒子少量(中~小粒)	良
37-102	23-2	60	4	SB03・埋土	中世		内耳鍋	把手	5%	-	-	-	-	5YR4/3にぶい赤褐	7.5YR6/4にぶい橙	白色粒子多量、褐色粒子やや多量、中粒砂多量	良
37-103	23-2	59	4	SB03・IY01-11	中世		内耳鍋	胴部(下)	5%	-	(24.0)	-	-	7.5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	白色粒子・赤褐色粒子少量、中粒砂多量	良
37-104	23-2	61	4	SB03・No.5・埋土	中世		内耳鍋	底部	5%	-	-	-	-	7.5YR4/6褐	7.5YR5/4	中粒砂粒・白色粒子多量	良
37-105	23-2	57	4	平垣地25・凹地・I S25-16	平安	美濃灰釉陶器	瓶	胴部	5%以下	-	-	-	(16.0)	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	-	良

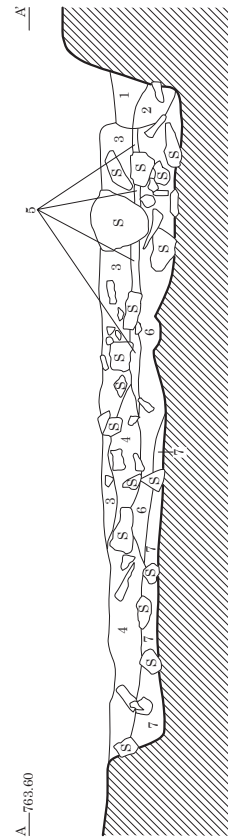
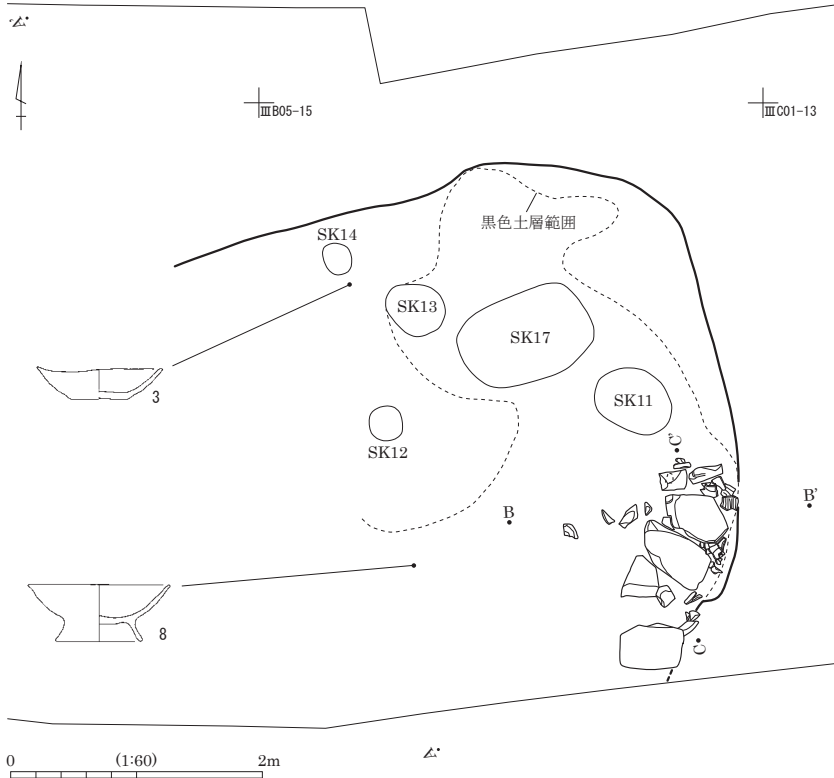
石器・金属製品

図版 No.	PL No.	管理 No.	地区	遺構・地点・層位	時期	種類	器種	残存率	推定：<>現在値：()法量mm			石材	備考		
									長さ	幅	最大厚			重量	
37-1	24	136	3-2	SK11		石器	石鏃			14	3		0.6	黒曜石	
37-2	24	139	3-2	3-2区黒色土、SB01		石器	使用痕ある剝片			30	22.5	8.5		黒曜石	
37-3	24	138	1	SK40		石器	使用痕ある剝片			34	18	7.5		黒曜石	
37-4	24	137	3-2	SK17 2層		石器	スクレイパー			(48)	34	10	15	チャート	
37-1	24	1	3-2	SB01 黒色土層		鉄製品	釘?			26	16.5	11			
37-2	24	1a	4	SK59No.1	中世・鎌倉	銅製品	銭貨			23	23	1			元祐通宝(宋1086)
37-3	24	1b	4	SK59No.2	中世・鎌倉	銅製品	銭貨			22	22	1			聖宋元宝(宋1101)
37-4	24	4	4	平垣地25北東部溝付近(黄褐色土)		銅製品	銭貨			22	22.5	1			文字不明

遺構・遺物図版
写真図版

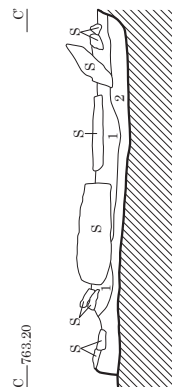
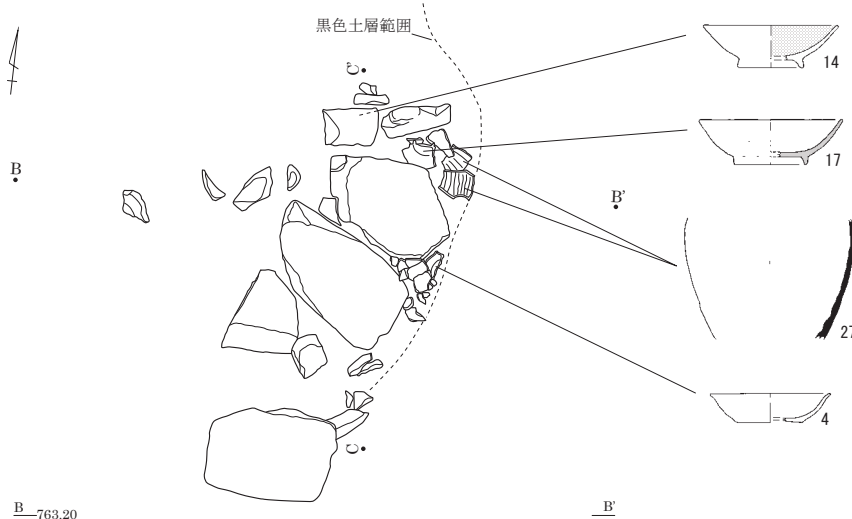
図版1 3-2区 SB01 住居跡

SB01



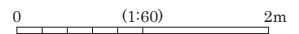
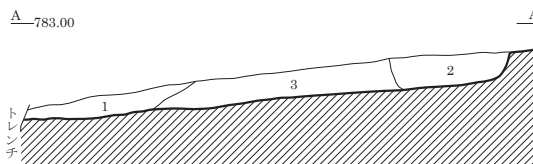
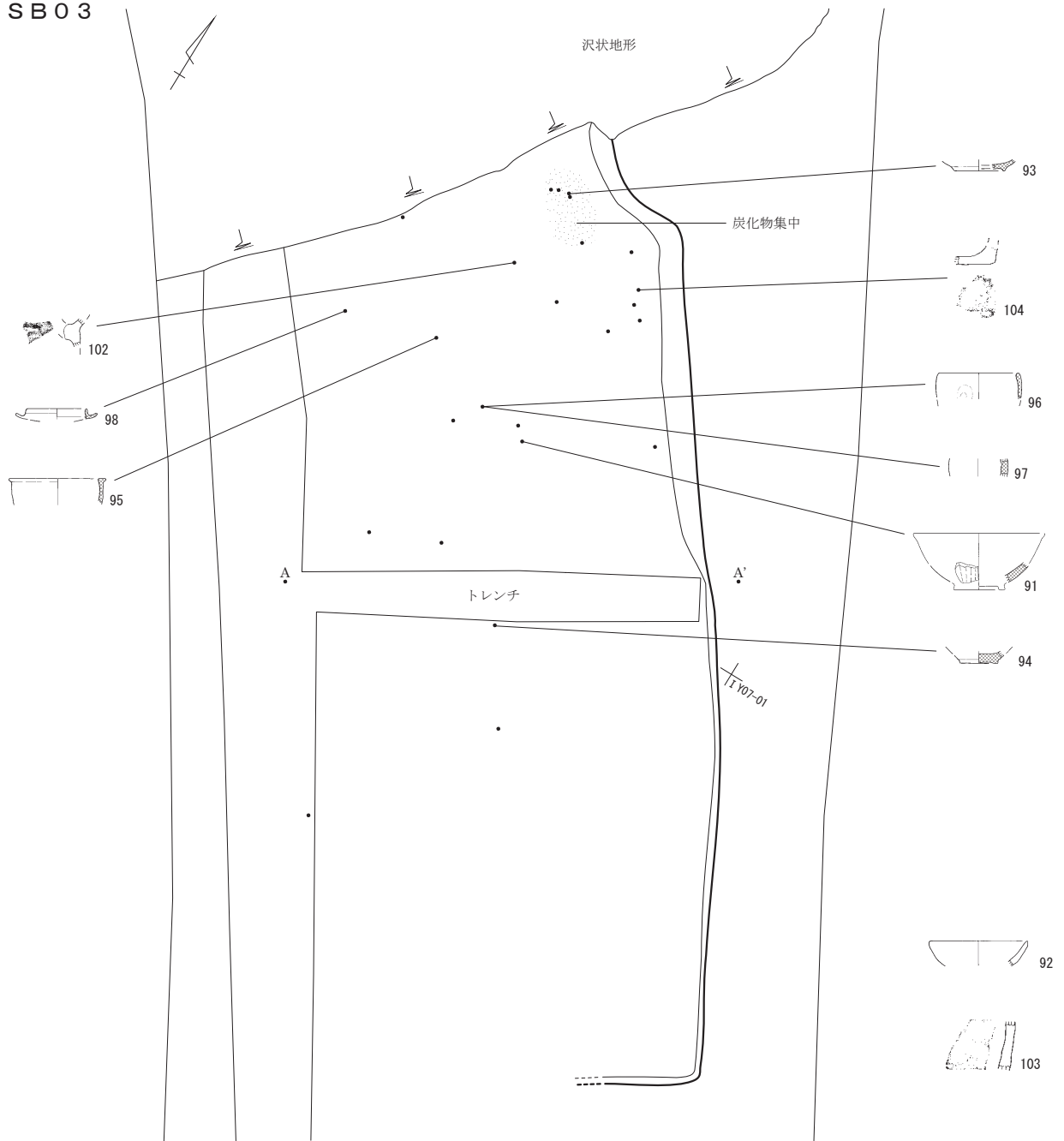
- | | | | |
|----------------|---|----------------|---|
| 1 10YR2/1 黒色土 | 粘性・しまりあり。シルト質埴壤土。暗褐色土15%混。明黄褐色土5%・黄褐色土7%粒状に混。拳大礫1%・φ1~2cm礫3%・0.1~0.2cm炭化物3%混。 | 4 10YR4/1 褐灰色土 | 粘性・しまりあり。シルト質埴壤土。褐色土20%混。黄褐色土5%・明黄褐色土3%粒状に混。粗砂7%・φ10~15cm礫2%混。 |
| 2 10YR3/1 黒褐色土 | 粘性・しまりあり。シルト質埴壤土。暗褐色土15%混。明黄褐色土3%・黄褐色土5%粒状に混。φ1~2cm礫2%・0.1~0.2cm炭化物2%混。 | 5 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性・しまりあり。暗灰黄色シルト。砂・φ1~5cm角礫30%・黒褐色土塊混。 |
| 3 10YR2/1 黒色土 | 粘性・しまりあり。シルト質埴壤土。暗褐色土15%・明黄褐色土7%・黄褐色土10%混。拳大礫10%・φ1~2cm礫5%・0.1~0.2cm炭化物3%混。 | 6 10YR4/1 褐灰色土 | 粘性・しまりあり。シルト質埴壤土。暗褐色土20%・明黄褐色土3%・黄褐色土3%混。φ15~20cm礫7%・10cm礫3%・1~2cm礫3%混。 |
| | | 7 10YR4/6 褐色土 | 粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。褐灰色土30%・オリーブ色土5%混。黄褐色土5%・明黄褐色土3%粒状に混。粗砂7%・φ10~15cm礫3%混。 |

SB01 カマド



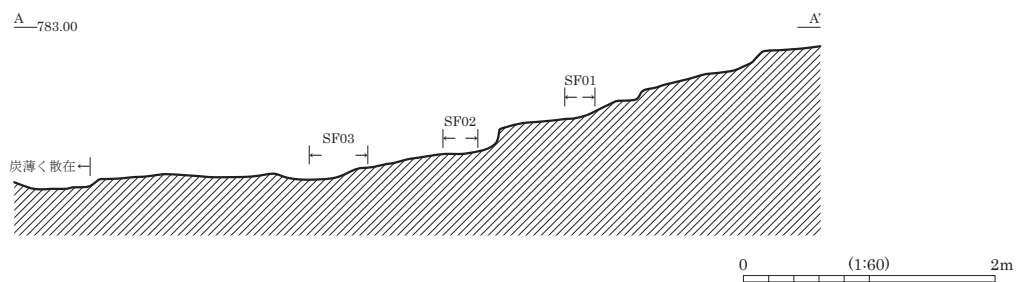
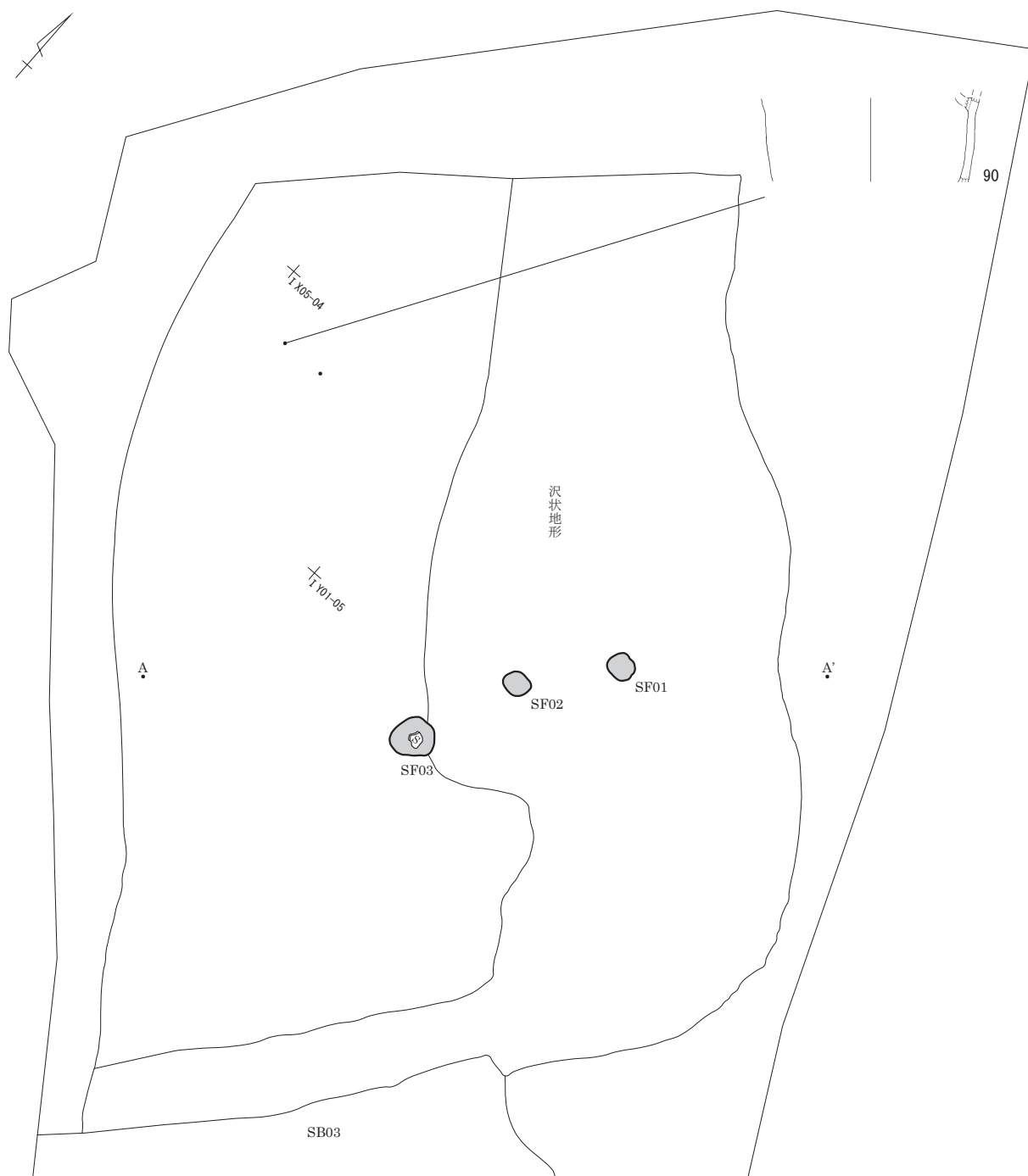
- | | |
|----------------|---|
| 1 10YR2/1 黒色土 | 粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。暗褐色土15%・褐灰色土5%・赤褐色土5%混。明黄褐色土5%・黄褐色土3%粒状に混。φ0.5cm礫3%混。炭化物7%粒状に混。 |
| 2 10YR4/1 褐灰色土 | 粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。褐色土20%・オリーブ色土3%混。黄褐色土3%・明黄褐色土2%粒状に混。φ1~2cm礫1%・0.1~0.2cm炭化物2%混。 |
| 3 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性・しまりあり。暗灰黄色シルト。黒褐色土塊・砂・φ1~5cm角礫30%混。 |

SB03



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 砂壤土 3層と同じ含有物+黄スリア20%・風化礫(拳大・花崗岩?の亜角礫)20%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土 砂壤土 3層と同じ含有物+橙スリア15%混。
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土 砂壤土 φ1~2mm砂礫10%、φ1~5mm亜角礫(一部風化)10~15%、炭10%混。

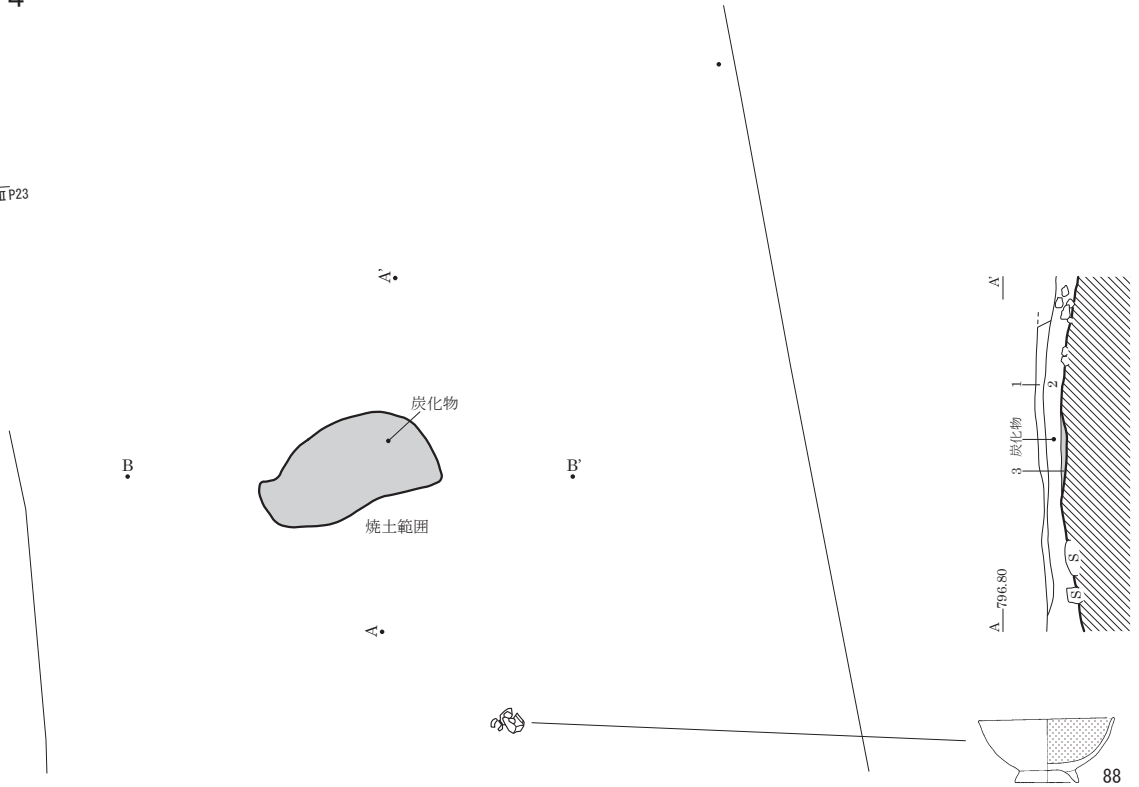
図版3 4区 SF01~03 焼土跡・沢状地形



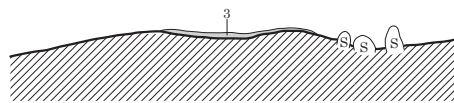
S F 0 4



II P23



B-796.80



B'

1 10YR5/2 灰黄褐色土

粘性あり。しまり弱い。シルト。粗粒砂～細礫(風化)1%混。

植物根多混。耕作土下半部・下部にφ1~2cm鉄分・マンガン集積部あり。

2 10YR3/2 黒褐色土

粘性・しまりややあり。シルト。風化礫(黄褐・灰色)3%混。大～巨礫(φ5~50cm超)10%混。炭化物少量散在。下部に焼土分布。

3 5YR4/3 にぶい赤褐色土

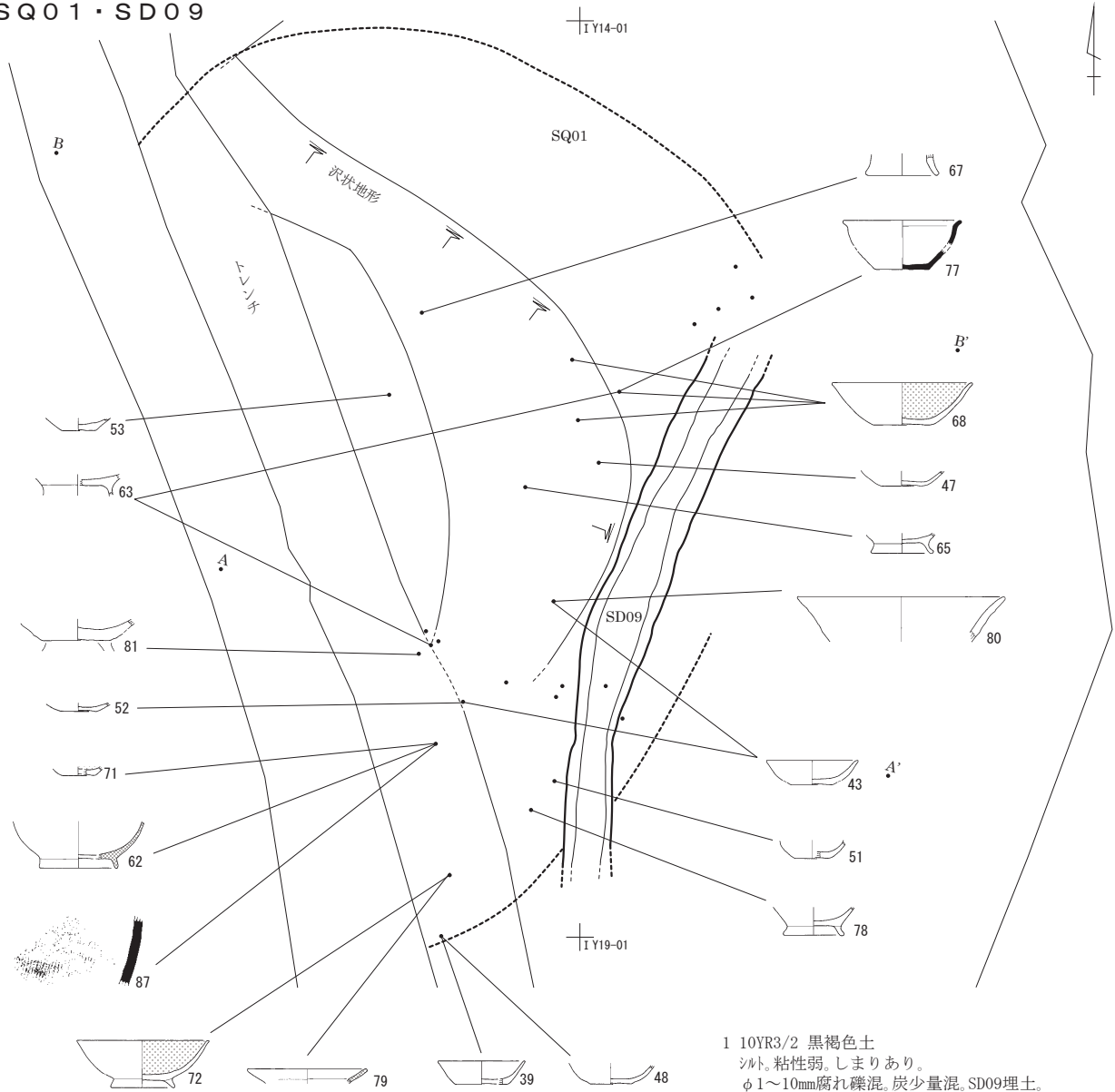
シルト。焼土層。



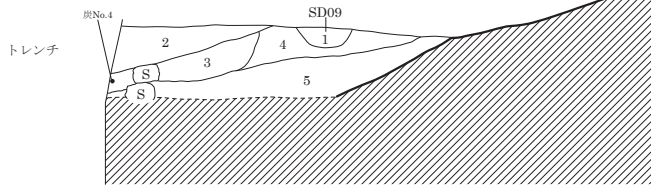
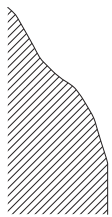
SF04 表土剥ぎ

図版5 SQ01 遺物集中・SD09 溝跡

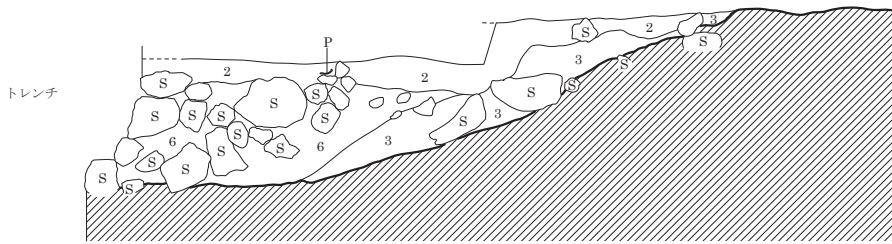
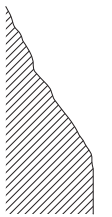
SQ01・SD09



A-785.40



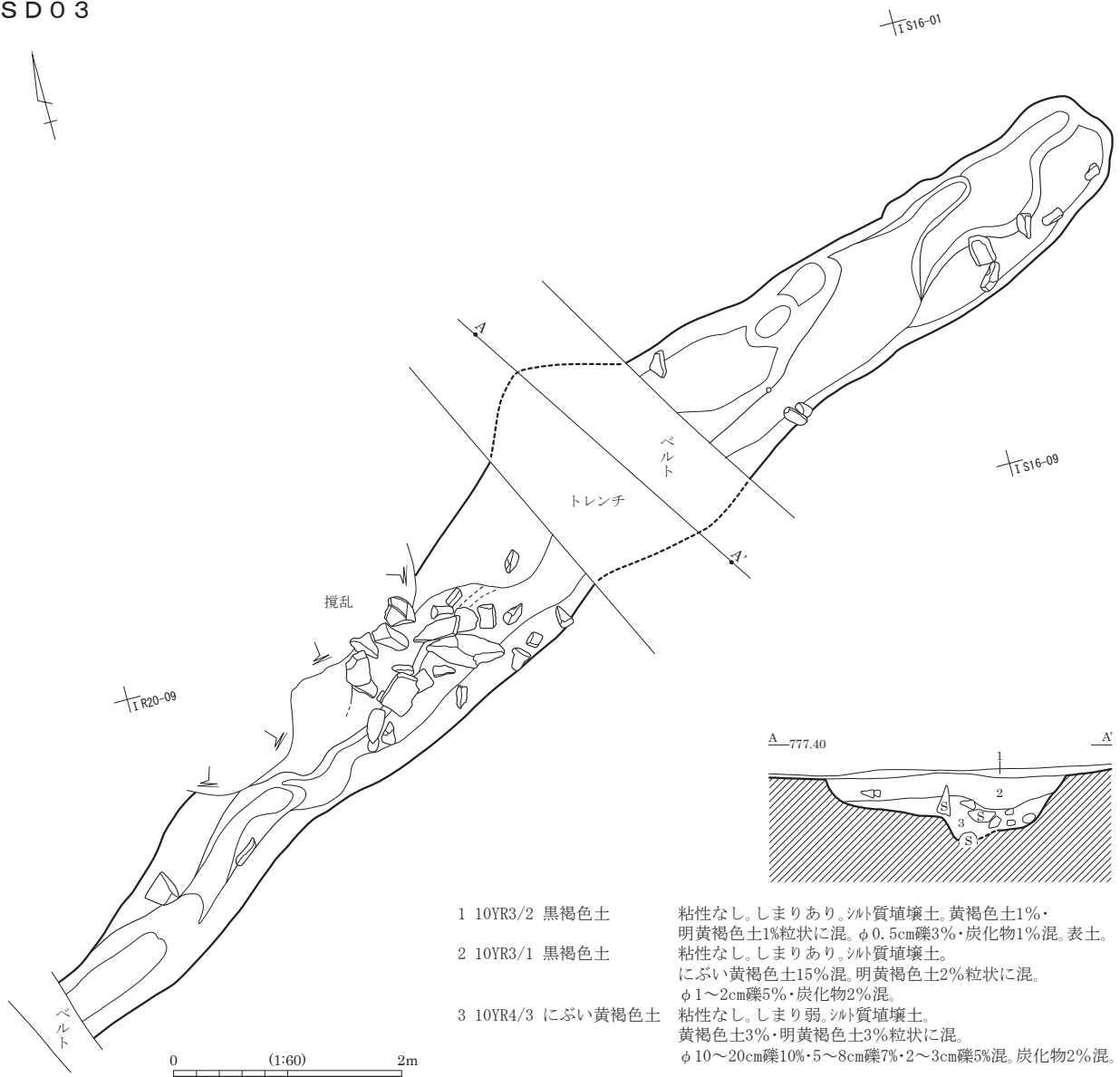
B-785.40



- 1 10YR3/2 黒褐色土
シルト。粘性弱。しまりあり。
φ1~10mm腐れ礫混。炭少量混。SD09埋土。
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土
シルト。粘性ややあり。φ0.1~0.7mm白・褐色腐れ礫
5%混。平安時代遺物包含層。
- 3 10YR3/1 黒褐色土
シルト。粘性あり。しまりよい。φ1~6mm白・黄褐色
腐れ礫7%混。φ20~30mm炭多混。巨礫20%混。
- 4 10YR3/2 黒褐色土
シルト。粘性・しまりあり。腐れ礫少量混。
- 5 10YR4/4 褐色土
粘質シルト。粘性やや強。しまりあり。腐れ礫5%混。
大~巨礫20%混。縄文時代遺物包含層。
- 6 10YR4/2 灰黄褐色土
シルト。粘性あり。大~巨礫・水分多。上部空隙多、下部
空隙少盛土層。

0 (1:60) 2m

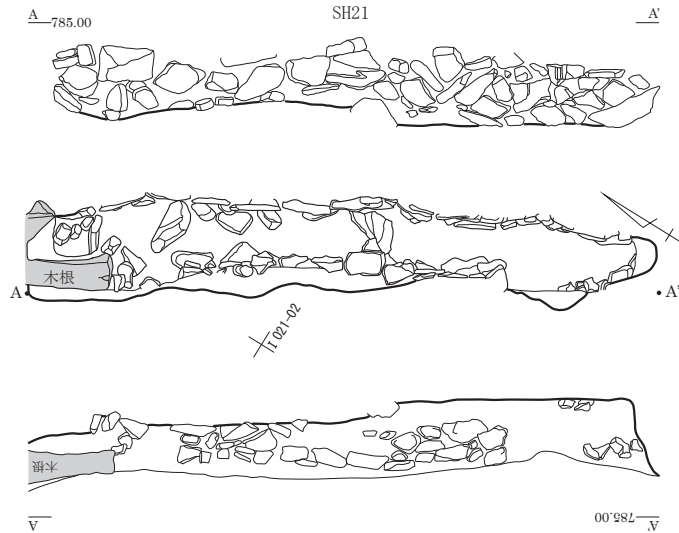
SD03



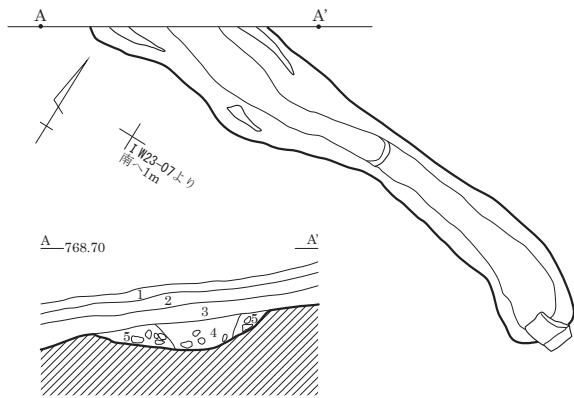
平坦地11 調査風景

図版7 2区 SD01・3-1区 SD02・1区 SD04~07 溝跡

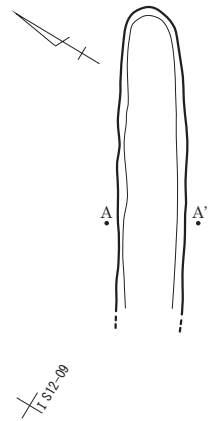
SD01



SD02

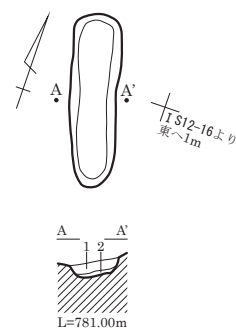


SD07



- | | |
|-------------------|--|
| 1 10YR5/2 灰黄褐色土 | 粘性あり。しまりなし。砂混。未分解植物片少混。 |
| 2 10YR5/3 にぶい黄褐色土 | 粘性あり。しまり強。φ1~5cmにぶい黄褐色粘質土塊20%混。
φ1~2cm礫20%混。淘汰悪い。 |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色土 | 粘性強。しまり弱。粗砂多混。φ1~10cm亜角礫30%混。 |
| 4 10YR3/1 黒褐色土 | 粘性あり。しまり弱。φ1~2cm礫・粗砂多混。炭化物10%混。 |
| 5 10YR4/2 にぶい黄褐色土 | 粘性・しまりあり。φ1~10cm礫20%混。 |

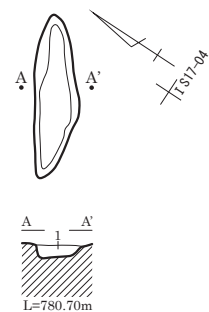
SD04



- 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~3cm礫30%混。
- 10YR4/1 褐灰色土
粘性・しまりあり。砂混。

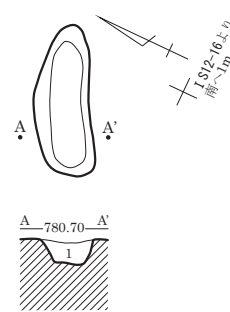
0 (1:60) 2m

SD05

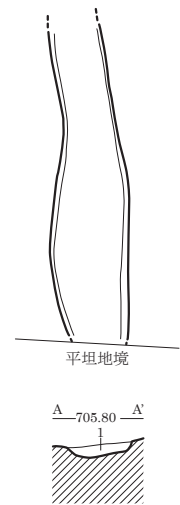


- 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性弱。しまりあり。砂混。
φ1~3cm礫20%混。

SD06



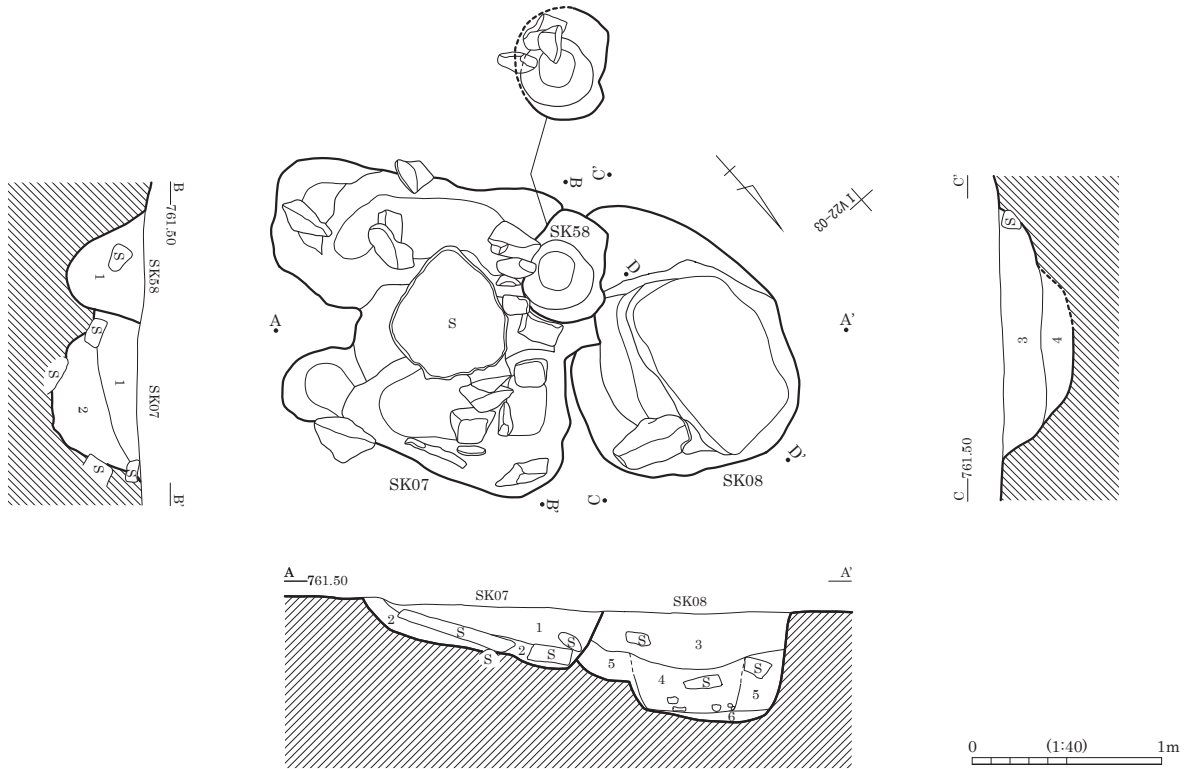
- 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性弱。しまりあり。砂混。
φ1~3cm礫20%混。



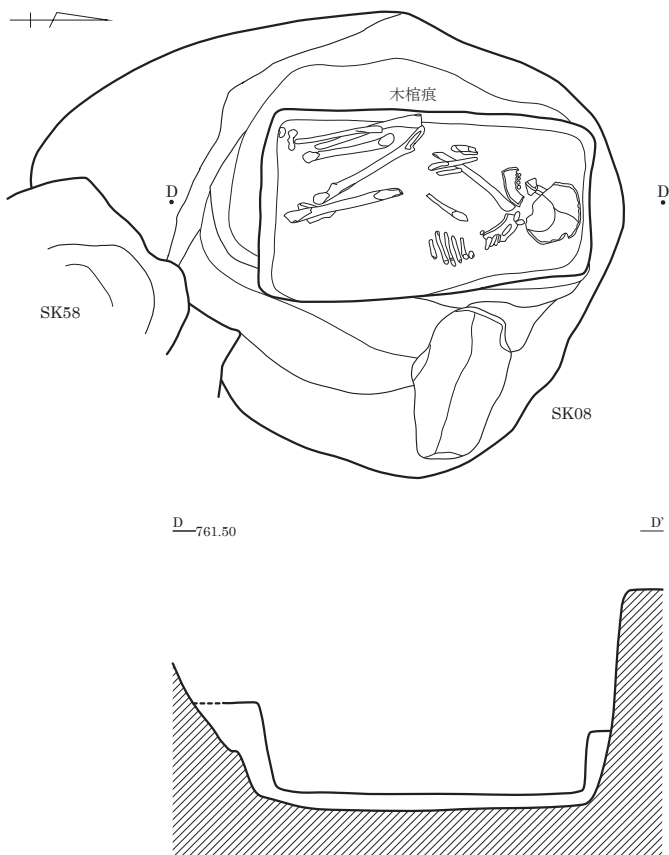
- 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~3cm礫1%混。

SK07・08・58

SK58 完掘図



SK08 人骨出土状況図



SK08 掘り方・木棺痕立面

SK07

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまり弱。粗砂多混。φ1~3cm礫10%・
5~10cmにぶい黄橙色粘質土塊20%混。
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまりややあり。粗砂多混。
φ5~10cmにぶい黄橙色粘質土塊40%・
φ1~5cm礫10%混。

SK08

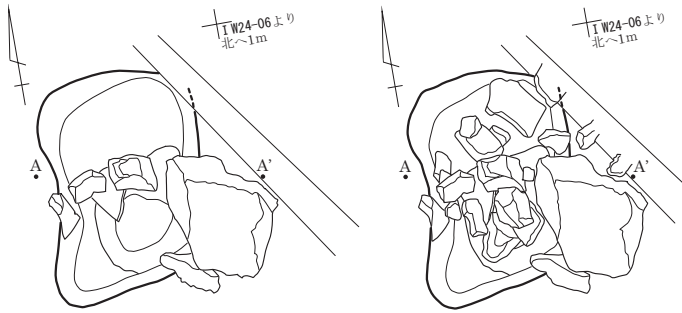
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。砂・粗砂多混。
φ1~5cmにぶい黄橙粘質土塊20%混。
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまり弱。砂・粗砂・φ5~10cm歪角礫5%・
1~10cmにぶい黄橙色粘質土塊20%混。
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまり弱。砂・φ1~10cm礫10%混。
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~10cm礫30%・1~3cm明黄褐色土塊10%混。

SK58

- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。φ1~5cm礫30%混。

図版9 3-1区 SK01~06 土坑

SK01

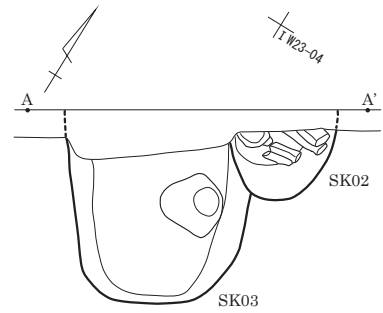


A-769.10

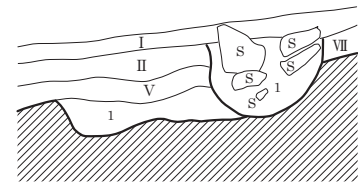


SK01 礫出土状況
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
炭化物1%・φ10~20cm亜角礫30%混。

SK02・03



A-769.10



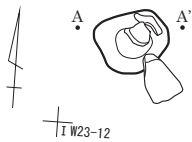
SK02

1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまりなし。炭化物5%混。

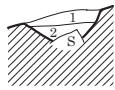
SK03

1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性・しまりあり。粗砂・φ1~3cm10YR3/1
黒褐色土塊・にぶい黄褐色土塊5%・炭化物1%混。

SK04

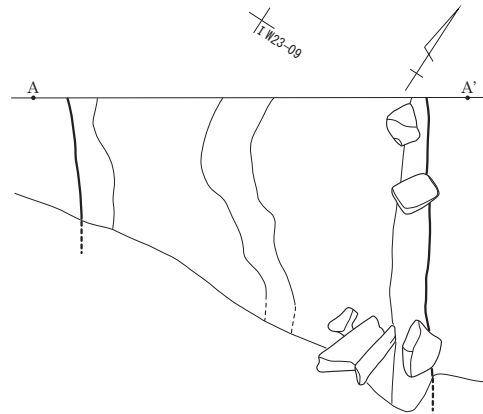


A-768.60

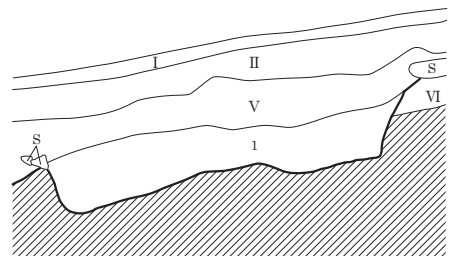


1 10YR3/1 黒褐色土
粘性あり。しまりやや弱。
炭化物5%混。
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土
φ1~2cm黄褐色粘土塊10%混。

SK06

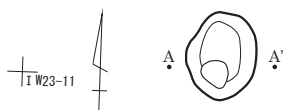


A-767.90

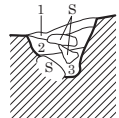


1 10YR4/3 にぶい黄褐色土
φ1~2cm礫20%・5~10cm褐灰色・にぶい橙褐色
粘土塊40%混。

SK05



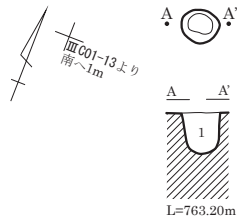
A-768.30



1 10YR3/1 黒褐色土
粘性あり。しまり弱。炭化物5%混。
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~2cm黒褐色土塊10%混。
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土
粘性・しまりあり。

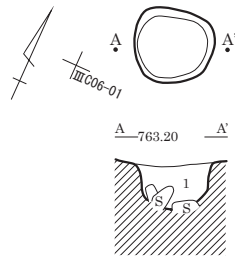
0 (1:40) 1m

SK09



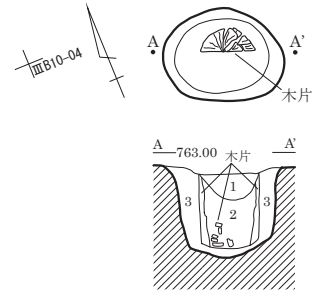
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性なし。しまりあり。シルト質埴壤土。
明黄褐色土・黄褐色土粒状に10%・
暗褐色土15%・ ϕ 0.1cm炭化物3%・ ϕ
0.1cm粗砂2%混。

SK10



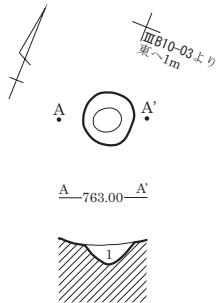
1 10YR2/1 黒色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。
明黄褐色土・黄褐色礫3%・ ϕ ~0.1cm
粗砂粒状に3%混。 ϕ 0.2~0.3cm
炭化物5%混。

SK11



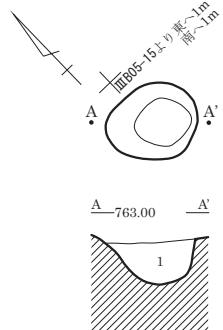
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。
黄褐色土15%・明黄褐色土5%混。長さ3cm幅0.8cm以
下の木片少混。 ϕ ~0.3cm炭化物2%混。
2 10YR5/1 褐灰色土
粘性・しまり弱。シルト質埴壤土。黄褐色土粒・木片7%・
 ϕ 0.2~0.3cm炭化物粒状に3%混。
3 10YR4/1 褐灰色土
10YR5/6黄褐色土混。

SK12



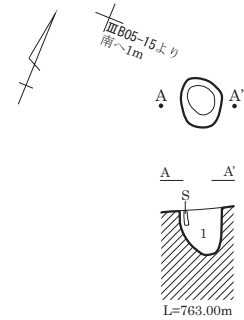
1 10YR2/1 黒色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。
褐灰色土15%・黄褐色土7%・褐色土7%・
拳大礫1個、 ϕ ~2cm礫・炭化物2%混。

SK13



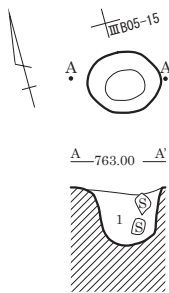
1 10YR2/1 黒色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。
褐灰色土15%・黄褐色土7%・褐色土7%・
拳大礫1個・ ϕ ~2cm礫・炭化物2%混。

SK14



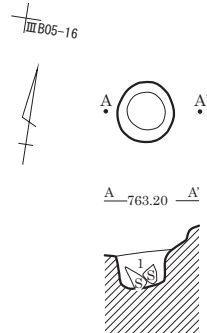
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性なし。しまりあり。シルト質埴壤土。
明黄褐色土・黄褐色土粒状に10%・暗褐色土15%・
 ϕ 0.1cm炭化物3%・0.1cm粗砂2%混。

SK15



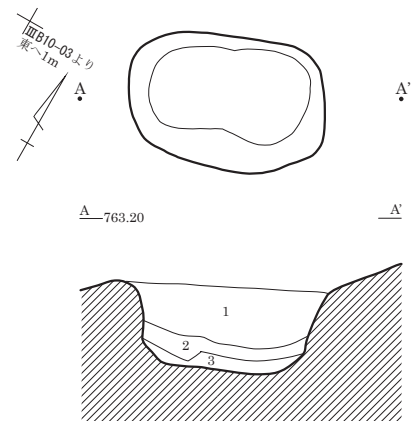
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性なし。しまりあり。シルト質埴壤土。
明黄褐色土・黄褐色土粒状に10%・暗
褐色土15%・0.1cm炭化物8%・ ϕ 0.1cm
粗砂2%・拳大礫2個混。

SK16

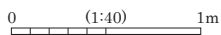


1 10YR2/1 黒色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。
明黄褐色土・黄褐色土粒状に10%混・
黄褐色土塊15%・暗褐色土15%・拳大礫
3個・ ϕ 1~2cm礫3%・0.1cm粗砂粒状に3%
混。 ϕ ~0.3cm炭化物5%混。

SK17

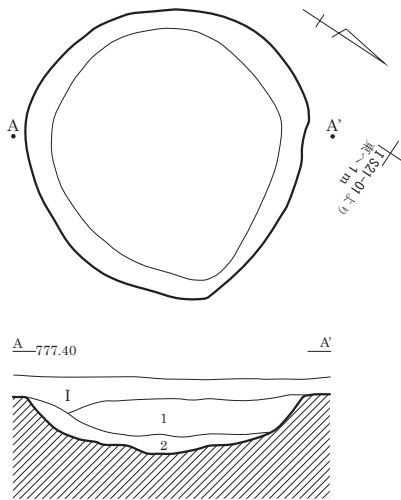


1 10YR2/1 黒色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。
暗褐色土15%・明黄褐色土5%・黄褐色土3%・ ϕ 2~3cm
礫3%混。炭化物5%粒状に混。
2 10YR2/1 黒色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。
暗褐色土15%・褐色土15%・ ϕ 1~2cm礫2%混。明黄褐色
土5%・黄褐色土3%・炭化物5%粒状に混。
3 10YR3/2 黒褐色土
粘性弱。しまりあり。シルト質埴壤土。灰黄褐色土15%混。
明黄褐色土5%・黄褐色土3%・炭化物5%粒状に混。



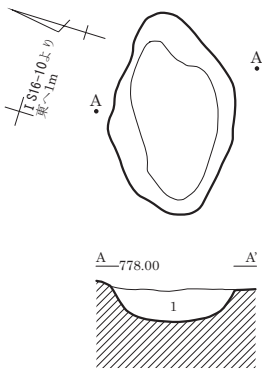
図版 11 1区 SK18~26 土坑

SK 18



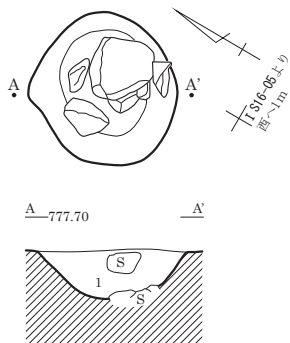
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~2cm礫5%・にぶい黄橙色土塊1%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~2cm礫5%・1~5cmにぶい黄褐色土塊10%混。

SK 21

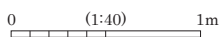


- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂・φ1~2cm礫30%・3~5cm
にぶい黄褐色土塊5%混。

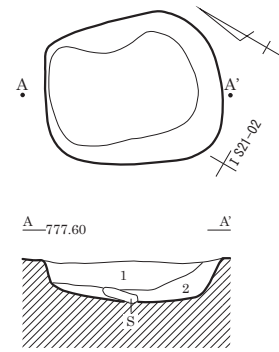
SK 24



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
粗砂30%・φ1~5cm礫10%混。

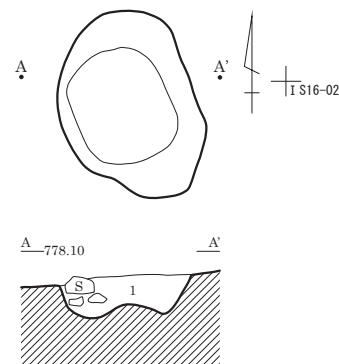


SK 19



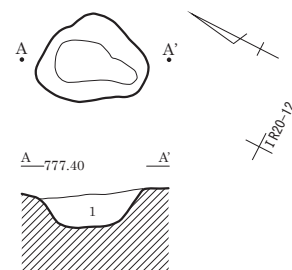
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
粗砂混。φ1~2cm礫10%混。
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂混。φ1~2cm礫5%混。

SK 22



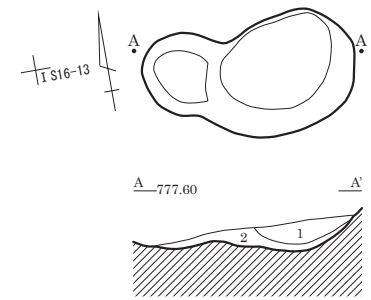
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂・φ1~3cm礫20%・5~10cm礫
10%・1~2cm黄褐色シルト塊5%混。

SK 25



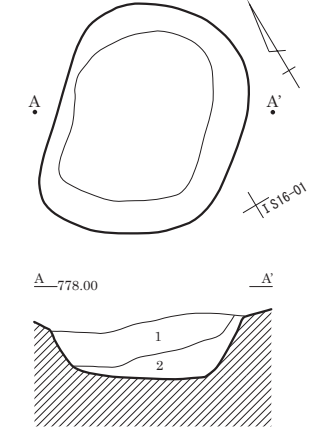
- 1 10YR3/2 黒褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂多混。
φ0.1~0.5cm山砂30%混。

SK 20



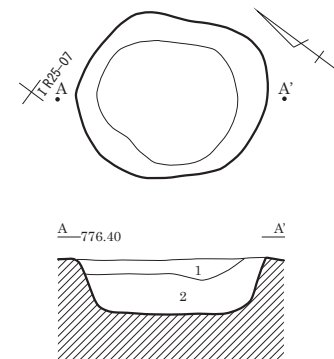
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~2cm礫5%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
φ1~2cm礫5%・1~3cm
にぶい黄橙色塊10%混。

SK 23



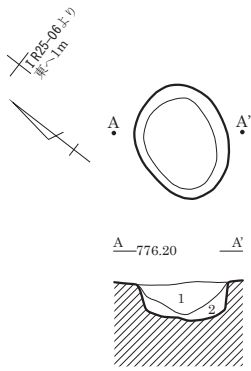
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~3cm礫10%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
砂多混。φ1~3cm礫30%混。

SK 26



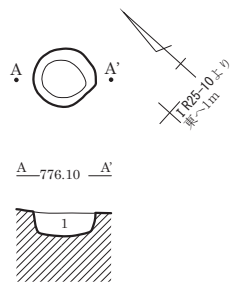
- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性強。しまり弱。φ1~3cm礫5%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。φ1~5cm明黄褐色
土塊10%・1~5cm礫1%混。淘汰悪い。

SK 27



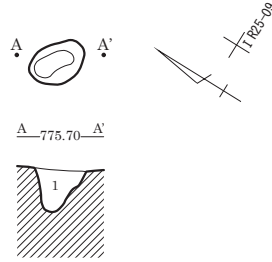
- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性あり。しまり弱。
φ 1~3cm礫10%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ 1~3cm明黄褐色
土塊5%混。

SK 28



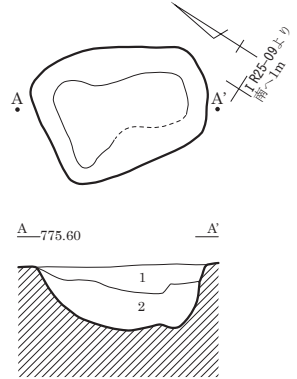
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂・φ 1~3cm明黄褐色
土塊1%混。

SK 29



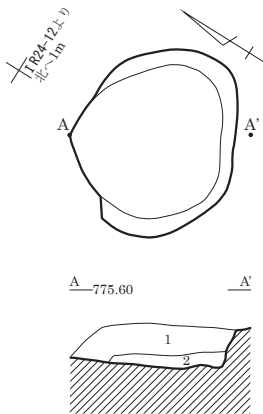
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ 1~5cm明黄褐色土塊5%混。

SK 30



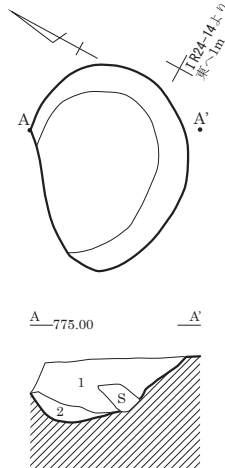
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粗砂・φ 1~3cm礫10%・1~2cm
明黄褐色土塊1%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
φ 1~10cm明黄褐色土塊30%混。

SK 32



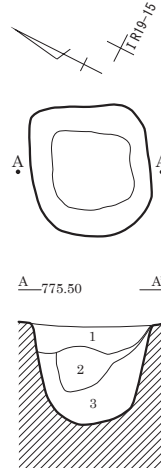
- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性・しまりあり。
φ 1cm礫10%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ 1~3cm明黄褐色土塊20%混。

SK 33



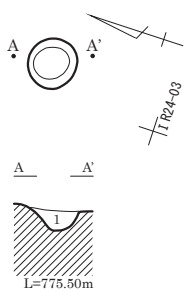
- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性・しまりあり。
粗砂・φ 1~3cm礫5%・明黄褐色
土塊5%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ 1~3cm礫1%・1~3cm明黄褐色
土塊20%混。

SK 34



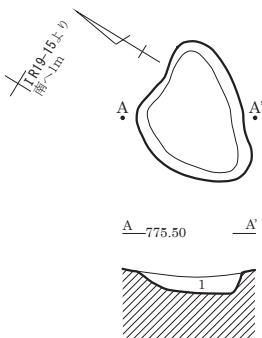
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ 1~2cm礫10%・1~5cm黄
褐色土塊20%混。
- 2 10YR4/1 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ 1~2cm礫5%・1~3cm黄褐色
土塊10%混。
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂・φ 1~5cm礫1%・1~2cm
黄褐色土塊20%混。

SK 35



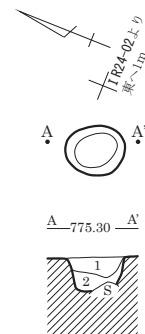
- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性・しまりあり。
φ 1~2cm礫10%混。

SK 36



- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂・φ 1~2cm黄褐色
土塊10%混。

SK 37

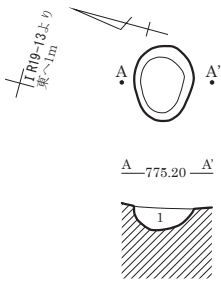


- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂・φ 1~2cm礫多混。
細礫40%混。
- 2 10YR5/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。

0 (1:40) 1m

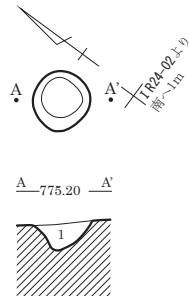
図版 13 1区 SK38~42, 44~47 土坑

SK38



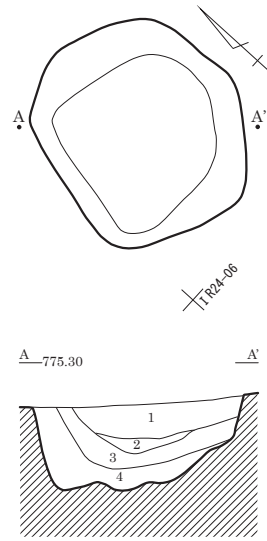
1 10YR4/2 灰黄褐色土
φ1~2cm礫40%混。

SK39



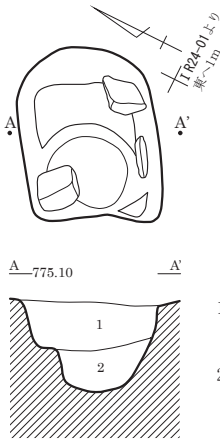
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
粗砂・φ1~2cm礫5%混。

SK40



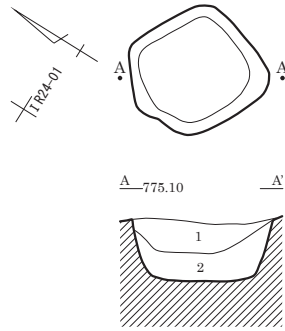
1 10YR5/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~5cm明黄褐色土塊30%混。
2 10YR4/1 褐灰色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~2cm礫5%混。
3 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~3cm礫5%・1~5cm
明黄褐色土塊5%混。
4 10YR4/2 灰黄褐色土
3層に7/6明黄褐色土塊40%混。

SK41



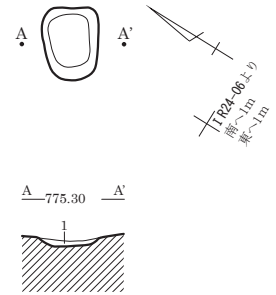
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~10cm礫20%混。
2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~3cm礫5%混。

SK42



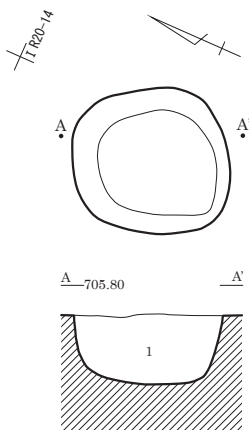
1 10YR4/1 褐灰色土
粘性あり。しまりやや弱。
φ1~5cm礫10%・炭粒1%混。
2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~2cm明黄褐色土塊10%混。

SK44



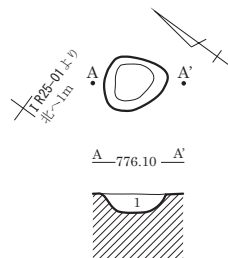
1 10YR4/1 褐灰色土
粘性・しまり弱。
粗砂40%・φ1~2cm礫混。

SK45



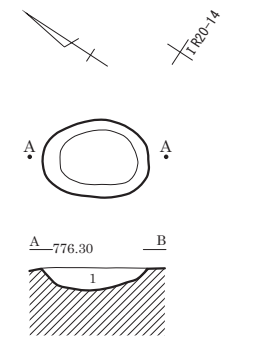
1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~3cm礫10%・明黄褐色
土塊20%混。

SK46



1 10YR4/1 褐灰色土
粘性・しまりあり。
粗砂多混。φ1cm礫10%混。

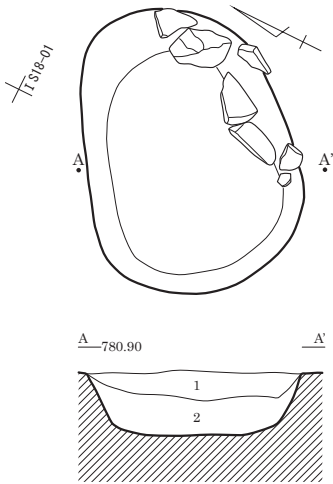
SK47



1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
砂・φ1~3cm礫5%混。

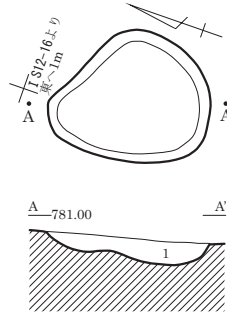
0 (1:40) 1m

SK 48



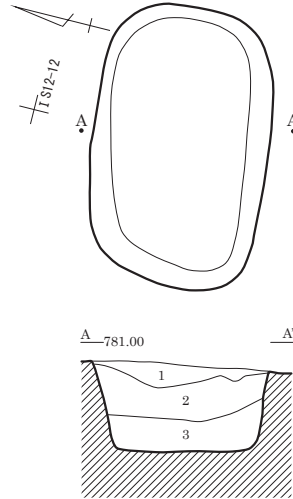
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。粗砂・φ1~5cm礫40%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。φ1~5cm礫5%・1~5cm
明黄褐色土塊20%混。

SK 49



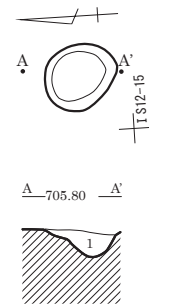
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
砂・φ3~5cm礫5%混。

SK 50



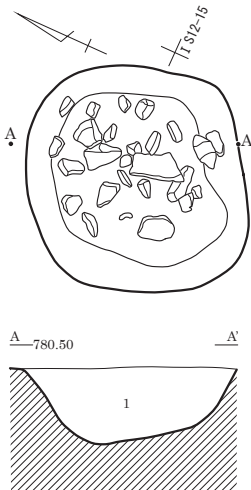
- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性あり。しまり弱。φ1~3cm礫20%混。
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまり弱。砂・φ1~3cm礫20%・
1~10cm明黄褐色土塊30%混。

SK 51



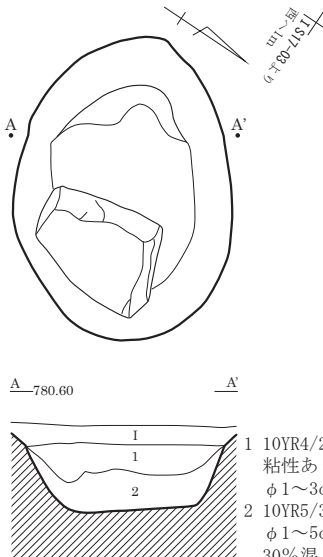
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
砂・φ1~3cm礫20%混。

SK 52



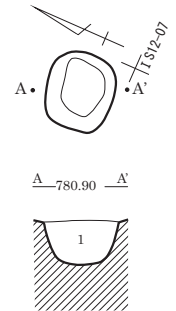
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~10cm礫40%・粘質土塊混。

SK 53



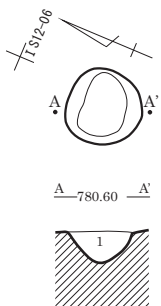
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~3cm礫10%混。
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色土
φ1~5cm明黄褐色土塊
30%混。

SK 54



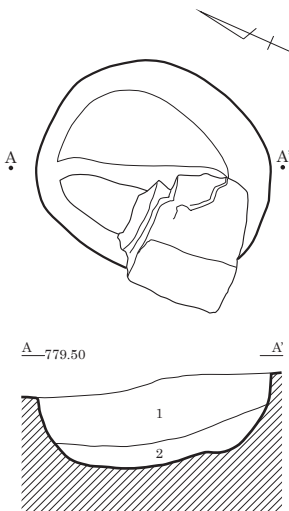
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~3cm礫20%混。

SK 55



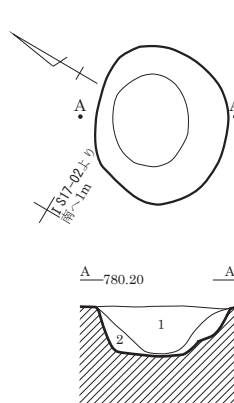
- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性あり。しまり弱。
φ1~5cm礫30%混。

SK 56



- 1 10YR4/2 灰黄褐色土
砂混。φ1~10cm礫30%混。
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色土
砂混。φ1~3cm礫10%・1~10cm
明黄褐色土塊30%混。

SK 57

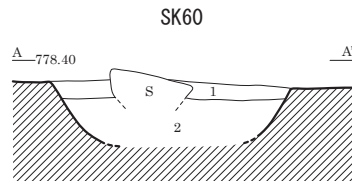
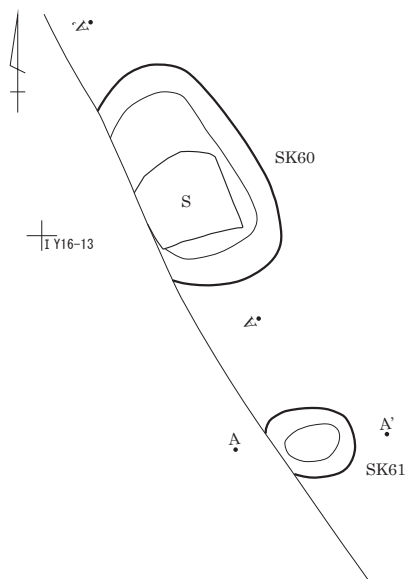


- 1 10YR4/1 褐灰色土
粘性・しまりあり。
φ1cm礫20%混。
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土
粘性・しまりあり。
φ1~10cm明黄褐色土塊
40%混。

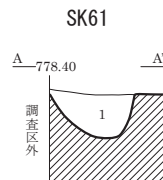
0 (1:40) 1m

図版 15 4区 平坦地 26・29 SK59~66 土坑

平坦地 26 SK60・61

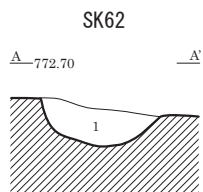
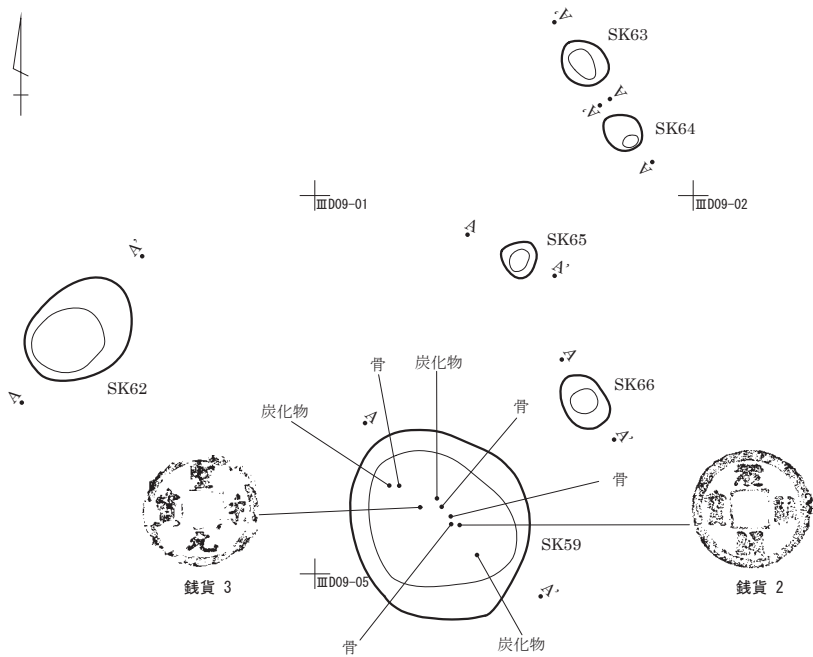


- 1 7.5YR2/1 黒色土
シルト質埴壤土。φ0.1cm砂礫20%混。
- 2 7.5YR4/4 褐色土
壤質砂土。φ0.1cm砂礫40%・炭(一部土壌化)10%混。



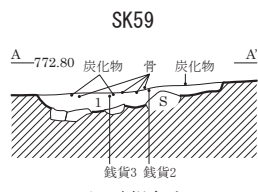
- 1 7.5YR4/4 褐色土
壤質砂土。φ0.1cm砂礫40%・炭(一部土壌化)10%混。

平坦地 29 SK59・62~66

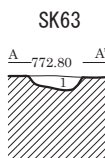


- 1 10YR3/3 暗褐色土
軽埴壤土・スコリア(黄・橙色)
各15~20%混。

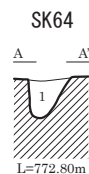
0 (1:40) 1m



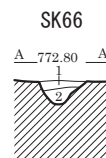
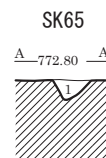
- 1 10YR3/3 暗褐色土
軽埴壤土・スコリア(黄・橙色)
各15~20%(一部被熱)混。



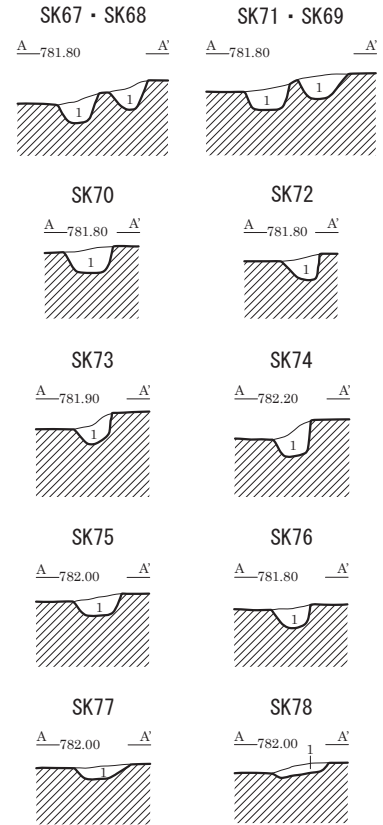
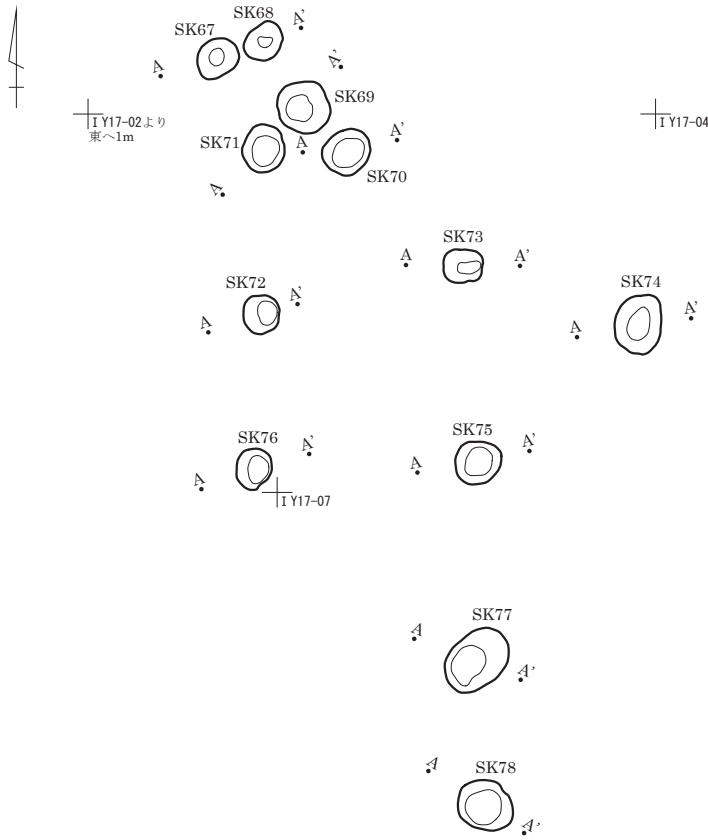
- SK63~65
1 2.5Y3/3 暗赤〜褐色土 砂質土。砂礫40%混。



- SK66
1 10YR3/2 黒褐色土 シルト質埴壤土・スコリア(黄・橙色)各10%混。
2 2.5Y3/3 暗赤〜褐色土 砂質土。砂礫40%混。

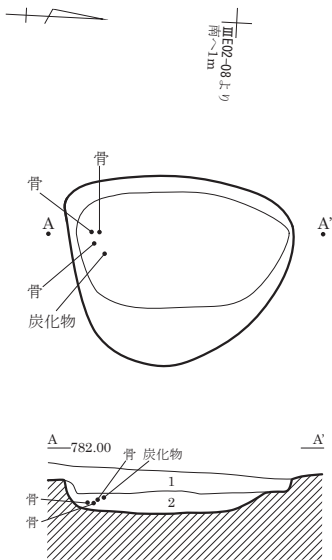


SK67~78

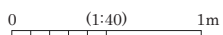


SK67~78
 1 2. 5YR4/2 灰赤色土
 シルト。砂礫10%混。
 鉄分30~40%带状周縁部に集積。

SK79



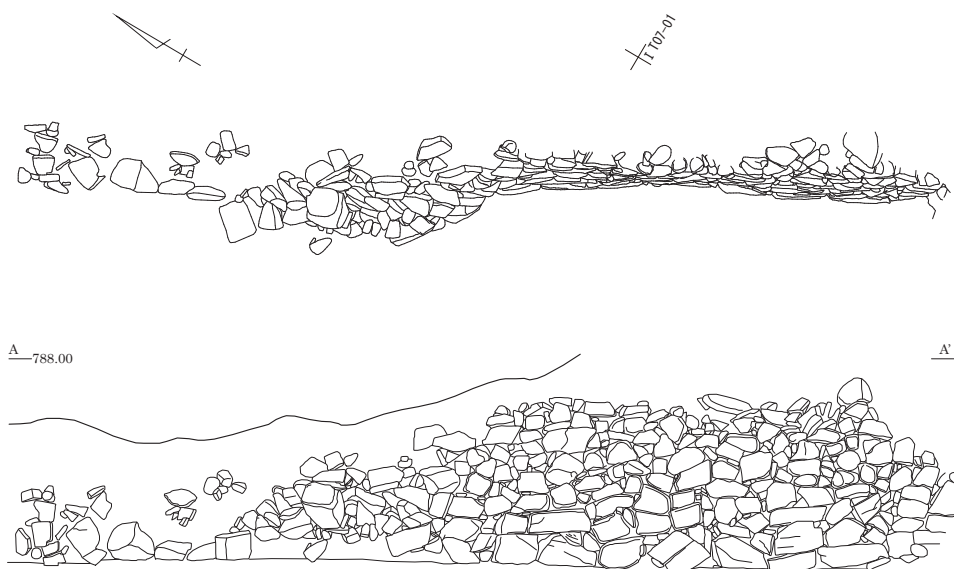
1 10YR4/6 褐色土
 シルト。φ0.1cm砂礫7%・φ0.1~0.2cm礫1%混。
 2 5YR3/6 暗褐色土
 シルト。焼土層。炭(一部壤土化)40%以上・1層土塊10%混。



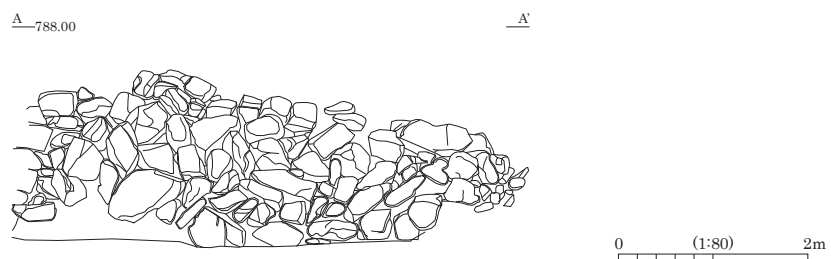
平坦地25 全景(北東から、SK79は最奥部)

図版 17 1区 平坦地5 SH01・02 石垣

SH01 平坦地5東面

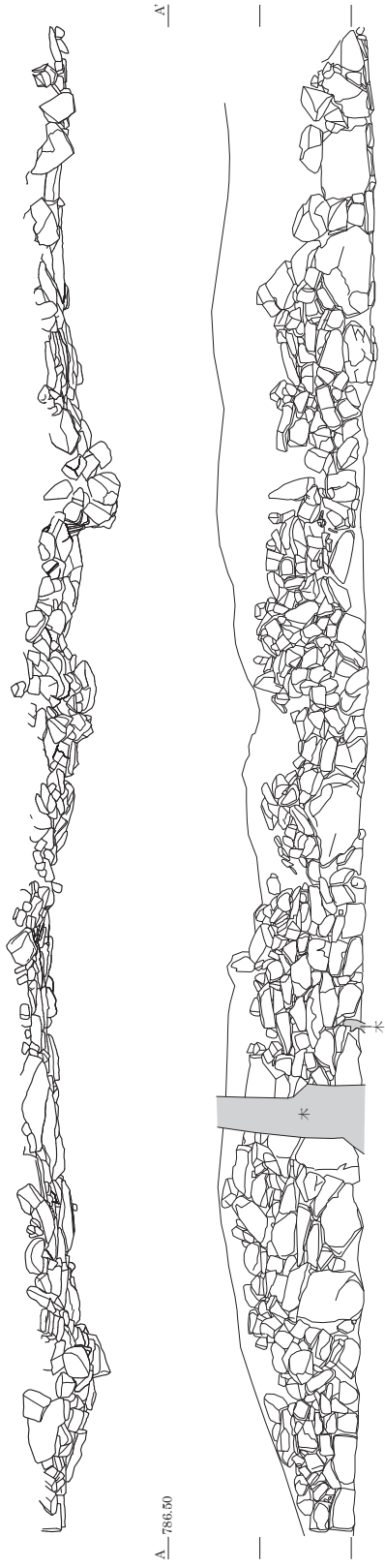


SH02 平坦地5南面



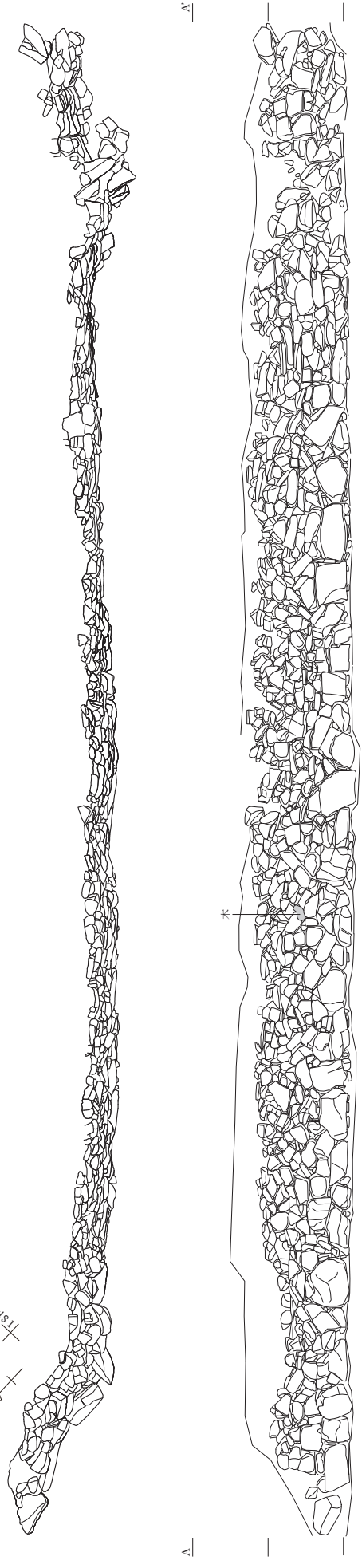
平坦地5 東面石垣検出(西から)

SH03 平坦地6東面

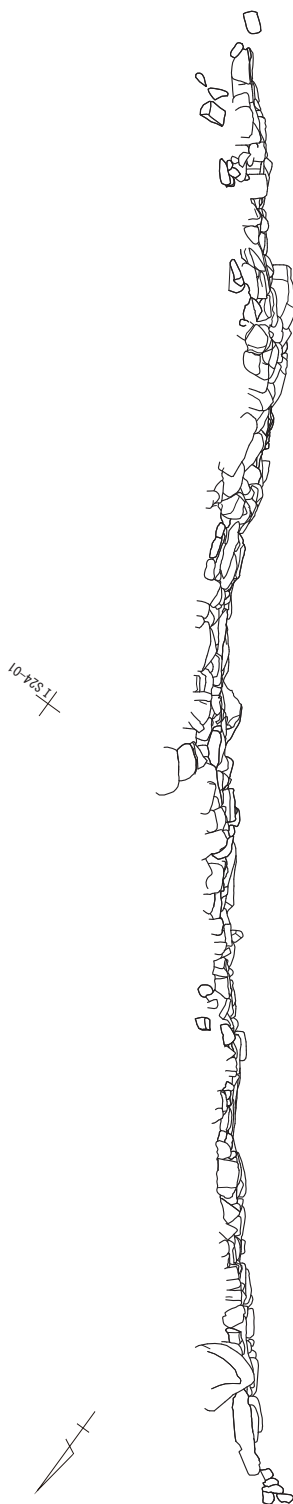


△ 7516.50

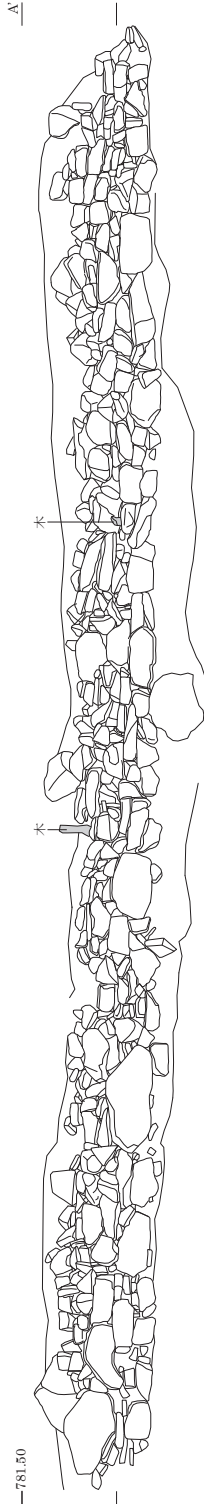
SH04 平坦地7東面



SH05 平坦地8東面

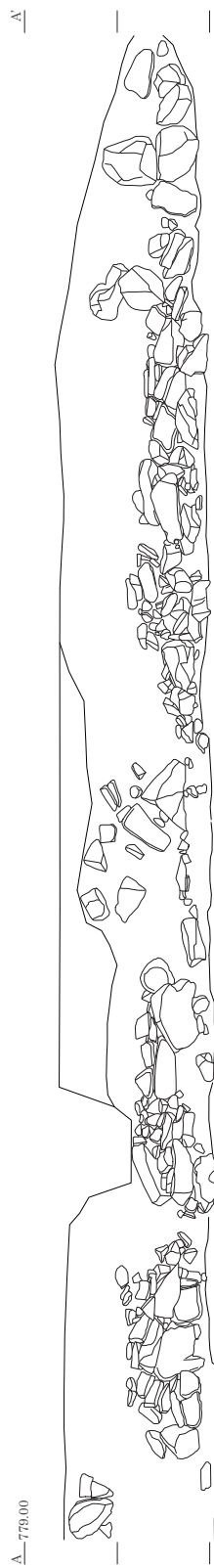


A-781.50

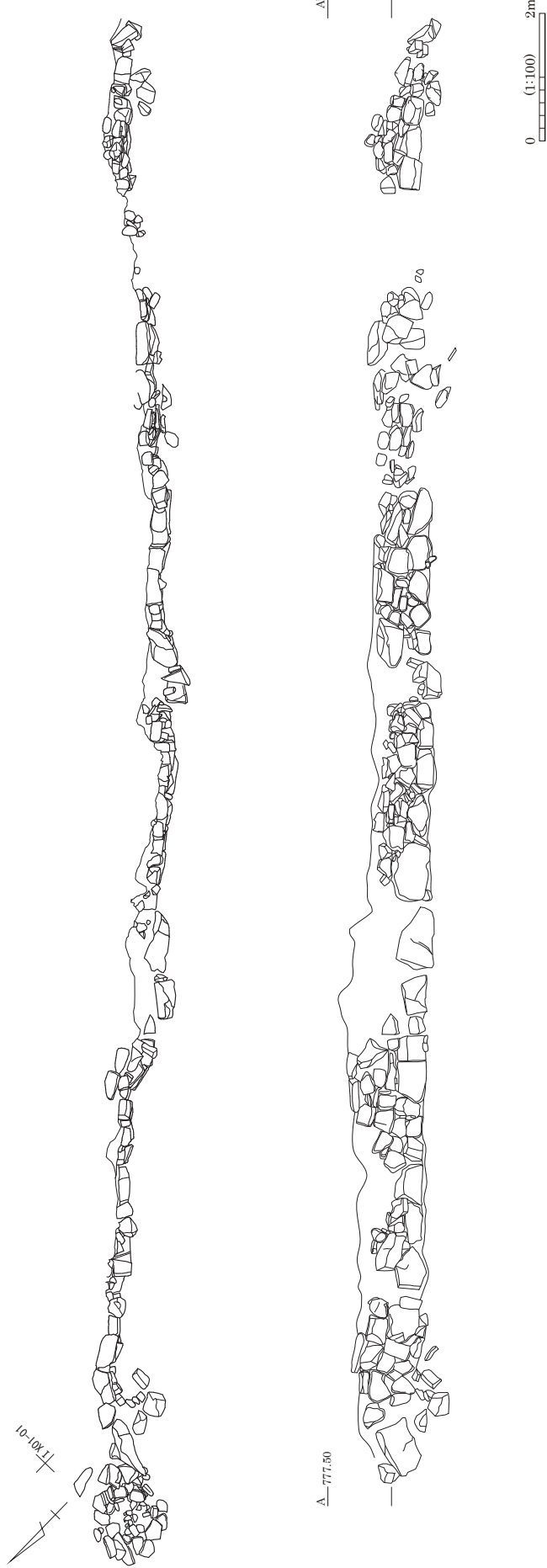


SH06 平坦地10東面

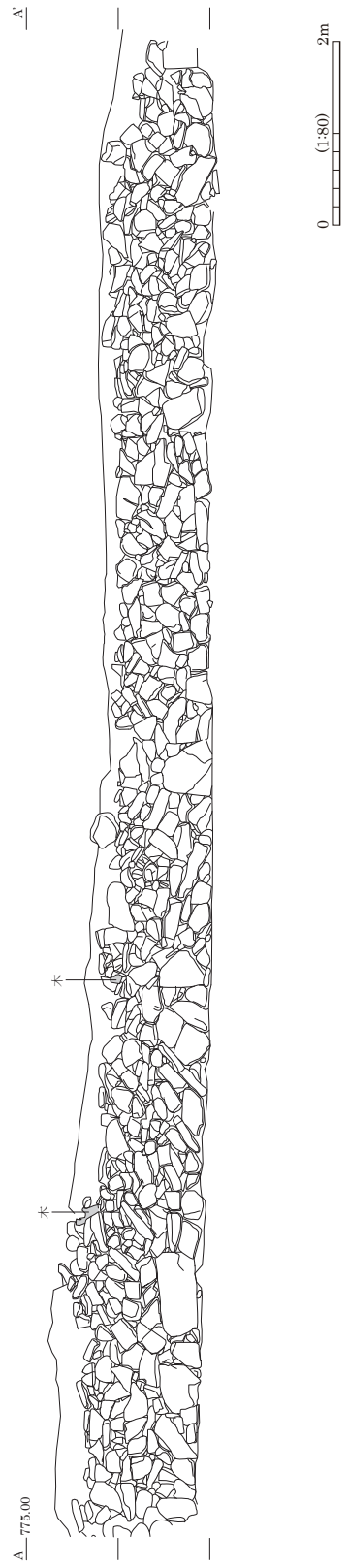
A-779.00



SH08 平坦地12東面

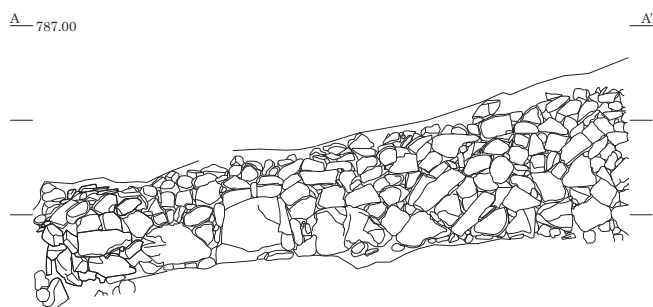


SH09 平坦地13東面



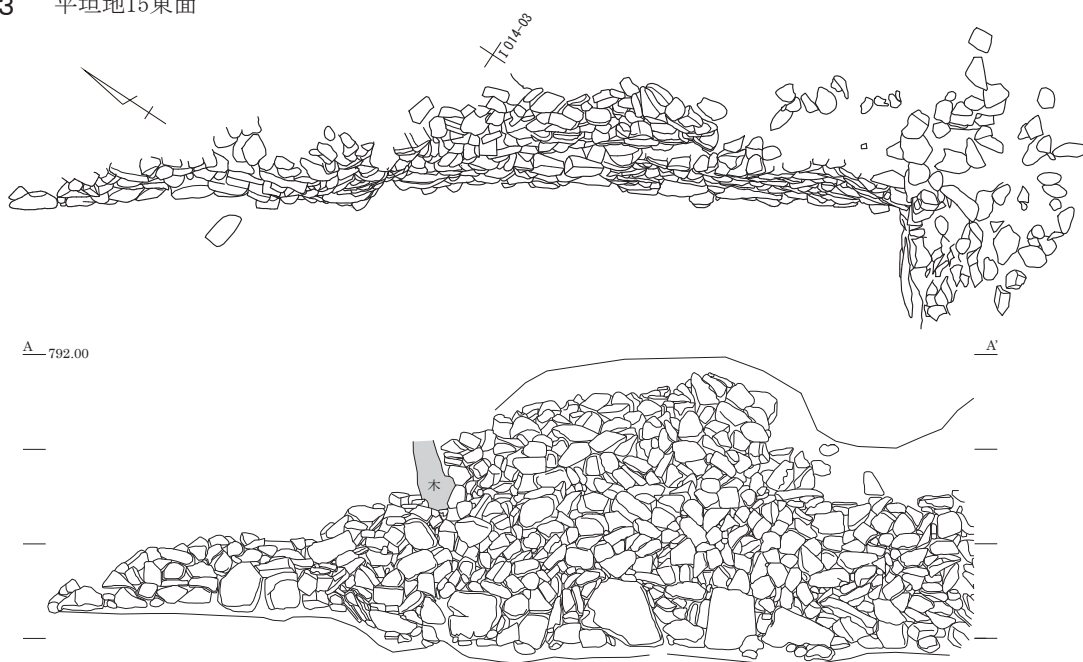
図版 21 2区 平坦地 14・15 SH10・13 石垣

SH10 平坦地14東面



2区 平坦地14 SH10接写(南から)

SH13 平坦地15東面

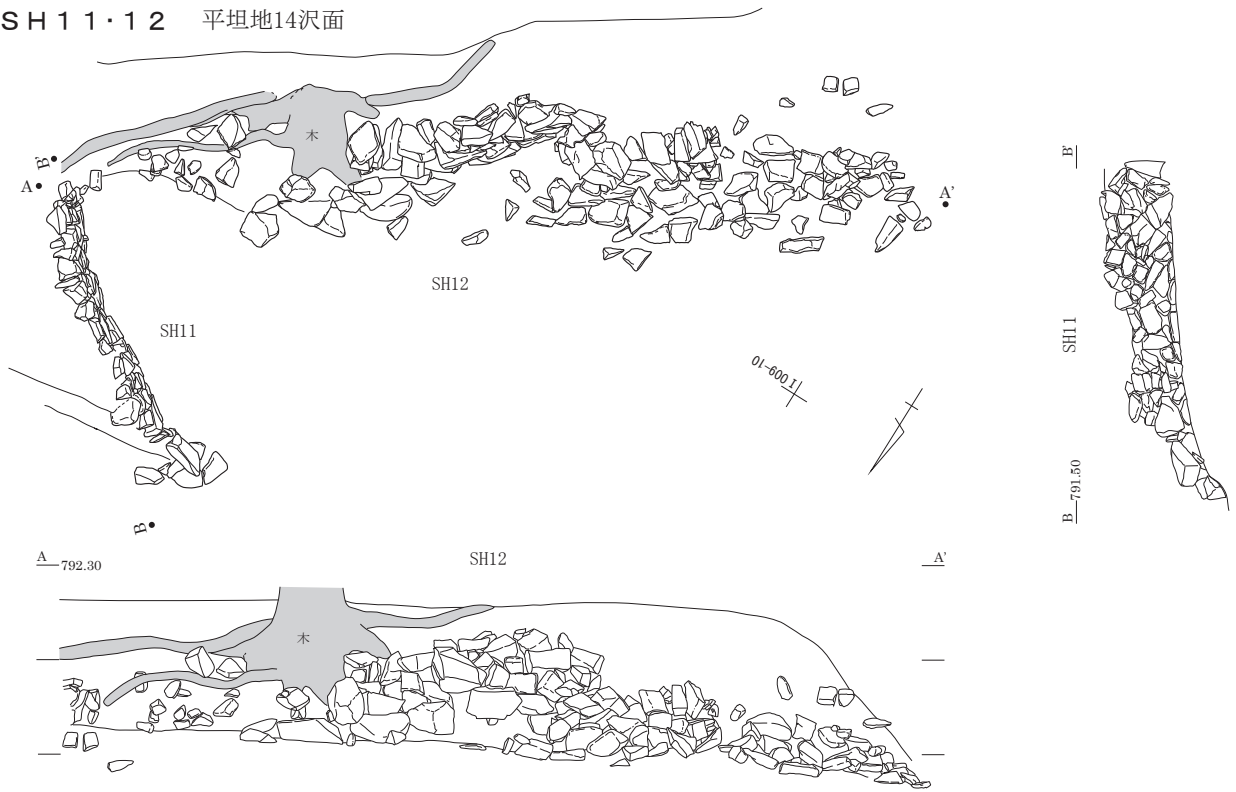


0 (1:80) 2m



2区 平坦地15 SH13 全景(東から)

SH11・12 平坦地14沢面



SH14・16~18 平坦地16突出部

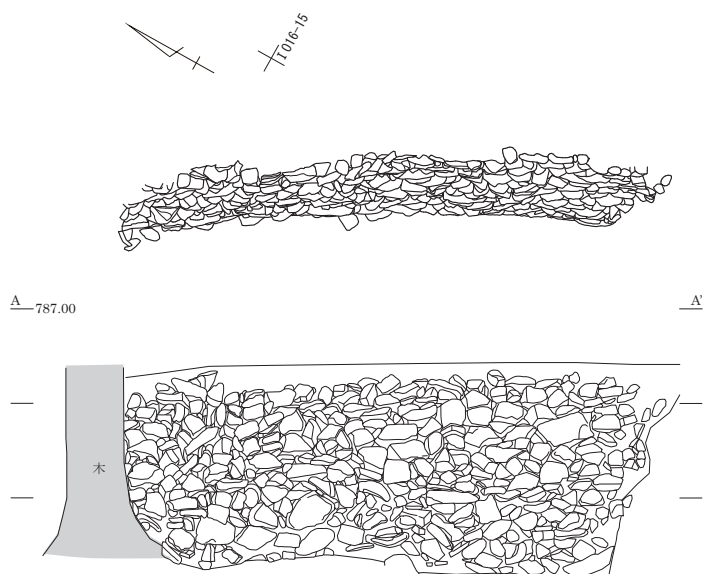


図版 23 2区 平坦地 16~18 SH15・21・22 石垣

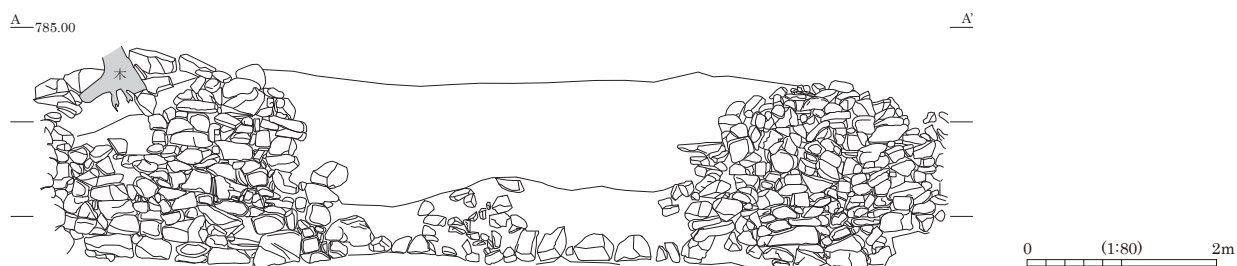
SH15 平坦地16東面



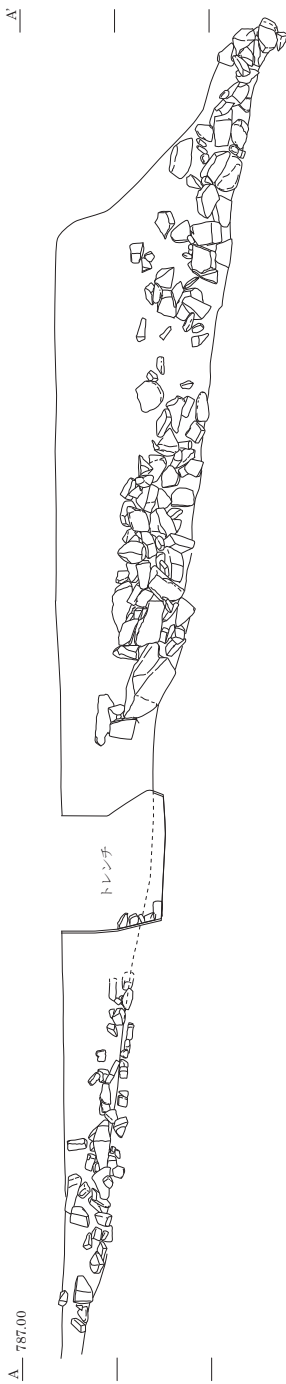
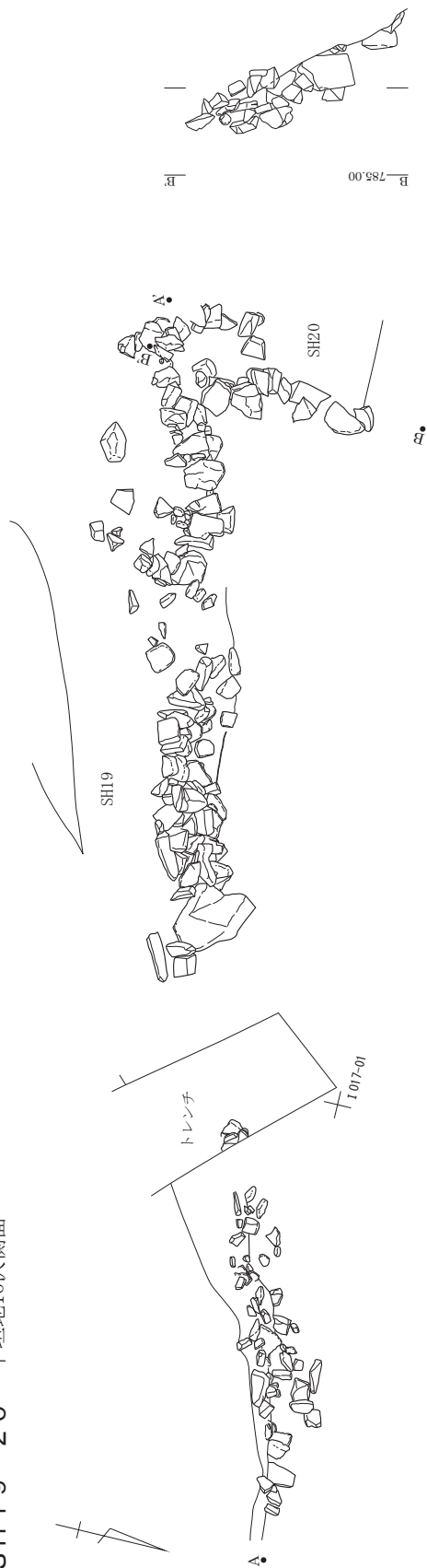
SH21 平坦地17東面



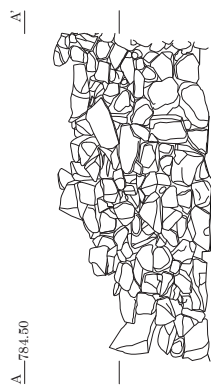
SH22 平坦地18東面



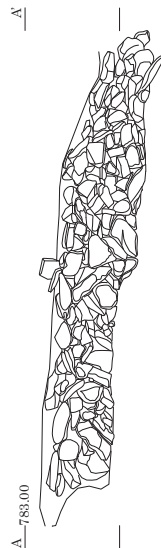
SH19・20 平坦地16沢側面



SH23 平坦地18北面



SH24(1) 平坦地18沢側東

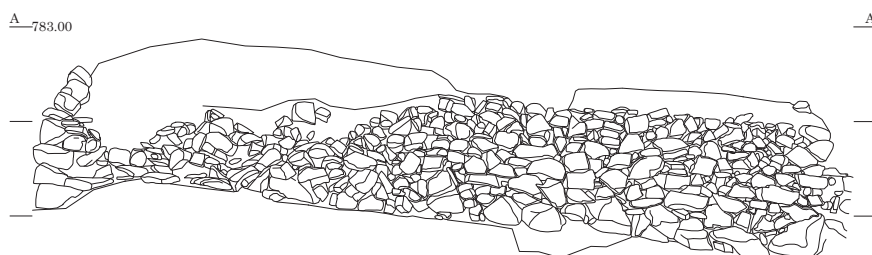


SH24(2) 平坦地18沢側西

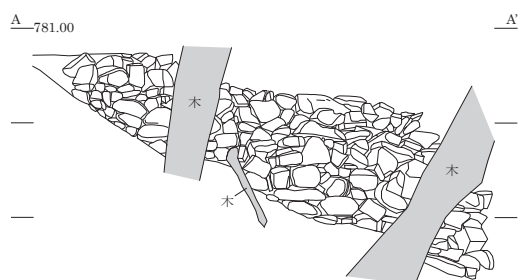


図版 25 2区 平坦地 19~21 SH25~32 石垣

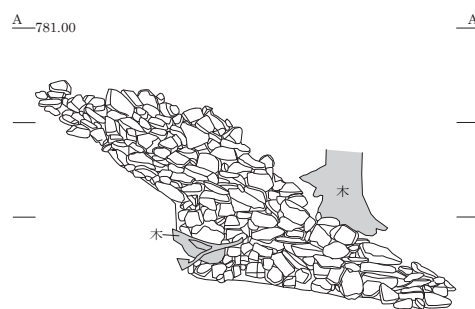
SH 25 平坦地19東面



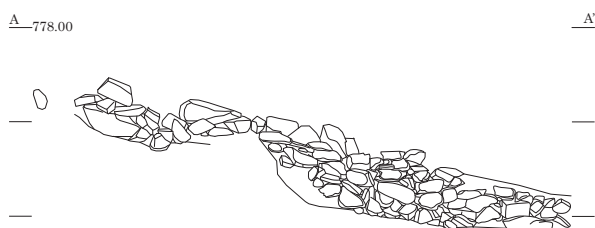
SH 26 平坦地19沢面西上段



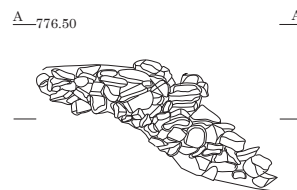
SH 27 平坦地19沢面西下段



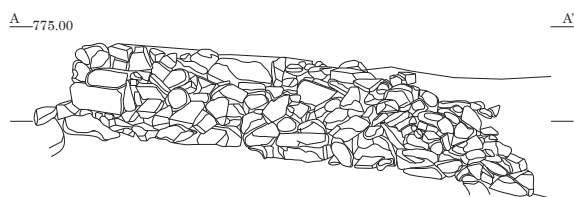
SH 28 平坦地20沢面東



SH 29 平坦地20沢面西



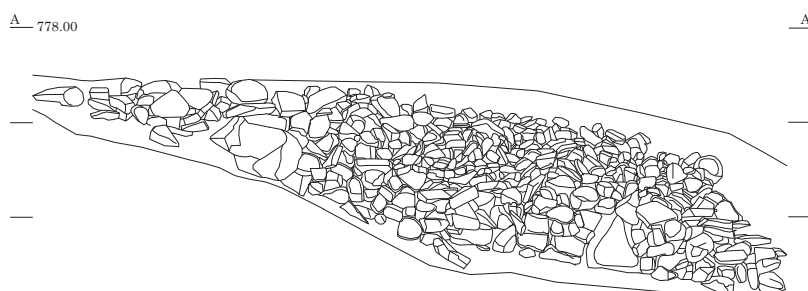
SH 30 平坦地21沢面



SH 31 平坦地21東面

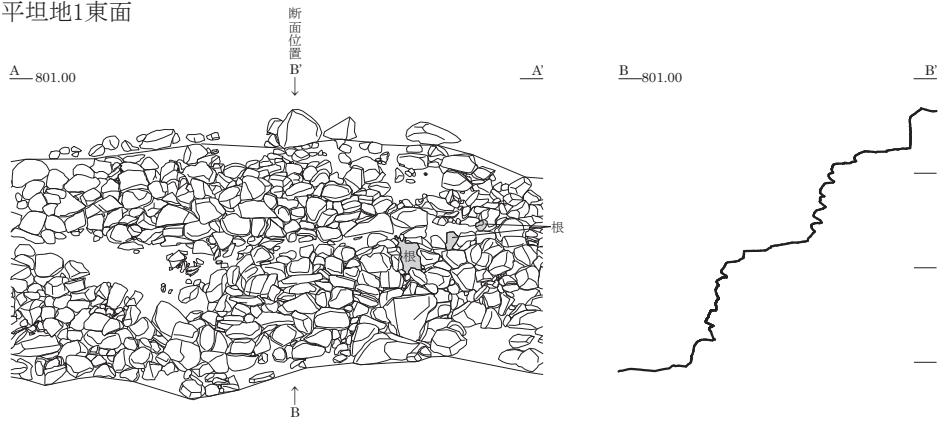


SH 32 平坦地21南面

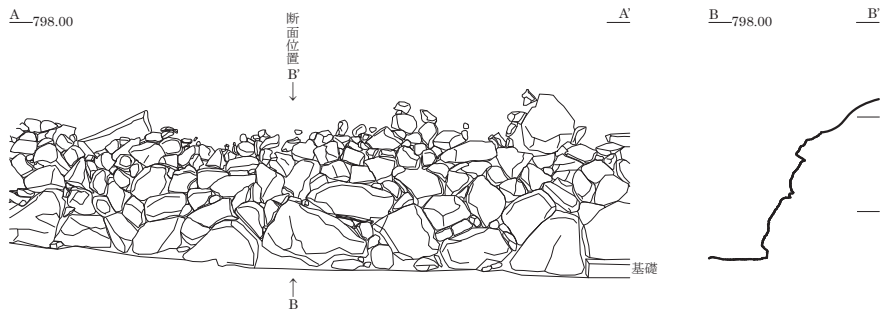


0 (1:80) 2m

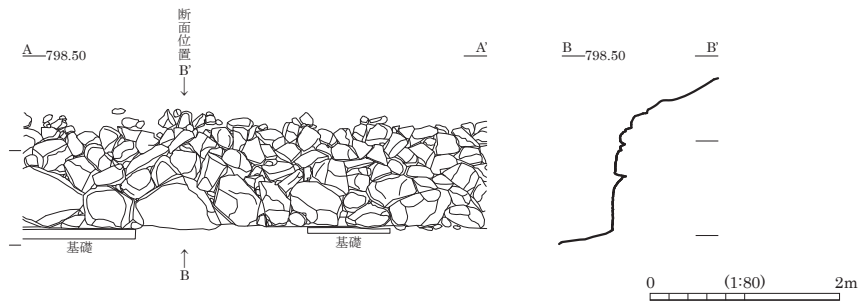
SH36 平坦地1東面



SH37(1) 平坦地2東面



SH37(2) 平坦地2東面

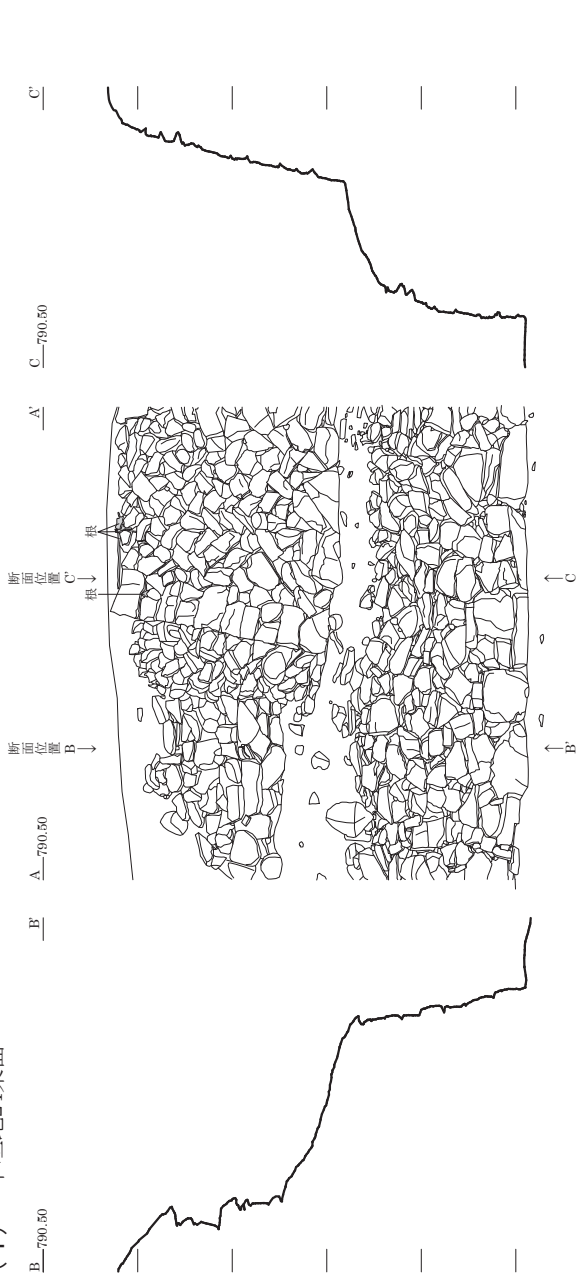


平坦地2 男女石碑(表)



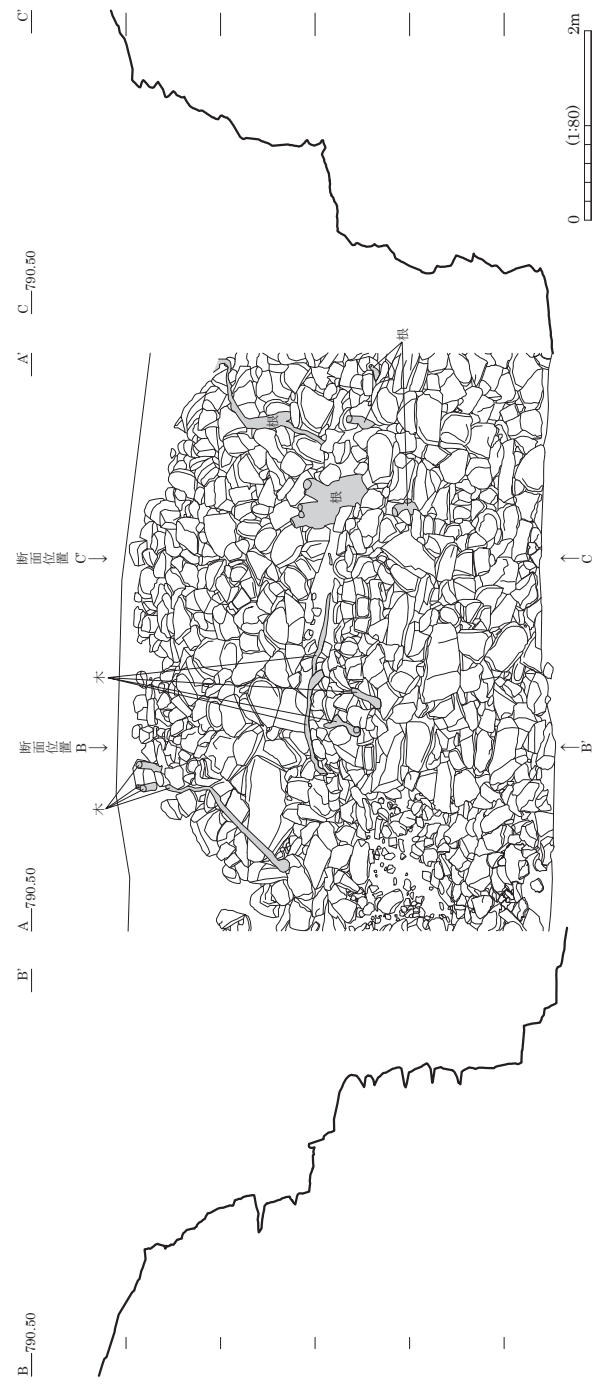
平坦地2 男女石碑(裏)

SH38(1) 平坦地24東面



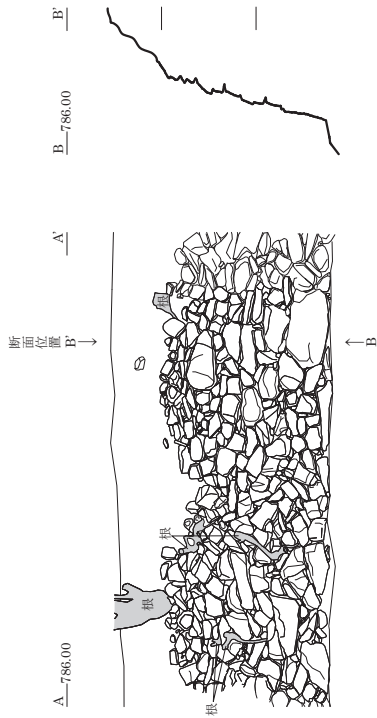
4区 平坦地24東面石垣 SH38(西半部)

SH38(2) 平坦地24東面

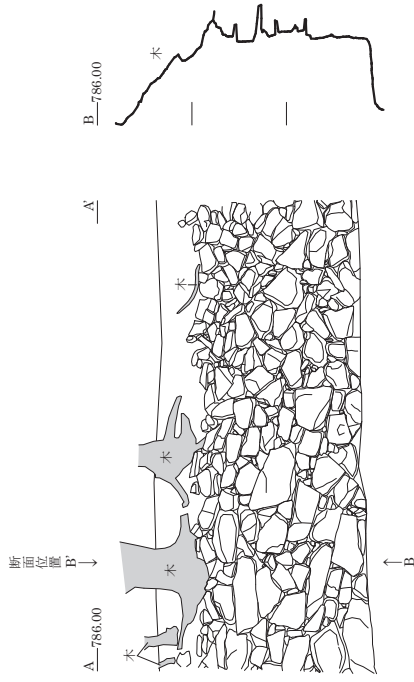


4区 平坦地24東面石垣 SH38(東半部)

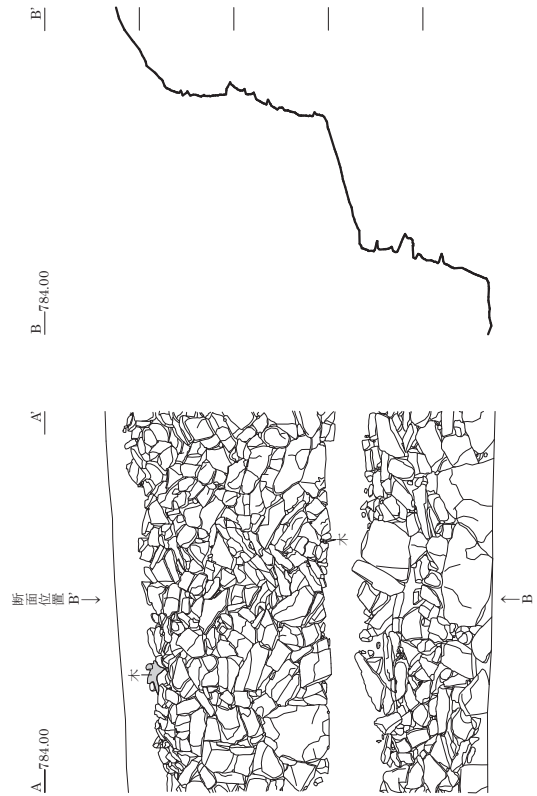
SH39(1) 平坦地25東面



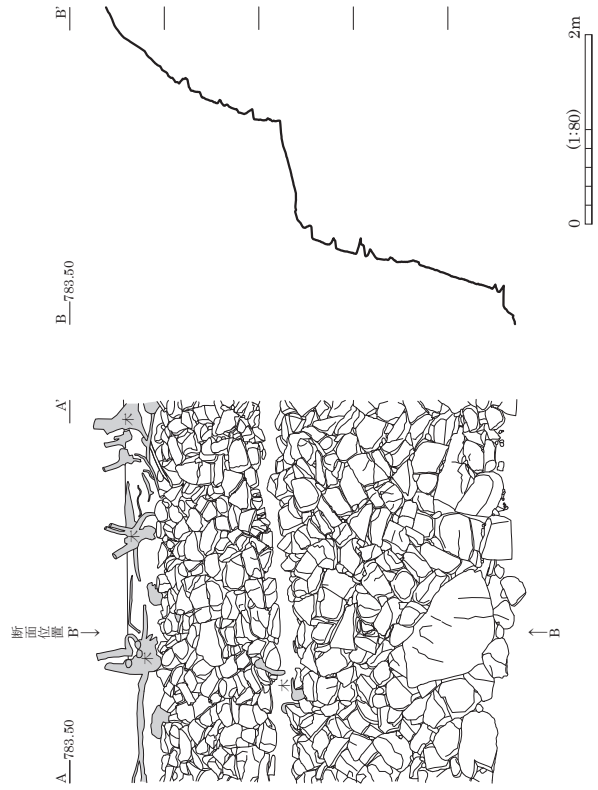
SH39(2) 平坦地25東面



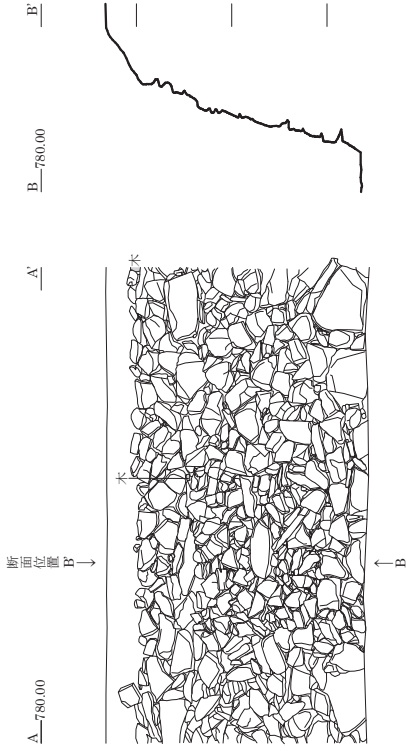
SH40(1) 平坦地26東面



SH40(2) 平坦地26東面

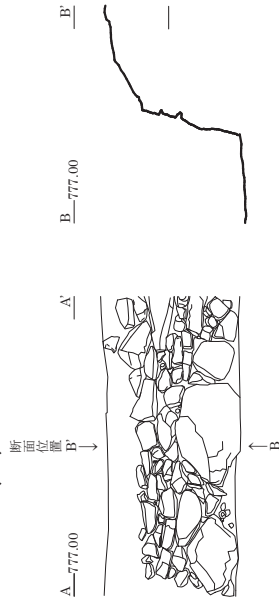


SH 4 1 平坦地27東面

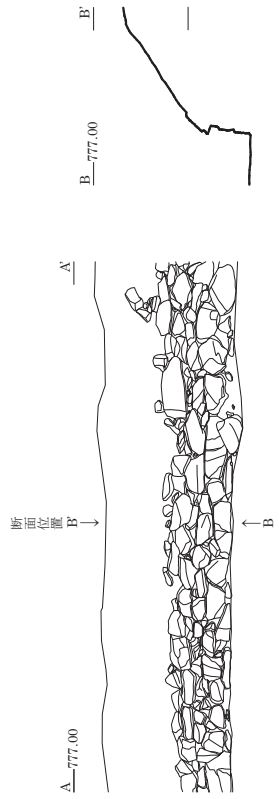


4区 平坦地27 SH41全景(南から)

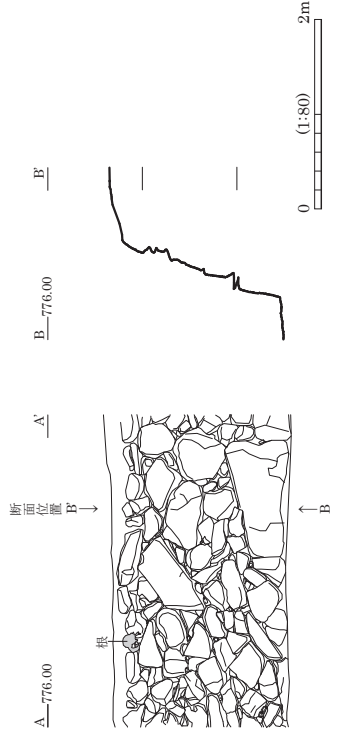
SH 4 2 (2) 平坦地28東面



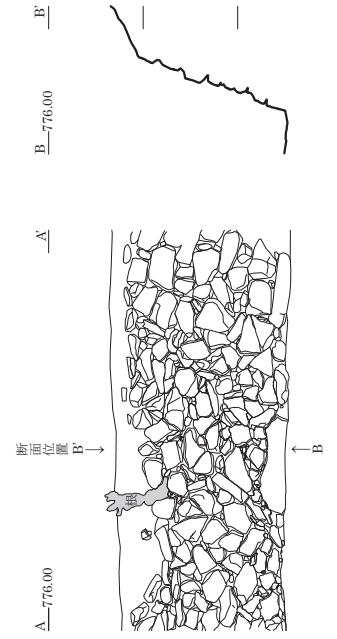
SH 4 2 (1) 平坦地28東面



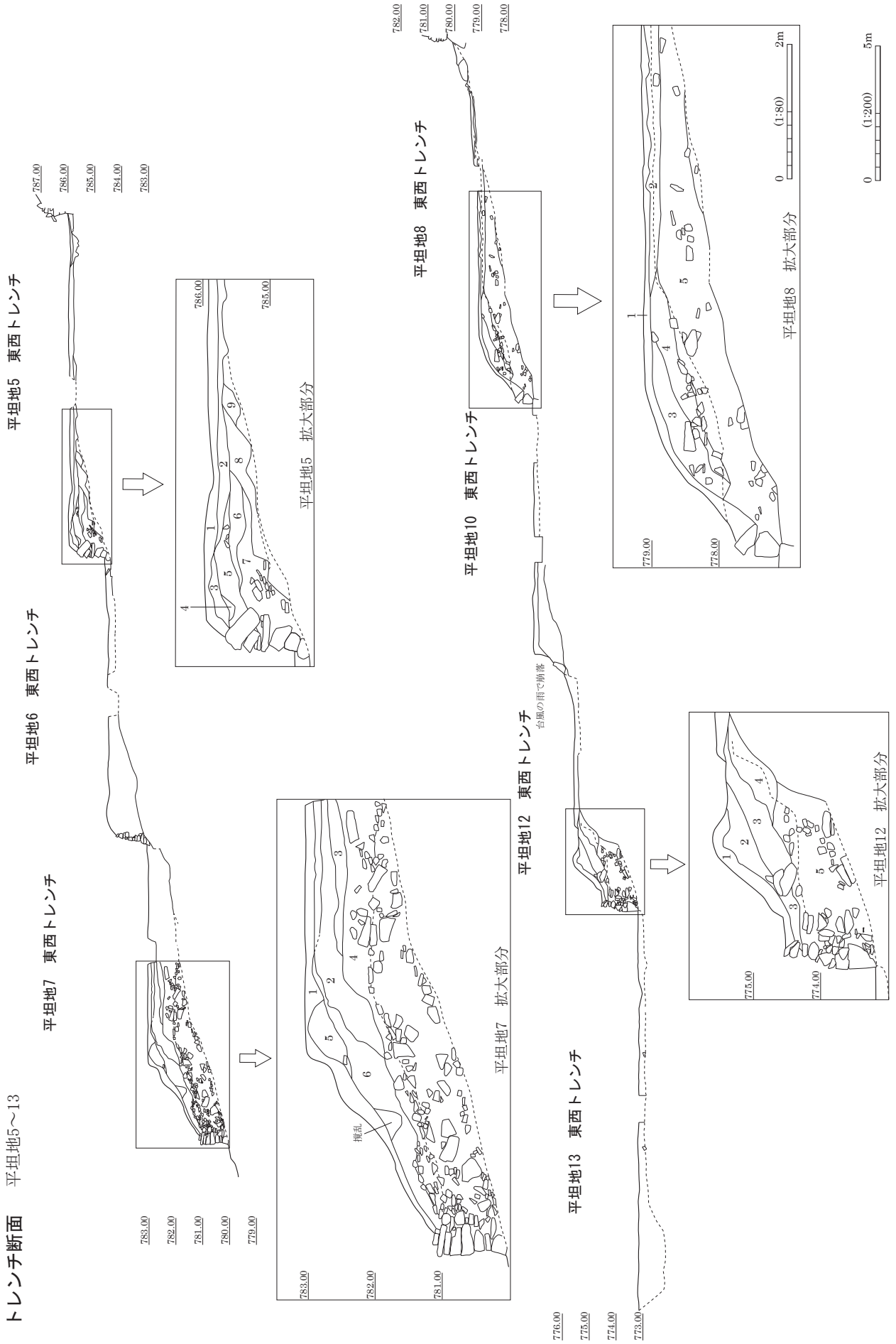
SH 4 3 (2) 平坦地29東面



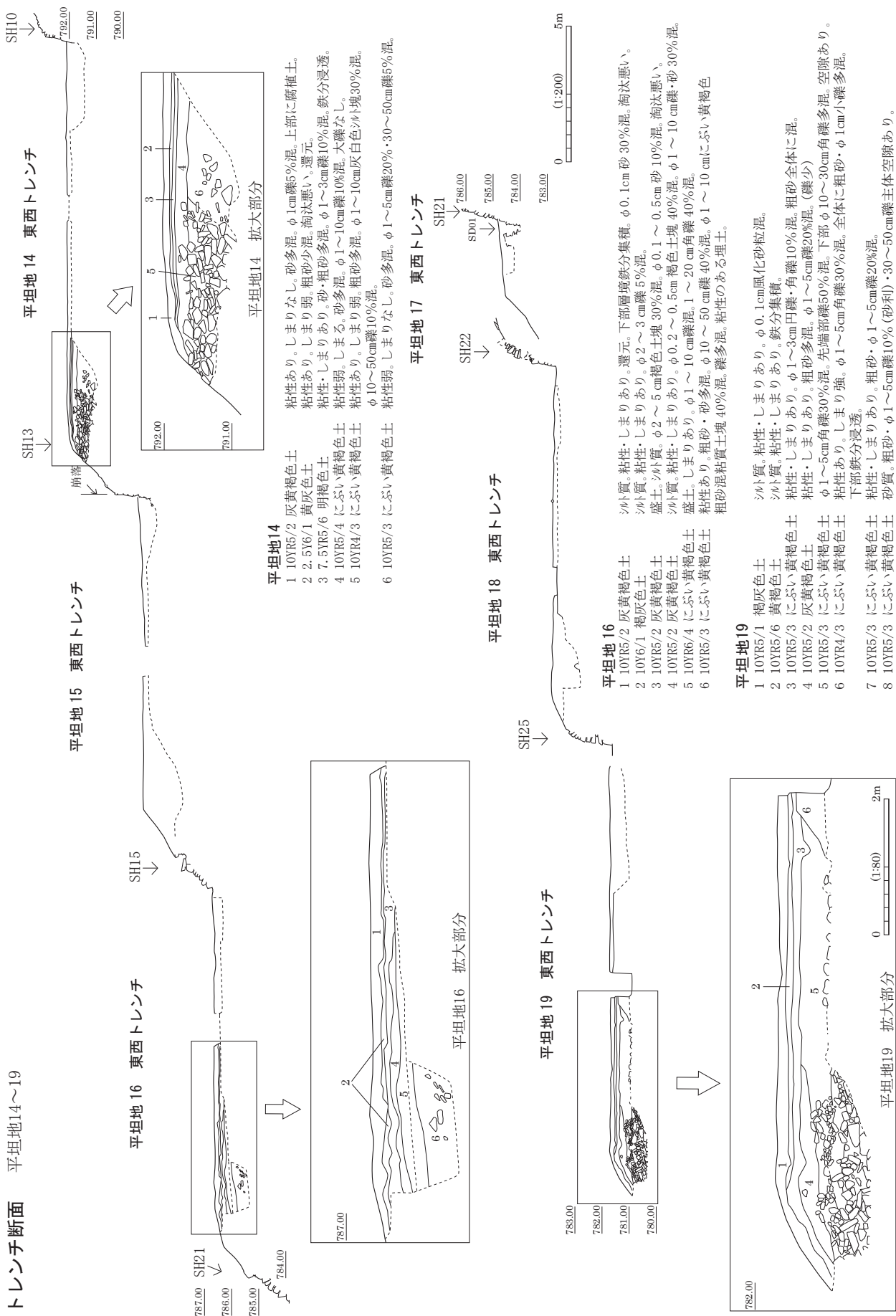
SH 4 3 (1) 平坦地29東面



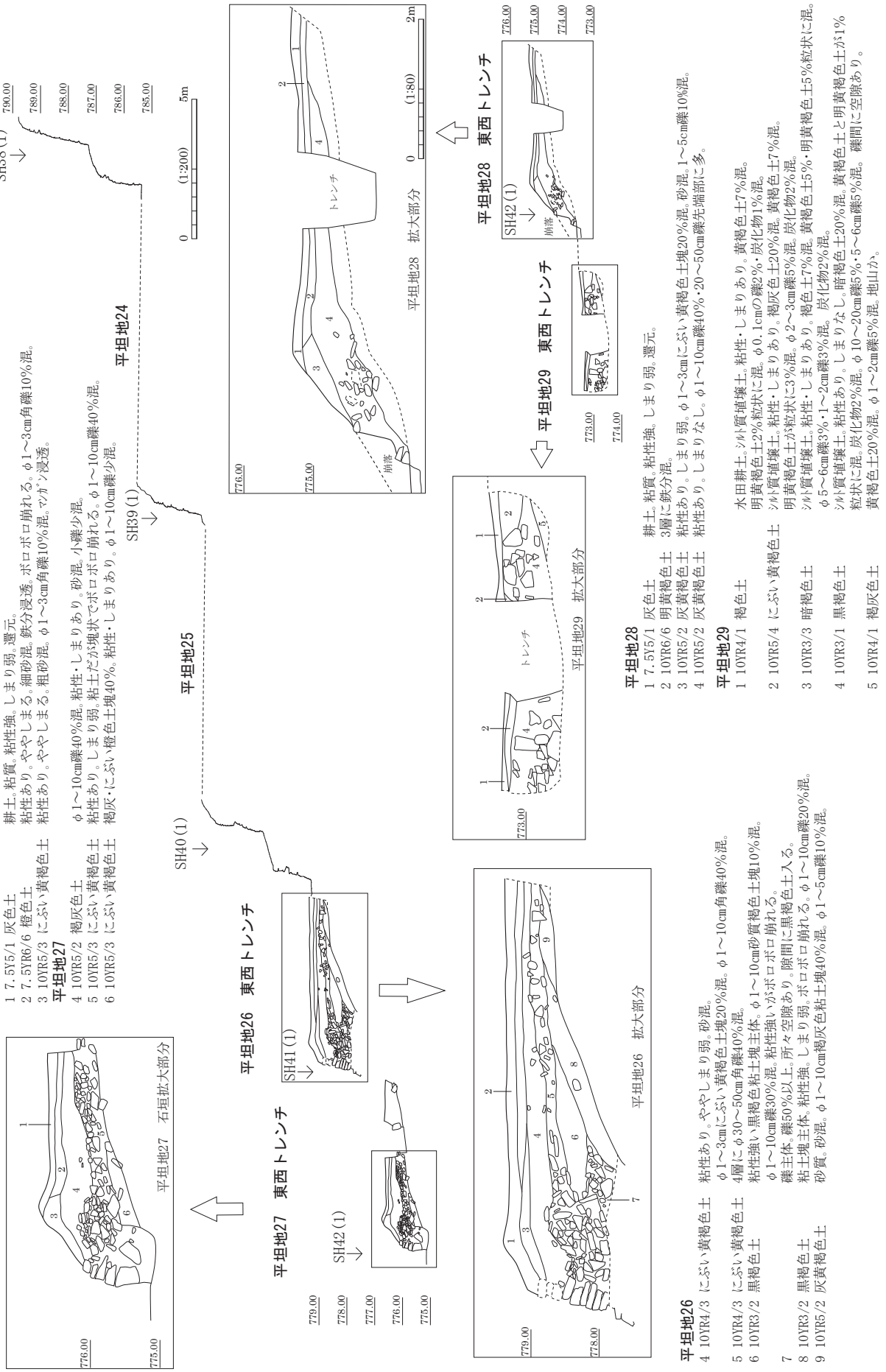
トレンチ断面 平坦地5~13



トレンチ断面 平坦地14~19



トレンチ断面 平坦地24~29



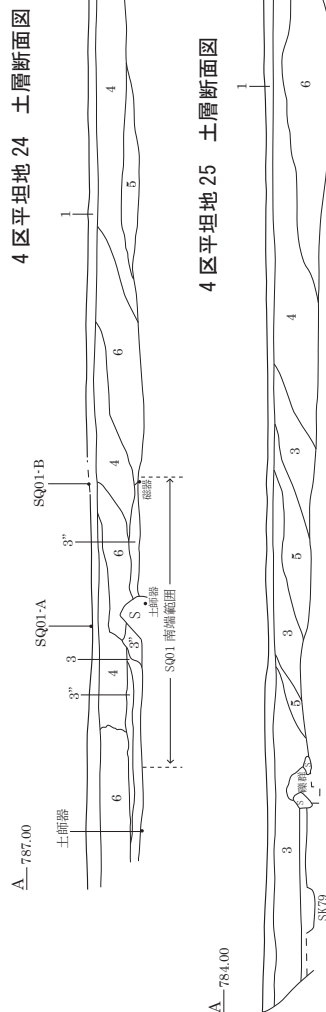
平坦地5

- 1 10YR5/2 灰黄褐色土 砂混、粘性あり、ややしまる、未分解、礫含まず、植物片混。
- 2 10YR5/1 褐灰色土 粘土質、粘性強、しまりあり、φ1~3cmにぶい黄褐色粘土(地山)塊10%混、礫含まず。
- 3 10YR5/2 灰黄褐色土 粘性あり、ややしまりあり、還元、礫少混、礫含まず。
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性あり、ややしまりあり、砂混、礫少混、礫含まず。
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性あり、ややしまりあり、粗砂多混、φ1~5cm重角礫20%・10~15cm礫2%混、炭粒混、黄褐色粘土塊10%混。
- 6 10YR4/2 灰黄褐色土 粗砂多混、φ1~10cm礫20%にぶい黄褐色粘土塊10%混、淘汰悪い。
- 7 10YR5/1 褐灰色土 粗砂多混、粘性、しまりあり、φ1~3cm小礫40%・5~30cm礫石垣背面に40%混、淘汰悪い。
- 8 10YR4/1 褐灰色土 全体に砂質、粘性あり、ややしまりあり、φ1~5cmにぶい黄褐色土・黒褐色土塊40%・φ1~15cm礫3%混。
- 9 10YR2/2 黒褐色土 粘土塊主体、堅くしまる、φ1~3cm灰褐色土塊(地山層)の還元したものか10%混、φ1~10cm礫10%混。

平坦地7

- 1 10YR5/2 灰黄褐色土 粒子細かい、粘性あり、しまり弱、礫含まず、還元化、やや腐植。
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粒子細かい、粘性あり、堅くしまる、上部に鉄分浸透、礫含まず、全体に砂混。
- 3 7.5YR5/1 明褐色土 粒子細かい、粘性あり、堅くしまるが2層より砂含有率高、炭化物粒1%混。
- 4 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性あり、しまり弱、上部φ1~10cm角礫30%・粗砂多混、下部にφ20~50cm礫多混、炭化物1%混。
- 5 10YR5/2 灰黄褐色土 粘土質だが粘性強、ややしまる、礫含まず、還元。
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粗砂混、粘性あり、ややしまりあり、φ1~5cm小礫・粗砂20%・炭化物粒1%混。

南東外周断面 平坦地24・25・29



4区平坦地24 土層断面図

4区平坦地25 土層断面図

4区平坦地29 土層断面図



平坦地8

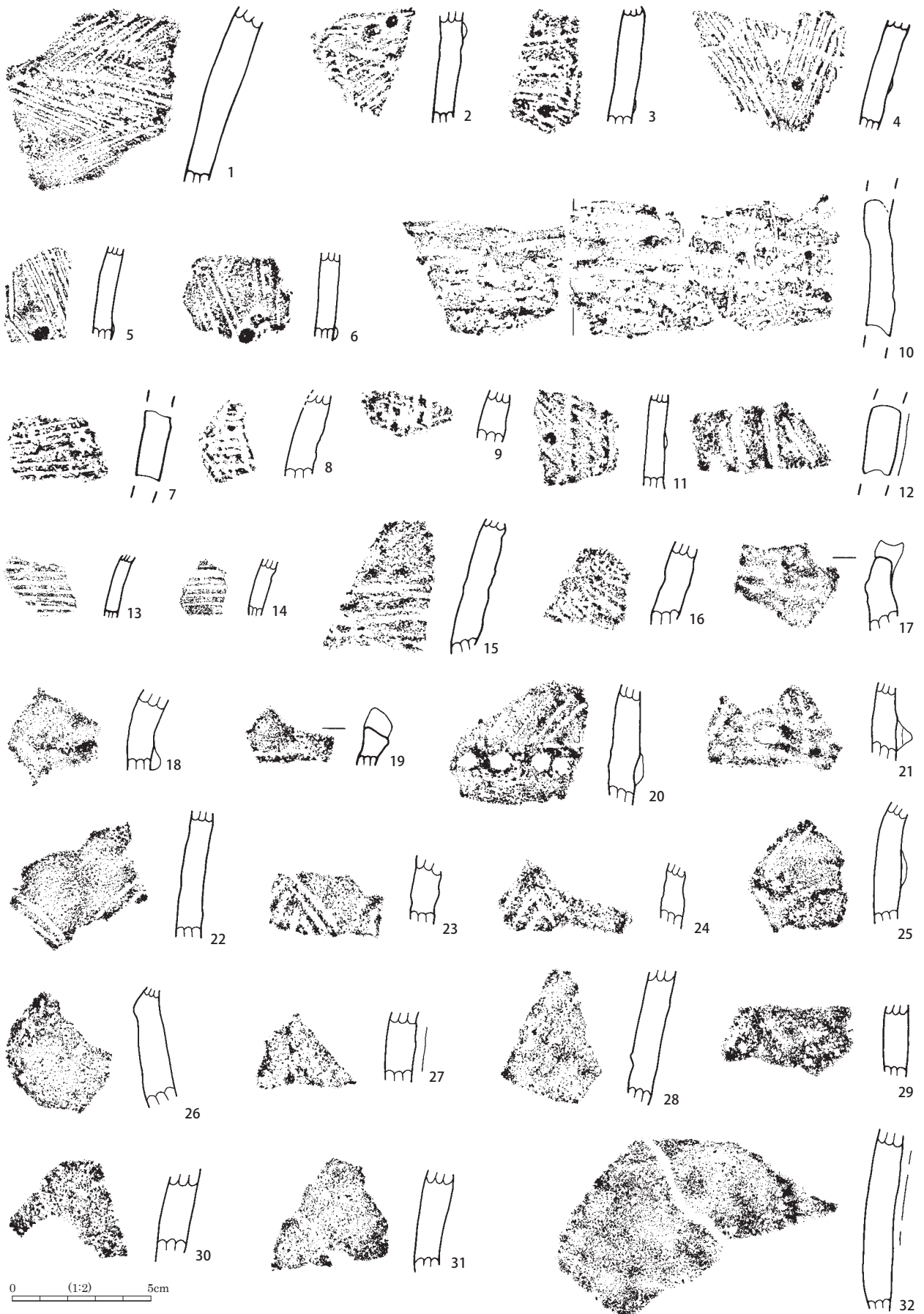
- 1 10YR3/3 暗褐色土 シト質埴壤土、粘性あり、しまりなし、黒褐色土5%、にぶい黄褐色土5%混、褐色土2%・炭化物2%粒状に混。
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 シト質埴壤土、粘性なし、しまりあり、灰黄褐色土10%混、黄褐色土2%・明黄褐色土1%・炭化物が1%粒状に混、φ1cmの礫5%混。
- 3 10YR3/3 暗褐色土 シト質埴壤土、粘性ややあり、しまりあり、褐灰色土10%混、黄褐色土5%・明黄褐色土3%・炭化物1%粒状に混、φ3~4cm礫5%混。
- 4 10YR3/2 黒褐色土 シト質埴壤土、粘性ややあり、しまりあり、褐色土5%混、黄褐色土1%・明黄褐色土2%・炭化物2%粒状に混、φ10cm礫3%・3~4cm礫5%混。
- 5 10YR3/2 灰黄褐色土に黄褐色土が15%・褐灰色土が10%混、明黄褐色土2%・炭化物2%粒状に混、φ7~8cm礫3%・3~4cmの礫5%混。

平坦地12

- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 シト質埴壤土、粘性なし、しまりあり、明黄褐色土2%・炭化物2%粒状に混、φ5mm礫5%混。
- 2 10YR4/1 褐灰色土 シト質埴壤土、粘性なし、しまりあり、褐色土20%・黄褐色土3%・明黄褐色土1%粒状に混、φ1cm礫2%混、炭化物1%粒状に混。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし、しまりあり、褐灰色土10%混、黄褐色土1%・炭化物粒状に混、φ2~3cm礫3%混。
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 シト質埴壤土、粘性なし、しまりあり、黄褐色土2%・明黄褐色土1%炭化物2%粒状に混、φ10~15cm礫20%混。
- 5 10YR3/3 暗褐色土 シト質埴壤土、粘性なし、しまりあり、黄褐色土3%・明黄褐色土3%・炭化物2%粒状に混、φ30cm礫石垣側に10%、底部に10%混、φ10cm礫10%混。
- 6 10YR4/1 褐灰色土 シト質埴壤土、粘性ややあり、しまりあり、黄褐色土20%混、明黄褐色土5%粒状に混、φ10cm礫3%混、炭化物1%混、地山。

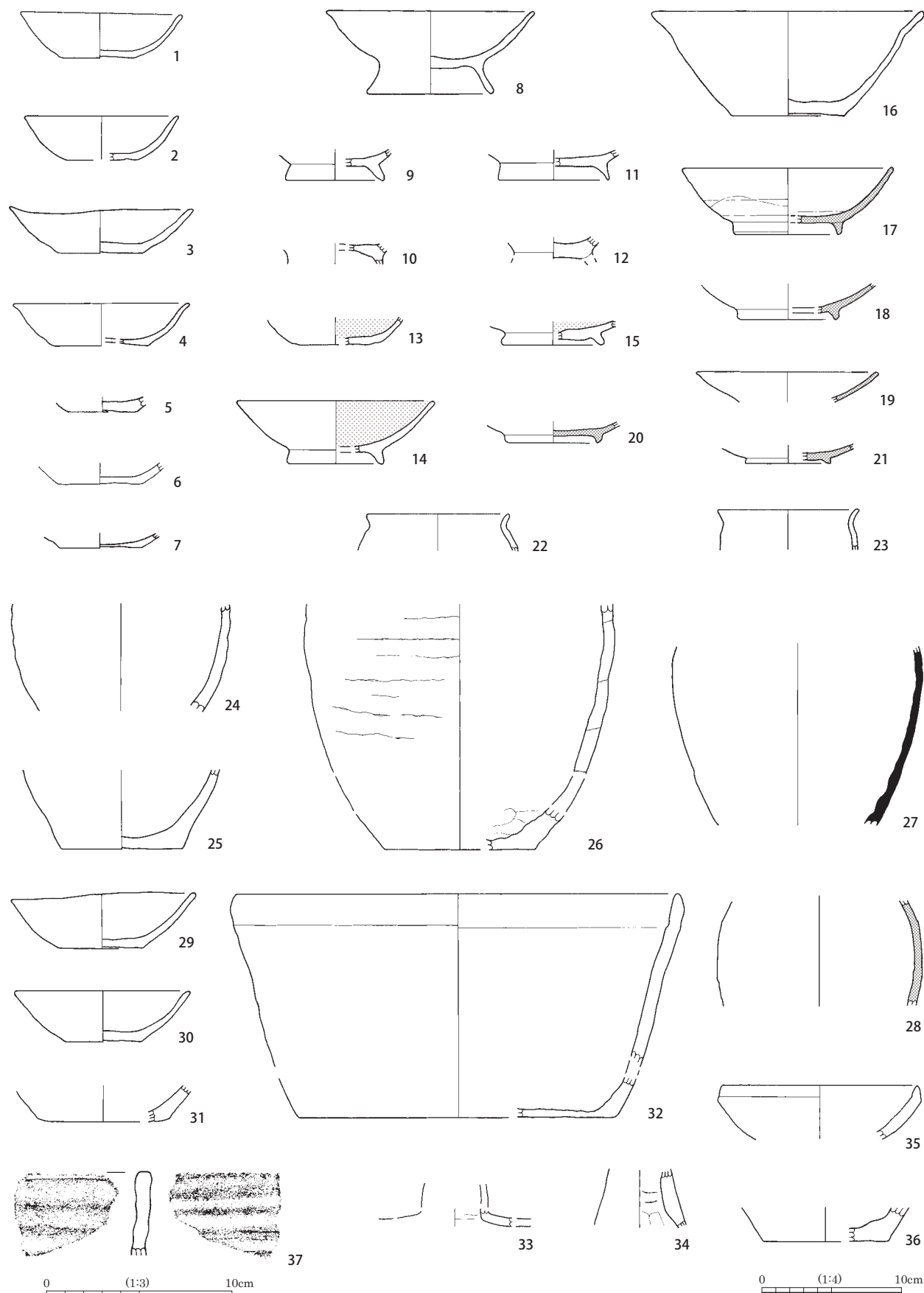
平坦地24・25・29 共通

- 1 10YR3/2 灰褐色土 水田耕土、シト質、粘性あり、しまり弱、砂~細礫少混。砂脱、上部表土剥ぎ削平、層厚5~8cm、下部は鉄分集積。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 巨礫ない盛土層、シト質、粘性弱、しまりあり、φ~0.5cm風化礫5%混、植物根少。
- 2' 10YR5/2 灰黄褐色土 粘性・しまりあり、φ~0.5cm風化礫5%混。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 細粒砂(褐色・白色)混。
- 3' 10YR5/4 にぶい黄褐色土 盛土層、シト質、しまり・粘性弱、φ~0.3cm風化礫2%混。
- 4 10YR5/6 黄褐色土 シト質、中・大礫少量~30%混。
- 4' 10YR5/2 灰黄褐色土 シト質、中・大礫少量混。
- 5 10YR3/3 暗褐色土 シト質塊と黄褐色シト質の混合、礫層、大・巨礫30%超~70%。
- 6

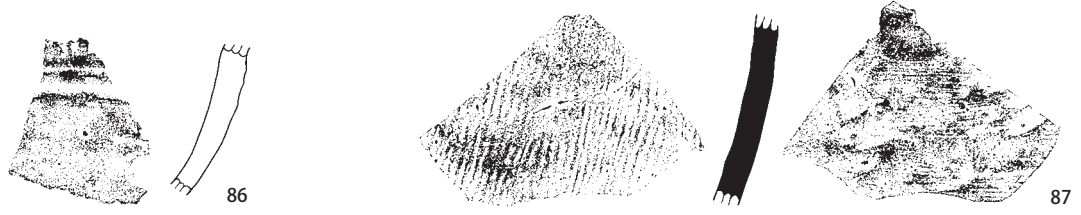
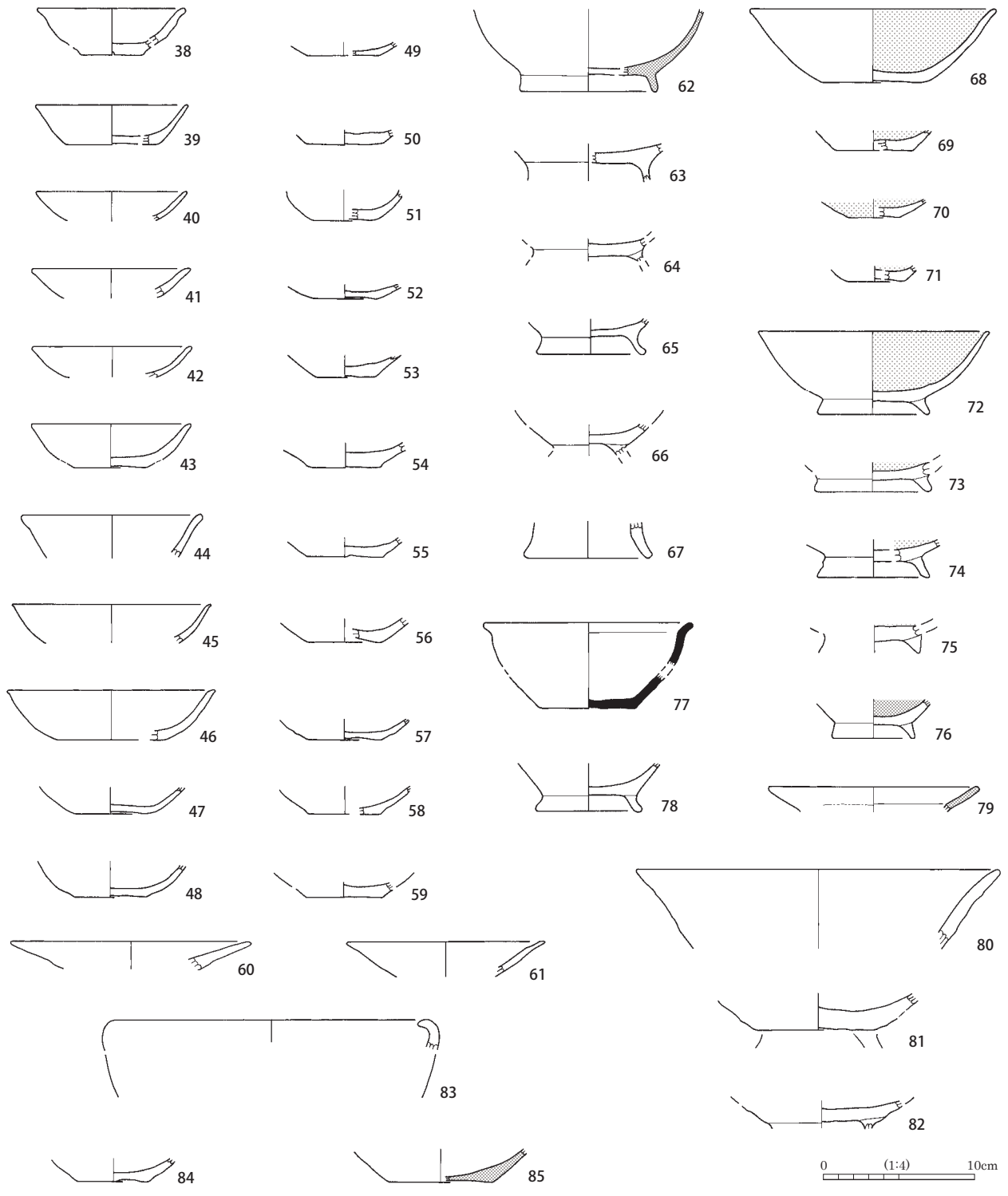


SB01 : 17~32 SQ01 : 1~5·7·9·10·12~14 平坦地2 : 11 平坦地7 : 15·16 IY13 : 6·8

图版 35 3区 古代他 土器·陶器

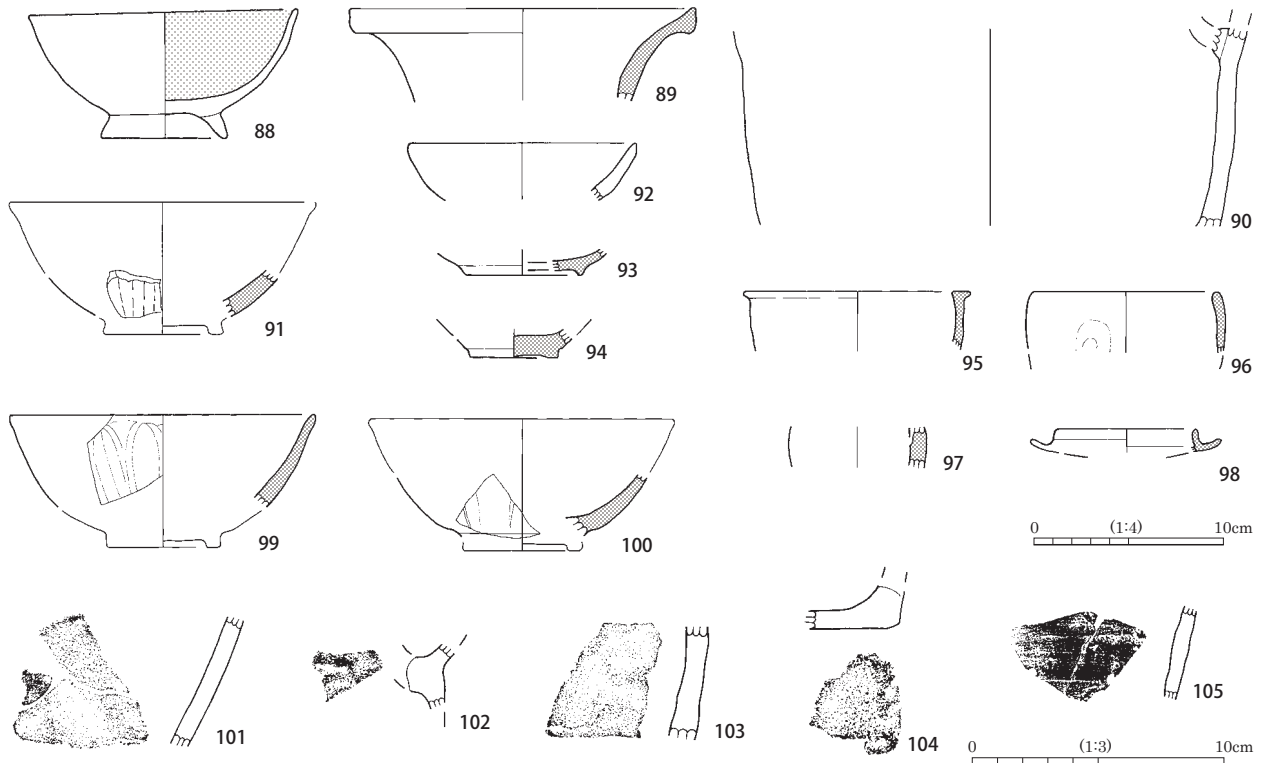


SB01 : 1~28 SD03 : 34 SK11 : 31 SK17 : 29·30 平坦地7 : 35 平坦地9 : 36 3-2区 : 32·33·37



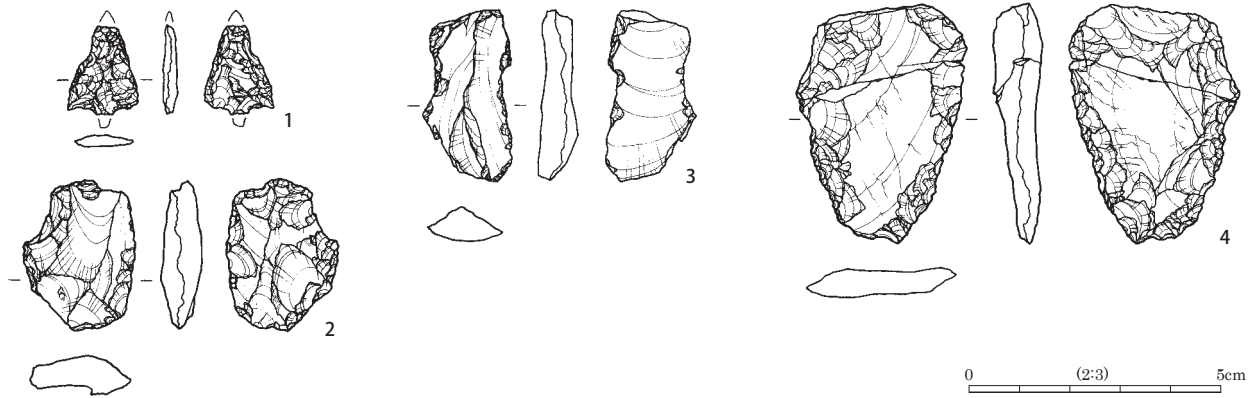
SQ01 : 38·39·43·47·48·51~53·62·63·65·67·68·71·72·77~81·87 SD09 : 84 I T16 : 59·85
 I T16·17·22 : 75(内耳) I Y13 : 40~42·44~46·49·54~58·60·61·64·66·69·70·73·74·76·82·83·86 I Y14 : 50

图版 37 4·5区 古代·中近世土器·陶磁器、石器、金属製品



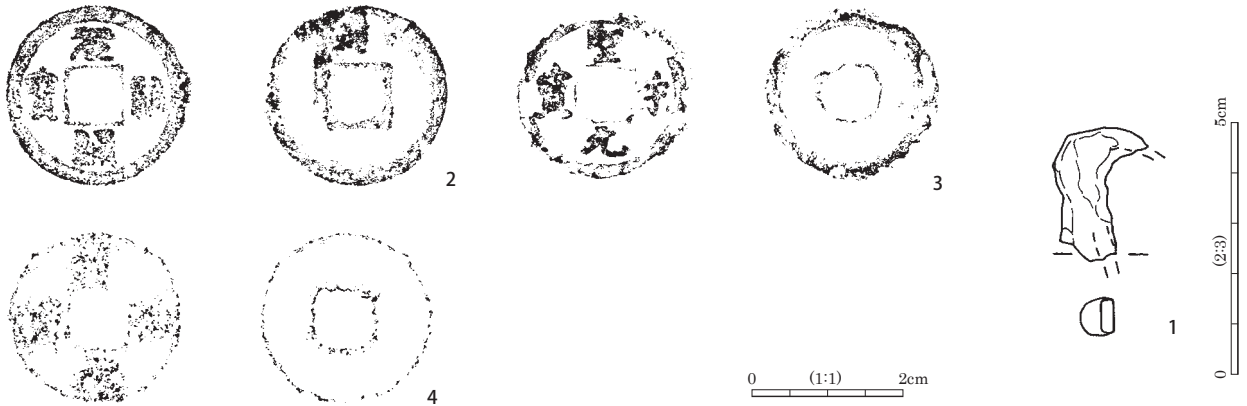
1 4·5区古代·中近世土器·陶磁器

SB03 : 91~98·102~104 平坦地2 : 88·89 平坦地25 : 105 平坦地29 : 99
I T16·17·22 : 90 II P19 : 101 III D08 : 100



2 石器

SB01 : 2 SK11 : 1 SK17 : 4 SK40 : 3



3 鉄製品・銭貨

SB01 : 1 SK59 : 2·3 平坦地25 : 4



調査区全景空撮（南から）



遺跡遠景（南から）



薄川・市街地眺望（北東から）



3-2~4区空撮（南から）



3・4区空撮（北から）

PL2 3-2 区遺構 (SB01 住居跡、土坑)



SB01 黒色土範囲 (西から)



SB01 黒色土範囲土器出土状況 (北から)



SB01-17 出土状況 (西から)



SB01 カマド周辺土器出土状況 (南から)



SB01 周辺ピット完掘 (西から)



SK07・08 南北断面 (東から)



SK07 完掘 (東から)



SK08 人骨出土状況 (南から)



SK08 完掘 (東から)



SK08 人骨出土状況 (東から)

PL4 3-1区・1区遺構1 (平坦地11)



3-1区全景 (東から)



SD02 完掘 (南東から)



SK01 礫出土状況 (南から)



SK02・03 完掘 (南から)



SK06 完掘 (南東から)



平坦地11 完掘 (東から)



SK18 完掘 (東から)



SK19 完掘 (南から)



SD04・05 完掘 (西から)



SD07 完掘 (東から)



SK48 完掘 (西から)



SK51 完掘 (西から)



SK52 完掘 (西から)



SK53 完掘 (西から)



SK56 完掘 (西から)



平坦地9 完掘 (北から)

PL6 1区遺構3 (平坦地 11)



SD03 完掘 (東から)



SK26 完掘 (南西から)



SK27 完掘 (南西から)



SK33 完掘 (西から)



SK40 完掘 (西から)



SK41 完掘 (西から)



SK42 完掘 (西から)



SK45 完掘 (西から)



平坦地2 北半分完掘 (北から)



平坦地2 北半分完掘 (南から)



平坦地2 SF04 焼土跡完掘 (南から)



平坦地2 5区-88 出土状況 (西から)



SD09 完掘 (南から)



SQ01 前景 (南から)



SF04 付近土器出土状況 (西から)



SD09・SQ01 土層断面 (南西から)

PL8 4区遺構2 (SB03 住居跡、沢状地形)



SB03 完掘 (手前は沢状地形、南西から)



SB03 完掘 (北東から)



沢状地形完掘 (南西から)



沢状地形完掘 (北西から)



平坦地 25 北西壁内耳鍋出土状況 (▲印、南東から)



SK59 検出 (北東から)



SK59 遺物出土状況 (南西から)



SK59 遺物出土状況 (部分、南西から)



SK59 完掘 (南西から)



SK79 炭化物No.1 出土状況 (北東から)



SK79 完掘 (西から)



SK61 完掘 (北東から)



SK67~78 完掘 (南西から)

PL10 1区石垣1 (平坦地5・6)



SH01 (西から)



平坦地5・SH01 トレンチ断面 (南から)



SH02 (北西から)



SH03 全景 (北西から)



SH03 (西から)



SH03 (西から)



SH03 (西から)



平坦地6・SH03 トレンチ断面 (南から)



SH04 全景 (西から)



SH04 (西から)



SH04 (西から)



SH04 (西から)



SH05 (南から)



SH05 (南から)



SH06 (西から)



SH06 (南から)

PL12 1区石垣3 (平坦地12・13)



SH08 全景 (西から)



SH08 (西から)



SH08 (西から)



SH08 (西から)



SH09 全景 (北西から)



SH09 (西から)



SH09 (西から)



SH09 (西から)



SH10 (北から)



SH11 (西から)



SH12 (北西から)



SH13 (西から)



SH13 (南から)



SH14 (西から)



SH17 (南から)



SH19 (南から)

PL14 2区石垣2 (平坦地 17・18・19)



SH21 (北西から、下端はSD01)



SH24-(2) (北から)



SH24-(1) (北から)



SH25 (南から)



2区石垣全景 (南から)



SH31（西から）



SH32 全景（北西から）



SH32（北から）



SH32（北から）



平7 東西トレンチ西端断面（南西から）



平10 東西トレンチ西端断面（南から）



平12 断面（南から）



平16 南北トレンチ断面（北西から）

PL16 5区・4区石垣1 (平坦地1・2・24)



SH36 石垣全景 (北西から)



SH36 石垣 (西から)



SH37 石垣全景 (南西から)



SH37-(1) 石垣 (西から)



SH38 石垣全景 (南西から)



SH38 石垣全景 (北西から)



SH38-(1) 石垣 (西から)



SH38-(2) 石垣 (西から)



SH39 石垣全景 (南東から)



SH39 石垣全景 (北西から)



SH39-(1) 石垣 (西から)



SH39-(2) 石垣 (西から)



SH40 石垣全景 (南から)



SH40 石垣全景 (西から)



SH40-(1) 石垣 (南西から)



SH40-(2) 石垣 (南西から)

PL18 4区石垣3 (平坦地 27・28・29)



SH41 石垣全景 (西から)



SH41-(1) 石垣 (南西から)



SH42 石垣全景 (南から)



SH42-(1) 石垣 (南西から)



SH42-(2) 石垣 (南西から)



SH43 石垣全景 (南から)



SH43-(1) 石垣 (南西から)



SH43-(2) 石垣 (南西から)



平坦地2 トレンチ1断面 (北から)



平坦地26 トレンチ断面 (南から)



平坦地27 南北トレンチ断面 (南から)



平坦地28 南北トレンチ断面 (南から)



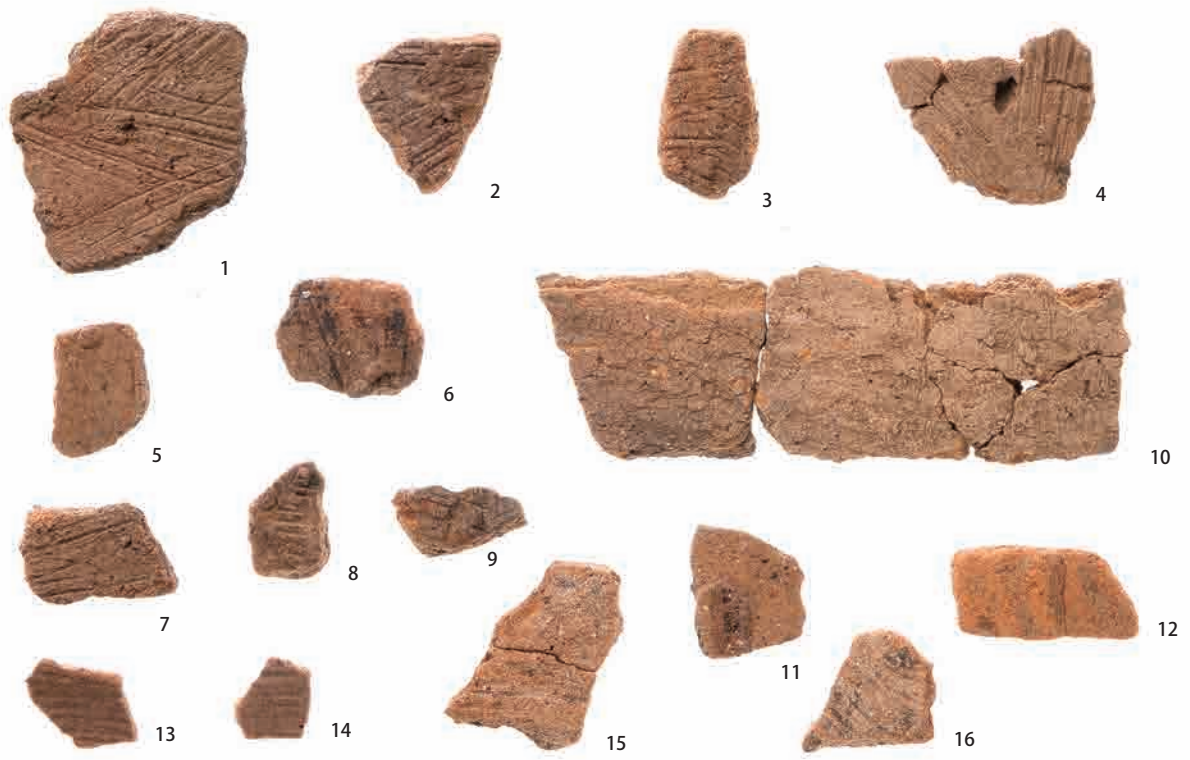
平坦地26 南東外周東断面 (北東から)



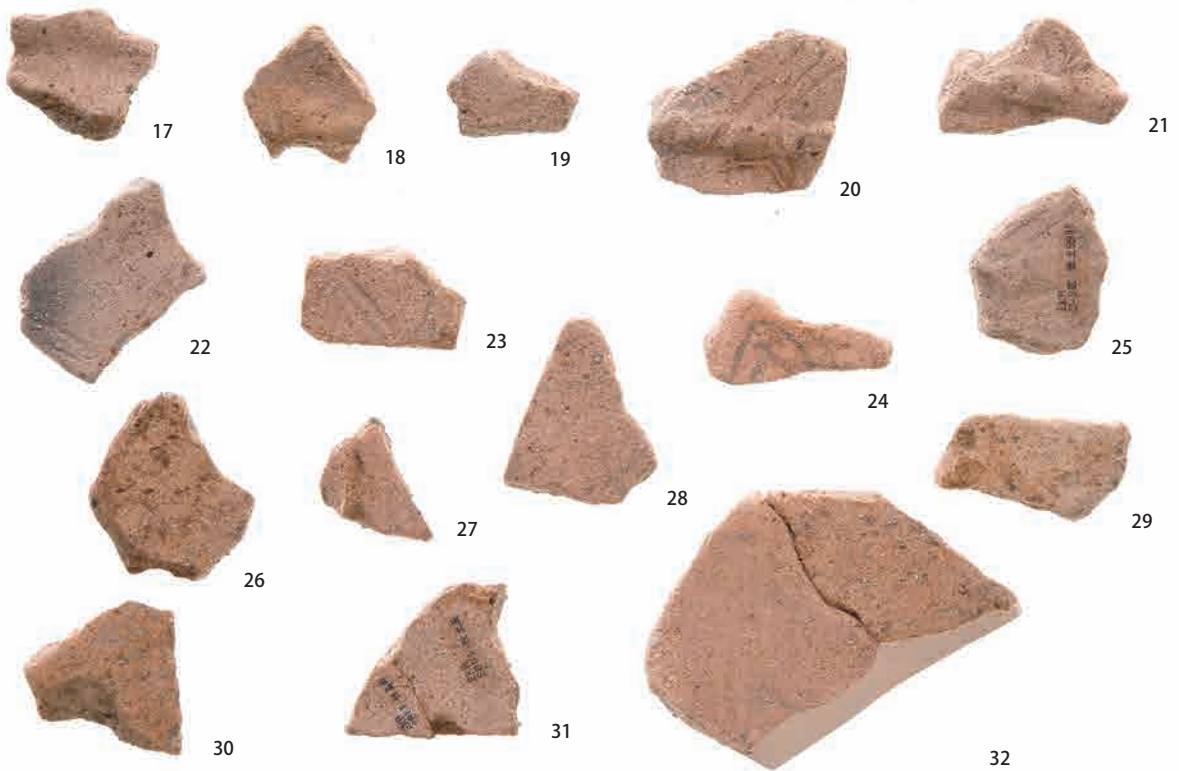
平坦地26 南東外周西断面 (北東から)



平坦地27・28・29 南東外周断面 (北東から)



1 縄文・弥生土器



2 縄文土器



SB01・SK17



SB01-1



SB01-4



SB01-3



SB01-14



SB01-17



SB01-18



SB01-8



SB01-16



SB01-27



SK17-29



SK17-30



SQ01-43



SQ01-78



SQ01-68



SQ01-72



SQ01-77



SQ01-62



5区-88

PL22 古代土器 SB01、SQ01、平坦地 24



1 SB01



2 SQ01・平坦地 24 (1)



1 古代・近世土器 4区SQ01・平坦地24(2)



2 古墳時代・古代・中世土器、陶器 3・4・5区

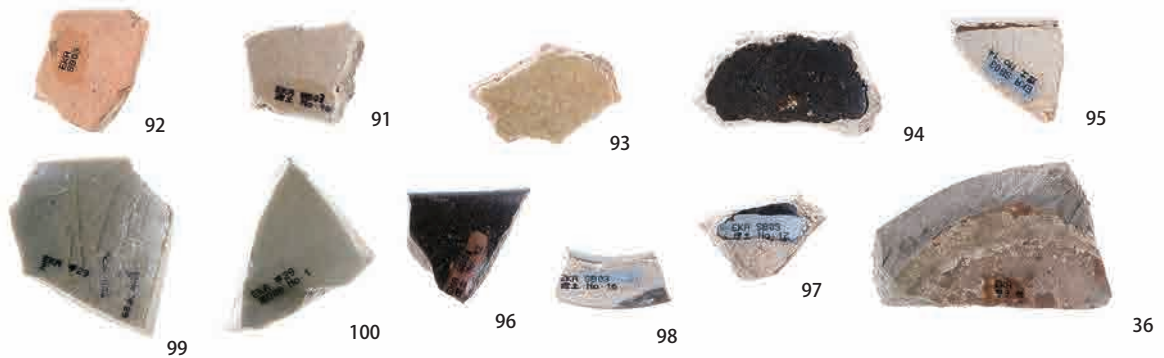
PL24 古代・中近世土器・陶磁器、石器、金属製品



1 煤付着古代土器 4区 SQ01



2 中近世土器、陶磁器（外面） 3・4・5区



3 中近世土器、陶磁器（内面） 3・4・5区



4 石器 3・4区



5 鉄製品、銭貨 3・4区

報告書抄録

ふりがな	まつもとしかいがんじいせき
書名	松本市海岸寺遺跡
副書名	通常砂防事業（海岸寺沢）埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	110
編著者名	綿田弘実
編集機関	（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4 TEL026-293-5926
発行年月日	2016（平成28）年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいがんじいせき 海岸寺遺跡	ながのけんまつもとし 長野県松本市 いりやまべ 入山辺 1955 ほか	20202	501	36° 13' 07" (世界測地系)	138° 02' 57" (世界測地系)	2013.08.01 }	5,800 m ²	海岸寺沢の砂防 ダム建設に伴う 事前調査
						2013.12.17		
2014.09.01 }	5,200 m ²							
2014.11.11								

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
海岸寺遺跡	集落跡	縄文時代		土器（前・中期） 石器	
		弥生時代		土器（中期）	
		古墳時代		土器（後期）	
		古代	竪穴住居址1、遺物集中1、 溝跡1、土坑1	土師器、黒色土器、 須恵器、灰釉土器、 鉄製品	
		中世	竪穴住居址1、焼土跡4、溝 跡7、火葬施設跡2、土坑73	土器、陶磁器、銭貨	
		近世	石垣40、土坑墓1	陶器、人骨	
要約	<p>調査範囲全体に連なる平坦地群は、水田主体の耕地造成を目的とし、少量の出土遺物から、地形改変によって縄文、平安、中世の遺構が削平されたことが判明した。盛土下からは平安、中世、近世の遺構が検出され、縄文から近世にわたる遺物が出土した。縄文時代の遺構は確認できなかったが、土器は前期末葉にまとまり、時期不詳ながら、全体から石器も出土した。弥生土器は中期前半の条痕土器と考える。古墳時代後期の高杯破片については、周辺の遺跡分布状況から、古墳が存在した可能性がある。</p> <p>竪穴式住居 SB01 は平安時代 10 世紀代と推定される。松本市域では 10 世紀に平地の遺跡が減少する一方、山間地に 9 世紀末ごろから 10 世紀にかけて小規模な遺跡が出現する状況が知られている。海岸寺観音堂に伝わる木造千手観音立像が 10 世紀の作とされているので、SB01 は年代が近い。遺物集中 SQ01 は平坦地 24 東半部、日照の悪い湧水地点付近にある。地形改変を受けながらも遺物出土範囲は狭く、復元個体が複数含まれているから、本来の遺構に近い位置であろう。9 世紀後半から 10 世紀後半までの土器があり、10 世紀代を中心とする。80%以上を食膳具が占める組成は一般的な集落遺跡とは著しく異なる。牛伏寺堂平跡・若澤寺元寺場跡の山地の寺院遺跡出土遺物と器種組成を同じくし、煤付着杯・椀の存在も共通する。湧水信仰に関わる祈祷などの儀礼を、灯明具を用いて行った場と推定する。</p> <p>中世の遺構は、平坦地 29 から 14 世紀後半頃の火葬施設跡、平坦地 25 から 16 世紀代の火葬施設跡と焼土跡群 SF01～03、平坦地 2 から 13 世紀代の焼土跡 SF04 が検出された。15 世紀代を挟んで前後 2 時期の遺構・遺物が調査範囲に広く分布している。中世の海岸寺と桐原城の存続時期に、生活領域が広がっていたものと推定される。平坦地 25 の盛土層下で検出したテラス状の整地面 SB03 で 18 世紀後半から 19 世紀の陶器が出土し、造成の上限年代となる。側臥屈葬人骨が出土した 3 区の SK08 は、造成後作られた近世の墓と推定された。近世後半から調査地一帯は農地となり、現代に至っている。</p>				

平成 28(2016) 年 3 月 18 日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 110

海岸寺遺跡

通常砂防事業(海岸寺沢)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

- 松本市内 -

発行者 長野県松本建設事務所
(一財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 カシヨ株式会社
〒 381-0037 長野県長野市西和田1-27-9
Tel 026-251-0510 Fax 026-251-0500

